
女學世界



乳白化粧水
レート
潮に吹かれ
波に曝されても
玉の肌の少しもあれず
益〻美しさを
加ふるはこれぞ
朝に夕に
お用ゐ遊ばす
レートの賜物

中元の御進物は三越の品

三越は最も信用を重んず。
三越の品を贈らるゝ御方は安心して贈り得べく、
三越の品を贈られし御方は實用に立ちて大に喜ばるべし。

最新流行の夏向き絹織物。實用品として此上もなき木綿類。
小間物化粧品を始め流行の雜貨。贈答品として理想的なる商品切手。

何卒三越より御求め下さる樣偏に御願ひ申上げます。

寫眞版入『地方御注文案內書』は御申込次第進呈いたします。

東京駿河町

三越吳服店

女學世界 第拾壹卷第九號 七月號目次


牛乳で洗ふと
美しくなるといふのは
昔の事！
御料洗粉
初夏の新緑に映えて
美しい素顔を
いとゞ美しくなすのは、
牛乳浴にも増した
この御料洗粉ばかりです。

造花原料

東京九段坂

吉住商店

營業目錄御入用の方は郵券貳錢封入……▲東京九段坂吉住商店宛御申込みの事……

本圖は著者が十數年間苦心を重ね夫々實物を解剖し寫生したるものに多年の實驗と考案とを加味し日々實地に應用しつゝある處の瓣、葉、蕚等の切型一一鮮麗なる着色を施し側らに其組立てたるものを圖示して一目瞭然たらしむ故に只僅に其心得を有するのみにして本圖を[illegible]けば直に理想的の造花を作成するを得べし若し又些の心得なき者なる時は左記造花自在を併せて繙讀せば師に就き學ぶと毫も異なる所なし

吉住春子著

新刊

實用造花圖譜

（掲載種類七十有一種）

定價金壹圓　郵税金六錢

本書は造花技術の基礎に重きを措き著述せるものにして多年の實驗と考案とを網羅し百數十個の解説圖を挿入し染色法鍍當法組立法其他種々の秘法便法を剰す所なく親切叮嚀に且最も平易に説明したるものにして眞に造花秘密の鍵を讀者に提供するものなり故に造花家の好參考書たるは勿論初學者と雖も本書を繙かば優美艶麗佳香を放つを疑ふ底の造花は立所に床上机邊を飾り不斷の春色を一室に集め得べし

跡見玉枝女史書　●吉住春子著

新刊

實用造花自在

（一名造花術秘密の鍵）

定價壹圓廿錢　郵税金八錢

●右二書の内容見本御入用の方は郵券五錢封入東京九段坂吉住商店宛御申込みの事

東京九段坂（九段郵便局私書函十番）

發兌兼發賣元　造花原料商　吉住商店

特長電話番町二〇五六　振替東京六六六七九番

◎賣捌所　◎東京神田表神保町　東京堂　◎東京日本橋本石町三丁目　至誠堂

(いの1)



佛國メルマン會社醸造
アルコール分少く滋養豊富なる葡萄酒
マルタン赤白葡萄酒
食卓用とし又薬用として到る處の家庭に愛用せられつゝあり
MEDOC SUPERIEUR
Merman & Co
BORDEAUX
R YAMADA-YA
横濱 東京 山田屋

女(いの三)


煉香油
パール
夏が
來た
愈々香油を
撰ばねばなりませぬ
毛髪の光澤が良くなつて
頭垢だの塵埃を除き常時毛髪サラ〱として
心地の好い馨を保たせやうと
するのにはパール煉香油に限ります
スミレ香水
スミレ黒香油
ルビー石鹸
本舖
東京日本橋區横山町三
平尾銑也商店
電話浪花百十番
振替東京百十番

女(いの四)

白樺



田中製版所三色版

◉婦人の幸福は如斯して得らるべし

結婚前に至つて健康なりし婦人の一旦他に嫁し未だ幾もなくて血の道癪に苦しむ者の非常に多きは事實婦人の生殖器が天然的受身に構造せられ即ち人類の田畑なれば病菌の繁殖するは當然にして結婚の機會に病毒侵入し其田畑を荒す故實際惡き土地の田畑に滿足な農產なき道理にて政治實業上外交繁き人の夫人及日常多くの客に接する婦人等は殊更其生殖器を害する機會多きを以て子宮血の道に苦しむ事の夥しきは此理由なれば一生の損害とならぬやう可要球を用ゆべし、方今婦人科學の泰斗として臨床上實地の錬達一世を歷する獨逸伯林のフロインド博士の研究と其實驗に成る處方に依る藥液をして直技に婦人の局處に作用せしむべく可要球(座藥にして內用藥にあらず)を調劑し幾多婦人科醫の實驗に供したる處殊に子宮內膜炎帶下白帶下赤帶下下腹筋張胸先差込子宮糜爛子宮出血及惡臭搔痒月經時疼痛黴毒性子宮病等の諸症に外用すれば驚くべく效力神速顯著なりとの稱賛を受けたり故に速に可要球を外用して病毒を根治せらるべし

可要球定價 三球入廿錢 八球入五拾錢 拾八球入壹圓 四拾球入貳圓 特製百拾個入五圓

發行所 東京本鄉湯島天神前(振替東京千五百番) 藥劑師 中西莊吉

眞に美容を希ひ美髮を望む者は

先づ……

衛生 化粧 最新 美髮法 を讀め

本書の內容は

◎しらが、赤毛染の話◎毛のなき所に毛の生える話
◎ちゞれ毛くせ直しの話◎毛髮の洗ひやうの話
◎拔毛どめふけとりの話 其他毛髮化粧に關する秘法

にて郵券貳錢封入御申込なれば直ちに無代贈呈

次ぎに……

理想的 最新製劑 ちゞれ毛くせ直しベンドを用ひよ

本劑は一度之れを使用すれば如何なるちゞれ毛くせ毛も立處に直伸し永く使用すれば殆んど根本的に全治す

定價十二個入九十錢 六個入四十七錢 送料東京市內四錢 地方八錢

また……

內務省免許 生毛强壯 ヱフ、トニック

本劑は最も進步したる毛髮劑にして根本的に毛髮を美化するにあり、されば本劑を服用せば身體を强健にし、血行を良行ならしむ、皮脂線の分泌を盛んにし、毛根の營養を能くし、毛髮の發育を補くるを以て、薄毛、細毛、赤毛、白髮等に連用せば奇効あり。

十日分金壹圓 小包料金八錢
卅日分金貳圓五拾錢 小包料金拾六錢

發賣元 東京本所區外手町八七 振替東京二〇八二五 深澤國華堂

女(ろの一)

婦女

七月號 要目

新に設けられたる婦女講壇には學者宗教家の精神修養談を順次續載すべく、其の第一着手として近角常観先生の講話を掲げ衛生欄には小兒科醫學士豊福環産科婦人科醫學士大瀬貴明兩先生の適切なる記事あり内田魯庵先生の「自覺せよ若き女」は一層論歩を進めて若き婦女の爲めに氣焔を吐き亦同氏の飜案小説「とみくじ」は文壇の傑作たり其他名流大家の夏期に關する趣味多き記事を滿載せり

◎婦女講壇 信仰に活きよ……近角常観

◎自覺せよ若き女!……内田魯庵

▲彩色ある天地……菅原南蹊

▲如意輪堂を訪ふ……千萬樹

▲見聞と感想……

▲英詩……仙石四郎

婦女と旅行問題 女學校長數十氏の意見登載

▲虚榮心より起りし悲慘の實例……山室軍平

▲近代思潮と若き娘の長所……海老名みや子

▲海外婦女界……

▲泰西名畫解説……文學士 瀧村靄山

◎婦女と旅行の趣味

一册十五錢 六册九十錢 十二册一圓七十錢

東京神田表神保町 同

女(ろの二)

女界

一冊 十五錢

▲岩手山と八ヶ嶽……學習院女子部教授 野口幽香子
▲赤毛布式の旅行……男爵夫人 目賀田逸子
▲壯快なりし富士登山……日向きん子
▲懷かしい相州三崎……竹越竹代子
▲娘の爲に選んだ旅行方法……子爵夫人 加納謐子
▲富士山を紹介したい……野中千代子
▲旅行は活動的である……東京女子高等師範學校教授 下田次郎

◎小說 富籤（とみくじ）……内田魯庵

▲涼味は至る所に滿つ……大倉桃郎
▲訪問した時された時……女子大學教授 笹木幸子
▲文藝その月々……文學士 沼波瓊音
▲茶話會と旅行とに要する食料の選擇……龜屋支配人

▲涼しき夏の衣裳……伊賀とら
▲顏容と髮の結ひぶり
▲夏向の香水と使用法……佐々木玄兵衛
▲お茶を甘く飮ませるには……山本嘉兵衛

鯛の料理…家庭の實驗…和歌…俳句…家庭の日記

◎轉地と婦女の衞生……醫學士 大瀬貴明
◎初夏の小兒衞生……醫學士 豐福環

▼懸賞新題「貴女の身長は何尺ですか」一等五圓 以下數等▲

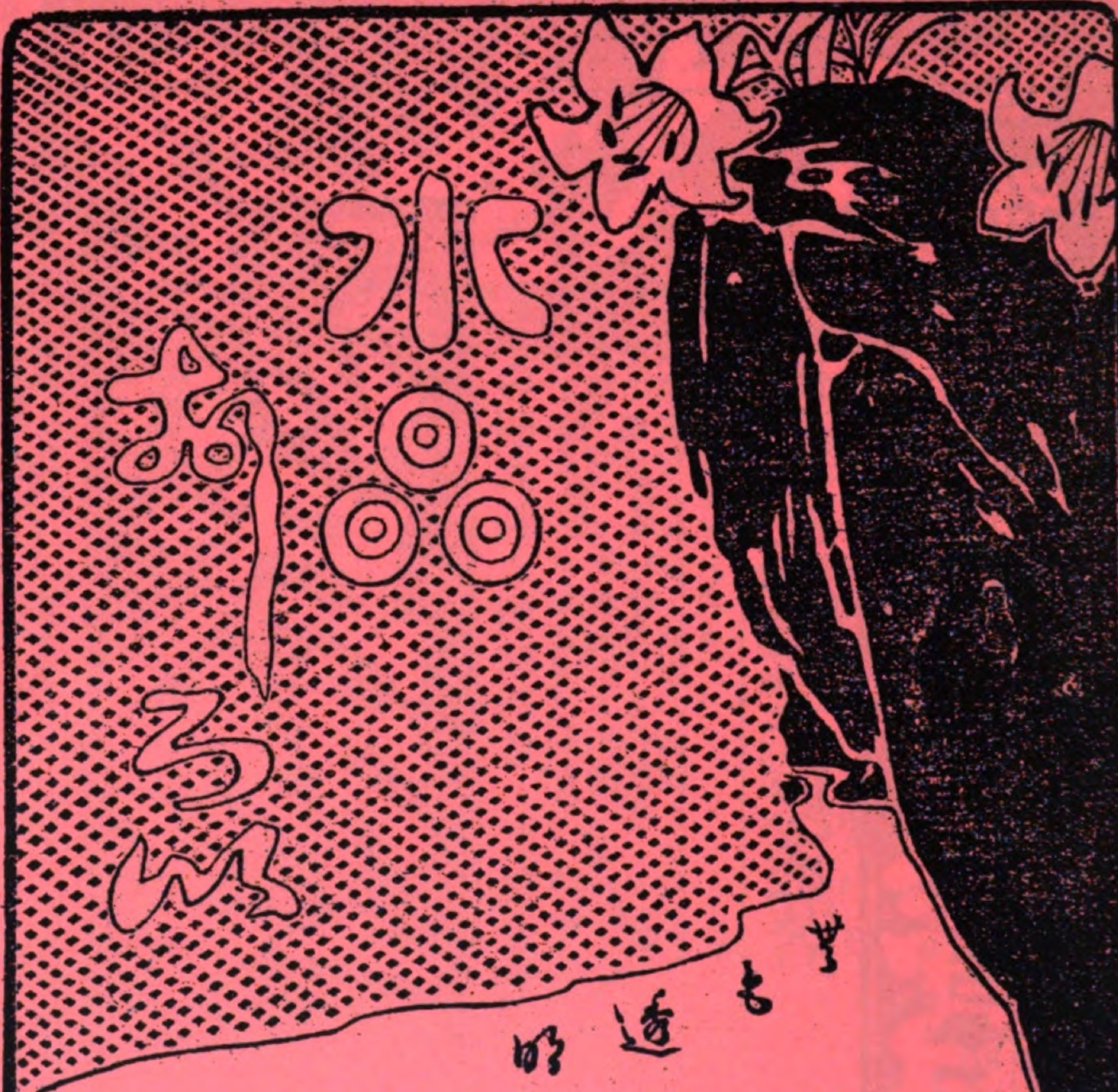
懸賞 和歌 俳句 繪書 習字 一等三圓 以下數等

振替東京一三五番 文館

避暑



竹久夢二筆



東京大和屋

すきとうりたる
水にて付ると白くなる
流行の薄化粧料
にして
目立ぬ故
男子にも用ゐられる

定價

五拾錢
貳拾五錢
拾五錢

女(けの一)

婦人世界

七月一日發行 六巻第八號

一冊拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共二圓五錢

◎女學生はこの質問に答へ得るや……下田歌子

▽私が百萬圓寄附したは母のお蔭……岩本榮之助

■小兒病の豫防法……加藤博士

■宮様のお産……婦人記者

◎夏のお辨當はどうするか……加藤博士夫人 堀越夫人 服部夫人

■馬鈴薯の料理法……弦齋夫人

▽心配のなかつた女學生時代……川瀬夫人 岡田八千代

■七夕の話……赤堀講師

名流婦人旅行談

跡見花蹊 佐藤男夫人 江木博士夫人 目賀田男夫人

▽賃仕事までした我が姉一葉の面影……樋口くに子

■三十年前の女學生……下田たづ子

■夏のお化粧……遠藤初子

◎初めて母となつた時……鳩山一郎夫人

■家事經濟の執り方……嘉悦孝子

■歷史講談……細川風谷

▽大谷派本願寺裏方の平生……川村文芽

◎婦人と迷信(人情論)……村井弦齋

女(はの三)

發行所 東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 郵便振替貯金口座三二六番

シトロン便

東京市
四十五番
夏野

一筆申上候私共昨
日午後三時無事に
當地へ着いたし候
孃も正雄も初旅のことゆ
ゑ汽車窓よりあたりの景
色に見とれ申候今朝は早くよ
り濱邊へ參り申候こちらは例年より熱さ
はげしく候間**シトロン**二三ダース大至急汽車便
にて御送り下され度子供等も早く／＼とせがみ居候先は安着
の御知らせながら要用申上候まで可祝

相州江の島清涼軒ニテ
夏野清子



清涼飲料

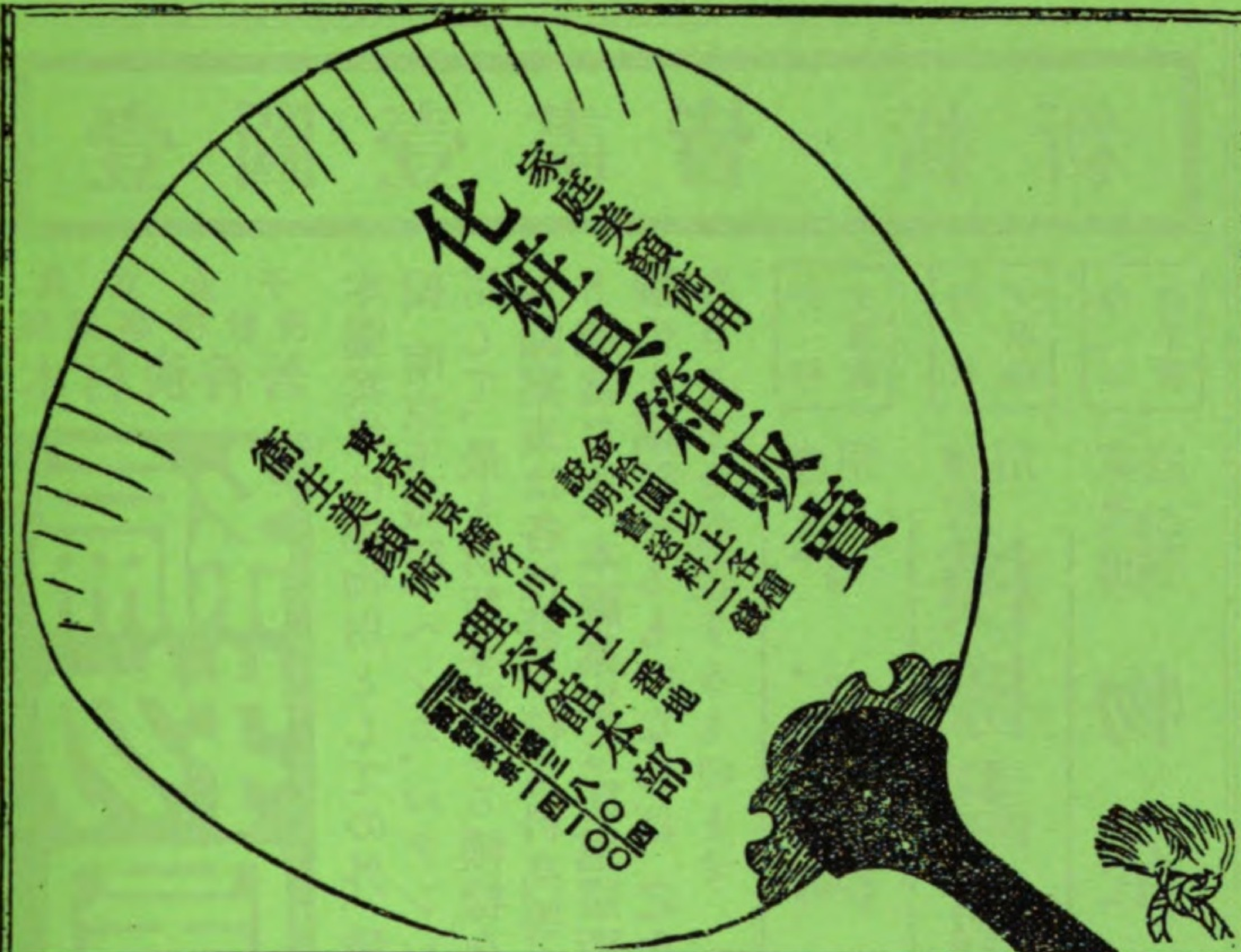
女(はの四)

朝凪



片山春帆筆

女（にの一）



見よ◉月經なき女子◉病める婦人

▲勿驚……藥力最精實……効能確保……有効無害……

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の月經閉止り月經滯り經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歲になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す



博士賞贊良藥

改良 女月丸

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

◉肥滿病新藥（米國新輸入）

子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてよりぶと〳〵肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ペンツォルト氏の發見藥にて脂肪多き人◉ぶと〳〵ふとり◉血太り◉肉太り◉酒太り◉水太り◉顏赤◉にきび◉ふき出物多き等輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は美顏窈窕たる艶白となり誓て美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸孃姉の福音

美人となる

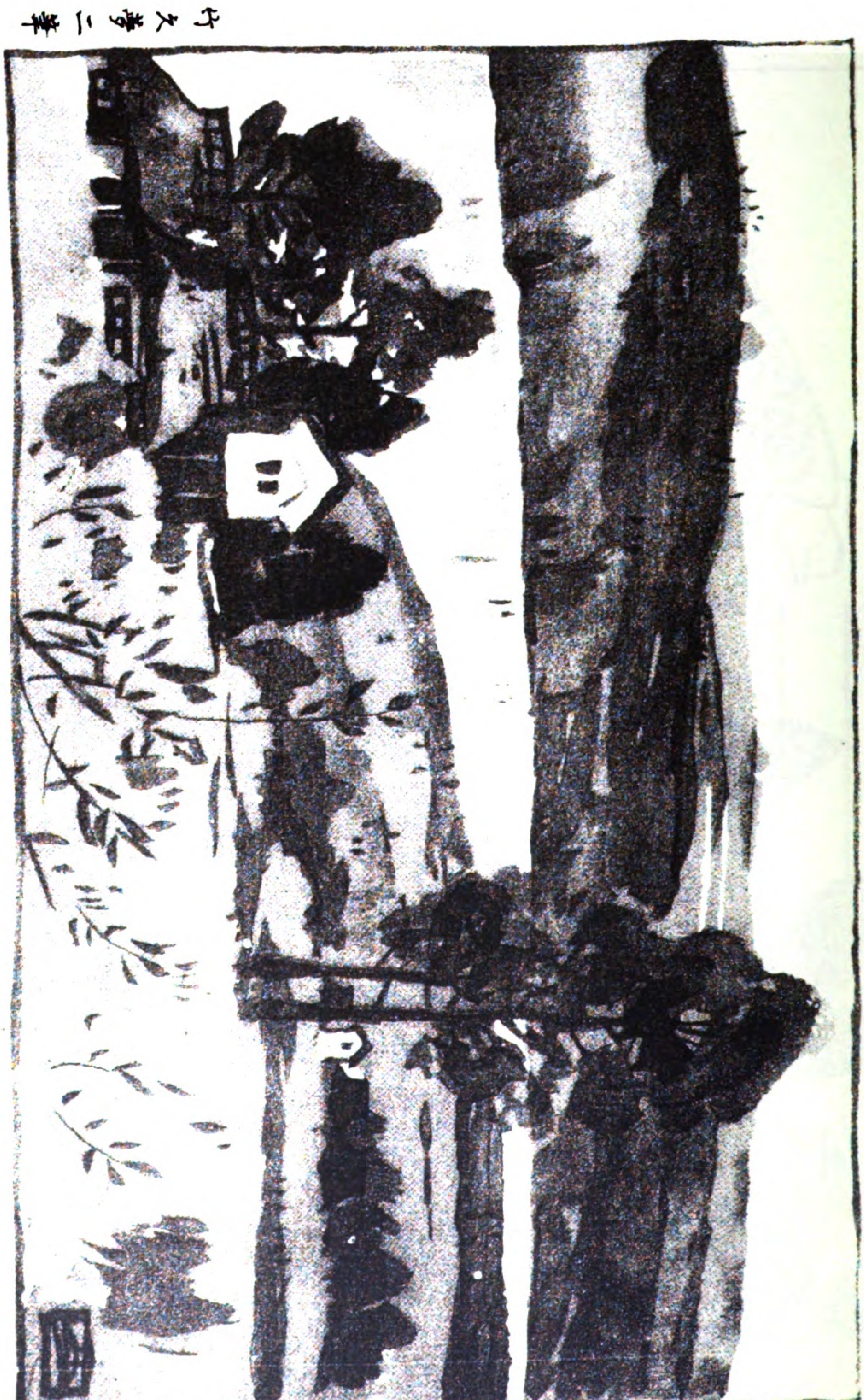


やせる藥

藥價	一劑一圓五十錢	三劑四圓卅錢	送料
	二劑二圓九十錢	四劑五圓半	十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七番 小宮愛生堂

女(にの三)



沼のほとり

姫百合





朝顔と造花

牽牛花のために釣瓶をからみ取られて、態々隣家へ水を貰ひに行たといふのも、畢竟は其朝顔の花が、ホンの朝一時の盛りなので、之を没義道に切放すのを、可哀想だとも思ひ、且は其眺めの床しさにも、心を奪はれたのであらうが、現時は造化といふ調法なものが出來るから、少しく造を練習さへすれば、此の朝顔も朝のみに限らず、いつでも勝手に愛玩する事を得て、而も自ら咲せた花は、又格別に興味が深いのである、加賀の千代は地下で口惜がつて居るであらう。

金三十六錢を御送り有れバ花手内を送付す

東京市日本橋區山町壹丁目拾六番地

造花材料商 合資會社 天野卯兵衛商店

(電話浪花一六四三番)

振替口座(東京一四九七〇)

電信略號(アマウ)

女(其の一)

女(はの二)

●●七月の卷發行●●

新婦人

第一年第四卷 定價 一冊廿八錢郵税二錢五厘 六冊郵税共金壹圓七拾錢

郎君未だ歸らず

佳人紅涙を呑むで巖頭に立てば雲烟渺茫として水空しく流る

コロタイプ寶寫眞

繪畫寫眞版概目

文箱 油繪極彩色……河村清雄筆

夕化粧 二婦膝を交へて交情蜜よりも甘し……鰭崎英朋筆

竹田宮妃殿下●裝の島津公夫人●丸髷姿の森鷗外博士夫人●友達づきあひの田村松魚氏夫妻●破布を裝ふ江木欣々女史●山内八重子の方●火桶を閉める[illegible]井伯令妹●山岸荷葉氏夫人の新粧●女醫木村すみ子女史●怪氣焔家小島ふみ子女史●素顏と舞臺顏の上山浦路女史●閨秀書家肥田野梅女史●淺野侯令嬢家庭の團欒●國書刊行會員蛭間鑑子嬢●小野貞子嬢●松平子爵夫人●木村莊平氏夫人●田中筆子女史●近藤しげ子嬢●常盤花子嬢●青地幾造氏令嬢●松方侯令嬢●中原ふみ子嬢●其他

附錄 家庭日記

七月分 溫度表●晴雨表●獻立表 來客簿並に九星[illegible]附●

見本 郵券七錢五厘 賣捌所は全國著名の書林雜誌店●

男心とは如何なるものか……小島ふみ子

女畫家に對する誘惑……藤代よし子

女性の長所と短所（森田草平）日本婦人の長所（笹川臨風）

東京の女と柳（兒玉花外）お局生活の裏面……（藤田なを子）

妾の良人……田村俊子

僕の細君……田村松魚 青柳有美

女（ほの三）

發行所 東京本郷區龍岡町 振替東京三〇五八 聚精堂 賣捌所 全國各地雜誌店書林に到る所にあり


赤門大學は
最高學府
大學白粉は
化粧界の逸品
大學白粉

竹田宮妃昌子內親王殿下



岩倉子爵家の新粧



子爵岩倉具明氏令弟具光氏、同夫人花子（岩下清周氏令嬢）

婦人へ相談

月やく滯り、又は不順

等を人知れず秘密に治療せんとするのが女の性癖である、夫故往々有觸れた無効の藥などに迷ふて後日の大病を引起す人が多い、此等の婦女に斯道大醫の方劑を仰ぐと同樣最も安心に快通流下する靈藥をお知らせするから、郵券三錢を添へて申込みあれ密封にて詳報す

東京市京橋區金六町三番地　徑山むめの

東京皮膚科醫院發明山崎製

毛生液



禿、脫毛、薄毛、生際惡き人試みよ……

本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、へぎ髮の毛は眉毛髮等の薄きをこく生じ皮膚病でもヤケド跡は物其他あるべげ所に毛なききに用て毛はへる事請合

○定價三十錢、五十錢の外、一圓、二圓の四種郵料六錢

本舖　東京市日本橋區蠣殻町二丁目　山崎愛國堂

●診察時間毎日午前八時より午後九時迄院長診察

梅毒症　りん病　生殖器諸病　神經衰弱症　婦人病　わきが　ぢ

東京淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町停留場橫

中央醫院

ぢ　諸病

梅毒　横根　下疳　全身梅毒等

りん病　消渇

子宮病　血の道　月やくとまりたる病　子なき婦人

生殖器諸病　神經衰弱症

記憶力思考力減衰症等　生殖器病萎縮遺精早漏夢精發育不充分症等

わきが　きで色の黒き人　にきび　ふきもの

そばかす　あれ性　皮膚諸疾患　いんきんた蟲等症

▲病狀記し郵券四錢送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥說明書を送る

東京市淺草區瓦町廿八番地淺草橋通瓦町電車停留場橫

中央藥院

女（への二）

羽仁もと子主筆

婦人之友

七月一日發行　第二號　一冊金十五錢　郵税一錢五厘　六冊前金九十錢（十二冊一圓七十五錢）郵税共

◉理想の生活（花子の巻）愈佳境に入る……羽仁もと子

◉女（戒めらるゝ女の虚榮心）……文學博士三宅雄二郎

◉夫婦論（新婚時代の生活法）……羽仁もと子

◉中流の家具費は如何にすべきか

◉赤坊を泣かせずに育てる秘訣

◉かうすれば子供に好かれます（女中訓）

◉着物の色どりの研究

◉五十錢で出來る夏の肩掛

◉僅かの時間で上手に出來る洗濯法

◉成功した贈物の實例

◉器用に座敷を飾るには

◉和へ物の拵へ方鯛めしの炊き方

◉七月の惣菜（卅日分の献立と料理法）

▲樂天生活の工夫……佐々夫人

▲男女交際奬勵論……長井博士

▲旅行中の見聞……志賀重昂

▲東京生活と地方生活……後藤宙外

▲衣に厚く食に薄し……北尾夫人

▲主婦としての一日……加藤夫人

▲父母のをしへ……羽仁もと子

▲新案の家庭遊戯……松浦政泰

▲假名文字の習ひ方……星野天知

▲繪の習ひ方……大下藤次郎

▲家政問答（質問隨意）……羽仁もと子

▲修養カード（七月分）……

畫報（●第一歩（ミレイ筆）●若き母親の一日●小さき花瓣●誕生日の集り●夏の勤勞●子供の笑顔●子供の夏の生活●製糸のいろいろ●夏の盆栽●夏の農科大學農場●團扇のいろいろ）

▲初號四版　取揃御注文に應ず　東京小石川區雜司ヶ谷町　振替口座東京壹壹六〇〇　婦人之友社

女（への三）

妻の病氣は一家の大難

從一位久我侯爵　伯爵伊東元帥　從一位東久世公閣下賞詞

産科婦人科專門醫學士　北畠孝夫先生
産婦人科佐藤病院長　佐藤醫學士共著

女の衛生

婦人病者の心得

無代進呈

百版記念

處女の煩悶

無月經、月經困難、月經過多等で、頬ばかり赤くなつたり、蒼白い顔してる樣な婦人はどうすれば治るか

病婦の苦痛

子宮病、血の道で、惱み醫藥も更に効なく、迚ても治らぬものと、諦めてる樣な婦人はどうすればよいか

妻女の悲嘆

夫婦共健康相で居て、結婚後何年經つても、子寶のない婦人は如何すれば望み通り愛兒を得られるか

姙娠の心得

是迄流産、難産、つはり等の不幸を招いた人や、初ての姙娠で心配してる樣な婦人はどういふ心得が必要か

老女の誤解

老人には子宮病はないと誤解して頭痛や帶下があつても平氣で居る樣な婦人はどういふ危險が起るか

◁ 頒本所　東京築地新榮町四の一　笹岡省三　へハガキにて申込めば直に送本致升 ▷

女(への四)

若尾家の新粧

紳商若尾民造氏令息謹之助氏同夫人春子（四子爵令孃）



慈善會へ



上圖　鈴木繁氏夫人千代子（園田實德氏令孃）　下圖　農學博士澤野淳氏令孃富子

IVORY SOAP

アイボリー石鹸

Procter & Gamble, Cincinnati

日本輸入品に限り包裝紙に斜に「アイボリー石鹸」と記入し一見模造惡質石鹸と判別に容易ならしむ御購求の節「アイボリー石鹸」に御注意を乞ふ

英語夏期講習會

夏期休暇を利用して語學力不足を補はんと欲する女子の爲に塾に於て講習會を開き塾長自ら懇切に教授す

志願者は七月十日迄に申込みあるべし

但し詳細は本人御來談を乞ふ

學課程度 高等女學校二年より四年に至る **組教科書** イソップ物語、アラビヤ物語類

英作文、英文法、實用會話は入會者の學力と志望に應じ適當なる教科書を指定す

開期間 七月二十一日より八月十九日まで **授業時間** 午前七時より十一時に至る迄各組一時間宛

授業料 貳圓

東京本郷區駒込彌生町三番地

櫻井女塾

文(その二)

月さらへ

內用 **月經球**

藥價 ｛六十球入壹圓八十錢 百廿球入壹圓八十錢 二百四拾球入參圓｝ 送料各八錢

いはゆる粉末の藥品は諸種の病症をひき起す不合理の配劑はたゞ一邊の下し藥に過ぎず本品は最近の醫界にたて等しくみとめられたる强度の有効原料を配合せる月さらへ專門藥にして他の賣藥の如く月さらへ藥にして子宮道血の道に効ありなどと不合理の藥効に非ず其偉大なる藥力は如何に長き月やく滯りも心地よく通經す効能の猛烈なると生理的の障害は確に本品の特長にして必要とする所なり他藥を用ゐて効なき患者乞ふ速に本品を試用し絕大の効力を實視せられよ

▲安全正確なる **月さらへ自宅療法** ▼

申込所 大阪心齋橋筋周防町東二丁目 **樂天堂藥院**

◎産婦人科 宅診 午前

◎小兒科 往診 午後

病室並ニ産室ノ設備アリ隨時入院ノ需メニ應ズ

院長 **女醫** 鷲山改姓 吉岡彌生

東京至誠病院 東京市麹町區飯田町四丁目卅一番地 電話番町(二二五七)

近來博文館員と詐稱し豫約募集の勸誘をなすもの有之候哉に聞及び候へども當館にては一切斯樣の派出は不仕候間爲念茲に警告致候

東京日本橋本町
博文館

蹄鐵印 シャターリヨン 白赤 **葡萄酒**

は藥用料並に食卓用として御強壯に最も妙なり
●至る處に取次店あり
本品は從來赤葡萄酒のみ發賣の處今回更に品質を精撰し最も純粹にして善良なる白葡萄酒をも輸入發賣仕り候に付御愛飮の上御稱贊あらんことを乞ふ



東京市本町三丁目
鈴木洋酒店
電本局長一四三五

男女 **ちゞれ くせ毛 赤毛** は何れの毛も直に根本的矯正黑化良き艶の出る最新發見奇液を郵券封入申込の方に教授し誓 美髮に治して差上升

東京麻布區材木町
岩阪澄子

近來處々に類似模造、無効のにせ藥多し御注意

毛のはへる藥

多年實驗の生毛劑にして特効驚くべき奇藥
一ヶ●一圓 中●厚二圓●三圓半●送料十錢

美容散 やせる藥

●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顏赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ゐて害なく身體美容となる保證藥なり
●定價(一週)七十錢(三週)二圓(五週)三圓二十錢●送費十錢



◀にせ物あり乞御注意▶

らい病 根治新藥 レプラ丸

本劑は獨逸醫學博士ボルマルセイ氏が癩病の病源より探究し多年の辛苦と幾萬の患者に施藥實驗を經て終に成功したる靈藥にして如何なる難症と雖も本劑に依て必ず治するを得る一大奇藥也●にせ物注意あれ
價一劑廿五日用三圓二劑五圓五十錢四劑十圓小包料八錢

(全快禮狀店內に保存す) **新宮藥館** (東京本郷三丁目 振替一二五八四)
電話下谷二二一九番

奥様の心懸…家庭の平和

花嫁

主人は宅の料理は不味い〳〵と申ます。妾も此内へ参りますまでは料理なんか致した事は有りませんがドーシタラ主人が喜ぶでせうか心配で成りません

料理通

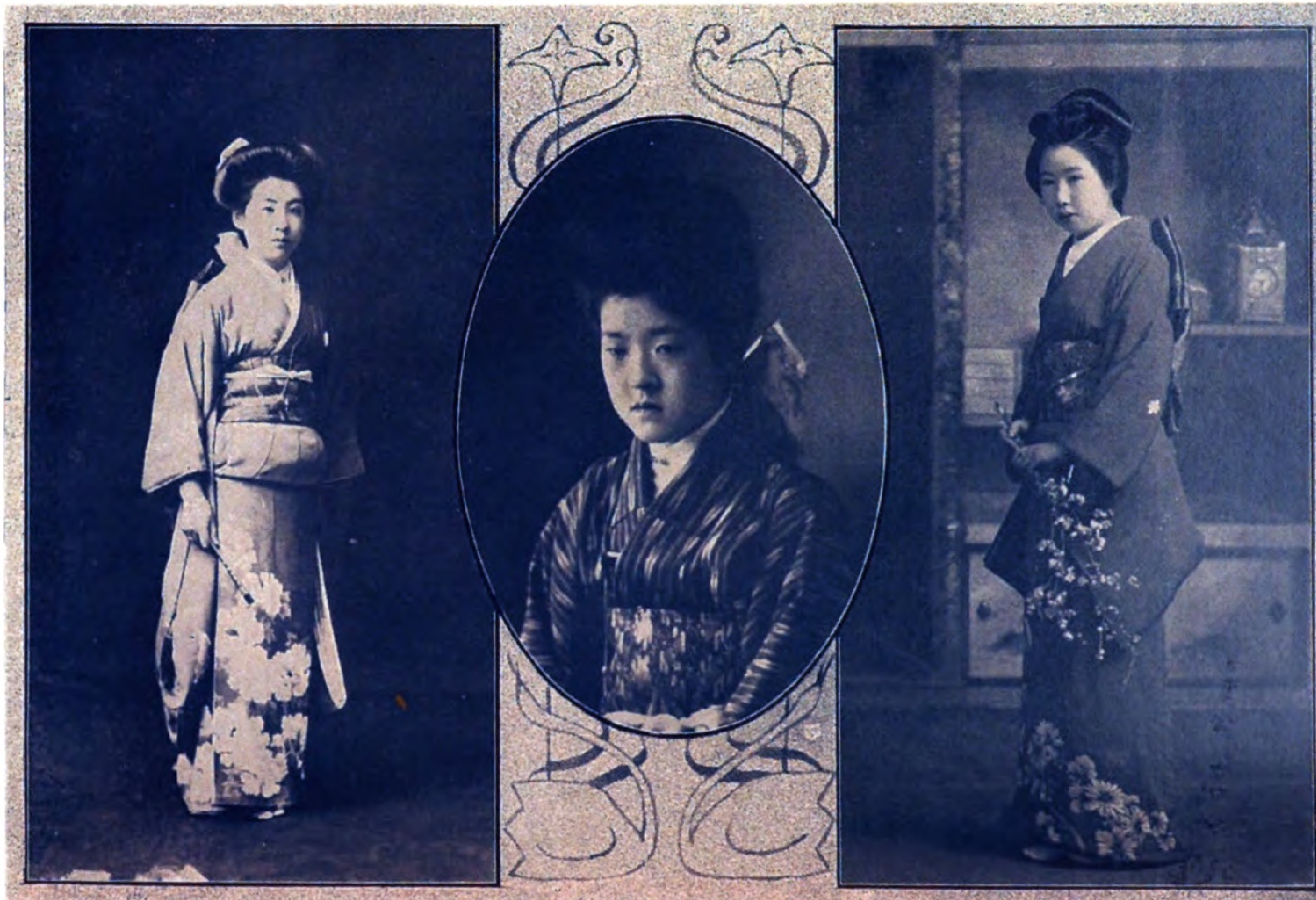
素人の家庭では御料理を成さるに大抵主に砂糖をお用ゐでせう牛鍋や鳥鍋を成さるにしても砂糖は鍋に(こげつき)ますが其代用に味淋を使へば其心配がなくて第一、味は牛屋や鳥屋でお喰べになると同様においしく戴けます魚肉や其他総てのお菜を煮るにしても味淋を使へば味は料理屋の様に甘味たべられます上等味淋は流山の万上味淋に限りますが瓶詰、樽詰も有りますから是非御試めしなさい御主人も必ず御喜びになる事請合です。

姉妹



上圖海軍機關少將加茂嚴雄氏令孃文子、（長女）下圖同令孃藤賀子、（次女）

令嬢かゞみ



右．伊東信子（東京女學館卒業）
中、藤田りき子（海軍々醫大監藤田甫氏令孃）
左．小幡けい子（故貴族院議員小幡篤二郎氏令孃）

實用新案

夏期家庭の必須品（誰にても出來る製造秘法添付）

家庭實用 **ラムネ輕便製造機**

特色
家庭實用向にして簡單輕便即席に新鮮ノ味のラムネ、サイダー、ジンジヤ等を製造する夏期衛生上の最新發明特許品也（説明書無代進呈）

定價 一號 金[illegible]圓 二號 金[illegible]圓九拾錢 送料廿錢

專賣元 東京市神田區榮町 東榮堂 振替口座東京三一〇五番

大根ト菜ト蕪及蔬菜草花種子販賣

種物と苗木は品種正確發芽ノ全保證ス勉強廉價販賣す
僅か郵券十錢御送り下されば御試作用蔬菜又は草花種子は本ノ種ト詳細種苗目錄とを早速御郵送申上げます
種苗目錄のみ御入用の方は往復はがきにて申込あれ

伊勢松坂新町 〔貳〕倉儀種苗店

やせる藥

多血症●脂肪過多●中氣●便秘●酒ぶとり●凡てふとりすぎて御困りの方に害なく●やせて●中肉ノ容となる新藥なり試みたき人は郵券二錢送れ詳細報知す

東京市小石川區ノ六大町一七

池田製藥所

有功金牌受領

本年五月東京開設 第一回日本文具教育品博覽會

當今文具界に於ける最新流行の佳品

○リンネルケント製 洋式封筒 一組十五錢

○風景花鳥美人畫附 ノートペーパ 一號二號三號各一組十五錢

○最新意匠 飛行機封筒 一組十錢

○草花模樣 花封筒 一組十錢

其他斬新精巧なる紳士學生向文追用品色々御座候（郵券代用一割増遞送無料）

發賣元 大阪市東區今橋二丁目二十三番地 電話東二五六九番 振替大阪六六五九七番

岡井文花堂

●販賣希望の御方は見本料五十錢相添へ御申込被下度候

毛ぬき 新劑

●別名ヘールピン 壹圓、特製弐圓 内地送料十五錢

本劑は極有効なる成分を集めて成せる脱毛劑にして主成分の化學的作用により皮膚に害なく根本より脱毛す男女毛多き人毛深き人は速に本劑を試みられよ

東京牛込區北山伏町壹
百合園製藥所



東京神田裏猿樂町
東洋音樂學校
電話本局三八五四番

生徒募集

本科、特別科、本校及東京音樂學校入學豫科

夏期講習會（八月一日より）

ピアノ、オルガン、バイオリン、唱歌、其他管絃樂器及理論等

入學志願者ハ本校ヘ照會アレ

●婦人科 産科 明治療院

殊に月經障害、ヒステリー（診察午前）

淺草區七軒町二

院長 平田東一（章之丞改）

外科 入院随時 ●生殖器科（診察午前）

圖書目録

御入用の方は往復ハガキにて御申越次第即時送呈仕候

東京本町 博文館

●本物は 女髪結師安部歌子女史

ちぢれ毛くせ毛
二大奇方劑
毛はへうけあい

多年の實驗を經たる證明秘法劑にして是迄の使用者を悉く滿足せしめたる奇劑なり往復端書紹介詳報す

●東京市麴町區三番町六十七
濟世園

隆鼻術

はなたかくするほう

東京市九段下二丁目十一番地（神田今川小路）

午後 夜間

和田耳鼻咽喉醫院

わきが

患者にて醫療藥有らゆる手を盡しても全治せざるの士女は獨逸醫學界の泰斗たるノート博士の最近の發見のわきが根治用「プレート」を用ゐて速に其苦痛を脱せられよ◎藥代は輕症用八十錢重症用壹圓五十錢慢性頑固用特製二圓送費十錢郵券代用必ず二割増代金引換小包は一切謝斷

◉發賣元 東京市本郷區東片町十五番地 市原製劑部

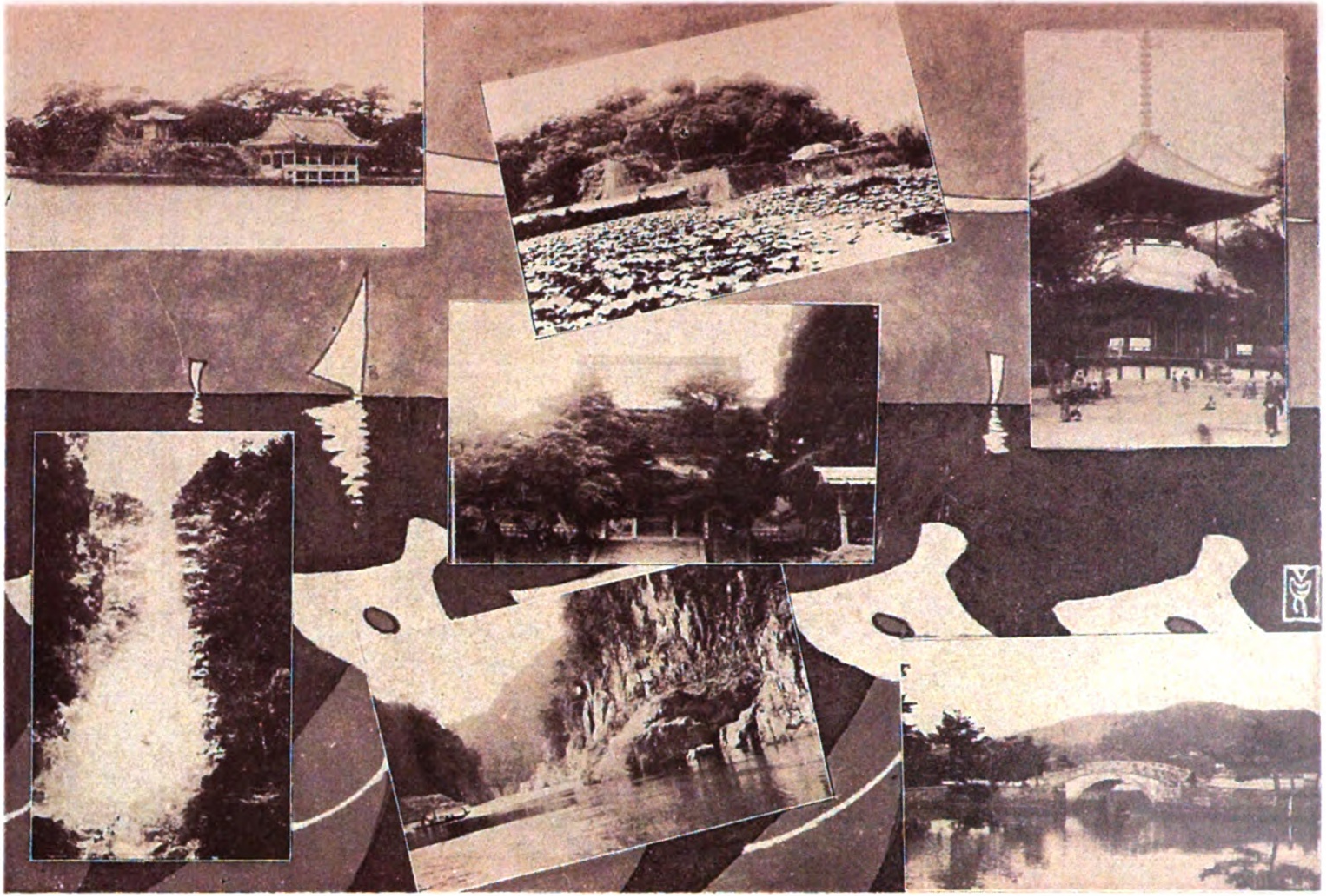
電話下谷二五六九番 振替口座東京二一〇七四三番

女（ちの三）


斯様に萎れた花でも
水をやれば斯様に生氣
を回復す
滋養強壮剤
ソマトーゼ
各地薬店にあり
説明書無代進呈す
横濱市山下町百八十三番
フリードリッヒ、バイエル會社
斯様に痩せ衰へた人でも
ソマトーゼをのめば如斯
肥滿し元氣旺盛となる

(其の四)

南紀名勝



中央、高野山の金堂　上段右、根來寺の多寳塔　中、和歌山城の蓮池、　左、和歌の浦妹背山觀海樓　下段右、和歌の浦不老橋　中、熊野瀞峽　左、那智の瀧

大阪割烹學校記念



女（りの一）

醋酸需要の好季



醋酸は食酢製造業者に缺くべからざる最も有益なる理想的好資料なり。

醋酸は在來の釀造酢に比し極めて廉價且清新の風味を有する純良品也。

醋酸は醫藥用食酢用に適する純良品の外染色用製革用の工業品もあり。

醋酸は日本醋酸製造株式會社製品にて品質佳良今や輸入品全く杜絶す。

醋酸手引草と題する小册子を刊行し需要者各位の申込に應じて贈呈す。

日本醋酸製造株式會社
一手特約發賣元
醫療藥品工業藥品問屋
(博) 合資會社 **博愛堂**
東京日本橋區本町三丁目
電話本局二八六番 振替口座東京八八一三

らい病

此らい病藥は有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分拆し當舗主が醫科大學在學中研究したる成績に考へ配劑したる有力藥なれば一度其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども其病勢の甚しからざる中に本劑を四ヶ月間服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても繼續服用すれば病原菌を脫力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の誇大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陥れんとする營利主義の賣藥に非ず

醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

ナノサール 一ヶ月分 貳圓
强方ナノサール 一ヶ月分 參圓

本舗 醫科大學卒業藥劑士 從七位 勲六等
三河國碧海郡刈谷町
中島龜之丞鑑製
振替口座東京貳參壹壹
電話 刈谷參拾貳番

華道の珍書「花包」は公開せられたり
芦田春壽先生著

花道の珍書
花包
最新刊

大本全壹册 木版彩色刷
極上日本紙 大和綴美裝
實價壹圓 郵稅八錢

發賣元 東京日本橋本町三丁目 **博文館**

女(りの二)

東京市京橋大鋸町

女子文壇社出版

振替口座第壹七貳九番

七月號發賣

『女子文壇』と『少女』は到る處の書店に備へあり、最寄書店にて內容御覽の上愛讀を乞ふ

【本社に各一月號より取揃へあります】

女子文壇　少女

▲女子文壇▼
毎月一日發行紙數百五十餘頁頗美裝
定價拾五錢　送料壹錢半

▲少　女▼
毎月一日發行紙數百餘頁口繪挿畫多
定價金拾錢　送料壹錢

各號高評

▲女子文壇增刊　**新文章**　二百餘頁美裝

七月十日第二增刊●定價廿錢　送料壹錢半

御婦人の寶

御婦人方が生涯無病でお過しなさるには月經の處置が最も大切な事は申上る迄もなく従來の樣に脫脂綿等を挿入なされては經水の滯るのみならず綿の纖が殘り乾度子宮病ヒステリ等の病源となり醫家の嘆かる串です

特許 安全帯

は藤川藥學士發明消毒安全吸收力脫脂綿の數倍で博士の甚く賞用さる丶月經時に重寶便利な如何程經水の多い方でも粗漏する事のない起居動作極めて安全な帯



又產後や白血長血痔漏等に妙です

東京市下谷區池之端七軒町四十二番地
內外石鹼化粧品卸商安全帯**本舗　安全堂**

大阪市西區阿波座上通一丁目二十二番地角
關西一手販賣　洋々堂分店

定價
安全帯特甲一筋壹圓貳拾錢
乙ハ拾錢、並四拾錢、一筋ニテ二三年使用出來升
安全衣は一打入一箱金四拾錢

市內ハ藥種化粧品店ニテ販賣致升
小包料ハ一組金拾貳錢一組增毎ニ貳錢增シ候

女(りの三)

東京
白木屋
SHIROKIYA

七月一日より

中元大賣出し仕候

御贈答品は呉服太物洋服地は勿論
和洋小間物一切箱入又は紙包と致し

至極体裁宜敷様

調進仕り迅速御届可申上候又從來
澤山御用命相願候弊店商品切手は
殊に

此の上なく御重寶と存候

尚かたびら地浴衣地目下出盛りに
有之御撰擇御好みのまゝに御座候間
御來店御買上の程偏へに奉願上候

東京日本橋
白木屋呉服店
振替東京九八

女(りの四)



女學世界

第拾壹卷 第九號

七月號

書道執心談

峯香樹



私は書を見る事が好き、從つて筆を執る事も好きでございます、主婦としては好事過ぎて主人は迷惑を致す事でございませうが、盜人にも三つの理由と申す諺の通り、好きな經路がございます、そんなことで大目に見て置かれること丶思つて居ります、私は生家の父祖代々醫業の傍ら文筆を好みまして、佐藤一齋、屋代弘賢、千蔭、千浪、等百年前後のさういふ方々と御交際をした跡が遺つて居ります、加之近く祖父樋口光義が一層古實趣味の深かつた爲に、私は十四歳の時別れまして、さして感化を受る暇もございませんでしたけれども、遺物等を整理いたしますのにつけて、自然注意を引つけられました。

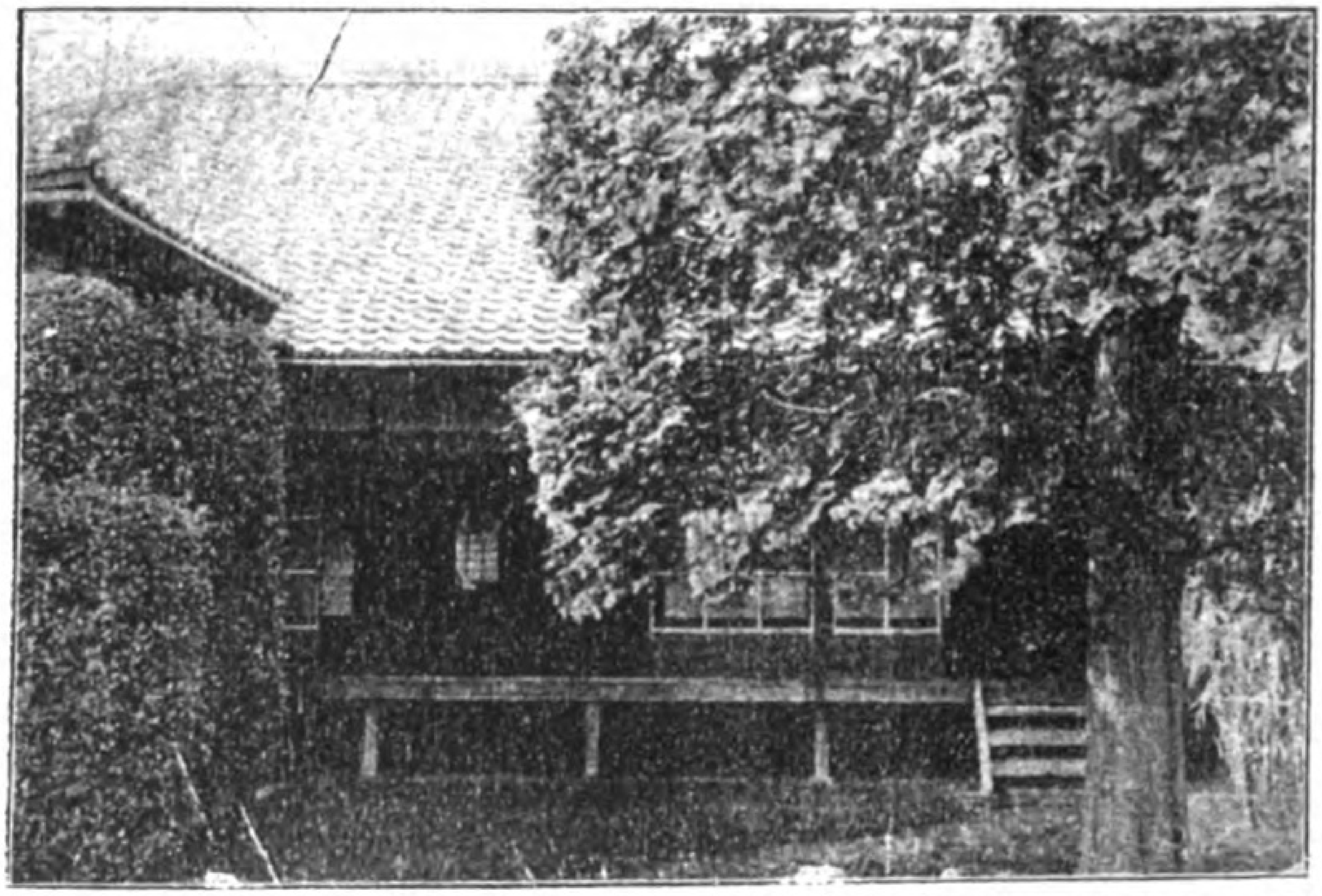
△文字探し

十五歳の時多田親愛先生の御門弟になりました、早く子を持ちまして十分修業致した事もございません、お手本を一通り上げて古い處を習ふやうになりましてから、公任行成あたりを頻りと拜見して居りました。元來好きな事ですから、子供が寢ますと冬の夜中でも起きて習ひました、氣が充溢いたします所爲か寒いとも思ひませんでした。

少々文字の格好がついてまゐりますと、人樣が何か書けと仰つしやるのにまかせて、厚顏しく梓に上せて見ました物もございます、然も古人の眞似を致しますとゞうやら形が出來ますが、自分の文字を書かうと存じますと、何處を捍へてよいかわかりません、而して熟ゝ考へました、道風以前に道風なく、公任以前に公任はない、行成以前に行成が有つたわけではないのに

あの結構な手蹟が現はれるといふには、何か原素がなくてはならぬ、自然に筆端に現はれる理がなくてはならぬ、屹度有るべき筈のものであると、何時からとなく堅く信じて獨りできめて居りました。

漸くさう氣が付いた時は最早多田先生はお逝れになつて御相談する事も出來ず、折角今迄手習ひはして見たけれども物足りない心地がして仕方がない、古法帖などを見ても何か偉大な力が潜んで居つて、しかも確實に認識することが出來ない、焦つたい悲しい氣がする、自分が一つの歌集なり文章なり清書するにしても、此字は公任、彼の字は行成、兩方に見つからなければ道風の帖を引出して捜さなければ書けないといふやうでは到底一生涯文字捜しに齷齪するだけでつまらない、而して夫等の寄合文字を自在に脱化する力はないのですされぱと申して吾々の手許に結構な物を揃へて持つて居る次第ではなし、いつそ筆も手本も燒て思ひ切つて了うとまで決心いたして居りました、處が或時小室屈山といふお方がお書きになつた入木道のお話を讀みましてどうも夫れらしい、床しくて堪りません、女でも修業さして頂けるならばと機會を窺がつて居りました、而して主人に許可を得るのにあまり希望が過るといはれはしまいかと心配も致しながら時期が熟さず三年ばかり過ぎました。



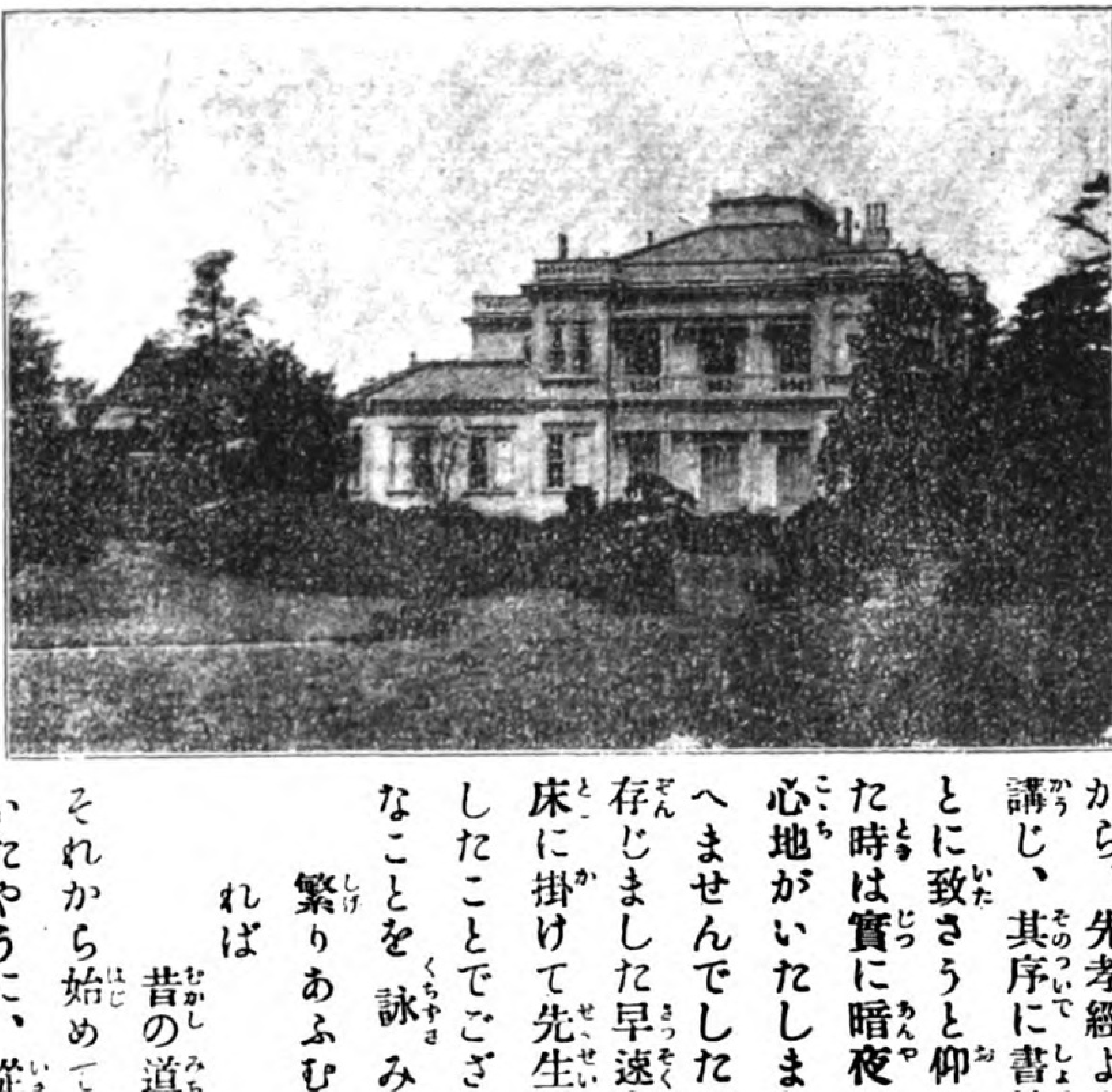
九條公爵邸表書院（赤坂福吉町）

△一道の光明を得た悅び

或時恩地太虛先生が宅へお出遊ばす事がございまして其節私の持ち合して居ります帖などを御覽に入れながら書道のお話を承はつて居りますうちに、お手本を書いて頂き度いと願ひました、さうすると先生が手本等は無用である書道には傳來の法といふものがあるからそれを知らなければ何とも氣の毒なことである、之は先年京都へ行幸の供奉をして參つた時に不圖其法脈の殘つて居つたのを見出す機會が有つたのである、古來秘法としてあるのだけれども、夫程の執心なら傳へて進せよう、人の命は明日もわからぬものであるから志ある人に殘して置うと兼て思はぬでもなかつたが、此方から人に勸める系の物ではないから、ついそれなりに打過ぎて居たのである、但し自分は書家ではない又書は敎へに屬するものであるから、先孝經より始めて人倫の道を講じ、其序に書法を傳へるといふことに致さうと仰つしやつて頂きました時は實に暗夜に一道の光明を得た心地がいたしまして、何共喜びに堪へませんでした、全く親の引合せと存じました早速多田先生の御筆蹟を床に掛けて先生にもお禮を申上げましたことでございます、而してこんなことを詠みました。

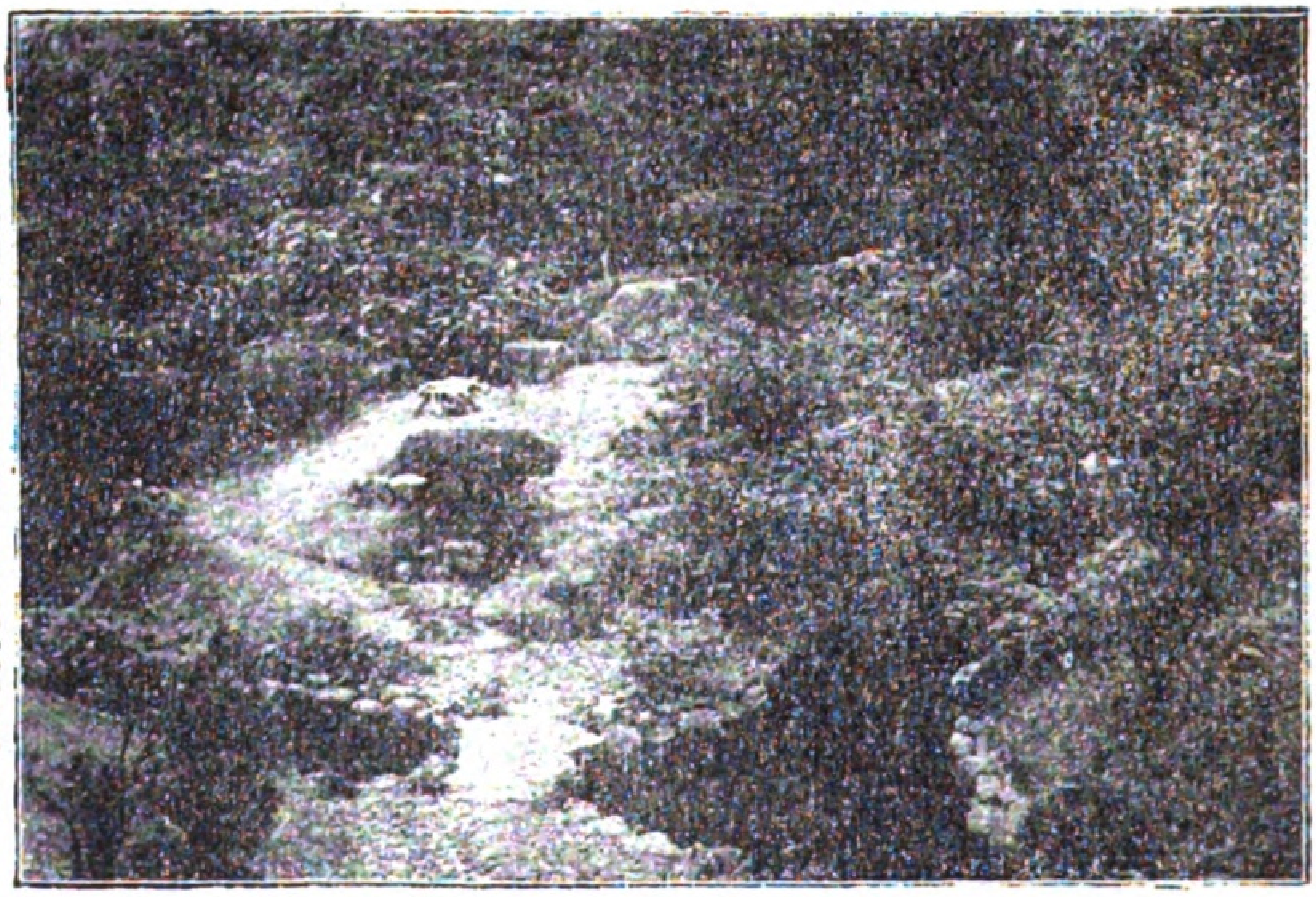
繁りあふむぐらのなかもよく見れば
昔の道ぞなほのこりける

それから始めて盲人が目を明けて頂いたやうに、從來とは文字の見え方が異つてまゐりまして嬉しくてたまりません、こんどは文字の形容などを模す爲に古人を



池田侯爵邸本館（大崎）

見たいのではなくて、古人の跡と自分の眼と一致する難有さ、愉快さを以て參考とするやうになりました。博物館に何が出た、美術協會に何が出て居るから見て來たいと主人に暇をもらひますと、よくさう嗅ぎつけると笑はれます、當節はコロタイプで實物の通りに出來ますから昔の人より何の位仕合かしれませぬ、私は恩地先生から敎へをうけるやうになりました時、以前多田先生が、之れは斯うすべきものぞと手を執つてお敎へ下さつた種々なきまりが、やはり法の中のものであつたと知りました、而して逝去せられた先生にこのお話を申上たら、どんなに嬉こんで下さる事であらうと更に悲しい心地がいたしました。


淺野侯爵邸庭園の一部（本郷彌生町）

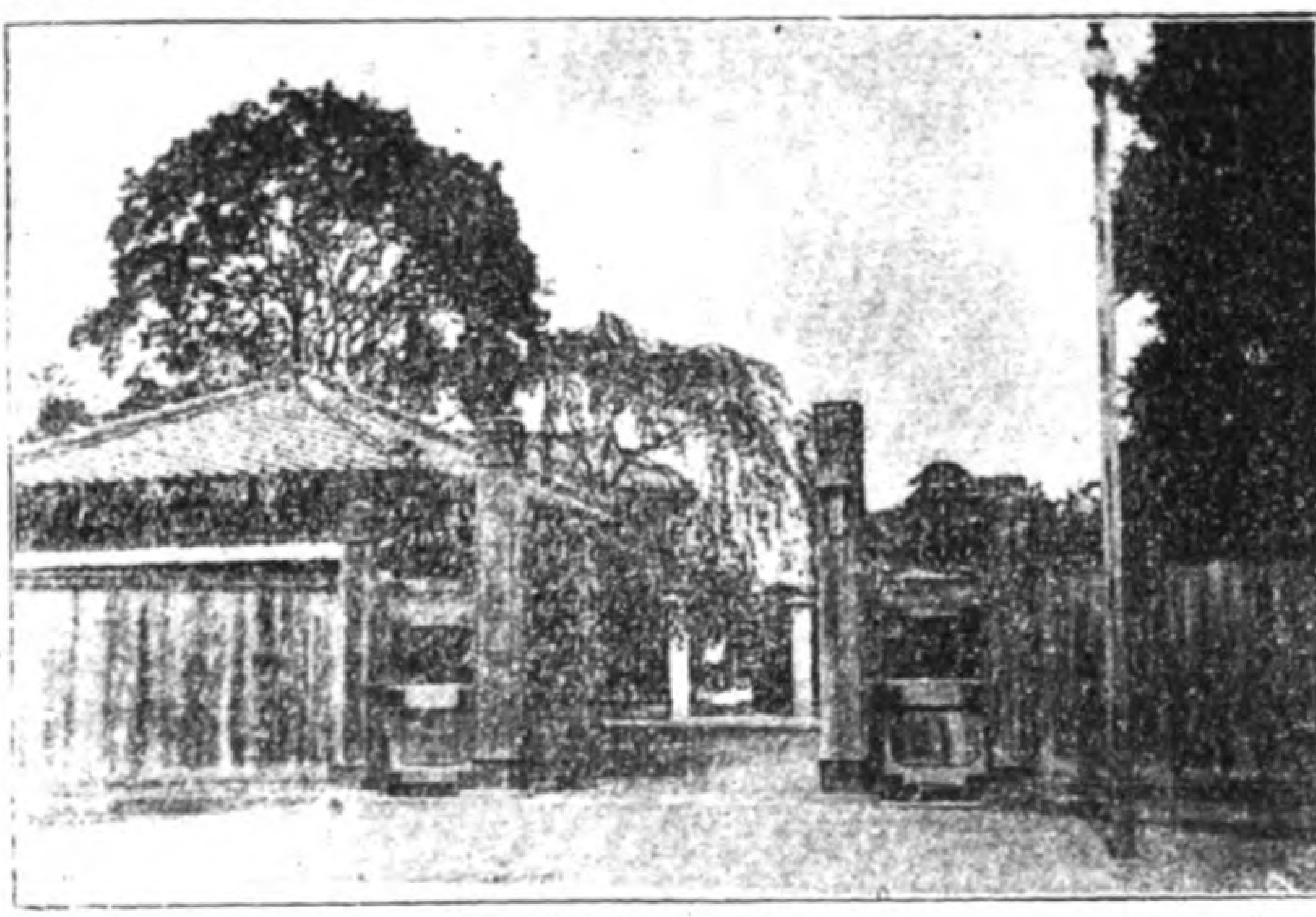
△お家流が廢れた

さて自分がうれしいにつけて老婆心が出てまゐりまして、どうぞ女子が各自相當の文字をかくやうになつて欲しい、昔はお家流が一般に普及して居て、善くも惡くも文字にきまりがついて所謂掟が亂れませんで、上手下手に拘らず見よかつたと思ひます、時勢の變遷につれてお家流が廢てから婦人の手蹟がだいなしになつてしまいました、御家流は矢張入木道の正統尊圓親王が純日本式に書き初められたものであつて、筆法は最も此流に據つて流布されて居つたのでございます、普通の場合に道風の貫之の、とさほど美術の精華を引出さなくとも、嫌味のない銘々の文字があれば好いと

思ひます、逢つて見ると品も落付も立派に備はつた人が文字修業の間違の爲にあたら人格と矛盾する事が隨分多いことゝ存じます、拙ければ拙いまゝ道に叶つて居つたらよろしうございませう。

△小學校の文字敎育

之を習ひますに大人はなまなか先入物がある丈に始は困ります、天地自然の道理で無理がございませんから子供の方が覺え易うございます、小學一年から始て六年敎へましたら中學校では自修にしてよいかと存ます手本を見て模倣するのでない故、自分の氣心の通りに出現いたします而して雜念があつたら一の字一つ滿足に筆が運びません、從て各自性質の長所缺點もまぎれなく現はれて作り飾ることが出來



德川侯爵邸の表門（麻布飯倉）

ませんから、どうしても精神修養も伴ふことになります、讀書數學のやうに思考力が複雜致しませんで極て單純になつて精神が落つくことでございます。

△我國體の貴さを想ふ

何の道も奧儀と申すことになりますと、一朝一夕の事ではございませぬ、書法も神人傳來と申て後漢の蔡邕が仙人から授かつたといひ傳へられて居りますが、神秘的な處はさうでも申さなければなりますまい、日本では空海上人が韓方明から法を受得せられ、

嵯峨淳和兩帝に奉られたのを源として、公卿四家並に加茂の社家を書博士として法を傳へ保護せられたのでございます（夫には沿革がございます）但し正倉院の

目録にも王右軍の筆蹟が澤山見えますし、光明皇后樣の御筆蹟を拜しましても其以前書法がまゐつて居つたに相違ございませぬ。

欽明天皇の頃百濟の諸博士がまゐり、其後阿佐太子來朝せられ學者達をお連れになつたのですから、書法も其間に渡來致して居つたことゝ思はれます、たゞ空海上人になつて規矩を建てゝ敎道せられましたから、大師流と申ます、本元の支那に絶滅して日本にのみ保存せられたといふ事は眞に國體の難有さでございます。



多摩川の上流日向和田

△他人の書を批評してはならぬ

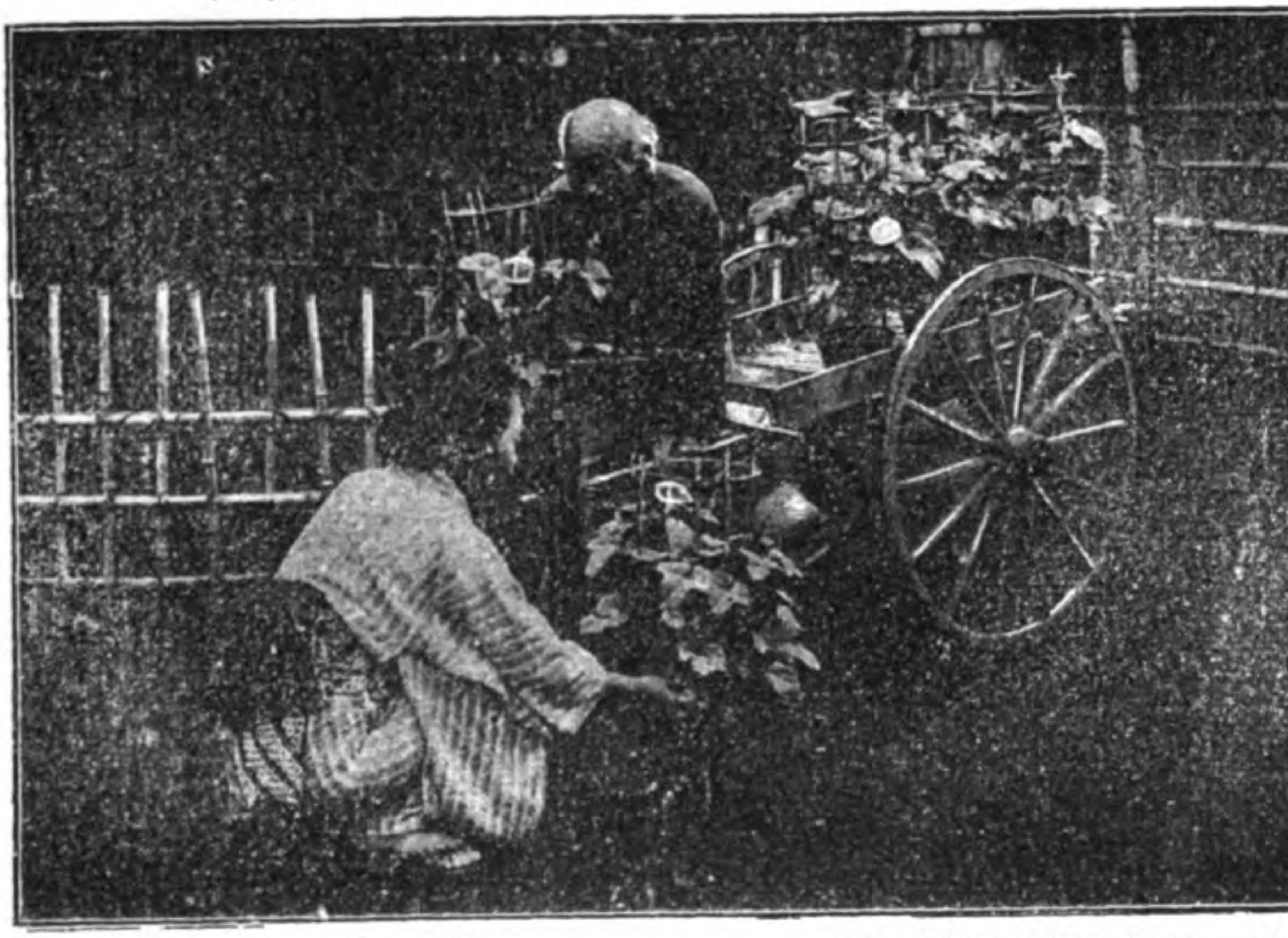
結構な書法もいよ／＼となると法を脱して自由自在な境界に到達しなければ眞の卒業ではないさうでございますから、僅に一端を承知して居るからとてそれを物指のやうに他人の手蹟の上に當塡て誹謗などいたすことは嚴禁されて居ります、又技巧の妙となりますと、山川草木といはず鳥の飛ぶ形、蟲の這ふ姿を見ても文字にあらはすといふことでございますから、古人のは素より誰が書いたものにも他人が妄りに詞を容れるわけのものではござい

ません。

△古來能筆の婦人

女でも蔡琰、衛夫人など唐土に名高い方も出ました、日本の光明皇后様は申上る迄もございません、藤原時代には優れた婦人も多く居りましたやうです日野の御息女と申すはどういふ方ですか古寫片れの中でよく拜見いたします、私は嘗て此方のお筆の伊勢物語をせめて一二行その通りにかいて見たいと存じまして一生懸命に臨寫したことがございますが、一字も似たものが出來ませんで膽を落したことでございました、今になつて見ますと何の辨へもなく馬鹿氣た骨折をいたしたものと呆れて居ります。

朝顏の花に手輕き料理かな（卓池）



先日或方が石摺の千字文を持つて來られて、誰れのかあてゝ見よと申されるのです大師のお弟子方のうちですかと申たらば、昭元といふ女子で加茂敎直の弟子佐佐木志津摩の娘だと申すことで驚きました。

△口傳に限る

昔も今もお志の厚い方が正しい筆道を世間に知らせたい御親切から或一部を通俗に敎導せられた書物も拜見致ました、併し是は著者が現在の御方で質問をすることの出來るのに限ります、さうでございませんと一寸の處に大層な間違ひを生じまして、到底口傳なしには解る筈が

ございませんから。又世間の書物に蔡邕の書論と王右軍の書法と其他聚文堂四體書法等と澤山流布して居りますにも拘らず段々間違つてしまいましたといふのは口傳なしに只文字を見てあて推量をいたすからの事と承りました。

△遺傳の經路

私は素より下根の生れで親共の眞似さへすることが出來ませぬが、不思議な事には祖父の文房具の中に一本妙な筆がございました、何ともなつて居らないから、捨るのも勿體ないと存じて取つて置きましたところ、夫が入木道の點畫筆であつて、當今の筆師雲平の先代が製作したものといふことが分りました、而して夫を持つて一の字を習ひ始めました時は實に嬉しうございました、父祖の趣味が子に傳はるといふものはこんな經路になつてゆくのですから善惡共に恐ろしいものと存じます。（完）



此頃は小粒になりぬ五月雨　（尚白）

◎河夏月

わすれては霜かとそ見る水鳥の
かもの河原のなつの夜の月

◎郭公　野中溪陽

郭公啼そめしより夏山の
青葉もはなにおとらざりけり

◎初夏風

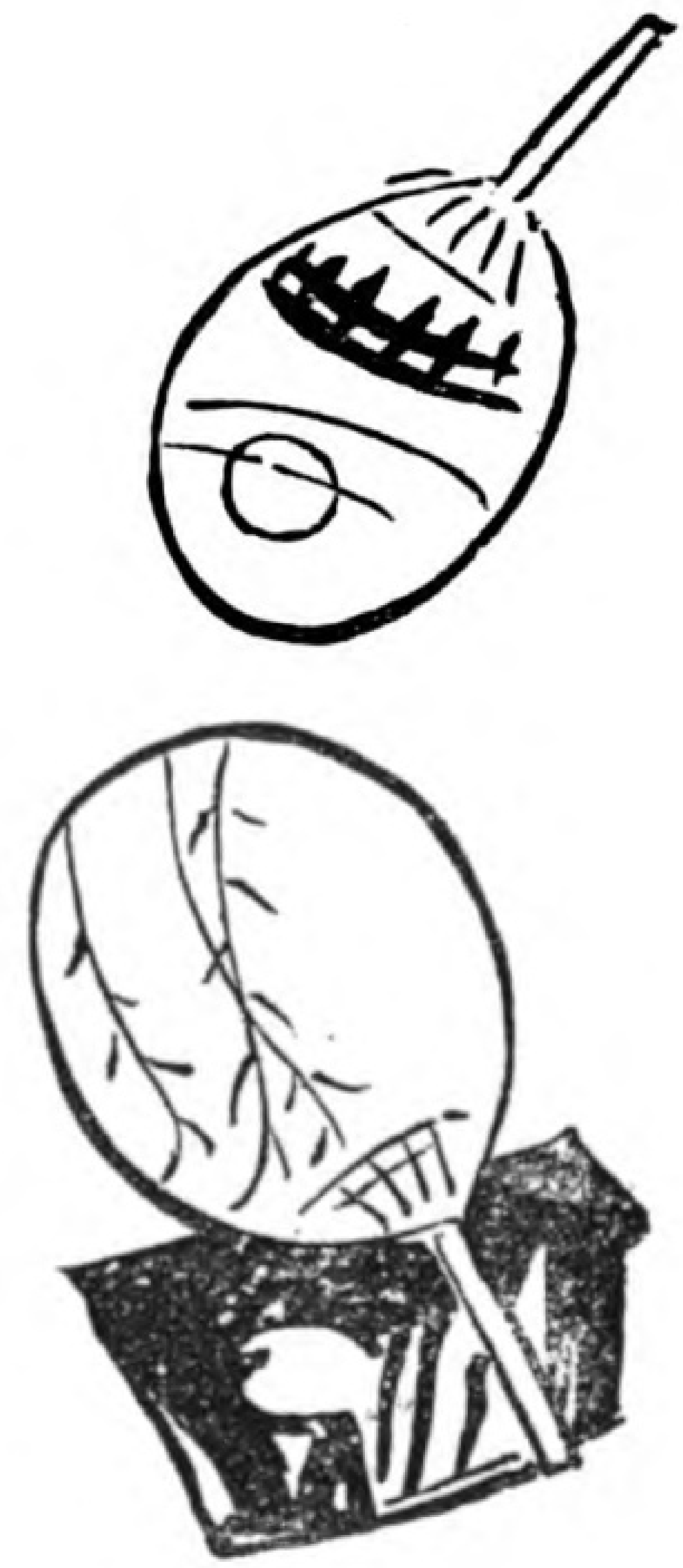
吹としも思はざれ共川の邊の
柳に見えしはつ夏のかぜ

◎溪間百合

荒川の岸のいはほに根をしめて
やさしくさける姫ゆりのはな
夏しらぬ里はこゝぞと谷陰に
雪よりしろき姫百合のはな

◎樹蔭水雞　黒田清綱

てる月の影をはなれて我門の
木の下やみにくひな鳴なり



女教師の尊き天職

葉櫻

其日々々の教訓

漸く試驗がすんで明後日はいよ〳〵證書授與式となつた。今年こそはと樂んだ甲斐もなく、又豫定の成績は得られなかつた。決して怠けては居ない積りだが、遂に骨折損となつてしまつた。去年は新任の事で兒童の實力がよく分らなかつたから、無理を承知で皆上げたが、あれがどうも姑息であつた。如何しても少しの犧牲は止むを得ない、根本的に治療を施さないと全體がくづれて仕まうと思つたので、此度はいよ〳〵二人停級と決めた。

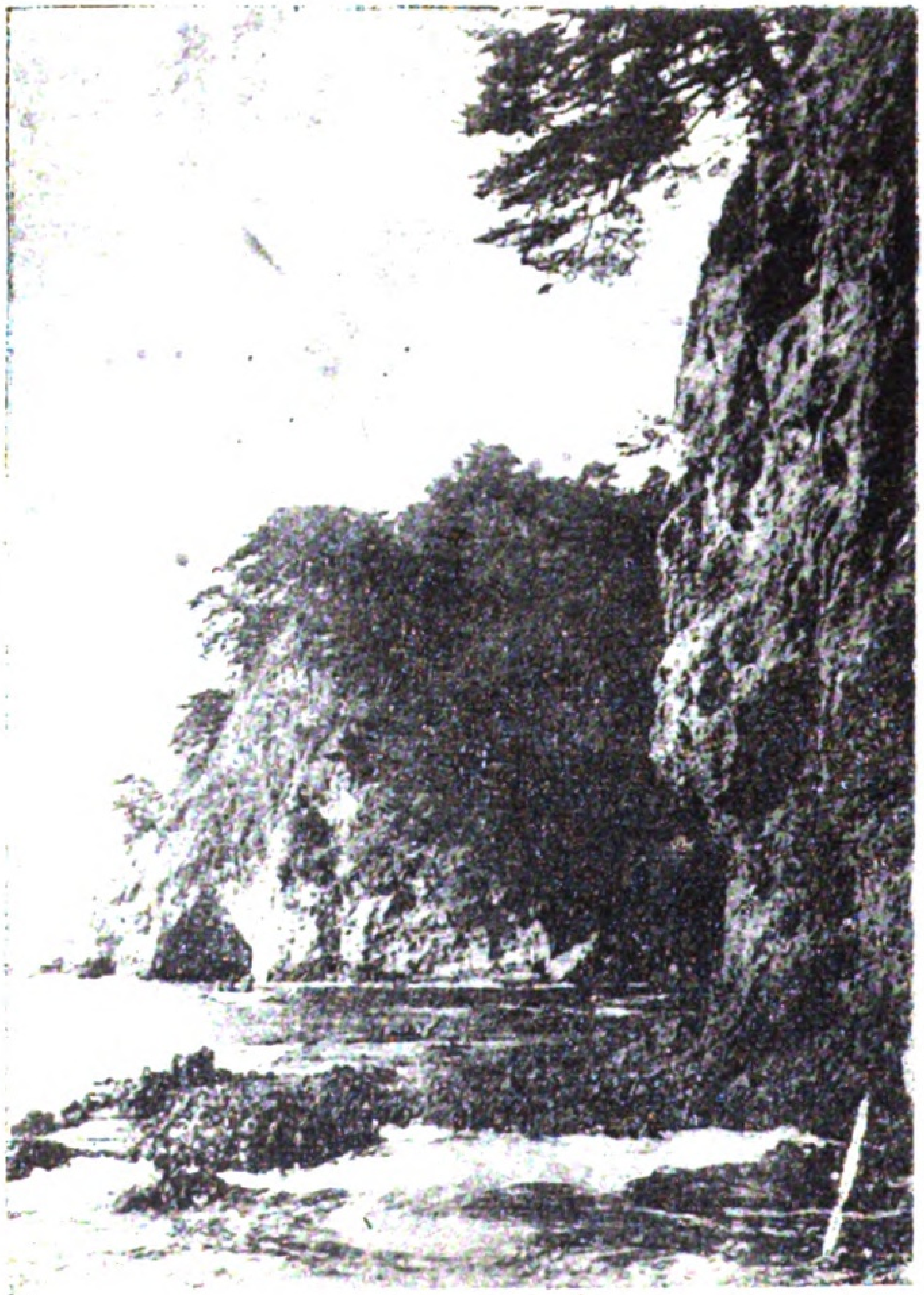
通知簿を渡した時、待ちに待つた兒童等は手を打て喜んで、取る手もおそしと直に成績表を開けて見る。あゝ嬉しい、先よりは甲が多いと喜ぶのもあれば、折角樂んで居たのに約束の靴が買つて頂けないとこぼすのもある。此一瞬時の兒童の心中を考へると、あゝよい事をした、停級兒を先きへ歸へしたのは自分ながら上出來だつた。

敎育者は常に微細な事に注意しないと、不知不識兒童を誤らせる事があるものだ。

證書や賞品を整理して家へ歸つたのは、もう夕方。母樣の愛の御手になつた晩餐を頂いて新聞を讀んで床につく。

今日は春季皇靈祭久しぶりのお休み、日頃の疲れを休め樣と、何時もより朝寢をして居ると、綠々、お人樣ですよ、生徒の親が見えましたよと、母樣に起された。生徒の親？、責任を持つ身は此一言に思はず飛び

起きて、洗面、着替もそこ〳〵に出て見ると、一面識ある停級兒の親！、話さぬ前から來意は讀めた。きつと進級の嘆願だらうと思つて居ると、果せる哉、さんざん我が子の棚卸しをした揚句、願ひ兼ねますが今度だけ上げて頂く事は出來ますまいか實は昨日通知簿を見て、驚いて校長樣のお宅へ參り、お願ひ申ましたけれど、校長樣は、兒童の事は一切受持の先生に任せてあるから、先生から此方へ御相談があれば兎も角、自分では何とも判斷が出來ぬ、それは直々先生に話す方がよからう、と仰有いました、何卒先生のお心で、助けてやつて頂きたい、と――校長の宅へ行たと聞いて例の癇癪が起りかけたが、これで胸がすつとした。ああそれでこそ我校長！、訓導の人格を認めて居らつしやる。だからこそ十數人を統御して、些の非難の聲もない。世の中には自己の勢力を示すのに、汲々として他の人格を蹂躙して迄、職權以外に權力を振ふ人も少なくないとか聞くものを、私も一人前として認められる上は猶更責任を全ふせねばならぬと、一角の先生氣どりで、堂々たる男子をつかまへて長演說を試みた。今度停級させるのは學業の不成績ばかりでない、品性陶冶の必要ある事、忍耐努



熱海錦浦の洞穴

力の修養は人間一生の寶である事、彼れは此精神が少しもない、而かも彼れは發憤努力さへすれば、上達の見込は十分あるから、よし一ヶ年遲れても、少しも惜む事はないが、此儘では學力の不足から、樂みがない物だから、唯自暴自棄に陷つて取返しの附かぬ人間になつてしまふ、との理由を利害を説いて聞かせ、姑息の愛は眞の愛でない事を懇懇得心させて歸らせた。

お互に顏を合せて話して見れば、直に融和する事も言傳や、手紙ですると つい感情の行違ひなどが出來て兎角圓滿に行かないもの。して見ると家庭と敎師の接近は、最もよいものだと思つた。



京華高等女學校裁縫敎室の瞥見

午後明日の用意に髪を洗ふ。洗ふ度に、氣がひける程たくさんぬける。よくこれで坊さんにならないこと、新わらで束ねて髪の乾く暇、緣に出て襦袢の衿をかけ替へる。白襟は直ぐに汚れ目が見えるから、面倒でたまらない。お湯に入ると何だか妙に身がだるくなつて仕事が手につかない、久しぶりに、ヴイオリンを出して離れ小島をひいて見る『水や空！空や水！』と彈き出すと頭も身もすうとしまつて弓が自由に動き出

す『見渡す限り白波の、爰は沖なる離れ島』のあたりに來ると母樣はお裁縫の手を休めてじつと聞いて居らつしやる。のどかな晩だ。

職員會があつて。大そう疲れたから、教案も成績も皆持つて歸つた。下手の横好きで私は作文を見るのが一番の樂しみ。今日は春の野といふ題を與へたが、三年位でよくもかう書けたもの却々思想がたつぷりしてる。そして調が整つて來たのはまことにうれしい。郵便！パタッと重い音がして雜誌が來てよと妹が持て來た。直に心當りの欄を開けて見ると、どうだらう。ちやんと自分のが載つてゐる嬉しくて／＼もう諳記してゐる自分の文章を幾度／＼も繰返して讀んで見る。姉さん私にも見せて頂戴なと云はれて赧くなつた。嗚呼私でさへ自分の作物を見ると此の通り、子供が淸書をとると直ぐ丸の數をかぞへるのも最もだ。これで若し自分の文が出てゐなかつたらもう。外のを見る氣にならないだらう、子供でも直してあるともみ／＼して袂へ入れてしまふ、だから淸書の直しは何の効果もないそれよりはよく平素に注意を與へて置いて、淸書には丸でもつけてやる方が餘程よいと思つて、大きな丸や二重丸をつけて置いた。やつと皆見てしまつて、さあ是からが私の安息時と、夢中になつて雜誌を讀む、濱荻樣の女教師の尊き天職、矢張同じサークルに居る丈けに一等早く目についた。鐵拳禪樣のきび／＼したお筆つき、磯千鳥樣の落着いた上品なお作、其他いつも



皇后宮御用掛小池権掌侍

ながらの千紫萬紅、いづれ劣らぬ花の色に、時のうつるも知らなかつた。ふと氣がつくと母樣も、妹も何時の間にか寢てしまつて大そう靜だ。時計を見るとまだ十時半、こんな時何か考へて見ようと詠草を開く、

いさぎよく咲き出しかな櫻花かくあらまほしなべて世の人

私は何を考へても直ぐに理に走つてしまふ、如何して皆さんの樣に若い花やかな心にならないだらう。むし暑かつたのも道理、ボツリボツリと春雨が窓を打つ、ひどくならねばよいが、花の上が氣づかはれる。

今日はいよ〳〵遠足の日、子供心にも心配してゐた試驗もすんで、晴々した兒童等は、一日千秋の思ひで待つたであらう。昨日からあやしかつた空も、今日は日本晴の好天氣、コバルト色のすみきつた空には、我が時至れりと雲雀が聲高く囀つて居る、私も何だか氣が浮き立つて、足もと輕く村はづれに來ると、村の子供が誘ひ合つて登校する、新入生の親々は、後からついて廻つて、草履を持つたか、紙はあるかとあれこれ世話をやいてゐる。勇んで行く後姿を見送つて微笑してゐる親もある。學校では澤山の中だから、さうも思つては居ないが、扨一軒一軒にとつて見ると、何れも是れも皆大切な子供ばかり、あの樣に氣づかつてゐるものを、仇やおろそかに扱ふてはならぬ。子のある人と無い人とは大そう扱ひぶりが違ふと云ふ事だが、よく氣をつけねばならぬとしみ〳〵感じた。


東京女學館禮法教授沼野俊子女史

停車場迄來ると、まだ一時間餘りも早いのに、もう三々五々手を引き合つて驅けつける、皆袋の中にお菓子や、みかんを一ぱい入れて、喜色滿面、歌をうたふ競走をする、行かぬ先きから疲れるだらうに、道一ぱいになつて走つてゐる。私の姿を見ると一散に驅けて來て、彼方からも此方からも袂につかまつて、てる／＼坊さん作らへた事の、今朝三時から起きた事の、お辨當に何を持つて來たのと、問ず語りに喋つてゐる、何んて無邪氣なものだらう。

汽車に乘込むと又一さわぎ。『日は暖く雲はれて――』と皆一齊に唱歌する、耳がつぶれさうだ、それがすむと窓をのぞいて田圃に出てゐる人々からかつてゐたが、優勝劣敗は爰にも免がれない、胃の弱いものや、營養不良の者などは、一哩と行かぬ間にゑひ始めて青くなつてゐる、こんな事もあらうかと、二三日前から胃の養生法を話して置いたのだが、親に其氣がないものだから困る、現に一人の兒童など、常から丈夫でない方だのに、今朝嬉しさに御飯が食られないと云つたら、そんなら之れはお前の好物だからとて、稲荷ずしを食べさせたさうな、胃病の子にいなりずし、それでさへひどいのに、まして汽車旅行だといふのに消化不良が分らないだらうかと呆れてしまつた。可哀さうに、他の子供は面白さうにさわいでゐるのに五六人はもう半死半生、看護の私も氣が氣でない。



芋舘に入れてもまれよ磨かるゝ芋にて知れよ友の助けを（引佐大師）

土地を離れて遠足すると、兒童は平日よりも一層なつかしさうに、一も先生二も先生と、少しも傍を離れ

ないで、よく云ふ事を聞きますこと、宿泊旅行をすると親子の情が出るといふが、ほんとうにさうだらう、こんな無邪氣な白糸の樣な兒童を、よきに惡きに染めるのかと思ふと、今更に責任の重いのを覺えて、ますます修養の必要を感じる。

愛情永續の結婚

夫婦間の愛情を永く保つて幸福な愉快な一生を送らうとするには、結婚をする時、よく〳〵行末の事まで考へて、身分境遇財産等の相等しき者を選ぶやうにすることが肝腎で、これが賢こい人のやり方である。遠く旅立をする者は先づ其の乘物を用意すると云ふ諺の如く、行末長く幸福な月日を送り度いと思ふならば、先づ其の乘物たる婚姻に注意しなければならぬ。

今結婚上の心得を一つ二つ記せば、先づ出來る丈け女は男より年下の方がよい。世間には女增しの夫婦と云ふのがあるが、女は男よりも衰へ易き性質のもの故、女の方が年上では、男の愛情は何處かに飛んで終ふ憂がある。

次に金錢上の結婚は決して永續はせぬ。金の爲に結婚した者は、金がなくなると愛情もなくなる譯である。且し、金がなくならぬとするも、金の爲めに自由が利ける爲に、遠からず愛情は他に轉じて仕舞ふ。

次ぎに最も注意すべきは、德操の美が伴はなければならぬ事である。此の土臺のない結婚は決して愛情を永く保たれない。多くの人は體貌の美にのみ目をくれ、德操の美を毫も顧みぬけれど、佛者は色即是空と敎へ、西洋でも色は年齡の鉋で削り去られるといふ諺のある通り、體貌の美は年と共に衰へる。されど德操の美に至つては愈〻出で〻愈〻麗はしくなるもので、此の無形美に基く愛情は末々長く續くのである。トルストイ翁が、「名譽と富は、未だ之れを得ざる間は、人生の目的物として人は之れを求めんが爲めに奔走するけれど、一度之れを身にするや直ちに其の詰らぬ事を悟る」と言つた如く、愛情も亦斯く云ひ得るもので幸福の祕訣は「情慾を抑へ、義務を盡すの愉快」にあることを忘れてはならぬ。

次ぎに遺傳病のある者とは決して結婚してはならぬ。瘋癲病、肺結核、癲癇などの遺傳症あるものとの結婚は、愛情保存の道でないことは無論である。

清少納言の機才

梅澤和軒

函谷關の鷄と香爐峰の雪

平安時代は、女子教育の最も隆盛な時代で、才媛も多かつたが、就中最も有名なのは、紫式部と清少納言とである。紫式部は、眞面目な、溫順しい、奥樣風の女で、清少納言は、快活な、お轉婆な、女學生風な女である。紫式部は、念佛を唱へて、阿彌佛にすがつたが、清少納言は、老いて零落しても、笑つて運命にあきらめた。清少納言は、全く當世風の才女と云つてよい。

清少納言は、清原元輔の娘で、中宮定子の方に宮仕した。中宮は、中の關白道隆公の姫君で、此の世をば我が世とぞ思ふと歌つた、御堂關白道長公の御娘なる彰子の方とは、謂はゞ反對黨であつたのだ。紫式部は、御堂關白派であつかが清少納言は、中の關白派で紫式部とは、出處も進退も性格も文才も、全く異なつてゐるのは、蘭菊香を異にするが如く、寔に國文壇上の奇觀である。今清少納言の逸話を少し話して見やう。

清少納言の逸話中、最も其の頓才を示して、時の月卿雲客を驚したのは、函谷關の物語である。一夜頭の辨（太政官の判官の頭にして藏人頭を兼ねたる人）が來て、艶話數刻夜も更けた、明日は物忌に籠るから丑の刻になればわるいからとて退出し、翌朝藏人所の紙屋紙（色紙のごときもの）に『後のあしたは、殘り多かる心地なんする、夜を通して昔物語も聞え明さんとせしを、鷄の聲に催されて』と艶々しい書きぶり清女は『いと夜深く侍りける鷄の聲は、孟嘗君のにやと聞えたれば』と返事をした。すると直ちに『孟嘗君の鷄は、函谷關を開きて、三千の客僅に去れりと云ふは、逢坂の關の事なりと』書いてよこした。で清女は忽ち筆を執つて、さら〳〵と書き流した和歌一首

夜をこめて鷄の空音は計るとも

世に逢坂の關は許さじ

「心かしこき關守侍るめり」と答へた。此の事宮中の大評判となり、清少納言の名聲は藉々として聞えた。帝も中宮も美談であるとお喜びなされたのである。次に有名なのは『香爐峰の雪』である。

或年の冬、雪が非常に高く降つたので、火鉢に火など起して、女房達は集つて居た。此の時中宮は、少納言よ、香爐峰の雪は如何ならんと仰せられた。清女は聲下に立つて　咄嗟に御簾を高く卷き上げたので、皚皚たる白雪は、一と目に眺められた。中宮はいと興がらせ給ひ、殿上人も嘖々として、ほめそやした。此れは白樂天の詩の句　遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峰雪撥簾看　とあるを想起して、中宮の申されたのに、清女が頓才を現はしたのである。清女は如何に頓才があり漢籍にも通じてゐても、此の中宮の如き、才藻煥發の御方がなかつたならば、清女の天才も發揮せらるゝ機會がなく、千歳青史を照らすことが出來なかつたのだ此の閨秀あつて此の才媛ありと云ふべしだ。

一條天皇は、嘗つて「無名」と云へる名琴を携へて、中宮の方に渡らせ給うた。蟬丸の愛琴と傳へられてゐた。侍女が此れを彈じた。切々漕々私語に似て、えも云へぬ音色である。清女は其の名を聞きまゐらせた。宮はいとはかなく、たゞ『なもなし』と申された。『無名』に緣んでかく、申されたのである。申もかしこき御風流である。

道隆公薨じて、伊周等の左遷せられた頃であつた、御乳母の大輔が、日向の國に下る日、餘多の扇を賜ひ中に一方には旭を花やかに、旅ゆく人井手の少將の館の樣などを描き、他方には、京の方雨ふりて．人わびしらに思ふ樣に一首の和歌を添へられた。

あかねさす日に向ひても思ひ出でよ
　都は晴れぬなかめすらんと

眺めに長雨をかけられたのである。古人の詩の句に、桃花潭水深千尺、不及王綸送我情と云ふがあるの中宮が乳母を送らせ給ふ御情は、それにも増して優美である。清少納言も、此の宮の爲めに、死をだにも厭

はじと云ふ風で『さる君をおき奉りて、遠くこそえ行くまじけれ』と言つてゐた。

于定國と一乘の法

長保元年、中宮參內六月十四日內裏に火事があり、天皇は一條院に遷御まし〳〵、八月九日には、中宮は姙娠して、大進生昌が、三條の邸に入り給ふた。清少納言が、于定國の故事で、時の文章生生昌を驚かしたのも、此時の事である。女房の車は、車寄で下ろすものと思つてゐたので、髪貌もつくろはず、お化粧もせずに行つた。すると清女の乘つてゐた檳榔毛の車は、門が小くて入ることが出來ぬ筵道（筵道は通路に敷つゞくるむしろにて絹の緣をとりたるもの也）を敷いた所を行かざるを得ぬ。髪貌のしどけないのを男に見らるる、笑はるる、恥しいことだ。驕悍な、きかぬ氣の清女は腹が立つた。衆人環視の中に、侮辱せられたやうに怒つた。邸に著き、御前に參つて、此の欝念を晴さざるを得ない。宮に訴へ申しあげたが、宮は只、何せお化粧せなかつたのぢやと笑はせ給ふのみだ。清少納言は、一大恥辱を加へられたものとして、大進生昌に返報せざるを得なか



新粧の佳人

山川の風と水との涼しさもよろは螢のものとなりぬる（永好）

つた。怪む勿れ彼女に、成案がある。『さてもかばかりなる家に、車入らぬ門やはあらん』とて、生昌來らば愚弄しやうと、手ぐすね引いて待つてゐた。かくとも知らぬ生昌は、宮の御前に硯を持つて來た。清女は冷笑一番

『いで、いとわろくこそおはしけれ、などてか、その門狹く造りて住み給ひける』

生昌は唐突の問に驚いたけれども、家の程身の程に合せたので、身分相應に造つたのでと答へた。彼は愈愈彼女の術中に陷つた。待設けた奇問は發せられた。『されど門の限を高く造りける人も聞ゆるは』。此れ于定國の故事である。昔支那の于定國と云ふ人は、後々に內閣大臣も生れるやうにと緣起を祝つて、門を高くした、其の事を云ふのだ。こんな低い門からは、偉人は生れぬと冷やかに毒づいたのである。生昌は驚いた其の博學に驚いた。それは于定國の事でせう、古い進士でもなければ知つてゐるものはありますまい、私も文章生で、曾々此の道にわけ入つたので、かう辨へることができるがと、大に驚いた。文選、蒙求、文集などは、當時の敎科書である。此の位の故事は、文章生の知らぬにはあるまいが、清少納言の强記と頓才とは、老文章生を驚倒せしめたのである。

或る日のこと、中宮の御妹の方々や上達部など、宮の御前に集うた折、清少納言は廂の柱にもたれて、女房達と物語をしてゐた。此の時、中宮は物を投げて賜はつた。開いて見れば文がある。

『第一ならずばいかに』

これは、清女が、平生宮に、第一流の人となります二流三流には、死んでもなりませぬと申し上げたので女房達は笑つて『一乘の法』よと戲れたからである。一乘の法とは、法華經のこと。此の經は、お經の中で第一の聖典であるから、清女に比較したのである。宮は筆と紙とを下されて、返事を促される。

『九品蓮臺の中には、下品と云ふとも』

と書いて奉つた。九品とは一切衆生の成佛する階段を九つに分けて說いたので、釋迦が無量壽經に說かれた

言葉である。上品中品下品と三品に分け、更に其の中に、上中下の三等を設けたのだ。宮の御情にあづかるからは、下品で滿足し成佛し奉るとの義。宮はさう屈してはいけない、言ひ出した事は、どこまでも一貫するがよいとて、

『無下に、くんじにたり、いとわるし。言ひ初めることは、さてこそあらめ』

『人に隨ひてこそ』

と申したが、

『それがわろきぞかし第一の人に又第一に思はれんとこそ思はめ』

と仰せられた。此の宮の如きは、赤心を人の腹中におかるゝ方で、寔に珍らしい御方である。清少納言が、かゝる芳しき淑房に仕へたのは、望外の幸と云はねばならぬ。



新粧の佳人

晴間をも待たぬばかりに成にけり降になれたる梅雨のころ　（永好）

清少納言には、また名家の後と云ふ考が、常に腦裏を去らない。自分は、名家の後である、梨壺五歌仙の一人たる元輔の後であると云ふ自慢がある。或時女房等が、時鳥を聞いて歸り、清女にも詠歌をすゝめた。高慢な彼女は、なかなかよまぬ。中宮は元輔の後と云はるゝ

君しもや
今宵の歌にはづれてはをる

とものせられた。

其の人の後と云はれぬ身なりせば
　今宵の歌はまづぞよまゝし

と返しまゐらせた。彼女は、名家の後を辱かしめるのを恐れた。同時に氣取もプライドもあつたのである。名家の後でないならば、千萬首も、立所に詠まんと、氣焔はなか〳〵にさかんであつた。

駿馬の骨

私は此の中宮の御事を「美的皇后」と稱へ奉つたのである。此の美的皇后も、中の關白派の內閣が瓦解し赫く藤壺人內せられ、中宮の寵は秋扇となるや、意怏怏として樂まず、空房涙潸々たるものがあつた。去程に中宮崩御の後、兄の帥殿伊周は、宮の御帳の紐に結びおかれた御歌を見出された。

夜もすがら契りしことを忘れずば
　戀ひん涙の色ぞゆかしき

知る人もなき別路に今はとて
　心細くも急ぎ立つかな

烟とも雲ともあらぬ身なりとも
　草葉の露をそれと眺めよ

末路何ぞ悲哀なる。佳人涙なきを得ぬ。人心移つれば變る世である。友白髮の契もあだ、無常は迅速、哀別死別の血涙を催すものがあるではないか。あはれ中の關白派の優しき皇后は、かくの如くにして涙を呑んで逝かれた。かくして後宮は離散した。逝く年は再び來らぬ、赫く藤壺全盛の時、鳥啼き花落ちて人何にかある噫。

清少納言は、主と賴みまゐらせた中宮には死別れ、內閣も崩解した。彼女は小野の小町のやうに零落した元輔が昔住んで居た家の傍に、清少納言も住んでゐた。雪いみじう降りて、へだての垣も倒れければ、申しつかはしけるとて、赤染衛門の和歌一首、新古今集に見える。

跡もなく雪ふる里に荒にけり
　いづれ昔の垣根なるらん

末路の慘狀も忍ばるゝ。或時殿上人、あまた同車して、清少納言の門前を過ぎ、屋敷の破れたのを見てあざわらつて過ぎた。鬼の如き形の女、法師顔を差出して、「駿馬の骨」は買ぬかと罵倒した。これは昔支那で死馬の骨を五百圓で買つて駿馬を賣りに來るのを待つてゐた名臣があつた其の故事を想出して言つたのだ假令落魄しても、驕悍の氣は少しも衰へない、一片の奇骨稜々たるものがある。

清少納言は、女性であつても、男性的で、きかぬ氣な驕悍な所は、缺點であるが、また快濶な、落々たる心持は、京の女としては珍い、稀な女である。人形妻として、家事に齷齪するよりも、むしろ囚はれずに、解放せられたいと、今日ならば言ひさうな女で、獨身な所までが似てゐる。

おのづから角一つあれ人心あまり圓きはころびやすきに（隆覺禪師）



新粧の佳人

平安時代は、女子敎育の盛な時代であつて、才媛の輩出した時である。明治の今日も、種々な點で當代と似通つてゐるが、清少納言のやうな『新しい女が』澤山生れやうとしてゐるのは、一考を要することであらう。

少年少女の過渡期に於る態度

ウエストン夫人

ウエストン夫人は本年六十餘歲の老教育家特に小兒の研究と開發に就てはこれを畢生の事業として居られるお方でございます。左は女史が聯合母の會の席上で講話された一節でございます。

▲私の國で唱道する新科學

動物學界では各地に產する馬の特所を參酌して完全な馬を造ることを研究し、植物學界に於ても人工を以て理想の草花を養成すると云ふやうなことは、唯今私の國(米國)で最大必要の新科學として識者が熱心に唱道して居るのでございます。而してかやうな科學はこれを人類にも應用し、自然の法則に從ひつゝ改良することを務めて居ります、右今東西を問はず國を盛んにするには人類改良が要素でありまして、その局に當るものは即ち母親でございますから、母親及び未來の母となられる婦人は子供を深く研究してよき人間を造る方法を講究することが何より立派な事業であると存じます。

▲知らぬ振して見て居るが宜い

子供を研究する場合には唯研究と云ことに重を置て虛心に觀察しなければなりません。無邪氣な子供でも大人の見て居る前では兎角その人の氣に入るやうなことを爲て天眞を掩ふ傾きがあるのですから、成可く知らん顏を爲て、子供の遊ぶのを觀るのが肝要です。子供の勝手な遊び方を見て居ますとつい彼此制御して自分の理想通りに矯正して見たくなるものですけれども、漫りにかういたしますと子供の自然の性情を看破ることが出來ず、從つて適當な教育法を施せないのでございます。

▲小兒の發達に七期あり

小兒研究者は唯今小兒の發達を七期に分て居ります。その中第一期より三期までは母胎に在る時期ですから爰に省きまして、嬰兒、幼兒、子供、成年に移る頃と云ふ風に分ち各過渡期の樣子を大略申上げませう。尤も國土の寒熱に依て發育の遲速が大分ございますので一定して年齡を示すことは出來ませんけれども、その各期に於る態度の變化は保護者特に母親の頭腦にありありと映するものでございます。

▲社交的智識の發達する時期

嬰兒時代には未だ思想が纒りませんから唯音を聽く物を見ると云ふだけに止つて居ますが、幼稚時代になりますと眼に見える物へ指を觸れて動して見たり、色を識別したりする働きが出て參ります。尚進むと扇子なり時計なり持つた物を破壞して見る、これは思想を區々に集めつゝあるのです。最少し進むと他の子供と遊びたがりますがこれは社交的智識の始まりでございます。その次は一の思想と他の思想との區別を辨へて物を好惡する智識が出て參ります。この時は今まで無心で愛らしかつた子が何となく小惡しくなるものですが母親はこの時代に唯何々を爲るなと壓制するよりも子供の智識相應の道理に訴へて自然の法則を徐ろに說き聞かす方が宜しい。假令ば石の上で轉ぶと怪我をするとか、小刀を玩ぶと手を切るとか云ふやうな原因結果を敎へ始めるのはこの時でございます。子供にこの道理心が起つた頃は幼稚園に遣つた方が宜と思ひます。幼稚園に入れば人間に各々權利があつて恣まゝに我意を張れぬことや、組織立つたことを悟り得るでせう。但し幼稚園はよく詮索して完全のを撰ばなければなりません。

▲發育の尤も早き時期

六歲頃は男女各性の基礎が出來る時期ですから發育が急劇で態度が著しく變化いたし羞恥を覺えて客が來れば逃げ隱れたりなぞいたします。而して發育が急であるために非常に飢を覺えるものです、一體この頃

に我が強くなるのは自然でありますから無暗に叱つて意志を折るのは宜しくありません、丁度上手な庭師が枝を折らずに巧に撓て恰好よく植木を育たせるやうに子供の我意を旨く撓てゆく工夫が肝腎です。

▲身體を損ふ時期

子供時代を過て大人に移る時期には女は身體機能の變化があり、男は聲變りがすると云ふ風に過渡期の徵候がよく現はれるものですが、此時代は兎角心身の變化のために健康を損じ易いので母親は尤も注意を要します、子供はこの少し前より獨立思想が起り、今まで母親に舌吻されるのを怡んで居た男兒でも、もはや舌吻や頭へ手を當てられることなぞを忌がるやうになります、この樣子になれば母親は幼兒に對する態度を止め、お前でなければ出來ないと信用的の誘導を爲て少しむづかしい位の仕事をさせて見るのが宜しい、男兒は、特にこの仕向が必要です。

▲理想を遠きに求める時代

男女共理想時代に入りますと、理想を遠きに求むるために往々不測の失策を醸し、男子は理想の婦人を崇敬するの極二十歳も上の婦人に戀することもあり、女子も夢のやうな戀に憧れるなぞ、誠に母親の一番心配な時代でございます。それにこれまで一々母に打明た兒が何事も彼等の胸に秘して了いますから尚更眞相を知るに苦しみます。思慮淺き母親は、今まで何でも自分に打明て可愛らしかつた吾兒が急に分け隔てをして小惡しくなつたと考へて、注意と愛とを減ずるやうになりますけれども、これは心意の變化と申すより寧ろ身體の變化が原因しますので發育上當然の法則でございますから尚更適當の保護法を講究して深き同情を寄せ身體の健康を損せぬやうに導かなければなりません

私はこの時期の男女のために出來得る限り親切同情を盡すことを一生の事業といたすつもりでございます

▲天地自然の攝理を清く敎ゆべし

子供は年頃に應じて樣々の質問を發するもので、その質問の種類特に生育的のことについては往々解釋を與へ惡く、母親は已を得ず姑息の僞を說て掩ひ隱すと云ふのが今までの常習でありました。併し凡て生育に關することは神聖なる天地自然の攝理であつて決して掩ひ隱すべきものではないと思ひます。唯これを說く方法に依つて淸くもなり卑くもなるので母親の注意は一にこゝにございませう。假令ば植物好の子供であれば一の美しい花を取て雄蕊雌蕊の作用を話し、動物好であれば蠶の發育或は魚卵の孵化などについて說くも宜しく、雌が岩の上に卵を生付ると雄がこれに精をかけ日光に依つて孵化する魚族の實話なども面白く、尙鳥類の母親が子を育つる勞力や、動物の階級に依つて殖產の數に多寡あることなぞ興味ある話は幾らもあらうと思ひます、總て淸く正しき自然の法則即ち神の攝理をわざ〳〵掩ひ隱す姑息の敎へ方は却つて子供の將來を危くするものでございます。子供の心身共に預つて居る母親は子供の心理狀態の變化身態の變化に基することを須臾も忘れてはなりません。

▲幸福なる日本婦人方に望む

印度では小兒時代に結婚する風習がありますが、國民を劣弱にする基として近頃憂國の士が早婚排斥を主張いたし、女子十六歲、男子二十一歲を程度とする樣に盡力して居ります、身體の生長しきらぬ内に父母となるのは危いことですが餘り晩婚も子供に弊害を及ぼします、日本の結婚年齡は極めて常識的自然的に制定されてありますから、誠に幸福なことゝ存じます。尙私が各女學校を參觀しましたのに、未だ私の鄕土(シカゴ)當りでは迚も及ばぬ程に家政學を奬勵され、寮舍に於ける主婦の練習、及び家庭的美術の敎育等一一感服に堪へませんで、かく家庭的に敎育さるゝ日本の婦人方は實に幸福であると存じました。この幸福なる貴女方は益〻子供の敎育に注意を拂ひ人類改良の實効を擧げられんことを切望いたします。

腹式呼吸の話

醫學博士　二木謙三

私は貴女方に心身健安術として缺く可からざる腹式呼吸を御勸めいたしたいと思ひますが、最初にざつと學理的のお咄を申し上ませう。

▲呼吸の種類

呼吸の仕方には肺尖呼吸、胸式呼吸、腹式呼吸の三種類があります。肺尖呼吸と云ふのは、身體の弱い人の行る呼吸で、肩で息を切る、あの瀕死の病人の呼吸のやうな力弱いものであります。御婦人方は多くこの肺尖呼吸をやつてお出でのやうです。次の胸式呼吸は息を引と胸が擴がつて腹が低くなる仕方の呼吸で、最後の腹式呼吸は息を吸ふと腹が出るやうにする仕方であります。

▲三呼吸法の優劣

肺尖は最も組織が弱い處ですからこゝへばかり空氣を吸ひこんで使ひ過しますと自然結核菌などが附着し易い。又肺尖加答兒を起すのも肺尖呼吸をやつて居る者に多い。凡て空氣は肺全體に平等に入るのが一番宜いのですから、一部分に入る肺尖呼吸は一番いけないのであります。胸式呼吸は肺尖呼吸よりは勿論宜しいのですけれども、肺を横に擴げて丈を短くしますから完全とは申されません。腹式呼吸は肺を縱横平等に擴げ、肺尖も肺底も同樣に擴げますから尤も宜しい呼吸法なのでございます。

▲横隔膜の作用

腹式呼吸の宜い譯を今一層細かく云ひ現すには先づ横隔膜の作用をお咄しいたさなければなりません。人間の胸と腹の間には饅頭笠形の一枚の膜が上高く張てあつてこれを横隔膜と稱へます。この横隔膜の上の處が肺の入て居る胸で、心臟は少し左方に附て居る。胸は御承知の通り少し動き得る肋骨で出來て居て、動く

時に肺が擴がります。横隔膜の下になつて居る腹は、柔かい筋膜と皮膚で成立つ所の腹壁で圍まれ伸縮自在の働らきが出來るのです。それで横隔膜の筋肉が縮むと笠の山が低く下つて胸が廣くなり、從つて肺が擴がります。胸が廣くなれば腹の方は狹くなる理窟ですが腹中には胃や腸が一杯に入つて居るので上から壓されると、勢ひ前へ張り出して來ます。又横隔膜の筋肉が弛んで上ると胸が狹くなつて肺が縮まる代りに腹は廣くなりますから内臓は上に上つて腹皮が凹む。これが即ち横隔膜の作用であります。

▲腹式呼吸と横隔膜との關係

腹式呼吸とは横隔膜を上げ下して呼吸することでありますから一名これを横隔膜呼吸とも申します。横隔膜を壓し下るやうに息を吸こんで胸の容積を下へ大きくすれば、組織の丈夫な肺底で呼吸をすることが出來ます。又横隔膜が壓上られるやうに腹皮を縮めて凹ますやうに息を出すと肺に在る惡い空氣を十分に外へ出して了ふことが出來ますので、この呼吸法が一番良いのであります。

▲腹式呼吸と血液循環との關係

全身の血液は半分以上腹部へ入り、その殘りで筋肉、腦、皮膚及び他の内臓を養ふと云ふやうにチヤンと分配が定つて居るのですが、横隔膜がフワ〳〵弛んで居ると澤山の血が腹へ溜り、全身を環る血が少くなつてその部分の貧血を起し、例令ば眩暈したり手が痺れたり肺の力が弱つたり様々な障害が起つて來ます。又腹部の方にも循環しない血が鬱滯して居ると腹の動悸が強くなり腸胃の工合を損じるのです。でありますから何でも腹から血を押出す工夫を爲るのが肝要で、腹の血を壓出すには腹を前に張て横隔膜を下げ壓力を強くして血を壓出すやうに爲なければなりません。心臓は横隔膜の上に位し、丁度管のあるゴム袋へ水を入たやうなもので、そのゴム袋を縮めると水即ち血は管から外へ出る。この血を押出す力は可なり強いけれども血を吸ひこむ力は殆んど無いのに如何して心臓へ血が歸つて來るかと云ふに、前申す通り心臓から押出された血の半分は四肢、頭、胸等に流れ往き、半分は腹部に流れこんで心臓は一旦空になりますが、肚の血管がその彈力と腹皮及び横隔膜の壓力とで收縮して今度は血が他に往きどころが無いから再び心臓の方へ押上られて歸つて來るのであ

りますがこの際若し腹の張が弱いと、血が腹に滯つて心臟の方に澤山上らないのです。そこで腹式呼吸を以て横隔膜を下げますと十分に心臟へ血が歸り、この血は直に新鮮となつて各部分に循環しますから、何時も五體に活氣が滿つる次第ですし、腹部の方も鬱血なきために工合が清々しくなるのであります。

▲大抵の病氣には罹らぬ

腹は上下前後へ自由に動き得る體腔であつて、これを動すことに依つて全身の調和を計るのであります。若し腹を動かさなかつたら血行も惡くなり、神經の働はきも段々鈍る。加之肺や心臟の抵抗力も弱つて參ります。何でも腹を動かしさへすれば血液の循環も胃腸の働らきも盛んになるので、便秘の人が腹式呼吸をやれば一日一回づゝチャンと便通が附き、慢性胃弱、不眠症、神經衰弱症、ヒステリー病等も不絕これを實行すれば必らず治すること受合であると古人も云ふのである。併し病氣にはかゝらぬが增なり、此の呼吸をすれば健康の上に健康になり病に罹らなくなります。

▲百事成功の基

昔から何事を爲るにも先づ心を丹田に落付てかゝれと言ひ傳へたもので、碩學偉人の言行錄にもよくこのことを書いてあります。技術工藝の神に入つた人は必らず丹田に氣を充すことを務めて居つたに違ひありません。丹田即ち下腹にウンと力を籠め心氣を落付るのは丁度武術の氣合の如きもので眞劍に成功する基であります。下腹に力がこもらなければ名刀を振上ても切味が出ない、重い物を持つのに腕力がつかぬ。競爭を爲ても勝てない。又靜坐書を繙きて難文を解し、算數理科を研究するにも下腹に力なければ精神浮遊して腦力は零となる。茶の湯、活花、刺繡、裁縫の如き手先の技藝に至るまで丹田充氣が基礎であります。特に細かき彫物の如き極緻密な仕事にこの丹田充氣の必要なことは實驗ある人の感するところでありませう。丹田充氣は即ち腹式呼吸の結果として來ることでございます。

▲私が實感した利益

私は生れた當時、この兒は育たぬとまで醫者に言はれた位でしたから小學時代にはお咄しにならぬ弱蟲であつた。腦を始めとして眼、齒、氣管、腸胃、皮膚、何處と云つて良いところは無つた。危い大病も三度ばかりやりますし實に憐れな身體でありました。お醫者でも草津の湯でも達者になれぬと云ふ悲運に陷つた私は何か他に方法はなきものかと悶へ出したのは十六七の頃でしたが、不圖平田篤胤先生の志都乃石屋と云ふ本の中から我身の養生法に適切な事を見出して、暗夜に光明を得た心地がいたしました。それは唯今の腹式呼吸法であつたのですが私は專心これを實行して居る内何時の間にか忘れたやうに病氣も何もなくなつて了いました。この不思議な効果を一々具體的に述べると面白いのですが、餘り長くなるから他日に讓り、次に一寸平田先生の志都乃石屋を拔粹して御參考に供します。

人の身體は天地の間なる氣を口鼻より吸て上焦(即ち胸部)に登け、夫より中焦(即ち水落)下焦腹中惣體へ送り、其氣の力に依て血もよく一身を運るところを心を勞すること甚しければ常に物思ふこと絶えず、胸膈穩やかならぬ故、その氣沈滯して下への運り悪く、そこで種々の病症が起る。(中略。)尤も食養生と云ふこともあれど第一に胸膈の間に氣を沈滯せんでよく下焦へ循るやうに心がけるのが專要でムこ此は誰でも知て居る通り臍の下に氣海と云名をつけた穴處の有のも實は人の口鼻より受る處の氣をしつかりと臍の下謂ゆる氣海の穴あたりに湛へて有やうにと云ふ義で名づけた物でムこ然ればこれ程やんごとなき大事の處ゆへ醫書と云ふ醫書は本よりのこと諸道諸業何れもこゝへ氣をたゝみ蓄ることを論し、先づ天竺では釋迦よりも遙まへより學び來つたる婆羅門の修業も治心と云て心をこゝに治むるの修行、又釋迦の修したるところもこれに他ならず。(中略。)さて臍下へ氣を練りこむの修法は種々ある内にイツチ手短い修法が有る。(中略。)毎夜寢所に入て未だ眠りにつかぬ前に仰向て兩脚を揃へて強く蹈のばし、總身の元氣を臍の邊から氣海丹田の穴及び腰、脚先の心まで充しめ、さて他の妄想をさらりと止て息を數へること百息にしてその踏しめたる力を緩め、暫くあつて又かくの如く云々。

▲腹式呼吸の仕方

腹式呼吸の仕方は樣々ありますが、一定の時間に特別に行ふとなると繁忙の者はつひ長續がしません。一寸物好にやる位なら寧ろせぬ方がましですから、何でも各自の職業に應じて實用的にやる方が宜いと思ひます。坐しても腰掛ても立て居ても歩き乍らでも何れでも宜しい。坐する際には足を少し重ねて尻を其上に安置し、脊骨を垂直にして腕は肩から下て膝の上に置き、身體を落着て胸を十分に開き、腹を前へ出て呼吸をお始めなさい。而して腹の膨れるやうに、且少し腹の外から押て見て固くなるやうに息を吸ひ、少し精神を落着てから腹が可なり凹んで腹に在る空氣が胸を通つて外へ出るやうに息を吐き、又少し落着て前のやうに吸ふ。吸ふ時も吐く時もよく力を入れ徐々にするのです。但しこの呼吸は極端までやらずに大抵八分通り息を出入するのが宜しい。而して成可く鼻で呼吸をするやうに爲さい。特に吸ふ際は必らず鼻からでないと肺のために宜しくありません。立つた儘でも歩き乍らでも或は寢て居ても畢竟かやうな呼吸法を行へば同じ効果を奏するのであります。一般に無病な動物は自然にこの呼吸法を實行して居ます。試みに猫や犬の息を御覧なさい必らず腹を動かして居ませう。それから赤兒も腹式呼吸であります。笑ふのは樂になると云ふのもつまり笑ふ時には腹が凹凸して自然に腹式呼吸を行ふからであります。

▲腹式呼吸を見合すべき場合

腹式呼吸は自分の經驗に照して極めて健康に宜しい術と信じますけれども、惡い病氣の蔓延しつゝある今日は悉くこれを治するわけにも參りますまい。併し今日の人は惡病にかゝらぬ豫防策として一層これを修練爲なければなりません。但し已に病に罹れる人は病質に依て一時見合せる場合があります。例令ば腸窒扶斯、赤痢、盲腸炎、肺炎の如き急性のものや各部の出血ある場合等は宜しくありません兎に角疾ある人は一應醫師に相談して許を受た後に行ふが宜しうございます。

■會員募集● 幸福なる生涯は本講義に得らるべし■

女子大學家政講義

●入會隨時●

何時御申込むも初號より配本

家事に就てのあらゆる智識と良妻賢母の徑捷處世の要訣を最も懇切に詳述せるは本講義也講師は皆多年女子教育に經驗ある大家親切なる講述は通學聽講すると異らず之本講義の特色也

▲會費
月五十錢
半ヶ年貳圓八十錢
●全學期分十圓●

科目と講師

●修養談……諸名士教育家
●修身講話……成瀨仁藏
●教育……麻生正藏
●實驗心理學……松本亦太郎
●兒童研究……高島平三郎
●法制大意……法學博士 奧田義人
●經濟大意……文學士 中隈敬藏
●社會衞生……醫學博士 三宅秀
●家庭理科……近藤耕藏
●家事……井上秀子

●作法……小笠原清務
●日本料理……笹木幸子
●西洋料理……手塚かね子
●裁縫手藝……櫻楓會研究部
●生花……兒島晩翠
●家庭園藝……農學士 佐々木祐太郎
●自然研究……大橋ひろ子
●文藝……文學士 竹島羽衣
●國文學評釋……文學士 下村英

其他科外として歷史地理講話、生理、家庭、衞生等あり

▲見本付き會則 申越次第進呈

東京市小石川 日本女子大學校通信教育會

東京市小石川區久堅町一〇八
發行所 精美堂 振替東京二八三八

實踐女學校長
下田歌子先生著

三體女子消息文

菊判全一冊

定價 特製壹圓廿錢
　　 上製壹圓

郵税各金拾貳錢

本書は下田先生が子女間に往復する通信文に就て其起源、變遷、種類、組織、書き方に至るまでを尤も平易簡明に說き、更に之を雅文、候文、口語文の三體に分ちて萬様の文範を揭げ以て思想、感情の表顯、應答の資料に供するなど本書の特長とする處なり。

日本女子大學教授
手塚かね子先生著

家庭の友 西洋料理法

四六全一冊

定價金壹圓

郵税金拾貳錢

本書は女子大學にて多年實地に教授せられたる經驗と一年餘り歐米の料理界を視察せられたる最新の智識とに依て著者が新たに稿を起されし日本唯一の料理書なり、料理の數多きと日本の家庭に容易に行はるゝ様材料を撰びたるは尤も著者の意を用ゐたる處なり而かも優しき文章にて趣味深く書き一讀直ちに應用し得て家庭の幸福と愉快とを増進すべし。

日本女子大學教授
笹木幸子先生著

年中行事 家庭儀式料理

菊判全一冊

定價未定

目下印刷中

本書の著者も亦女子大學に於て實地教授せらるゝ經驗と深き學識とを基礎として年中行事に關する儀式料理の事を詳述したるものにして前述の家庭の友と併せ見ば東西洋料理の全般に通曉して些の遺憾あることなし家庭に是非一本を備ふべき好著述と云ふべし。

鳩山春子夫人著

婦人の修養

菊判全一冊

定價金壹圓貳拾錢

郵税金拾貳錢

本書は鳩山夫人が深き素養と、廣き見聞とを以て婦人常識の修養を說きたる書にして、敢て新奇に走らず舊を棄てず能く其中庸を得たる好著と謂ふべし、之を讀みたらんには母たる人は育兒の敎へを聞くべく社交の婦人は交際の術を學ぶべく各女學校は最好の參考書として如何に偉大なる感化を受くべきか誠に得易からぬ婦道の木鐸といふべし。

女(ゐの六)

博文館編輯局編纂
明治四十四年

夏期休暇

小學生日誌



洋裝菊判
石版刷表紙頗美本
各冊口繪寫眞版一枚
挿畫數十個挿入

本年は最も速に注文せざれば賣切の恐あり

（定價）

▼尋常科第三學年用
▼同　第四學年用
（紙數每冊四十二頁）正價各一冊五錢五厘　郵税一冊二錢宛

▼尋常科（第五學年用 第六學年用）
▼高等科（第一學年用 第二學年用）
（紙數每冊四十二頁）正價各一冊七錢　郵税一冊二錢宛

特別割引

尋常小學三、四學年用

五十冊以上	一冊送料共金五錢八厘
百冊以上	一冊送料共金五錢六厘
二百冊以上	一冊送料共金五錢四厘
三百冊以上	一冊送料共金五錢二厘
四百冊以上	一冊送料共金五錢
五百冊以上	一冊送料共金四錢八厘

尋常小學五、六學年用　高等小學一、二學年用

五十冊以上	一冊送料共金七錢貳厘
百冊以上	一冊送料共金七錢
二百冊以上	一冊送料共金六錢八厘
三百冊以上	一冊送料共金六錢六厘
四百冊以上	一冊送料共金六錢四厘
五百冊以上	一冊送料共金六錢二厘

注意

一、臺灣、樺太、朝鮮、清國、送分は……一冊に付三厘增しの事
二、內地代金引換小包送分は……一冊に付三厘增しの事
但 臺、樺太、朝鮮、清國行、代金引換小包送りは……注文者の負擔を輕からしめんため前記三厘增の外割增を爲さゞる事

東京日本橋區本町三丁目　**博文館**　振替貯金口座東京二四〇番

肺病患者に警告す

醫科大學藥學專攻
藥學得業士　金澤巖

肺病は難治の疾病にして病理診斷等の幼稚なる時代に於ては殆ど不治の病と稱せられたり此習慣久しくして今日尚必死と信ずる人多く教育ある醫師と雖も患者が肺病の診斷を以て死の宣告となし失望悲嘆するを恐れ最末期に及び治療の目的なきに至り始めて實を告ぐる事多し故に輕症時代に患者は其覺悟にて充分攝生服藥せず又家族は平素消毒豫防せず爲めに一家傳染滅亡する事多し是實に大なる迷信にして此考への爲めに生ずる人生の不幸は極めて多大なりとす不肖往年肺病に罹り一時は不治と決心したるも多數の成書を渉獵し大に悟る所あり現今醫學上の方式を原則として自ら實驗に實驗を重ね攝生療養に力を盡し又藥化學上の原理を應用し一新藥を發明し終に自個の病軀を全治し舊倍の健康を得るに至れりその藥物をキニトールと號し發行せるに既に幾千通の全治輕快の報告實證を受領せり爾來十箇年間に於る學界の進歩と實地の經驗を鑑み數次の改良を經て『第三キニトール』を發行せり此新藥は少くとも現代に於ける理想的肺病治療藥にして消化器を害せず食氣を進め全身の營養を增加し精神を爽快にし熱を去り痰を切り咳を鎭め肺病の各症狀を寬快し病原菌を擊退し漸次體量を增加し全治に至らしむるもの也同病患者にして一度使用せらるゝ時は自覺するを得べし尚委細は東京市下谷區上根岸町金澤巖宛御申込ある時は報告と同時に詳細の養生書一冊を進呈すべし（文句の盜用嚴禁）

井上胡蝶著

生田流

箏曲新譜

最見易き琴の譜本

改訂再版 **卷壹** 定價金壹圓三十錢送料六錢、代金引換小包十六錢增海外代金引換小包三十四錢增

歌曲目次

四季の花　門松　鶴の聲　黑髮　六段　亂　八段　金剛石　夕顔　新高砂
越後獅子　千鳥　茶音頭　春の曲　小督の曲　以上十五曲

卷貳 定價送料共金壹圓十錢、代金引換小包十四錢增、海外引換小包三十四錢增

歌曲目次

春日影　朝外出　六段前歌　難波獅子　末の契　松竹
梅　殘月　秋風　八重衣　飛燕の曲　以上十曲

本書の特色

一、本書は各調子の合せ方を初め音符休止符左右手法其他彈琴に必要なる事項は悉く記載し行文平易說明懇切を極むれば師に就きて直接習ふが如し

一、本書の樂譜は西樂に通せざる人にても容易に彈奏し得らるべく且つ全部言葉記號を附記しあれば少しも音符を解せざる人にても直に了解せられ自然の間に完全なる樂則を覺え得らるべし

一、本書の購讀者は萬一不詳等の節は返信料添へ發行所宛照合せられなば無料之が應答をなすべし

一、本書は西樂の譜記法を基としたれば記譜正確而も平易なり故に實用上琴の練習書として獨占權を有す

苟も琴を習はんと欲する人及び一度習ひて忘れたる人は必ず見給ふべきなり

發行所　福岡市外馬出一一〇三　**箏曲通信教授所**



日本印象記（五）

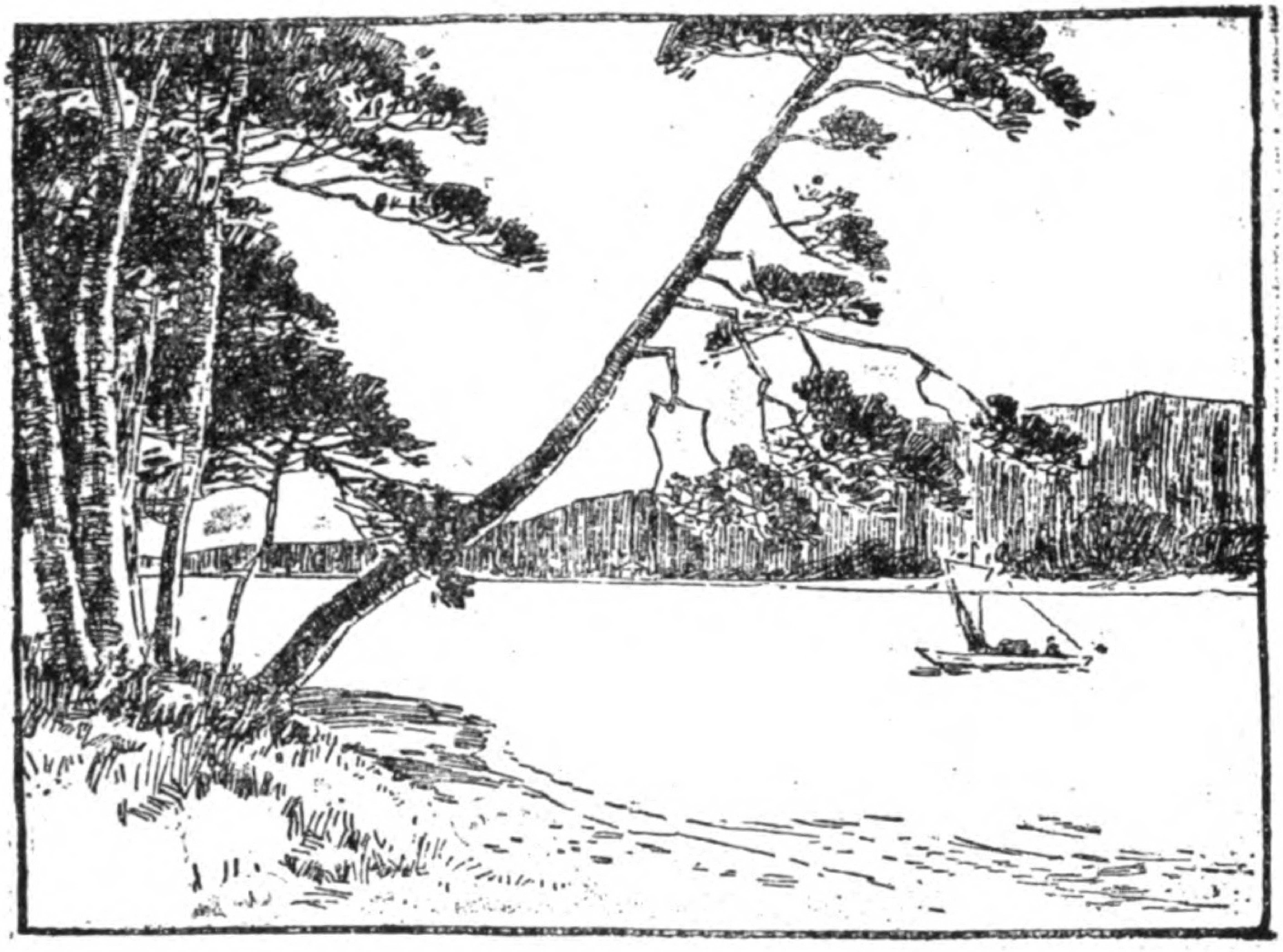
中村春雨

△故鄉の印象

歸朝後、四ケ月目に故鄉へ歸省する事となつた、自分の產れ故鄉は中國の西の果に近い、石見の一隅である、石見は出雲と共に、我が國に於て最初に文明の光に浴した神國である、大國主命——今の千家男爵の祖先が、始めて國を開いた古い歷史のある土地である、彼の素盞嗚命が、稻田姬を助けて、八岐蛇を退治したと云ふ簸の川上は、今も猶宍道湖にそゝぐ一條の流れと共に古蹟を存してゐる、出雲大社は、緣結びの神として我が國の男女の普ねく知る處で、十月の神無月には、八百萬の神々が、皆、この大社に神集ひに集つて來られるので、出雲丈は神有月となつてゐる、其大社の宮司の千家さんは、活き神樣として尊敬された時代もあつて、現に自分の幼時、石見の國まで輿で巡廻があつた時など、人々が皆、手に〳〵炬火を捧げて、活神樣のお迎ひに出た事も、おぼろげに記憶に存してゐる、その他、いろんな神々の口碑傳說が殘つてゐて出雲石見は、或意味から云へば日本の希臘である。尤も西洋の希臘が、今日では一番西洋の文明に遲れて了つたやうに、日本の希臘も今日では、日本の文明に後へ取り殘されて行つた形がある、出雲へ鐵道の架設されたのは、最近の事で、石見の方には、今以て汽車の影さへ見る事は出來ない、陸上の交通機關は人力車とガタクリ馬車と、人間の足と丈である、海上には汽船の航路はあるが、何日目に一回といふ、不便極つたものである。

　自分は山陽鐵道の、車窓に描くが如く、綠の油を湛

天橋立の渡船場



へた海、濃く淡く塗つた島影の隱顯する好風景に、伊太利の夢を見ながら、やがて三田尻驛へ着くと、こゝから、字音通りの・ガタクリ馬車に運ばれて、山をガタクリ、谷をガタクリ、十七里の道を一日がゝりで、漸つと故郷の人々に迎へられた。

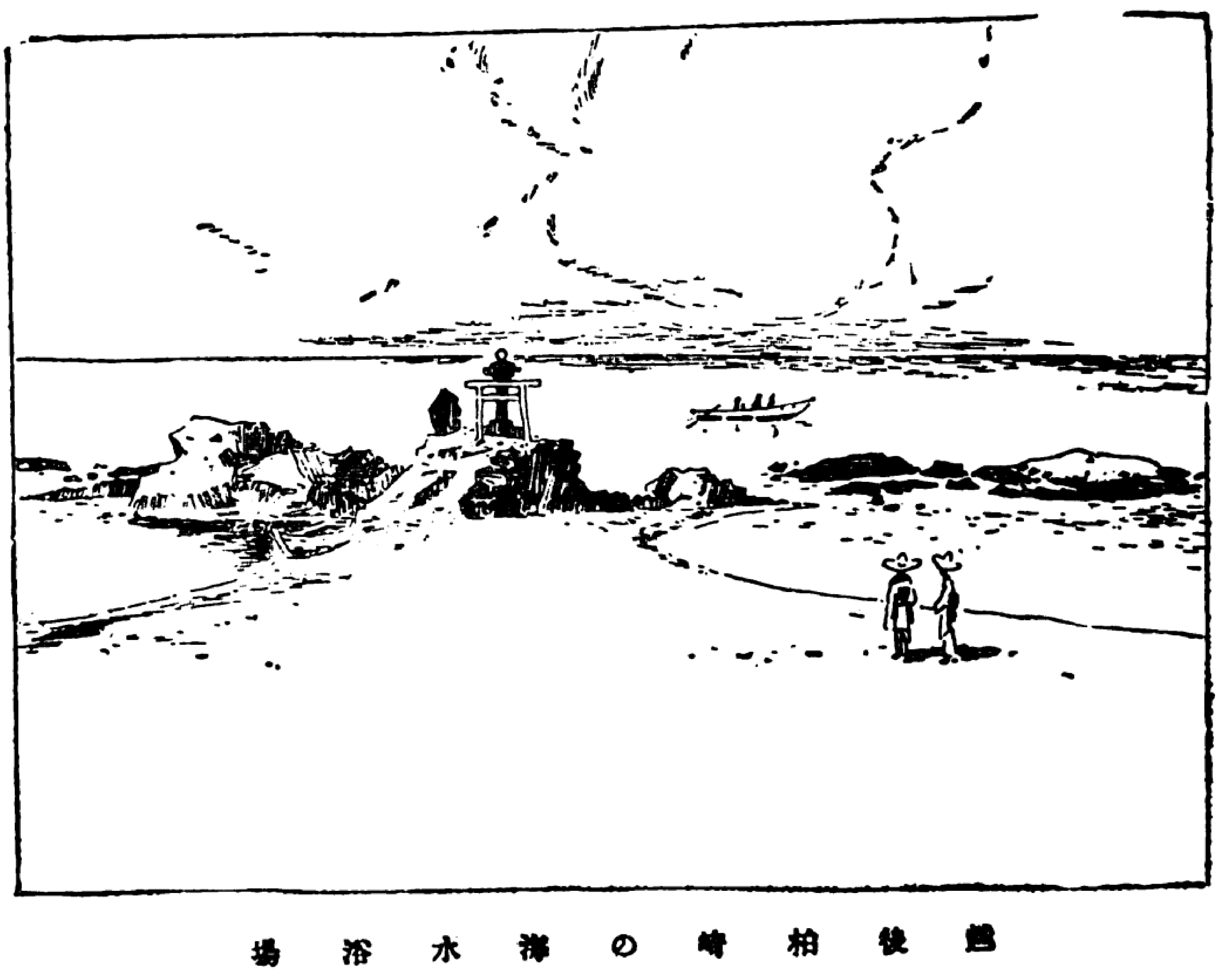
男性にはこのガタクリ馬車も、苦痛は苦痛だが我慢し切れないものではない、乍併、女性には誠に氣の毒である、男性程に自由な振舞は出來ぬ、身嗜みを重んずる習慣に養はれた日本の婦人は、他人の見ない前でも、衣服はキチンと整へて居たい、重い帶を締めて居なければならぬ、髮は毀さないやうに勦はつてゐなければならぬ、殊に都會に育ち、都會の空氣を呼吸して來た女性であると、神經が一層鋭敏になつてゐるから傍から見ると、要らぬ處にまで氣を揉みたがる、一體地方出の女學生なぞが、三年、五年、都會の風に染むと、もう田舍へ歸るのが忌になつて來て、父母との衝突が起り、家庭に悲劇が生ずるなどいふのは、この嶮惡な道路と、ガタクリ馬車の中と丈でも・一應推察は

着いて來る。

△日本の田舍と西洋の田舍

日本の田舍から思ふと、西洋の田舍は、この交通機關の便利といふ事は實に行屆いたものである、例へば米國の如きは、人家も村落もない、唯の廣野原へ一番先きへ大きな、平坦な道路を附け、それから水道を引き、電車を通行させる、其處で始めて徐々人間が集まつて來て、市街を形作る、獨逸などもこれと同じ行方である、その他の諸文明國、苟も一の市となれば、電車の通じてゐない處は殆んど無いと云つてもよい、然るに日本で市街に電車のある都會は、三府を除いて、横濱、神戸、名古屋位なものである、交通機關は文明の大動脈で、人間の幸福も、社會の便安も、生活の眞味も、皆これを通じて、交換され、分配され、融和されるのである、この點から見ても、日本が眞に文明國の仲間入の出來るのは、まだ程遠い未來の事である。

乍併、途中至る處田舍の田や畑の中で、男と打交つ



越後柏崎の海水浴場

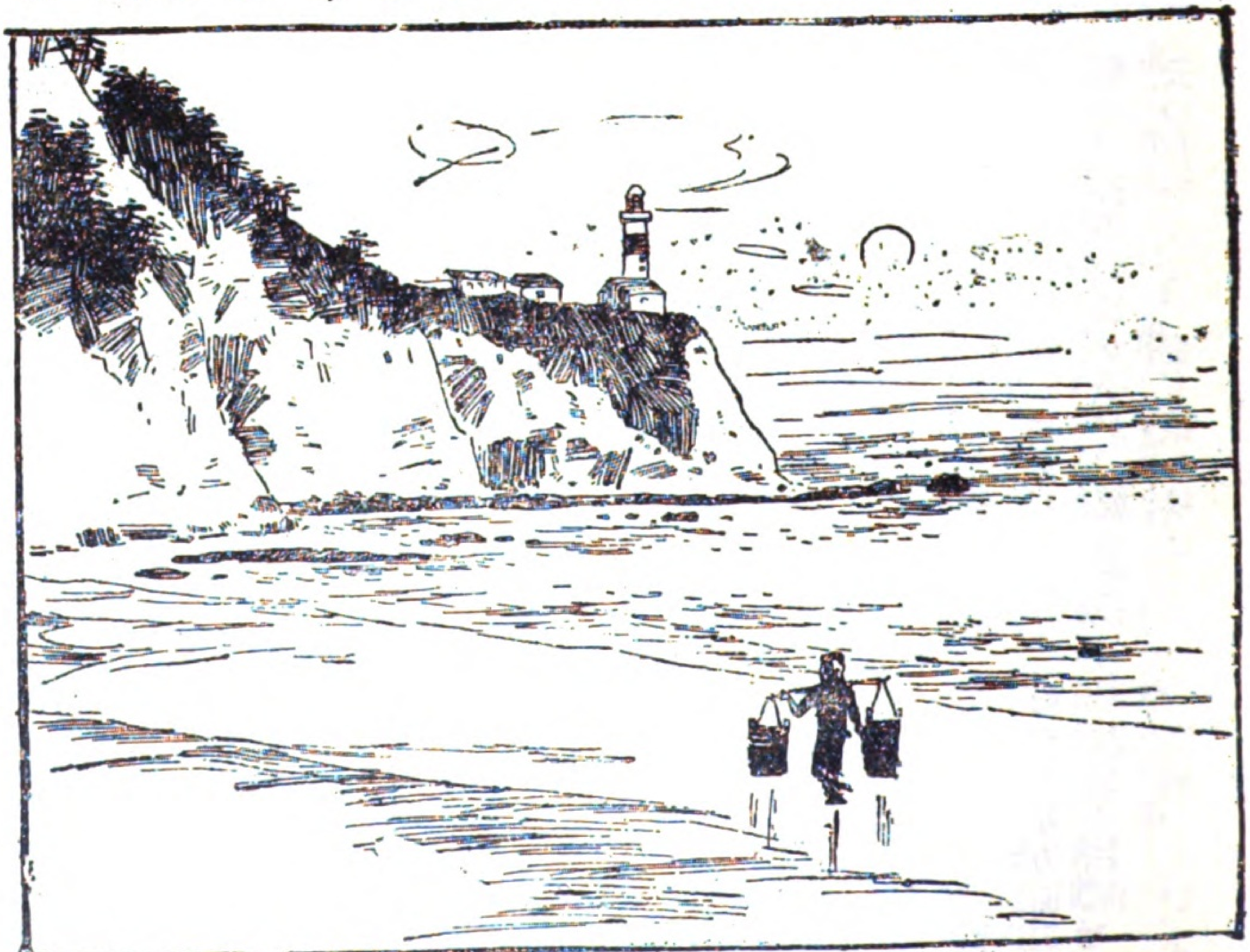
て、女が鍬を揮り、鋤を使つて働いてゐるのは、何んとなく賴母しく思はれた、イヤ、百姓仕事許りではない、夫の車力の後押をして、汗みづくになつて行く妻もある、籠を肩にして歩いてゐる女もある、すべて勞働を厭はない氣風が田舍に殘つてゐるのは、一面まだ文明が惡い實を結ぶの時期の程遠い事を示してゐるのであらう。

多少の例外はあらうが、米國などでは、女の百姓仕事などは先づ見られないものゝ一つである、四千哩の長鐵道で、前後一週間合衆國を横斷した際、自分は畑に出て働いてゐる女の影は唯の一人も眼にする事は出來なかつた、英國の田舍でも矢つ張然うである、イヤ英國は一體に田舍が荒廢して、耕せば立派な田畑になる處も、打捨つてあるから牧場許りが出來る、百姓が鋤鍬に手を荒らす事は厭つて、皆、倫敦の都會生活を慕うて、逃げ出して行く、かくて倫敦は人口七百三十萬といふ、稀有の大都會になつたが、その代り、田舍は次第に人間の影が少くなつて行き、政府當局者の頭腦を苦める一大問題となつて來たのである、又田舍で百姓仕事をする女性の居ない代りに、例の婦人選擧權要求の大運動が持ち上つて、何千の婦人が旗を押立てて、倫敦の市中を練り歩き、騎馬巡査の護衛で、堂々とハイド、パークに勢揃ひをやつて、四十七ヶ所の野天演說に、老いた夫人も、若い令孃もその咽を涸らせ舌を爛らすといふ大活劇を演じ、果ては總理大臣アスクヰスをテームス河畔の國會議事堂に取圍み、石を玻璃窓に投げ附け、巡査と摑み合ひをやり、中には監獄にまで入れられるといふ有名な事件を惹起したのである、乍併彼等の熱心は近頃、下院丈でもその要求を通過せしむる事が出來た、此の運動は例のおきやん質の米國婦人等をもその渦中に卷き込んで、紐育市中で、婦人連の一大示威的行列を見るまでの形勢となり、日本の某々婦人の許へも勸告狀が來たといふ有樣である、勿論、一面には、此事に反對し、有名な小說家、ハンプリー、ワード女史等を首頭として、婦人の家庭中心論者も出來て、互に相爭つてゐるが、兎に角、目

ざましい活動振である、日本の男子の不義私通をも罰するといふ刑法改正運動の婦人連も、その素志貫徹の爲めには、或はこんな騒動が起るかも知れぬが、何しろ一般の日本の婦人には一寸も想像も及ばぬ事であらう。

△婦人の勞働の相違

田舍の荒廢といふ事は、佛蘭西も矢張免れない、巴里丈が次第に繁華になつて地方は一向に發展が鈍い、これ等の國々は、一面から云へば皆多少文明の弊を被つてゐるが、さすがに、獨逸は然うでない、この國の田舍を汽車で通過すると、婦人が男子に交つて、鍬を使つて、田畑の黒土を碎いてゐるのを眼にする事が出來る、イヤ、田舍許りではない、南獨逸のミユンヘン、の如き大都會では、電鐵のポイント、メン(?)は、羽根の着いた青い帽子を冠つた婦人がやつてゐる、彼等は人通りの多い、大都會の十字街頭に立つて、臆する色なく、恥づる色なく、旗を揮つてゐるのである、夫婦



磐城海岸鹽屋崎の燈臺

銚子霧ヶ濱の燈臺



共稼ぎで、車力を引いてゐるものは、伯林市中にも見受けられる、最も西洋の車力は、すべて馬に牽張らせてゐるので、夫婦が馭者臺に乘つて、その馬に鞭を加へて行くのである、こんな事は、日本人から見れば何んでもないが、他の米國や、英國や、佛國などでは、婦人のやる眞似ではない、尤も室外勞働も違つて、室内勞働は、西洋至る處、婦人が皆遣つてゐる、デパートメント、ストアーの賣子などは、歐米共に、婦人の仕事と相場が大概一定してゐる、それから、米國では小學校の敎師は、皆婦人の受持つ處である、英國では郵便局の下級吏員は、殆んど婦人許りの擔當となつてゐる、料理店の給仕は、米國も英國も、亦南獨逸も多く婦人を使用してゐる。

要するに、身綺麗で、あまりはげしい勞働をしなくても濟むやうな、又然う體裁の惡くないやうな、假令惡くつても、室外の晒らし物にならぬやうな方面の仕事は、西洋の婦女子が、競つて行つてゐる、乍併、前云つたやうな、姿も振も構はないで、唯働くといふや

うな事は、先づ獨逸あたり、若くは北歐邊の婦人でなくてはあまりやらないやうに見受ける、日本の田舍の女がそれを平氣で行つてゐるのは、習慣の力とは云へ又强健なる新國民を產むの母たる資格があるとも云へよう。

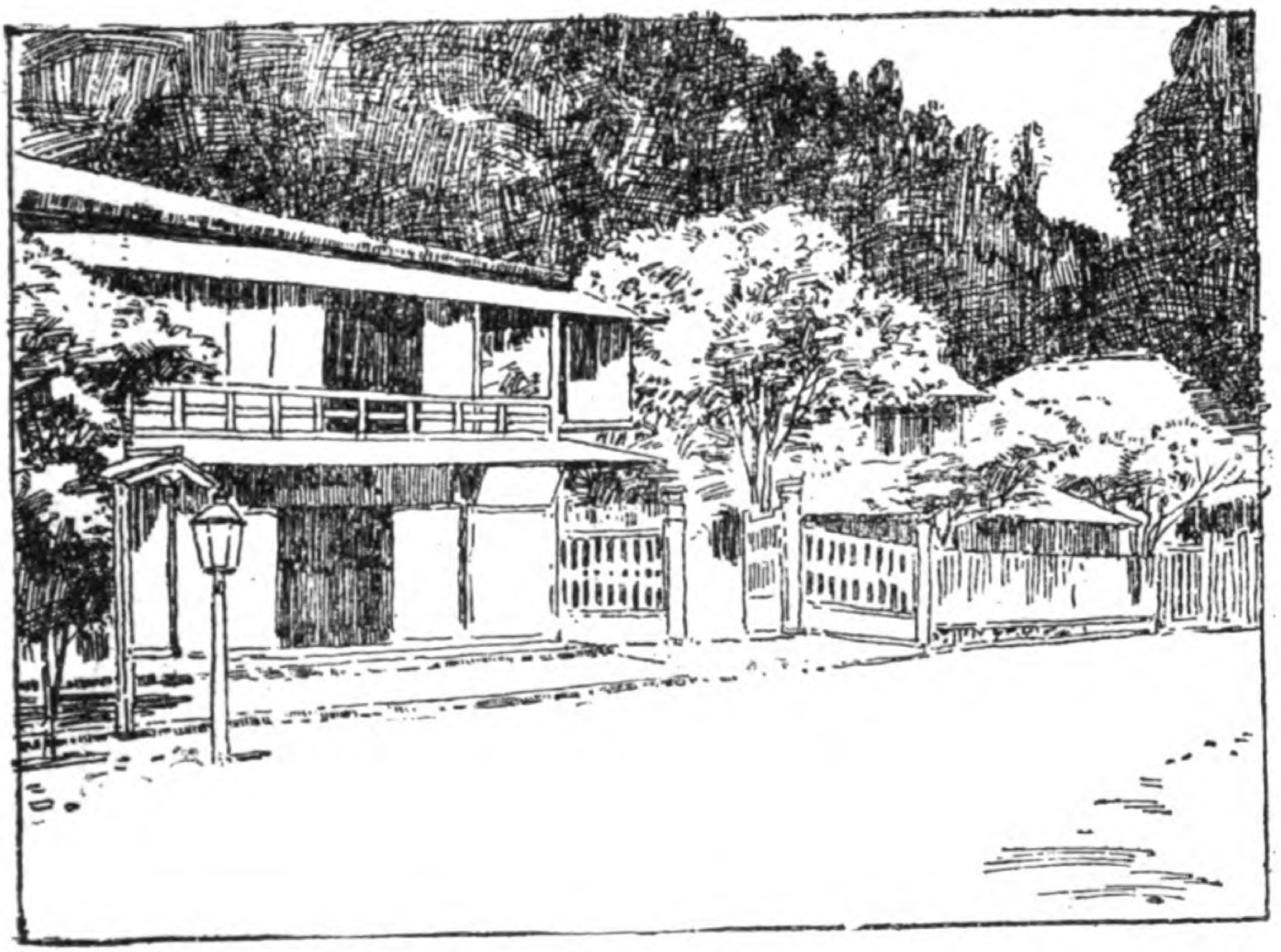
△親戚故舊の關係

田舍へ歸つて、第一に感ずるのは、家族若くは親戚故舊の關係の、緊しく結ばれてゐて、稍ともすれば緊しきに過る事がある、何しろ東京の如き都會の地の、向ふ三軒、兩隣りに、如何なる人がゐるか、又、何時移轉したか、知らないで居るやうなのとは違つて、古くから皆土着してゐるのだから、少くとも二三代の關係はある、挨拶に行くにも、一町內を皆步く位では濟まぬ、飛び〳〵ながらも一町村を經廻るといふ必要がある、每日二三度位、顏を合はすやうな人でも、その都度都度叮嚀に叩頭をするのが作法である、然ういふ習慣を離れて居た身には、時には煩雜で、應じ切れないといふ感が出て來る、故鄕へ歸る、田舍へ行くといふ事の裏面には、溫い情味と、又耐へ難い俗事とが、附き纏うてゐる、これがやがて都會と田舍との距離を一層遠いものにして行く傾向がある、だから田舍で生活するやうな運命の下にある子女は、矢張田舍で敎育する方が何彼につけて得策である、地方に續々中學校や女學校の出來るのは、然ういふ意味に於て、歡迎すべき理由であると思ふ。

△無雜作な結婚と離婚

田舍の結婚程又無造作に行はれるものもないが、田舍の離婚程又無造作に出來るものもない、苟も都會で獨立的生活を營んでゐる者には、家と云ふ考よりか、矢張、個人といふものに、價値を置いてゐる、從つて假令、離婚といふ場合にも、當人同士の意志から出來るものが多い、然るに田舍になると、何處までも家風で押して行くのである、姑や舅の氣に入る、氣に入らぬといふのが兎角第一原因となつて行くのである、殊

箱根温泉蘆の湯



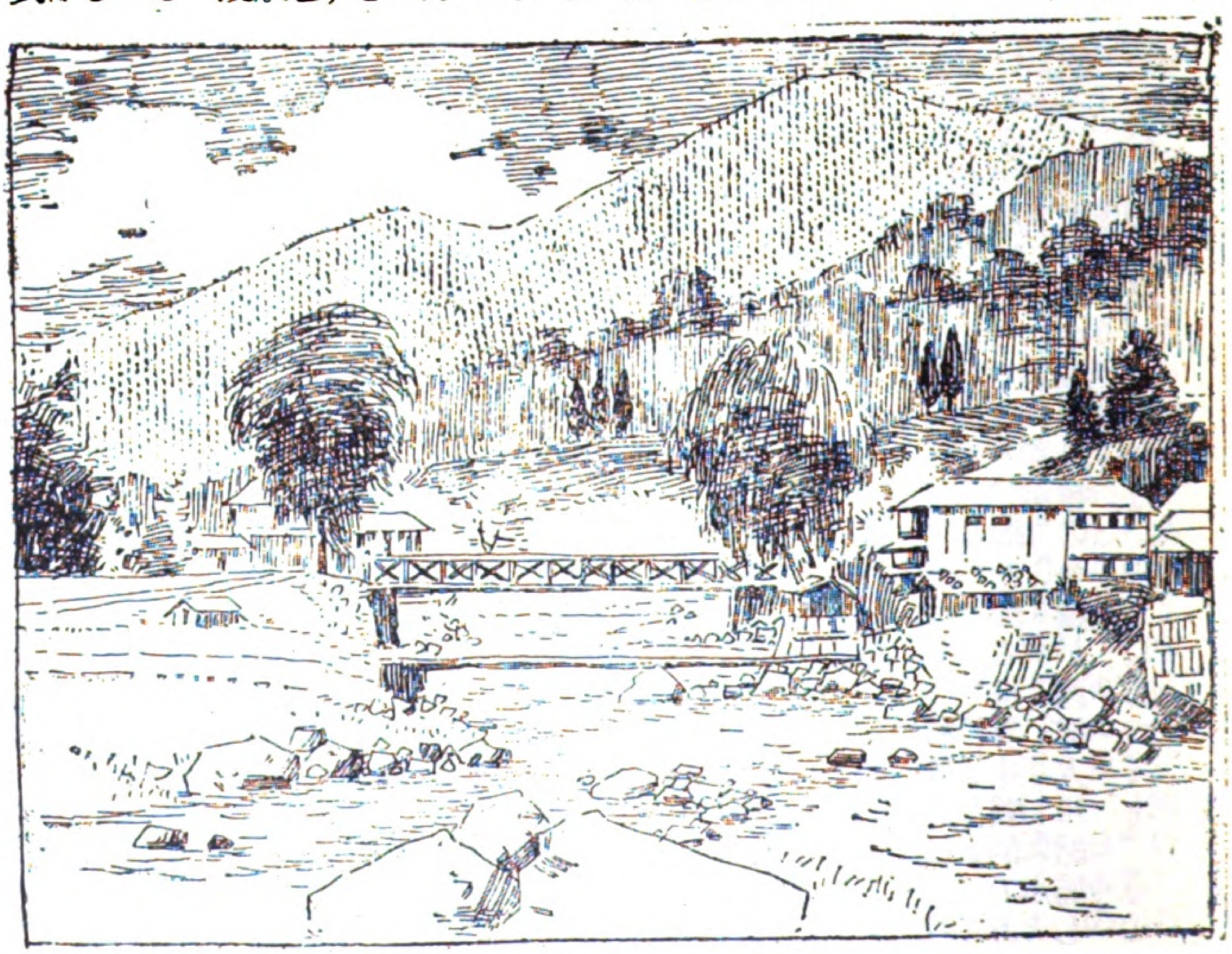
に一町内、若くは親族、故舊といふ例の輿論的制裁迄がその上に加はつて來て、隱然として姑や、舅の意志を動かす槓杆になる場合もある、結婚があつて後、第一、近隣の人々の問ふ言葉は「仲が善いか？」ではなくて、「治まりが善いか？」である、夫婦仲の睦しいか何うかといふ意味よりも、一家との折合が何うかといふ事がより重大なる意味となるのである、田舍の結婚は、個人の幸福の爲めではなくて、唯一家の事務である、之れがやがて日本人在來の結婚思想を最も赤裸々に露出してゐるものたるは事實である。

然るに一方には、前云ふ如く田舍でも女子教育が流行のやうになつてゐる、東京の女子大學邊りへ出すのは危險だと云つて、田舍で相當の教育を與へるやうな工夫をやつてゐる、これはいろんな點から同情すべきものだと思ふが、併し、その女學校の教師には、矢張、東京の高等師範とか、女子大學とかの卒業生が傭はれて行つてゐる、然ういふ人々の教へる事は、無論、文部省式の平凡、若くは穩健な思想、乃至、中和された

る學風であらうけれども、兎に角在來の、夫のための妻ではなく、姑舅の爲めの嫁といふ觀念は、その根據が動いて來なければならぬ、又それが動かせないやうな教育なら、寧ろ始めから與へないが善いのである。

△同情すべき田舍の嫁

田舍に於ける嫁の、最も同情すべき一例は、一日相當の働きをして、疲れ切つてゐる身でありながら、夕飯後の少休憩時間を、姑や舅の肩を叩いたり、脊を揉んだりするのを一の日課としてるのが往々ある事である、姑舅は、それを「孝行な嫁だ」としてゐる、イヤ、中には、自分の若い時代にも、同じ修業もやつて苦んで來たのだから、自分も若い嫁から當然、その報酬を受る權利があるとさへ思つてゐるものも隨分多い、老人を勦るのは、美事に相違ないが、唯、義務といふ觀念丈からこんな事を強ひられては耐へ難いものである田舍にても按摩はあるから、苟も中流以上の社會なら然ういふ仕事は專門の按摩を傭つてやらせた方が、眞



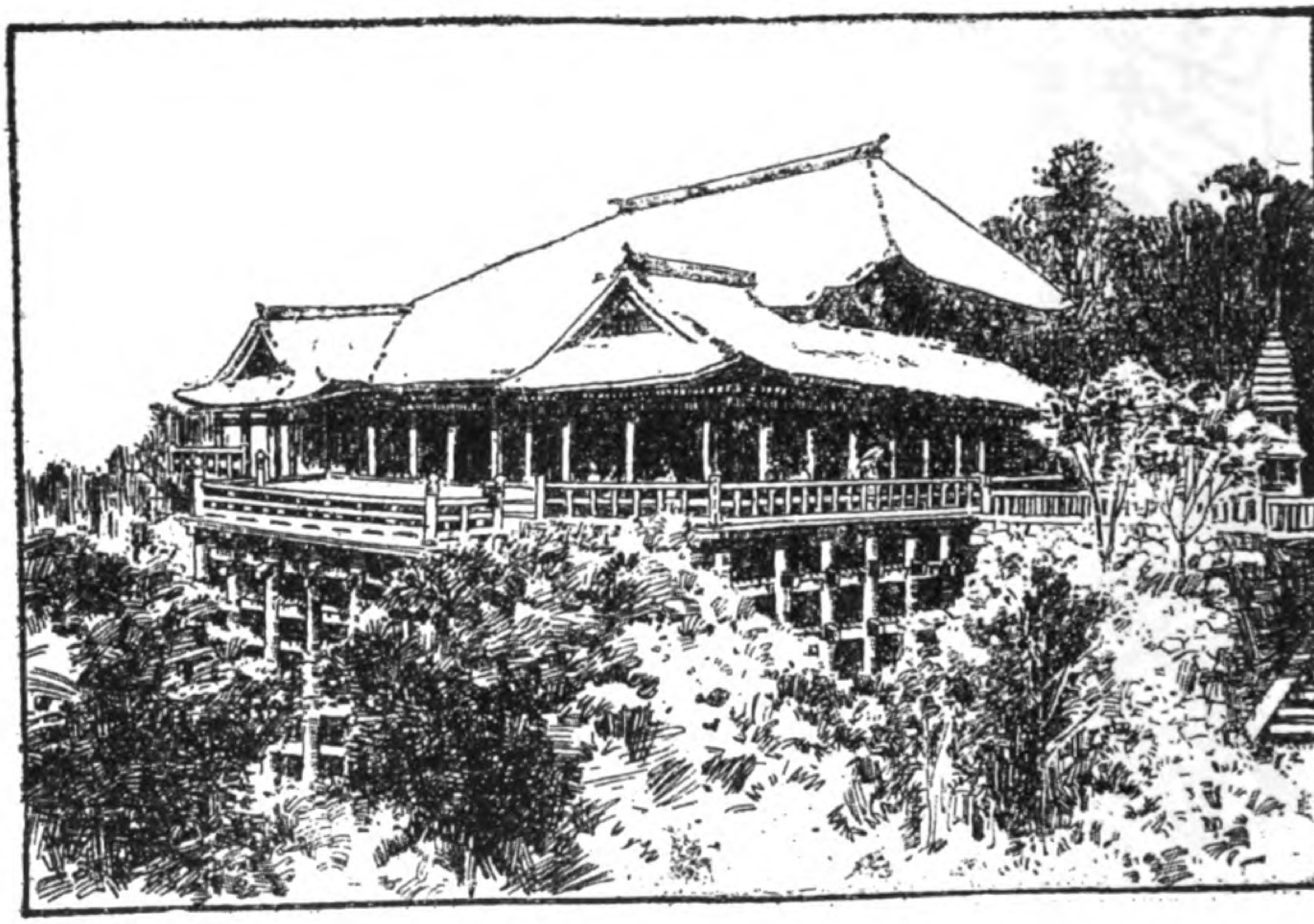
野州鹽原の溫泉

實の療治にもなり、効能も多い譯だ、女子教育を一方から扨けて、二三十年前の古い形式や習慣を一方から强請すると、從前には見ざりし悲劇が、いろ〳〵起つて來らざるを得ない事になる、都會に於ける新舊思想の衝突は、形が大きいだけ、眼にも附き易い、從つて一時を緩和する方法も附かうが、田舍に於ける此の種の衝突は、内に潜んで、聲を立てないだけ、存外な破裂やら、葛藤やら、又往々、救ふべからざる腐敗墮落をも導く事になるものである。

△血族結婚の濫行

それから又田舍の人の單純な考で、血緣の者から婿を取つたり、嫁を貰つたりしやうとする習慣のあるのも、大分時勢後れである、血族結婚が兎角その子孫に不具者を生じ易いといふ事は、今更らしく説くまでもなく已に幾多の實例が示され、又學理上からも相當の説明が立つてゐる、それ許りではない、教育上の關係、思想、趣味の程度や、然ういふやうな夫婦間の最も大切な問題をも考へないで、唯、血緣といふ事がさも重大な意義があり、保障にでもなるやうに思つて、家といふ標準から個人を犧牲にするやうな眞似をやるのは、假令一時は彌縫しても、やがては悲慘な結果に了る場合が多い、西洋人はかゝる點に於ては、最も注意深く且つ謹愼である、本來が自由結婚を主義とするからでもあるが、彼等は伊太利の娘が獨逸人の息子に結婚するといふが、又英國人の息子が、佛蘭西人の娘を嫁に取ると云はうが、そんな國籍などは何んとも思はぬ、當人は勿論、第一その父母がかゝる事には頓着しない、尤も白人種と、黃人種といふやうな、人種上の差別にまでなると、多少の例外はあるが、併し、獨逸の女や、アメリカの女が、既に日本の中上流社會の男子に嫁して來てゐるのは隨分多い、娘の方で何處までも嫁ぎ度いと云へば、父母は矢つ張故障は云はないやうな風になつてゐる、即ち頗る世界主義的である然るに日本の上中流の社會の令孃が西洋人に結婚したいといふ例は殆んど聞かない偶〻にあつても、その父

京都清水寺の御堂



母が已に雜婚してゐるといふやうな條件が附いてゐるやうだ、雜婚の可否論は別として、兎に角、日本の：：殊に田舍に多い血族結婚は、主義としては云ふまでもなく避くべき惡習慣である。

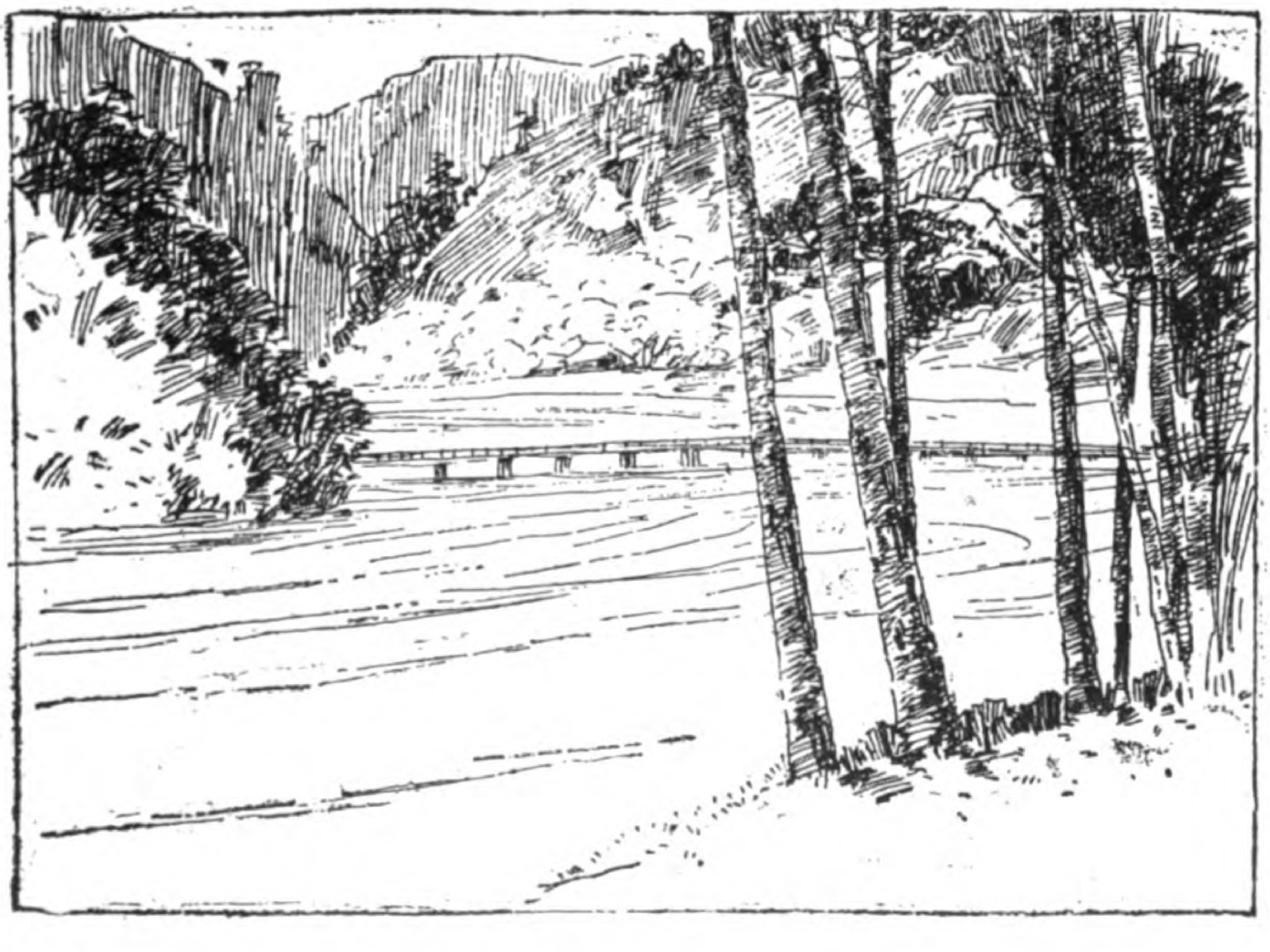
△改良すべき惡習慣

要するにいろんな點から云つて、田舍には已に改めざるべからざる古い、若くは惡い習慣の方が多く殘つてゐると思ふが、併し、一面には皆が親切である、人懷いといふ美風の貴いものが存してゐるのは事實である、親類間で互に庇ひ合ふ、一町內で、無盡講を營んで、知己の窮乏を救つてやる、冠婚葬祭には、皆が身を入れて世話をやく、偶に他國から歸つて行くと右からも左からも引張凧にする、一寸と市街を歩いても前に云つた如く此方が繁雜がるにも不構、向から一々叮嚀に挨拶する、一方から云へば、何んだか一大家族市に入つたやうな氣がするのである。

尤もこの田舍の親切と云ふ事は、西洋も矢張變らな

い、獨逸邊でも、伯林を離れて、地方へ入れば入る程田舍人が親切で、少しの顏馴染を彼方からも此方からも晩餐會に招く、いろんな物を持つて來る、一つは外國人が物珍らしいといふ所以もあらうが、その外國人に不自由な、寂ひしい思ひをさせないやうにといふ心遣ひも確かにある。米國でも矢つ張然うだ、自分は嘗て、知人がカリホルニヤ州の片田舍で、養鷄事業をやつてる際、一夜、見物旁〻泊りに行くと、その翌朝、裏隣りの農家から、新鮮な、搾り立ての牛乳を美しい小娘に持たせて來てくれたのをまだ記憶してゐる、又少し例は違ふが、プリンストンにゐる時町の附近の、廣大な林檎畑の持主は、幾千となく落ちてゐる林檎の實を放任して、人々の拾ふのに任せてゐたので、その恩惠に預つて、渇を醫した事も屢〻ある。

かゝる感想やら又實際上の生活やら匆忙多事の一周間を夢の如く故鄕の田舍で暮して、自分は再び東京の人となつた。



京都嵐山の清流



五人老孃ぶり

諦女

夢多き十七八すぎて、二十を四五といへば、處女としてはもう午下り、七八となつては老孃といはれても仕方はありませぬ、然し世智辛い、萬事勘定高くなつた現代に、財なく貌なく、才なく生れついた私なぞは、うつかりして居ようものなら、賣れ殘りの老孃のと云ふ、憂目をみねばなりませぬ、その時の覺悟といふのも、大變な杞憂ですけれども、さしあたり、私の知つてる老孃の型、代表的と思ひますのを彼れ此れ詮議して、參考にして見樣と考へましたので御座います。

◎野畑先生

英語の先生の型といふと、油氣のない廂に眼鏡を光らせて、胸低くに袴を召したといふ氣取つたスタイルを想起しますが、この方はまるつきり反對なので、極く御幼少から西洋婦人のもとに御寄宿なすつて被在り近頃まで米國に御留學遊ばしてたのはうその樣、只はきはきした御言葉なり、きちんと秩序立つたお仕事振りに、それかと肯れます許りで御座います、光澤のいゝ御髪を、黑鼈甲の三つ櫛愼しやかな束髪に遊ばして、撫肩のすらりとした、じみな澁い柄のお召し、それも物は質素で銘仙位ですが、恰好よく着こなして、クリームの高浪織のお帶きちんとなすつた風は、純然たる奥樣、チョークの粉を浴びて、リーダーのお講義なさる柄でありませぬ、聞說くこの君にも、悲しいローマンスがありました、春や昔、某女子學院の花と唱はれて被在つた頃、現今、某政黨の領袖として錚々たるその當時は少壯の雄辯家たりし〇〇氏、才子佳人は

ふとした機會からはしなくも、華な夢見る御仲となりましたが、世事意の如くならず、どういふわけか故障が出來て、先生は痛める胸をそのまゝに御洋行、○○氏は今も娶らず、男世帶の目白の梁山泊といへば、誰でも知つて居ますとやら、何はあれ、粋も苦いもかみしめて、その上御學問のある方故、捌けた樣で浮調子になりもせず、くすんだ樣で垢ぬけがして、親しみ易い樣で犯しにくい、上品な落ち着いたいやみのない立派な方です、お年は四十と云ひますが、お血色のいゝのでやつと三十を一二と見えます。

◎時子樣

六疊のお座敷、床には卯の花たわゝといけられて更紗表紙の浮世繪美人夢のやうな眼つきしたのが掛つて居ります、常磐樹多い庭は五月雨近くの薄曇りで猶更幽邃な、物音一つ聞えない眞晝間お緣近くの紫檀の机に片肘のせた時子樣、癖のないお鼻すぢに細い金緣の眼鏡もやさしう。

近頃一向、お作を拜見しませんがと人惡しと知りつつも油をかくれば、

ほゝ投書なんてことは子供のする事ですよ、一時つまらない誌上で騷がれても、中央の文壇には何の痛痒も刺戟にもなりません。たゞそれきりの事です、それにこの頃の婦人雜誌つたら何です、どれもこれも似たかよつたかの輕佻な態度ぢやないんですか、あんなものに投書するのは此方の人格が下ります（さりとては餘りなと思ひつゝもお歌はと伺へば）

え歌、短歌ですか、短歌の方は今のぬか星が、明星時代から、○○○先生にお願ひして居ます、何しろ、あの林先生方のお作物と一緒に、待遇されて○○誌上に發表されるんですもの、他の雜誌になんど出して見たいとも思ひません、一かど文壇で成功なすつた方はあれで皆、十年二十年の御努力の結果ですわ、よし天才でなくつても十年二十年死ぬ迄したら、きつと成功するだらうと私はいつも勉强して居ります、時樣は今年二十七、御病身故のお一人住、お金持の娘さんなれ

ばこそ、詩の歌の、感興のと美的生活を遊ばしても差支へますまい、バンに困らないから女の方が傑作が出來るとはいつもの御持論ですが、未だ拜見する光榮には浴しませぬ、最も短歌は○○○夫人ばかりの艶なのを拜見もしますが、大聲俚耳に入らずその高く思ひ上らずに御抱負なり御意見なり、ずん／＼手近い雜誌にでも御發表になり、愚な世俗の女を導いていたゞきたいと思ひます、學あり才ある御婦人の當然の務ぢやないでせうか。



◎水本女史

あはゝゝゝ馬鹿にして居すよ、新聞記者なんて仕方がありません、よく攻擊されますよ、種があることなら仕方がないと觀念しますが今度の樣なのは馬鹿々々しくつて話になりません、何に自分さへ淸ければ構はないわけですけれども手紙や何かで問合せが頻々と來るには閉口します、まさか結婚の風說は虛構にて候と廣告するわけにも行きませんしねあはゝゝゝ、と哄笑なさる御胸のひろさ、いかなる京童のとりざたからか女史が十も年下のさる學士と結婚なさ

る風說が、實しやかに新聞に記載された當時、その記事をお指しながらのお言葉ですが、實にこれある哉、洒々落々と世間のとり沙汰も批判も眼中に置かず、本場仕込みのスカートの捌き美しう、方舞圓舞蝶の様にお舞踏なさるかと思ふと、今度は六尺の男子も辟易する様な、號令で駈足やら跳躍やら。

元より御容貌は、申す迄もないお肉付のいゝ御色淺黑い方ですけれ共、こせ〳〵しない竹を割つた様なお氣分なり、お取り做しなり、どうして四十を越した方と見えませう、林檎の様なぼつたりとしたお頰に、美しいお笑顏、淡紅や緋の御洋裝、ボンネットの薔薇もふさはしいので御座います。

◎糸路師匠

おでこで、色が眞黑で、髪が淡くつてと三拍子揃つた不器量に、「佐野屋の娘は不出來だ、あの親あの兄に似ないあんな女が、どうして生れたらう、もう少しどうかして居ると私がもらつて遣る」と町の若い衆の噂に上つたのも十年昔の夢となりました、老舖の紺暖簾の奥ふかく生れて來た身故、一かどの店の御新造さんにはなれるのに器量惡いのを親は何より、不憫がりなまじかよそにかたづけて、憂目みするよりも質のいゝのが幸に箏曲を深く仕込んで吳れたので、今では押しも押されもせぬお師匠さん、水仕業して手桶一つさげた事もなく、世帶の遣り繰りに窶もせず、娘盛りの頃より反て色も淺くなり、おでこも目立ず女振りは上つたといふされば肝煎りて種々云ふ人あれば、「この年でまあおいてお吳れやす、コロリンシヤンと孃様方の御相手して居れば屈托はないでなも」と名古屋訛りで申すとやら、根が相當の處の娘故他の師匠と違て欲がなく行儀がいゝと云ふのが、人氣でお弟子も良家の子が多く、自然と積んだお寶は通帳に萬を超えて居るとの事、世に媚もせず、阿りもせず、さりとて冷眼視もせず、藝事大事といそしむ心根は、名ある藝術家の心事にも敢て劣りますまい、明治五年の生れです。

◎おくみ

父は車夫母は下駄の鼻緒の内職して子供五人と自分等七人の口はぬらしかねて、くみは十三の春早くも子守に雇はれ、他家の御飯の味を知りました、浮世はかうと幼心にも諦らめたか、孃様方のいゝ衣服を羨しいとも思はず朋輩達のする様な買食一つするでもなく、僅な給金も皆親許へ送る殊勝さに、雇主も不便がり、隙には針仕事や讀書きを敎へれば曲りなりにも形には、成るといふ器用さ、足掛七年その家に奉公して、可愛がられて居ましたが、主家が遠方に行くと云ふので暇取つて。



歸つてからは、近所の仕立物をひきうけて車輪の大働き、間もなく父は心臟病で頓死してからは十九二十、の細腕ながらともかく弟と妹とには小學校の全科を終らせ、一人は指物屋一人は紺屋の徒弟にすみ込ませ妹は家で仕事の手傳させて居ます、この頃きけば、一番上の弟が、呉服屋に奉口して居ましたが、堅い男と見込まれて、主人の女を嫁にもらひ、店を出すと云ので、何はあれ姉様をその儘ではと相談しますと、「嫁とは云へお主筋の娘御では母様の氣骨が折れ様、私が母様は引きうけたから只お前様は出世前の弟と妹とを賴みます」とゝりすまして申しますとか聞きました。

今日もその家の前を通りますと、裏町の長屋住ひながら出格子艶々ふきこんで、近所の娘二三人とせつせと何か仕立てゝ居りました、むつちりふとつた色白の

ひきつめて櫛巻にした、生え際さへどうやら、品がついたやうな、今年二十八になります。

菜食主義の流行

日本でも近來菜食の研究者が澤山現はれたが、歐米でも最近に上流者にして堂々たる定見によつて肉食を非とする連中が現はれた。現に英國知名の士バーナドショー氏の如きは、既に廿五年間肉の味を知らぬと云つて居る。時には僅に四個のバナヽで一度分の食事に代へる事もある。又貴族中屈指のワーウヰツ伯爵夫人は、中食と夜食と一日二食にして、果物、穀物、野菜を常食として居る。有名な女優マリーコーケリ孃も、肉食を廢して菜食を取つて居る。英國以外では佛國の名優トヌメサラベーナードは、南京豆を常食とし、希臘のジヨルジ親王妃は、三年前から菜食で、露國皇后も兩三年前から肉食を廢して居らせらるゝ。斯う言ふ風に菜食家が多くなつて來たが、英國の名醫オールトヒールド國手は、自分は菜食家と呼ばれるよりは寧ろ果食家である、自分はキャベツや葱は食はぬ、加特力教徒は地上に果物の生ずる事に就て毎日曜日神に感謝する風がある、自分は三十年前オクスホルド大學神學部の生徒であつた時、何れの宗教も肉類を遠ざくるを見て、全然肉食を廢して今日に至つたが、實に強健で盲腸炎、胃痙攣、癌症等の重大な疾患は果食者には斷じてない。と語つて居る。英國陸軍少將メーナー將軍も菜食家の一人であるが、最初多病な友人が肉食を廢して強壯となつたのを見て、最初は獸肉を廢し、鳥肉のみを用ゐたが次第々々に臭ひが鼻について少許の魚肉を用ゐる樣になり、頗る健康となつて、病氣に勝つ事が出來たと云つて居る。英國庭球の名家マイルス氏も菜食家で、穀類の外、ハリコツト豆、新鮮の野菜、林檎を常食として居るが、其結果は痼疾の腎臟炎が一朝にして全治して、庭球界に名をなすに至つたとの事である。

英國の女市長

小柳夏村

△開祖アンダーソン夫人

英國では二年前にガーレットアンダーソン夫人がアルデバーグの市長に始めて選擧せられたので、非常に評判となつて居たが、昨年の暮に又二人の女市長が現はれた。先づ最初の女市長アンダーソン夫人の事から述べて見ると、夫人は英國女醫者の開祖としても有名である。「婦人として最も婦人らしからぬ仕事は醫業に從事することである」とは英國人が誰れでもいふ事であるが、此の間にありながら、夫人は率先して醫學に志し、世の擯斥を意とせず、熱心に勉强して、千八百五十年には、開業免許試驗に應じ得るまでになつた其後五年にして婦人として初めて開業免許を得、千八百七十年には醫學博士に推薦せられ、千八百七十六年には或る醫學専門學校の講師に聘せられ、爾來英國の醫學界の爲に非常に功勞があつたので、千八百九十六年には英國醫學協會東部支部の總裁に擧げられた。頭腦の明斷な、意思の强い婦人であるが、醫學協會の總裁にも選擧せらるゝ程あつて、流石に溫厚篤實な處があるといふ。次で千九百八年に市吏員として婦人の被選擧資格が認めらるゝや、衆望忽ち夫人に集まつて又女市長の開祖となり、千九百九年には更に再選の榮を得た。

△市長モルガン孃

昨年の暮に選まれた二人の女市長の一人はブレコン市長モルガン孃で、他の一人はオルダム市長リース夫人である。モルガン孃は過去十六年の間救貧委員會の一員として盡力し、又最近三年間は市會議員として市政に與り、其他、敎育事業、家屋問題などに關係して公人としての經歴は甚だ豐富である。遂に昨年末の選擧に市長に當選したのであるが、其の就任披露會は又

實に立派なものであつた。元來、ブレコン市はお祭騷ぎの盛んな所で、何か祝日とか歡迎會とかいふときには、酒は必ず附きものとなつてゐたので、前市長の如きは立派な禁酒主義者であつたけれども、到底主義を貫せないで、盛に酒を饗ふた。孃も又禁酒主義者の一人で、然も錚々たるものである。こゝに於てか孃は市長に選擧せらるゝや、市會に臨んで劈頭第一に左の宣言を發表した。

『妾は市の代表者としてブレコンの祝典若くは儀式を司る場合には、舊慣に拘束せらるゝことなく、從來妾の家庭に於て維持し來りたる禁酒主義に據るべし。斯くして節約し得べき費用の一端として今朝二百圓を養育院に寄附したり。妾は將來偶生すべき總ての失望を未然に防がんが爲めに斯く一言し置くの必要を感じたり』。孃の此の宣言は市民には非常の打擊であつたらうが、とう／＼其れがとほされて、市民は例へ孃が一杯の茶も饗はなくとも不平はないと云つた程に歡迎した。

孃は又古代文學の造詣深く、文才もあるのでブレコン市を訪ふ文士は必ず孃の家を訪れるといふ。

△神の如きリース夫人

オルダム市長のリース夫人は、慈愛心に富むので有名で美術品の鑑識者として、又公共事業の熱心家として名高かつたリース氏の未亡人である。良人の歿後、夫人は二人の娘と田舍の別莊に閑散な餘生を送りながら、亡夫の遺志を繼いで又公共事業に力を盡して居たので、養育院其他へ寄附した金額は莫大な高であるといふ。數年前から市會議員となつて市政に携はり、又オルダム協會の總裁として非常に聲望がある。今年六十八歲といふ老體でありながら、市長就任披露會の演說は壯者も及はない程よく出來たさうで、人を威壓する人格と、絕えず浮べてゐる微笑とは、大に聽衆を感動せしめたといふ。本年の戴冠式に、各〻の市を代表して列席する市長の中に、此の三人の女市長はサゾ人目を惹かうと思ふ。

洋服の扱ひ方

洋服は活動の敏捷を援ける點に於て又着心地の輕快な點に於て、慥かに實用的のものであります、仕立振や縞柄の流行が餘り頻繁で其新陳代謝に追駈けられる煩ひが多く、冬は又綿布程寒さを凌げない抔といふ嘆聲を往々耳にしますが決して其麼事はありません。

洋服の取扱ひ方は、出入の都度ブラシで塵埃を拂ひ淸め、仕舞ふにも成るべく和服の樣に疊み込まないで、洋服用の衣紋掛けに懸けて吊し置く方が宜しいのです。又夏着冬着の出入の時は、一遍商賣人へ手入に遣りますと、新らしい物になりますから始終綺麗な服を着ることが出來ます、其れから衿の垢に汚れたのは、揮發油で拭くのが一番ですけれど、只拭ふ丈けでは利目少なう御座いますから天日に能く當てゝ揮發油を塗り、而してブラシで拂ふなり手で揉むなりすれば、譯もなく垢は綺麗に落ちて了ひます、泥や何かに汚れた時は、總て乾く迄ソツと其儘にして置き、乾き上つた處でブラシで擦るのですが、其れでも旨く行かなければ水に浸した手拭で汚れを拭ひ取り、アイロンで其所を蒸し、柔らかなブラシで毛並なりに均らせば元の地肌に直ります。

醜いものは洋服の皺でありませう、之には誰れしも閉口するのですが、坐居生活に慣れた我國の家庭では、小皺は所詮免かれる事が出來ないのです何の位贔屓目に見ても、洋袴が小皺で縮み上つた格好は、隨分醜いもので、又皺の寄らない程の地質のものは、穿き心地が惡くて仕方がありません、膝に小皺の寄つた洋袴を直すには、能く折目を正しく夜具の下に伸して置きますと、人體の温度と重みで、翌朝穿く時には、大分格好が直りますけれど、完全の方法は袴の上下を挾み螺旋で張り伸す簡便な皺伸し器械がありますから、家庭用として備へて置くがよいでせう。

清風三千里

筑摩子

◎

打水のあとすが〱しう軒の釣り臺から雫の滴る夕ぐれな、青簾の縁先に横ずわりして、涼しい風に亂れた鬢づらなぶらせつゝ、出放題のむだ口たゝいてゐるのも、たしかに夏日の快樂の一つでせうね。

◎

今度新らしく出來た、中央線鐵道唱歌と云ふのを見てがつかりしてしまひましたの。失禮ながらあのゴツ〱したうま味のなさ加減、「千駄ヶ谷代々木新宿、中仙道は前を行き」の語路の巧妙なる事、パンに正宗ビールにマッチの呼聲そつちのけた、とは某新聞の皮肉ですが、眞個ね。あの――から申しますと女のくせにして妙にねち〱頭を曲げる樣で、甚だ恐れ入りますけれど、唯驛名や山川の名を片端からづん〱讀み上げるだけなら、どうやら私にだつて一生懸命地圖でも見たら出來ぬこともなさゝうに思はれますのよ。だつて何とかもう少し美しくなだらかに云ひまはせないものでせうか、それにさ「汽笛一聲我汽車は」なんてはじめから不見識に眞似たあたり、泣きたくなりますわ。

亡くなられた大和田先生ね、三途の河岸あたりで「さても腑甲斐なき者共よな」なんて舌打でもしてらつしやりやしないか知ら?

◎

怎んな不芽出度い唱歌が作れたんで鐵道の神樣、まさか御立腹遊ばした譯でも御座んすまいが、全通祝ひのお酒の醉もまだ醒めはてぬ、こゝ僅かの間にまあどうでせう頻々として起る汽車の衝突――脱線――轉覆す、怖い〱文明の利器もかうなつちや飛んでも無い血染めの武器と相變つて仕まう。木曾路が通じたらと云つて、折角まちにまつた伊勢詣でも命懸の仕事とあつてはへ〆〱に氣拔けがしちまいましてよ。

◎

近頃口語詩とか申すものが大分流行する樣ですね、あれなら私にも早速に作れさうですわ。併し作つて見ようとは思ひません、何故かつて厭なんですもの。ちつとも興味がない、まるで未開國の民謠かなんどの樣な氣が仕ますもの。



◎

昨日、夢中になつて「當世五人男」を讀んで居たら、或る婦人が來た。

「小説や雜誌なんか好きな人は、既に精神が墮落してるんですつてね。」

どうも御苦勞さま。

「ぢや貴女の樣に、毎日蚤取り眼で新聞の三面から、情死や放火ばつかり探し出して居たらさぞ〳〵品性も高潔になる事でござんせうね。」

◎

修身書などに、山内一豐夫人の事蹟をのせて女の鏡としてあるのは誠に結構な事ですね。けれど、唯仕舞つてあるお金を出して夫に馬を求めさせた事のみを無暗と稱めたゝへて、若い女達に妻となつたらこれを手本にせよ。と教へ込むのは醜たらしう御ざんせう。私思ひますわ、それ程賢明な夫人の事ですものあの折もしかお金がなかつたら屹度徐に大器の晩成をといつて一豐侯がはやる心を止めさせたに違ひないと。

何しろ世は生活難の叫びけたゝましい今日、さう〳〵娘に持參金つけてお嫁にやれる親達ばかりは御座いませんから。



あゝ云ふ場合に行きあたつて、金のない時にはいたづらに甲斐なき身を果敢なむより、一躍して高位高官にならうとあせる、良人の名譽心をうまくしづめて、以て自暴自棄に陥らせない丈の手腕はつけて置いてほしいぢや有りませぬか。

◎

甘つたれるに妙を得て居る女が、世に最も幸福なものとしたら、先づもつて只今の處内藤千代子位仕合せな者はないでせう。

——私一生忘れませんわ、あゝしめやかに雨そゝぐ日、恥かしかりし對ひ居や、門邊に殘る輪だちのあとも君がかたみよ——だの。もう學問もいらないの名もいらない花に泣き、月に悲しみ、遠く別れた君を慕ふて所詮——所詮——だのつて、甘い事〳〵胃が惡くなりさうね。いとも御幸福に在す君が御身の上、ほんに御羨ましう存じ上げまする。

併しね、そりや千代子さんこそ所謂、一種の女で、かくせざるべからざる内心の要求によつて働きもされるでせうさ、意志は自由で御ざんすもの、戀しやうが憧憬やうがそんな事御勝手次第、私共が何も横からつべこべ申される譯では有りませんが唯、そのために、そんなたわけた甘たれ言葉や手紙のために、可惜有爲の青年の幾人かゞ下らぬ煩悶したり、失戀

のふちに落ちこんだりする事かと思へば、それが何より殘念で御ざんすのよ。

そこでお千代さんに一つ折入つてお願ひがある。

あのれ、お得意の、昨は早稻田のポエトにラブし今は赤門の秀才に秋波を送る——なんて事は——實を云へば、きれいに筆を斷つて頂きたいんだけれど、それでは千代子崇拜のお饒舌方がなか〳〵以て承知遊ばさぬは定ですもの、そんな無理は申しません、で何卒あの、ふは〳〵した風船じみた事は唯、机前の空論——だけに止めて置いて、ゆめ〳〵實行はして下さるなよ。

わかりましたか、千代子の君！

右の願ひで御聞きとゞけの上ならば、さあ〳〵盛に甘つたれ給へ憧憬れ給へ、やは肌の熱き血汐にふれもせで淋しからずや道をとく君、とても我世の春を戀とよぶらむとでもハシヤイで跳ね返るもよし、とび上るも可なり。一切我は關せず焉。

◎

貘と云ふ獸は人の夢を喰ひ、浪華節なるものはよく赤穗の義士を食物にすると云ふが、當世のお美しい姫御前達が我劣らじと、向うが岡や五位樣やもゆる思ひの三田早稻田、さては赤門とやらの秀才をまで食物にしやうと頻に活動遊ばさる



ると云ふ事を毎度新聞で聞かされるが、もしそれがほんたうならばげに〳〵淺猿しき、恐ろしきもの〻うちに數うべかりける。

◎

「オイ。」

「あ〻、びつくりした何ですの。」

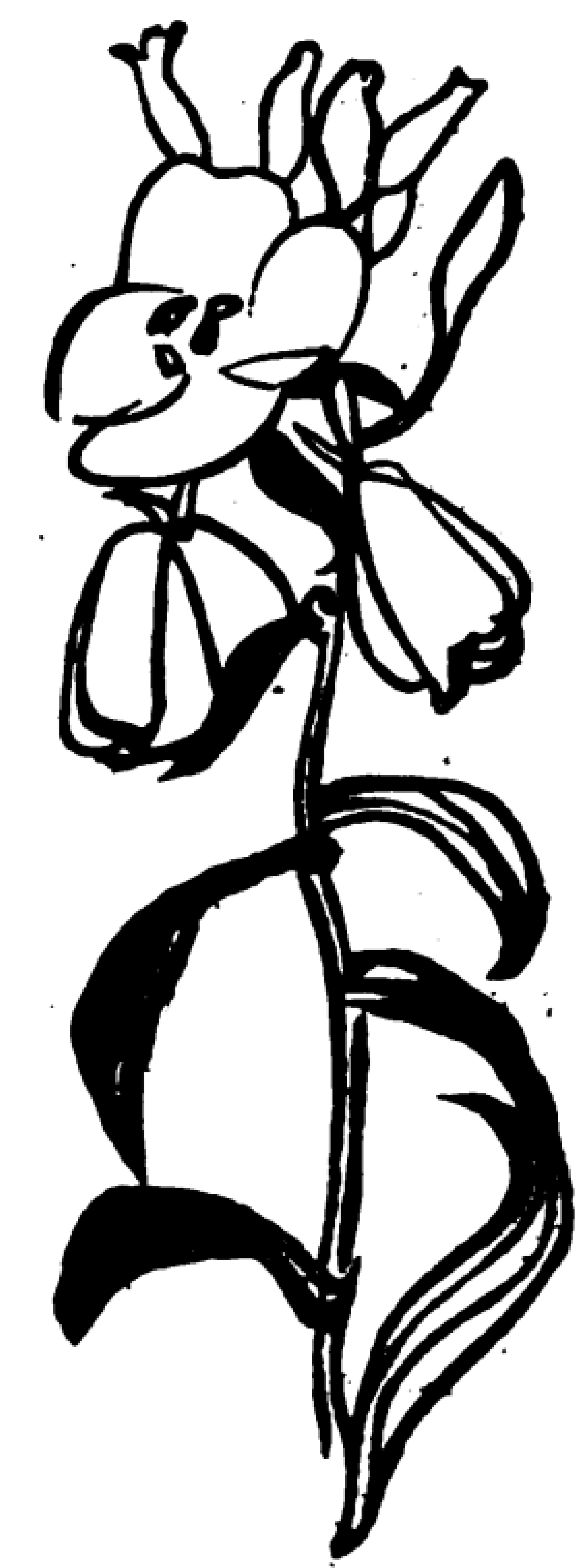
「餘り惡口が過ぎやうぜ、後の祟りが怖かないかい、相手が若い女だ、化けてゞも出られたらどうする。

そら、流石の〇〇將軍でさへ氣味が惡いと見えて、懸賞の一等美人を侯爵夫人に仕上げ奉つて御機嫌を取つた(?)つて云ふぢやないか、あれと是れとは聊か異ひはしてもさ——なあ、ちと氣をつけろよう」

「ウフ、いらぬお世話は置いて頂戴、祟られるがコチヤ本望なのよ、美人のお化なんてちよつとオツだわれ。」

心なき子等のすさびの砂の池
潮さし入らば月もやどらん　　義象

磯邊來てかたみの月にこと〻へば
夕浪高しいなむらが崎　　幸次



危險な精神狀態と健全な精神の働き

強迫觀念の話

文學博士　福來友吉

△人間の癖に現はるゝ人格

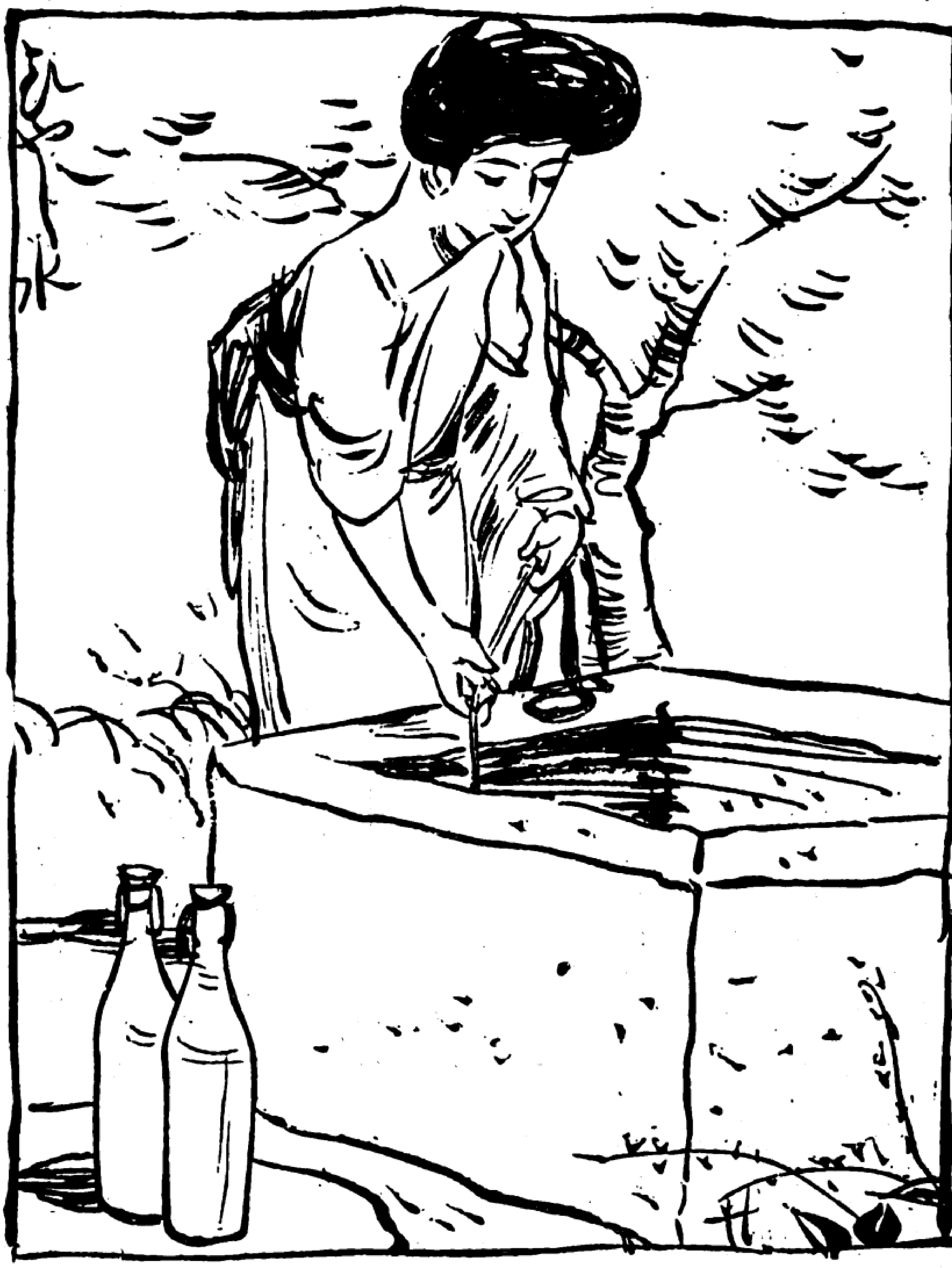
強迫觀念の起るべき事情は色々あるが、之を一口に言へば、人格の衰弱の爲めである。普通にはヒステリー、神經衰弱などの爲めと言つてゐるが、私は之を人格が衰弱するからだと言つてゐる。此の人格の意味は倫理學者などのいふ意味とは少しく異つて、或る一つの目的を實現する爲め精神能力に統一ある事をいふのです。此の意味に於て人格は必ずしも人間の特有物ではなく、國家の如きも矢張り之を有つて居て、其の目的を實現する爲めに多數の官能を備へて居ります。又人格は其の目的を當人が必ずしも自覺してゐるとのみは限らず、知らず識らず目的を實現することもある。例へばそれとは知らずに人と競爭して見たり、子供を愛したり、朋友相愛したりするのがそれである。又何の爲めにするか判らずに物を集めるなどいふ事もある。私の親類にマッチの空箱やビールの空壜を頻りと集めてゐる妙な人がある。或は大和煮の罐詰の、中味ならばいゝが、空の罐を集めてゐる人がある。又德富蘇峰はステッキを二百本も集めてゐるといふし、亡くなつた小泉八雲は煙管を幾百本も集めて、それを交り交りに用ゐて樂んで居たといふ。又一層風の變つたのは、停車場の茶碗を集めて喜んでゐる者がある。それを日本國中を集めて足らずして、支那滿洲邊迄も行つて盛んに集める。これらは修養して斯かる性質を備ふ

るのではなく、本來知らずして働はつて、その本能の爲めに精神が活動して、知らず識らず或る目的を實現するのです。一休和尚は狂歌を詠じて、人は理想々々と言ふが、世の中に其んなものが有る譯のものぢやない飲んだり食つたりして日を送つて、やがてくたばれば其れで濟む、それが人生である、と斯う言つてゐるが、それも一面の眞理かも知れぬ。しかし斯る生涯にも亦或る目的があつて、それを實現しつゝあるので、矢張り一種の人格であります。

△事の大小に應じた働き

此の人格が強いか弱いかに依つて善い人格と惡い人格とがある。我れ〳〵は目的を實現する爲めに、常に胃を働かせ、腸を働かせ、又神經を働かせて居るが、或る人はそれを害ふて居る。それは人格が惡るいのであります。腸を損めた者も、神經衰弱の者も皆人格が惡るいのであります。即ち自分の自覺してゐる目的に向つて凡ての能力が活動出來るもの、言ひ換へれば、凡ての能力を統一させて使ひ得るものは、通常の修養を積んだ善い人格で、之れに反して、誘惑に耽けるのは惡いとは知つてゐるが、仕方なしに耽ける、それに耽けらずに斯くする方がよいと自覺して居ながら、それを實現する事が出來ないもの、言ひ換へれば、能力が衰弱して統一を缺いだものは惡るい人格である。そして此の能力の衰弱に依つて強迫觀念が起るのであります。即ち人格の活動力が不平均になつて、之を自分の目的通りに使ひ得なくなるのです。多くの人は能力を自分の目的に合ふやうに何時でも工合よく使つて、要らない時はすつかりそれを忘れてゐる。此の樣にして感情其他の能力を目的に應じて適當に使ひ得れば、統一ある人格なので、大に都合がよいが、統一を缺くとさうは行かなくなる。或る目的があつても、精神の活動が適當に行かなくなる。要らぬ能力が活動して、詰らぬ事に力を使ひます。大なる事柄には大いに力を使ひ、小なる事柄には少し力を使ふのはよいが、神經衰弱、ヒステリーなどの者は、それが出來ないの

です。お互にも過去を顧みれば、其んな事があらうと思ふ。獅子は兎を撃つに全力を盡すと言はれて居る。獅子は獸類の王である。それが兎を殺すのに全力を盡して、必要な力丈けを出して餘りを仕舞つて置く事が出來ない。人にも其んな事がある。一匹の蚤を殺すには、一寸ひねつて置けばよいのに、満身の勇氣を出す。故に福澤先生も言つて居る、「智慧を小出しにして使へ」と。智慧のみならず凡ての精神能力も其樣すべきである。極く小さい事にでもボンボン頭を惱ませるやうな、所謂神經質感情的ではならないのです。



△精神の自由な使ひ分け

又人はよく三昧三昧と言ふ。これは精神を集中して全身を精神三昧に導く事で、佛教の大部分を占めてゐる事項である。けれども之れにヒス

テリー性三昧と八面玲瓏的三昧とがある事を注意せねばならぬ。鎌倉などへ行つて見ると、坐禪をくんで頻りと之れに耽つて居る人があつて、特に婦人に多いやうであるが、それで果して悟りが開けたかといふと、恐らくヒステリー性三昧が多からうと思ふ。三昧に入このはよいが、ヒステリー性の融通の利かない三昧では、入つたら出る事が出來ないのである。鰌は小さい穴の中へ首を突込んでピチ〳〵はねくり返つて居て、一寸手前に大道坦々として水の流れて居るのを知らぬそんな所へ首を突き込んで、眞理があるの、餌があるのと言つて騷いで居たところで、其んなものゝ見付からう筈がない。ヒステリー三昧、或は出刄庖丁三昧（斯んなのも近頃新聞などによく見える）などゝこんな三昧が流行ると、たゞさへ神經衰弱であるところだから、下手にやると、いよ〳〵「融通の利かぬ三昧」になる。精神に統一があると、小なる事には少しの能力を出し大なる事には大なる能力を出すが、神經が衰弱するとそれが出來なくなつて、何時でも凡ゆる力を出して身に餘裕がない。精神の確かな者は英雄は閑日月ありで、一つの仕事に熱心であるが、他の仕事を始めると、亦其れに精神を集中して自由に三昧に入るとが出來る。今此の仕事を、次に彼の仕事をと、頭を向ければすら〳〵と事が運んで少しも停滯しないが、然らざる者は頭を或る一事に囚はれて其れの出來ない結果は耽溺になる。此の耽溺といふのが極く强迫觀念に近いのであります。

△强迫觀念に近い耽溺

我々は普通は、仕事をする時、遊ぶ時と、次から次と必要に應じて能力の活動を變へる事が出來るが、精神の工合の惡い時は其樣はいかない。婦人などには特に其れが多いやうである。例へば芝居を見に行くとする。之れは惡るい事でないかも知れぬ。又見に行くなと言つた處で、見たければ仕方がないけれども、神經の弱い人は、之を見て歸へると、すつかり其れに囚はれて了つて、他の方面に向つて精神を働かすことが出

來なくなる。無論芝居を見る時は、精神を十分其れに集中するのはよいが、他の仕事をする時には、又た其れに熱中しなければならない。ところが神經が衰弱すると其れが出來ないのであります。一晩芝居を見て精神を集中すると、其の觀念が何時迄も殘つて、一向仕事が手に着かない。學校へ行つて講義を聞いて居ても其れが浮ぶし、商賣屋の者ならば、帳場に坐つて帳面を繰り乍ら、ア、政右衛門はよかつた、など〻其ればかり思つて居る。一晩錢を拂つて其樣に何時迄も樂まれるのはい〻が、外の仕事の出來ないのは困つたものである。或は小說に熱中しては、それが爲めに全く仕事が出來なくなる者がある。頭にあつて仕方がない〳〵と言ひつ〻、それで念頭から離すことが出來ないのです。そして甚だしくなると、小說中の人物に贔屓々々が起つて何時ぞやも萬朝報に「伯爵夫人」を揭げて居る最中に、其の作者に向つて



伯爵夫人は可哀さうだ、最少しよくして呉れなけりや困る、といつて手紙を送つた者があつたといふ。此の樣に、小說に夢中になつて、困つた〳〵と言ひつゝ、矢張り其れを考へて、他の仕事が一向手に着かないのであります。碁を打つのも矢張り同じで、初めは遊び半分に打つのだが、其の次の日も、其の時刻になると何だか又打たなければ氣が濟まないから打つ。打つと面白いから又打つ。遂にはもう止められなくなつて了ふ。惡いとは思ひつゝ何うしても其れを止める事が出來ない。それがも少し進んで**强迫觀念**の性質を持つとそれを考へて不眠症を起し、更に烈しくなると、小說や芝居を夢に迄見るやうになる。明日運動會があるといふと、嬉しくて〳〵眠られないといふのも其れに近いのです。斯うなつては困るから、我れ〳〵は、精神を統一して、勉强する時には精神を傾注して十分に勉强し、遊ぶ時には十分に遊ぶといふ習慣を附けなければならぬ。禪の方では、野心は持つていゝが其れに囚はれてはいかぬと言ふ。之れは一應の眞理があらうと思ふ。物に執着して**强迫觀念**に陷り。それが止められなくなつてはならぬ。之れは修養さへよければ決して出來ぬ事ではありません。

△氣の毒な精神狀態

けれども神經の衰弱して居る人は其樣はいかぬ。書物を讀んで居ながら、ひよつと思ひ出して、ア、彼の人に手紙を遣らねばならぬと言つて其れを書きかけるが、書きかけて見るとなか〳〵捗取らぬ。斯うはして居られぬと言つて又書物を讀みかけるが、何だか厭になるので又手紙を書きかけるといふ風で、一向仕事が手に附かない。宗敎に懺悔といつて、新らしき信仰に入るに當つて、從來の罪惡をすつかり神の前に打ち明ける事をする。斯うしなければ何うも信仰が確かにならぬと見える。我々の頭の確かりした時は、恰度其んな風で、ある丈けの仕事を片附けて了つて氣分が輕くなつてから書物を讀むから、仕事は大に捗取るが、神經衰弱者はそれが出來ない。讀書しつゝ、ア、あれも

仕なければならぬ。オヽ今頃は堀切の菖蒲は美しからう。なんて考へて又讀書にかゝる。かと思ふとほんに昨晩の芝居は面白かつた、なぞと次から次と考へたり讀んだりしてゐるから、二時間位机に向つて居ても、正味讀書したのは二十分間にも足らない事がある。そんなに芝居を見たければ見に行けばいゝのに、それもやらずに、家に居ては芝居を思ひ、遊びに出ては勉強の事を思つてゐる。西洋の諺に『よく遊びよく勉める』といふ事がある。之れが實現出來れば、精神狀態は好く、人格の活動は完全なでのあるが、神經衰弱に陷つた者は、日曜日などでも、遊ぶでもなく勉強するでもなくたゞ徒らに考へて居る。考へると言つても飛行機の大發明を考へるのでも何でもない。そして飯を食つても美味しくもないのだから、止せばいゝのに、薩摩芋などを噛つて見たりしてぐづら／＼してゐる。恰度胃の惡るい時と同じである。胃が惡るくて食物を十分取られぬからお腹が淋しくて時時何か食べたいと等しく、頭の惡るい者は精神の滋養が足らぬから、ぼんやりと何か考へる。けれども其れが一向精神の滋養にな



らぬから、徒らにあせる。かうなると全く强迫觀念をもつた精神狀態であります。

△睡眠と精神の統一

睡眠に就て見ても、人格の衰へた者は、何か感ずると寢て居て物を考へて安眠が出來ない。明日の事は明日考へればよさゝうだが、兎角取越苦勞をする。或る禪師は、今の人間は眠られぬ〳〵といふが、それは意思が弱いからだ、自分なぞは眠らうと思へば、今即座にでも眠つて見せると、言つたが、之れは實際である睡眠も人格の活動が現はれるので、精神能力に統一があれば、眠る時には十分眠り、起きたらハツキリ眼を覺まして清々として活動するのが健全な狀態であるが神經衰弱者はさうではない。夜は十分眠れないと共に朝になつてもハツキリ眼を醒さない。日中眼を明けて何かやつては居るが、多くは夢を見て居るのである。多くの人に就て言つても、一日中眞にハツキリ眼の明いて居ること……心の醒めて居る事、又眞に眠つて居る事は割合に少ないのであります。特に夏向はさうである。それが完全に出來れば、眞に統一ある人格であります。

△本物の强迫觀念

進んで本物の强迫觀念に就て述べて見ると、第一運算狂といふのがある。物を數へる强迫觀念で、數へても何も利益はないが、恰度嚔をするやうなもので數へなければ何となく氣が濟まないのである。例へば電車や自轉車の通るのを數へる事の好きな者がある。或は書物の活字の誤植を數へる者など皆な是れである又聖書に神といふ字が幾つあるかを調べて、色々統計してゐる者がある。或は新橋から萬世橋迄の間に電話を持つてゐる人は幾人なんて調べて居る者がある。さうしないと氣持が惡るいといふ。又私の子供の時分に、よく家へ來た老爺は、御馳走に招かれると何時もお料理の數を數へた。一鍋、二鍋、三鍋、……六鍋、七鍋と數へて大變な御馳走でしたといふ。之を數へて見

ないと何うも氣が濟まないのです。又那翁は窓を敲へる癖があつた。又英のジヨンソンは、ポストに觸つて歩く癖があつて、うつかり忘れて通り過ぎた時には、態々歸つて觸はつて行つたといふ。或は敷居を跨ぐ時は右から跨がぬと氣が濟まぬといふので、うつかり左から跨いだ時には、一二丁先へ行つても歸つて來て、更に跨ぎ直して行くといふやうな妙なのがある。



△人間の恐しい本能

又殺人强迫觀念といふのは非常に危險です。人間には他の生物を虐めて滿足を感ずる恐しい獰惡な本能があつて、人は大抵此種の强迫觀念の經驗を有つてゐる。例へば蠅其他の小蟲を捕へて來て針を刺し通して机の上を歩かせるとか、蛙の福々と脹れた腹を棒ではたくとか、或は人が喧嘩をして血をたらたら流すのを見たがるとか云ふやうに、他に害を與へ

て樂しむ本能があつて、それが神經衰弱の時に著しく現はれます。机や草木の樣な無神經の物を損めるのは面白くなくて、反應のある猫や犬をいぢめるのですかう云ふ性は本來誰れにでもあつて、精神の健全な時即ち人格の多數の能力が統一ある働きを爲す時は、それが他の本能に抑へられてゐるが、神經衰弱の際は、少しく刺戟を受けると、恰度催眠狀態に在る者が暗示を受けたと同じ現象を表はして、其の本能のみが猛烈に働きます。人が催眠狀態に入ると、人格の統一を失ふて、暗示に依て刺戟されると、直ぐ其れに支配されて當人は惡いと思つても、是非活動せねばならぬ樣になるが神經衰弱者も之れと同じで、我々が容易に動かされない樣な僅かの刺戟にでも、直ぐ精神を奪はれて一種の强迫的の活動を起します。人が崖端に立つてゐるのを見ては、一寸押して見たら何うだらうと思ひ、やゝもすると其れを實現する事がある。我々は其んな事を想像しても、他の本能が又働いて、其樣してはいかぬと云つて抑へるが、神經衰弱者には其れが出來ないのです。そして後で申譯がない〳〵と言つて謝まる樣な事をする。刺戟に動された其の瞬間に於て其れを抑へるやうに精神を統一する事が出來ないのです。毒藥を見ると人に呑ませて見たくなり、ピストルを持つと誰れかを目掛けてドンと放つて見たくなり、刀を持つと切つて見たくなつて、其れが動機で往々殺人行爲を行ふ者がある。我々も往々刀を一寸人に當てがつて見たりする事があるが、實に危險な事です。或は又人が肌をぬいで居ると、あの美しい肥つた肉を水も垂ちさずすらりと切り放つて見たら愉快だらうなどゝ妙な事を考へる。我々でも、子供の頰ッぺたが可愛ゆいとつい喰ひ付いて了ふ事がある。こんな風に人には殺人の强迫觀念があるが、これは何も恨みがあるからではなく、或る刺戟に因つて起る一種の好奇心に過ぎないのです。

△珍しい實例

或る佛人の著した書物に、或る種の殺人觀念は恨み

ある者に對してよりは多く親しい者に對して起ると記して居るが、其の實例の中に隨分珍しいのがある。プレナイデルと云ふ十六歲の青年があつて、無口で悲觀的で兎角物思ひに沈んで居たが、母親は心配して色々と訊して見たけれどもなか〱答へなかつた。が頻りと聞くと「誠に申譯がないが、私は何うかして母を殺したいと云ふ考が起つてゐるので困つて居る」と答へた母親は驚いて、ひよつとして其れを實行されては困る



といふので、志願兵として暫時軍隊生活を送らせた。其の内に其んな觀念も無くなつたから家へ歸つたが、今度は又自分の妹を殺したいと云ふ考が起つて、何うしても鎭まらない。これぢやまだ不可ないといふので又家を離れて旅行に出かけた其の旅行中に知人が其の青年に出逢つて、一緒に家へ歸らぬかと尋ねると、何うも斯々の考が起つて危險だから歸られないと答へた然るに知人は、君の妹は最う死んで了つたと言つたの

で、それでは安心だと言つて家へ歸つた。これは、斯く言つたら其んな觀念は無くなるだらうと思つて、方便として虚言を言つたのです。處が家へ歸つて妹に出逢ふと、咄嗟の間に又殺人觀念が起つて來た。これではならぬ、何うか自分を縛つて瘋癲病院へ入れて與れと言ふから、其處へ入れて、漸く危險を免れたと云ふのがある。其の外に睡眠中に觀念が活動して睡遊狀態の中に親兄弟を殺す樣な危險なのがある。或は又急に强迫觀念に居直る樣な實例もある。

△强迫觀念の矯正法

强迫觀念の矯正法は、一般の神經衰弱、ヒステリー等を癒す方法と等しく、生活を規則正しくするのが第一です。例へば禮式なども、其の一方法として宜しいやうである。又我々の行爲を共同の規則に從はせるのも宜しい。軍隊へ行つて見ると、湯へ入り方も法令で定めてあつて、何分間入つて、湯をかぶるには一二の號令でやると云ふ風に、總てを規則づくめにして居るが、あれが非常に精神の統一を計ります。つまり、身體を規則的にすれば精神が從つて規則的になるのであるから、生活の實際は何うであつても精神さへ確かりして居ればよいといふのは間違である。宗教家の生活特に禪宗なぞも非常に嚴重な生活で、香の物の食べ方口の動かし方から、眠り方、其の時間、讀書、遊ぶ時間等に就ても、やかましい規則があつて、普通人には一寸實行出來難い程であるが、理想としては我々の生活も斯の如く十分嚴重でありたいのです。それから何か仕事をして閑居せぬ事が肝腎です。日曜日だからと言つてぼんやりして居ると、神經衰弱は益々烈しくなるから、矢張り何か仕事をするがよい。尤も仕事も餘り過劇ではいかぬ。肺病患者は冷水浴が不適當である如く、度を越しては反つて害になるから、たゞ身體に應じて適度の仕事をしてぼんやり遊ばぬ樣にすればよいのである。但し遊ぶのも、仕事の事をすつかり忘れて遊ぶとすれば、これも精神修養の一つとなる。つまり仕事をするでもなく遊ぶでもなしと云ふのが惡るい

のです。次に讀書に就て言ふと、我々は如何なる事を爲すべきかの理想を得るには讀書は必要であるが、餘り過ぎては學問の奴隷になつて、精神の健全を妨げるから之れも程度を考ふべきである。最後に靜坐する事をお勸めする。學校では運動する稽古があるが運動せざる稽古はむづかしい。寢て居るのでなくして一時間も靜坐して居るのは一寸出來ない事です。精神が亂れて居ると、却却ぢつとしては居られないが、處が工夫が積むと幾ら長くなつても身體が搔くもならず、其の存在を忘れる程樂に坐つて居られる



橋すゝみ衣紋直して別れけり　（一具）

そして讀書して精神の疲勞した時とか、感情の激昂した時などに之を行ふと、疲勞も激昂も、又之れに伴ふ、不眠なども癒ります。個人も此れは必要であるが軍隊などでも此の必要を認めて、直眞に立つて三尺向ふを見る直立不動の姿勢は、凡ゆる活動の起る元としてある。個人の靜坐は腹部に力を入れて、亂れた精神を直すに最も有効です。（談話）

謡曲の趣味と實益

婦人が謡をやるといふことは、確かに家庭を清らかにはし、家庭に新らしい趣味を加へる事が出來ると思ひます。奥義を極めれば限りのないもので、難かしいには相違ないが、普通の處では節も整然と定つて居るから、子供にでも直きに覺えられて、一家が團欒して樂しむことが出來ます。殊に良人も好き妻君も謡ふと申すことになると、夫婦連れで他の同好者と往來もしたり、又良人につれて妻が謡ふとか 仕舞をやるとか、小鼓や笛の相手を致したならば、家庭に於て清い娯樂に耽られます。座席も三味線などの席の如に酒食に亂れることもなく、至極手輕に上品に子供も大人も一緒に樂しむことが出來ます。

それから第一健康の爲にもよし、又姿勢を正すにも誠に善いと思ひます。中以上の家庭になると、召使などが大勢居るために、自然婦人は運動が不足勝ちで、不健康な人が多いかと思はれるが、謡は聲を只に咽喉ばかりで出して居ては謡はれず、何うしても下腹の力に力を入れる故、一番も謡へば、直ぐに食物の消化がついて、知らず識らずの間に身體が丈夫になります。そして下腹に力を入れて聲を出さうとすると、自然に姿勢が改まつて、衛生上非常に利益があります。又謡曲を學ぶことに依つて、宗教、文學、歴史、地理などの思想も養はれます。

謡曲は一番毎に地理も詳しう記してあり、神社佛閣のこと、又人事にしても其起源とか、由來などを詳しく文學的に記してあるから、強ひて知らうと思はずともたとへば、三井寺は何國にあつて、何時の頃何のやうな事があつたと申すやうなことが、謡つて居る中に何時の間にやら頭に染み込んで了ひます。又神祇佛道の事なども、信心に因りて得たる不思議の靈驗や、其有難い有様が身に染むやうに作られてあるから、何とはなく神佛を渇仰するといふやうな清らかな信念も起つて參ります。且つ其道行や風景の光景を寫した文章の美しさに至つては、實に趣味津々として盡くる處を知らぬ妙味を以て書いてあるから、文學趣味も十分に味う事が出來ます。殊に子供をさらはれて母親が狂氣しつゝ跡を慕ふといふやうな悲哀なのもあつて、人情美の極致を示してゐるから、婦人に必要な美しい性情も確かに養はれ、優美な性格を高めやうと思ひます。

而かも芝居なぞのやうに風紀を亂すことがありませぬ。芝居は大抵の狂言が既に風紀上餘り結構なものでない上に、一度や二度は左程でもないが、度々觀に行くと、終には芝居を見るのでなく、役者を觀に行くといふやうな弊害が生じます。其點に就ては謡曲は役者と言つても武士的な點もあり、他の藝人のやうな低い人物も少ないやうで、謡ひ先生と呼ばれてはならぬだけの格式を具へて居るから、そんな弊害もありません。(男爵岩利五郎氏)



師範の寄宿舎生活

末央柳

御別れ申候てより、こゝに二年、花咲き花は移ひて、世は又青葉若葉、そぼ降る雨の絶間の空に、不如歸の聲懷しき頃と相なり候、折柄花の都の御起臥、如何渡らせられ候や、珍らしき晴天の日曜など、春の君様と打連れて、葉櫻茂る上野日比谷に御逍遙不如歸にも増さる妙なる音樂をや聞き給ふらんと推し上候。

こゝもと寄宿舎も、次第に夏めきて、白き夏衣もちらほら見え初め申候。名物の蚊軍の襲來も、漸々猛烈となり、從つてマラリヤと申す疫病神の舞ひ込むもこれからと皆々警戒をさ／＼怠りなく候。

△默習時間と先生の態度

只今の處起床は五時、就床は九時半、始業は八時、終業は三時、默習は午後七時より九時までに候、晝の間こそ賑かなれ默習時間のみは一舍水を打ちたる如く靜り返つて森と致し、皓たる電燈の下、皆々文机に凭りて、豫習に餘念もなく、机上の書籍を凝視いたし候舍監先生も此頃は御勉强にて、每夜御巡視一號室前の上板踏み給ふカタンコトンの音聞ゆれば、ソレ御巡視よと容を正す人もあり、隣の部屋にて居眠り給ふ君を忍びやかに起さるゝ聲の聞ゆる事も有之候。萬事細かき舍監先生は、默習中の態度、部屋の整頓などいと細かに眼止め給ひて、やがて室長皆舍監室にと申さるるが常にて候、相變らず高き御脊、犯し難き御眼どこ迄も學者風にて、威容は年と共に加せ給ふ舍監先生、斯う私共居流れたる中央正座に、靜に御着席、重々しうも口開らせ給ふ時は、小なる專制國の女王を聯想せ

しめ候、綸言汗の如しの例へ、一度令し給へは二百の生徒命を畏みて、違はざる、誠女王の權威のそれの如くに候、されど時ありて、此頃の空模樣の樣に、晴れみ曇りみ定めなき御氣色の折など、朝令暮改常ならず其政の下にたつ私共は、流に任す浮草の、主義も主張もメチャ〳〵にさるゝ時有之候、この師の君拜する毎に、思ひ出づるは、別れ參らせし美しき優しきA先生に候、御別の前日、春雨しと〳〵花にけぶる夕を、作法室傍の楊貴妃櫻の前に立たせて、湛然と澄み給へる、御双眸に、花眺め給ひしあの時の御姿、今尚眼前に浮びいでゝ候、彼の師の君は今は遠きロンドンの都に脊の君と暮させ給ふ由、海外萬里の異鄕の空に暖かきホーム營みていよ〳〵美しう氣高く在すことゝ御なつかしう存じ候。

△養蠶の作業

日、月、火、水、木、金、土との七日間を同じ樣式にくりかへし、繰り返す私共の生活は、實に週の循環小數に候、其中最樂しきは土曜日にて、明日は日曜と思へば、何となく心も長閑に、默習も無きまゝ、机片寄せて一室六人グルリと圓座して、各々足袋繼裁縫など持出して、互に身の上話の興盡きず、常よりは短き夜の如く感じ申候、土曜日と言へば、今年も養蠶を始めて、私の當番日は土曜に候、御身樣御存知のあの東北端なる、元乙種講習科教室を蠶室に充て、B先生御監督の下に五十枚の蠶は今小指大に成りて桑食む音の驟雨の如くに聞え申候、當番日の忙しさ、筒袖短袴の此儘にて、大きな籠提げて農場に桑摘み、蠶室に靴の音を鳴らすなどは、農家の養蠶とは一寸趣を異に致し候、兩三日中に上簇仕るべく、簇の繭の雪に埋れん日を樂しみ居り候。

△室長の役目

諺に乞食の子も三年たてば三歳になるとやら、御身樣と御別れ致し候頃は、まだ二年生の駄々つ子たりし私も、今年は既に最高級の四年生、この四月からは又

一つ室長といふ責任を負ひ申候、あの子供が室長づらも無いものだと、御笑遊すとならんも、此頃は餘程大人臭くなりて、一室五人を躾け居り候、去りながら級の中にて、最年少の私なれば、下級に却つて年上の人在り、時には泣き度き思ひも致し候舍の潔不潔室の整不整何につけても叱られ役目は室長に候、四年になり候お蔭には、各學科の進度著しく、後一年間にどれだけの事を、この小さき頭につめ込まねばならぬものか、毎日正科、豫科、豫習、復習に寸暇も無之有様に候、一年間叱られて修めしおかげに、此頃はバイオリンも鋸の目立の様でなく、少しは聞かるゝものとなりし様自覺致し候學科の中にて最も好めるは、例によつて國文と西洋史、國文は今Y先生の源氏箒木の卷に候、追々暖かになつて、授業中居眠る人の出來候に、Y先生の申さるゝ樣居眠する位の人は熱心に聞いてゐる人なんです、お講



義を餘處に、あの先生の鼻が如何の、髮の分け方がどうのと、そんな事思つて居る人は、決して居眠りしませんから……』と私共も何と御答してよいやら、思はず襟を正し候。

御身様方が、シューマン先生の尊號奉り給ひし敎育史の先生は、相變らず一抱もある程洋書を御持參なされ、御手を斯う口に當てながら『シューマンが申しますには……』を冒頭に滔々數千言の御演說、終に『一言以て之を掩へば云々』も形の如くに候、然も生等の頭には、其御演說の一事だも止らず、敎育史の試驗は如何にして受くべきかと今より頭痛の種に候。

△地久節の祝賀會

テニス、ピンポン共に盛にて、涼風通ふ夕方の運動時間など、我勝にラケット攫つて、運動場に驅け出す連中も少からず、三ツのコートは順待つ人の垣を結ひ居候、されば此間の地久節にも祝賀の運動會を止めにして、テニスマッチを擧行致し、本校、附屬小學校の先生方、皆様を御招待申し、餘興として園遊會をも併せ開き申候、模擬店のいでたるもの八軒、おでん屋あり、お茶屋あり、甘酒屋あり、種々の店の中にてかく申す私の引うけたるは言問亭と申すお團子屋に候、黑襦子の掛つた縞の着物でも着べき處を、紺がすりの筒袖に、海老茶袴を赤前垂に擬して、出鱈目のお世辭ふりまきつゝ『名にし負はばいざ言問はんこの店に、我思ふ團子有りやなしやと』の札引かへにお團子の大安賣、先生方も生徒方も、甘黨のみとて非常の混雜、轉手古舞致し候、但しお團子は我等の手に成れるもの隅田河畔花の下にて鬻ぐ如きにはなく餡を着けて串に差したるもの、串に差して附燒にしたるもの、さて其堅さには皆様など閉口の樣にて候ひし、と先生があのパック式のお顏に、お顏一ぱいのお口開けての横つかじりは、當日第一の見物なりきと、專ら噂に候。

この日晩餐の後、福引にて私の引けるもの、『高砂の尾上の櫻咲にけり』は、何ならんと考へ候程に、順の來りて我手に入りしは、賣藥の一袋、曰く

「富山の薬たゝで存むらん」と一寸面白くは候はずや

△試験前の混雑

試験期も近づきし事とて御身様も御承知の如く、鐘によりて起き鐘によりていね、學ぶも遊ぶも皆一定の時間に支配さるゝ寄宿舎は朝華胥の國を出てゝより、夜身體の疊に並行線を畫くまで、人皆一秒の時間をも惜しみあひて萬事萬端狂忙的なるは夥しきものに候、朝なぞ蒲團を



よい加減に押し込んで、理髪室、盥漱室に急ぐ人、掃除のバケツ取りに行く人、廊下に衝突る樣に候、部室の掃除などもほんの形式的にて、總てが粗雜になり行くは、誠に嘆かはしき事に候かゝる君方の、後來主婦とならば、其家庭如何にとよそながら氣がもめ申候

然るが中に私の部屋のみは、一分時を爭ひたりとて何程多くの學間の出來ることかはと、悠然としてよろづ物丁寧に致し居候處、いつしか京阪人種のお部屋といふ難有く

なき名を頂戴致し候、一昨夜は第一土曜とて、茶話會有之、私幹事に當り候まゝ、寄宿舍雜觀といふ題の下に、狂歌を募り候處、意外にも振つたものを多多得申候、就中、秀逸と見做すべき物の中一つ二つを左に、

朝の理髮室

ロンドンの街より繁き頭數
　朝寢坊主は暫し立ん坊

午後四時の浴室

大裸小裸はだか又裸
　お尻コッツリ御免あそばせ

と、誰か君の作にや、却々きはどい處迄、うたはれしものには候はずや、御身樣に『あなたは小さいのね』といつも仰せ頂きし私も近來御飯を餘計に食べ候加減か、生長率に激增を來し候へば、多方大裸の中に編入され居るものと存じ候、理髮室の立ん坊たるは申す迄も無之候へども、こは朝寢坊たるの故にあらず、室の遠隔と物丁寧なる爲と御諒察願上候。

△油斷大敵の教訓

丁度一週間前俄に命の下りて、室を替り申候、私共はお膝元（舍監室附近）の二號室より、是所西陲の蓀繁る二十一號室に左遷せられて候、舍監室へ一里、食堂へ一里、理髮室へ三十町とはちと大袈裟なれど、兎に角是等樞要の室へ遠くなりしは、不便此上なく、これよりは足袋の底の今迄の三層倍位破れるならんと案じられ申候、さる代り斯る僻陬の室に御眼の光の屆くとも少くて、結句氣樂と、二號室に鼠の如かりし私共も時々馬鹿騷致し候に、油斷大敵、彼の室に在りし二ケ月間一度もお叱言食べざりし私の、こゝに移りて一週間お目玉頂戴する事都合二度に及び申候、室長ともあろう我身がと、大に恥ぢ、今は全く悔悟仕り理想のホームならぬルーム作らんと勉め居り候。

懺悔の爲昨日の失敗談を御聞かせ申すべく、そは室順に傳へ次ぐべき言の廻り參り候まゝ、折柄裁縫に餘念なかりし私のわざ〳〵南舍二十二號室迄出馬して傳

へんも面倒と窓より首差し出して『あの一寸高梨さんけふねえ舎監先生から四年生に、えれんなお話が有るチュー事だから、何程用が有つてもくり合せて必ず四時迄に作法室に集りなさいっづう事でがすよ』某々々先生方の御口調をこき交せて得意顔に大聲でどなり候に、向では例の高梨樣にも似ず『有りがたう』と只一言お眼から異様の無線電信掛り候まゝ、ハット振向き候途端、我室の入口に無言のまゝスックと立たせし丈高き御姿、スリッパの音と共に徐々と彼處へ、



さてはと思ひしも取りかへしつかず、後に作法室に參り候時『四年生、而も室長から何の眞似です』と大變なお叱責にあづかり候。

其節先生の申され候は、『女子部の生徒は誠に常識が缺けて居て困る、常識によつて事を處して行くといふ事を知らぬから往々世間から非難の聲を聞くのだ』とて種々の例證を擧げ懇々と御諭し被下候、全く私共は自身にても慥に常識の缺乏を感じ申候、四年間といふもの、此の高い板塀に複雜な世間を隔離して寄

宿舍に蟄居、、なりにも振にも構はず、只管AはB也のりて候。重箱式の學問に許心を傾注してゐる我等は、恰も馬車馬と異らず、世間はさつぱりわからず候、同じ位の年輩の人のみ集りて、師の制裁の下に暮す身は、辛くも有り甘くもあり、苦しくもあるといふ、世間の空氣の味も知り申さず、かの葉に刺あるヒイラギも、幼樹より庭に培へば、刺なき樹とはなり申すとか、私共も十六の春より、十九の今日迄、この寄宿に世と相隔てゝ一途、學問にのみ凝り候へば、其昔各方面に發達すべく芽ざし候智、情、意の刺も追々退化して、かくは氣の利かぬ者となりしならんと存じ候、我等が世間に觸るゝは、夏冬の休暇位のものにて其範圍もいとせまく候へば、世事に疎くなる筈、歸省の毎に我母は申候「お前は師範へ入つてから、さつぱり役に立たなくなつたね」と母をしてこの語を發せしめざらんと欲し候も、やつぱり別世界の舍に暮す間はだめにて候、況して一時新聞雜誌すら讀むを許されざりし時なぞ、まるつきり世間の事は眞暗にて候ひし、此頃新聞だけはゆりて候。

△外出簿の信用

先生は今一つ申され候、そは外出簿の事にて、私共は日曜日外出の折々、外出簿持參して訪問致せし家にて、時間の記入認印の押捺を乞ふ規定なるは、今も昔と同じにて候、先生は私共素行上の御諷諭より、御話、是に及び候時「あなた方の外出簿はあなた方の不信用の看板です、彼樣なものがなくもあなた方が自己を重じて下らぬ處に立ち寄りさへせねば外出簿は廢めたいと考へてゐるのです、然し左樣したらどんな間違が起るか知れますまい……」と、あゝ私共はこれ承つた時、慨然として思はず暗涙を頰に傳はせ申候、如何なれば私共はかくも不信用なるか、將來人の師表とならん身の、而も先輩同級共に一糸亂れし事もなきに餘りといへば酷なる仰せ、いとゞ口惜しう存じ候先日も同級のK樣私と物語り致し居候節、あの媚ある御眼に、一寸横目使はせられしを、折惡しく舍監に

見附けられ「男子の人にあんな眼附すると退校處分ですよ」と舍監室へ呼びつけての御叱り、所謂青春の女子なるものは、よろづ疑の眼をもて睨まれつゝ在るもの、是非もなき次第に候、附屬小學校の先生方は「女子部の生徒は褒似の樣だ、笑顏作つた事がない」と申され候由、若き殿方の前には校規として、笑顏は禁物と知り給はざるにや。

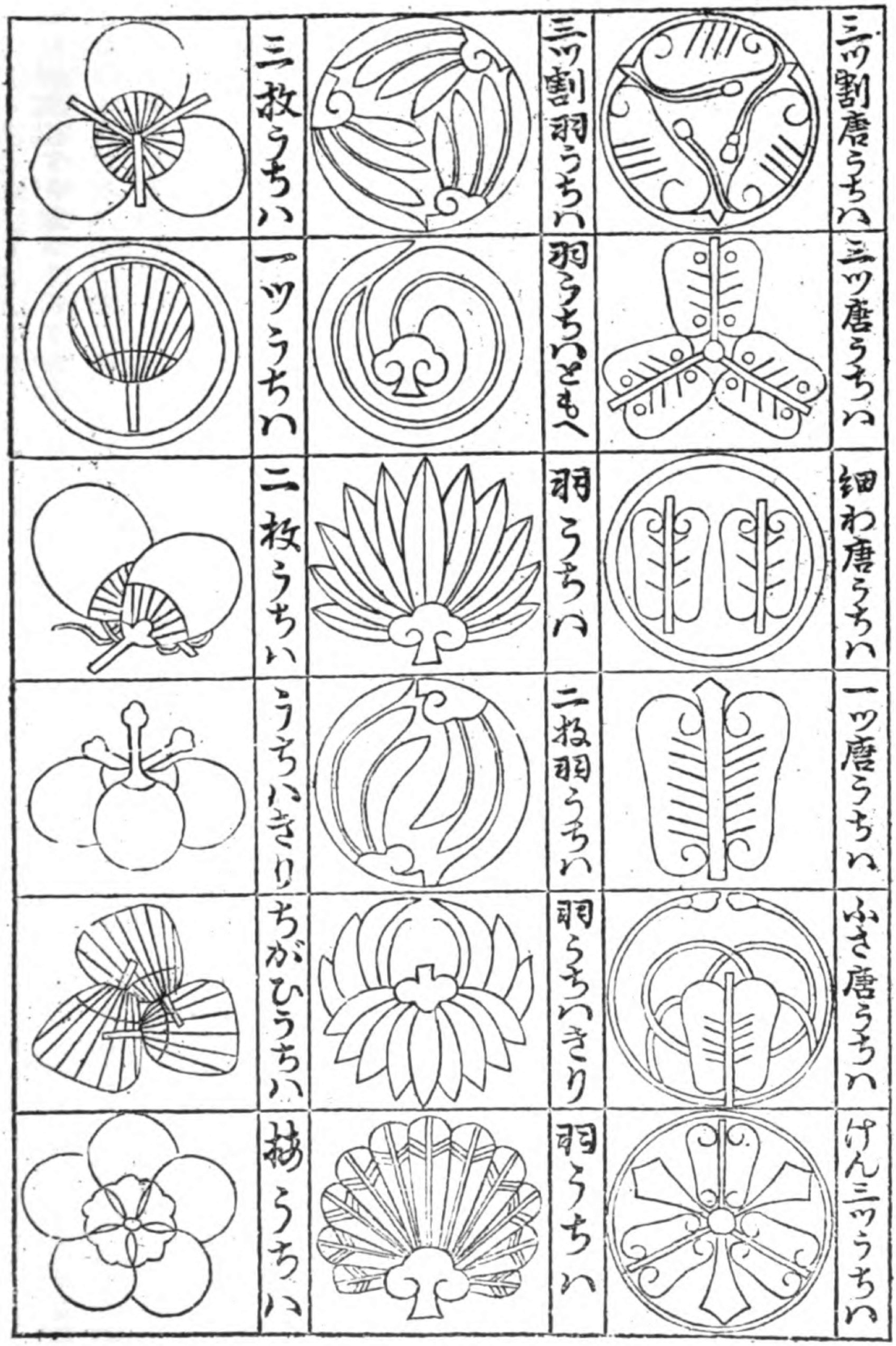
今宵は近來稀なる空清き夜にて候、夕つかたの運動時間に草取りすべく好きな裏庭の築山のあたり參り候新綠もゆる青葉の蔭に立ちて、夕づゝの星眺め候時、都戀しさ君なつかしさに、やるせなき胸の波動の高鳴るを覺え申候、マガレットに緋のリボン、褪紅色の厚板キユツと締めて、華麗なパラソルかざし給ふ都の君達、如何に繪の如く美しうや候はん、少女十九、我等が胸にも青春の血汐は漲り候を…細い縞の筒袖、色あせたる茶の袴、我此影の又なく淋しく眺められて候。さはさりながら私共は世の姫達とは、目的の異る身、徒に美しき物にあこがれ、賑はしき都戀ふるは我分ならず、容はいかに深山がくれの朽木なりとも、心の花に培ひて、校をいでん曉には、天晴れ誠實勤勉の教師となり、育英の任を全うすることそ本分には候はめと、深き覺悟は致し居り候。

あゝ今消燈の鐘は鳴り止みて候、五十の電燈一時に消えし後は、眞に月の世界、南の窓の白きカーテンに月が畫きし墨繪の樹立、そよとの風の音もなき此の靜夜、この崇高なる自然の繪畫眺めて、私は眠りもやらず、空想に耽り候、友は皆夢にいりてや、あたりは只靜寂、寂寞、晝の間忙しさに紛れて物思ふ暇もなき私が、君戀ふるも此時に候、故鄕偲ぶも此時に候、あはれ君は、今何をかなし給ふ、お火鉢の傍に脊の君と御物語り遊してか、但しは又樂しき夢路に遊び給ひてか君よ時には都の音づれをも聞かさせ給へさらば君まさきくいませ…。

Ｓ　より

都の君に

團扇の意匠


三ツ割唐うちハ
三ツ唐うちハ
細わ唐うちハ
一ツ唐うちハ
ふさ唐うちハ
けん三ツうちハ
三ツ割羽うちハ
羽うちハどもへ
羽うちハ
二枚羽うちハ
羽うちハきり
羽うちハ
三枚うちハ
一ツうちハ
二枚うちハ
うちハきり
ちがひうちハ
梅うちハ



壁訴訟

玉かつら

此間まで新綠で美しかつた山が、もうあくどい色になりましたのね。今この季節を貴女と私とに配合せて見るとあなたは、恰度櫻の花ならば滿開といふ時分、わたしは五月も半になつて綠の色の少々濃厚になつた時候です。何といつても女に取つて十代といふのは誇りです、お友達なんかで「十九の顏見てやるんだ」といつて除夜の晩に鏡と睨みつこをした方もありましたが、妾などそんな事はないにしても、十九の一年は始終心の中で「今の内今の内」と聲がする樣で何だか落付きませんでした。……其段家のお三なんか「十八にならうが十九に成らうがお關ひなし。あたら花の青春をねえ。ほゝゝお三の青春も少々振つてるけれど、誰だつて一生一度の時だのに、暇さへあれば井戸端で話をするか、柱に凭れて居眠をするかですもの。

それに、世間は現金な物で、若くて美しい間こそちやほや言つて呉れるけれど、少し年が行くと直秋の扇ですよ。絹さんなんか今うか〳〵日を過しては罰が當ります。

さう、さう、此間も可笑しいのです。今度△△女學校の敎諭にお成りなすつた原田さん。あの方に安川さんがお遇ひになつたんです。「ほんとに、好かない。何時でも人を鼻であしらつて……」とかう仰るのでせう。だから妾は原田さんを辯護しました「原田さんは別に此方を輕蔑なさる積もないのでせうが、何分あの大きなお鼻が生れつき空を向いてるんですからね人事なればこそ「向上鼻」とか何とか言つて笑つてるけれど、まあ御自分の身になつて御覽なさい。あのうら若い年を誰があんな淸敎徒の樣な風をしたい物ですか。妾は沁

沁思ひますよ。青春の過ぎた人も哀だけど、慾じ自分の持つてる青春を、人に誇る事の出來ぬ女程悲慘なものはないと！

○

向側の堤は相變らず色々な物が通りませう車を挽いた牛が他愛もなく涎を垂してパッ／＼と砂埃を蹴立てゝ行くかと思ふと、直ぐ其後から藥賣が風琴を彈き乍ら足どり面白相に歩いてゆく、何だか浮世をお茶にした樣な世渡りね。あゝ向ふから大原女が來ましたよ。太い友禪の襷に三巾の前掛、人から聞いたのですけど、お嫁に行く時も襷は外さないのですつてね。世間には女髮結のお神さんのお蔭で辯護士になつた人もある相ですけど、大原女は初から男位は養ふ覺悟で居るんですから痛快ですわ。ですから亭主を灰の中より見出した、釘の如くに思ひなす位は朝飯前、つまり女尊男卑の不言實行なのですよ。と言つて妾大原、八瀬が戀しいわと思ふ人もありますまいけどあのすらりとした體格、癖の無い髮……まあ何て言ふんでせう！

あの砂埃は、竹を積んだ車が末の方で道を掃き乍ら來るんですもの……

お絹さん、如何思つて？　總體京都の女は何處か身振に捕はれた樣な型に箝つた樣な處がありやしないでせうか？　兄さんに言は



神田の社の若葉

したら古典的とでも仰るんだらうけど、妾は東京の女の方が好ですよ。中流以下の若い女の言葉が荒っぽいのは少し困るけれど……

オヤ今のは二時? 妾も随分呑氣者でせう。未だお晝を頂かないんですもの……ほゝゝ、關はない。妾獨の時は何時もこれで、よくお母さんから「無精だねえ。此人は、僕が居なんだら二日でも三日でも御飯を食べないで机に噛り附いてるのだらう」なんて叱られますの。別に無精と云ふ理でもないですけど……思つて見りや女といふ者も随分單調な事をしてるものですねえ。毎日々々お膳を出しては茶碗を仕舞ひ、お膳を出しては茶碗を仕舞ひ、まあ妾なんか一生の内に何度同じ事をさせられるでせう!



谷中天王寺の新緑

つまりお母さんなぞの時々芝居へ這入るのが五十幾年かの單調な生活を破る波瀾になるんですもの心細い理ねほゝゝゝ妾でも時々は何か思ひ切つた事がして見たい! とかう思ふ事がありますのよ。無論他人に後指をさゝれる樣な事は眞平ですけど……ほゝゝ此心持は十七の貴女には分りますまい。

今日もね。是非一緒に行かうと兄が言つて呉れたのですけど、妾頭が痛くなつて斷りましたの。それに何時も忙しうしてるんだから、偶には皆出て終つた後で、門口の錠

なかけて、寂然と奥の間で手紙を書いたり、好な物を讀んだりするも嬉しいけど、芝居行の留守許りは何だか氣が落附きませんでれ。ほゝゝ何故行かなんだのかしらと、後悔してましたの。でもお絹さんが來て下すつてよかつた。幾ら悟り澄した積りでも女は女。妾の樣な者にでも廣茄子と芝居好の血は流れてると見えるわ。

それにしてもお母樣なんかの芝居觀が振つてるますの「どうも悲しいのは不可ません」と仰つておいでの癖に泣かなきや承知なさらないんですもの、芝居は四季袋に食物を一杯詰めて行く處、涙袋に涙を溜めて行く處と昔から相場が定つてる物と見えて、子役が黄色い聲で

「母樣い喃――」と言へば、それといふ鹽梅にお泣きなさるのよ……さう〳〵何時かも壺坂へお伴をした時でした「今の女はえらい。あれを見て涙一つ溢さない……と仰つた時には、妾達の泣く事は少し違ひます！と申上げたかつたわ。

話が脇へそれますが、年の行つた人の考と若い者の考とは隨分違ひますものねえ、

妾此間、泌々さう思ひましたわ。と言ふのは御近所のさる博士のお孃樣に、忌々しい噂が立ちましてね平生からハイカラの上にお父樣にお似なさつて大柄で、十七と云つても二つ位は乾と上に見るのでした。

「正可あの方が……」と妾なんか半信半疑で居たのですが、學校の方を急に退學なさつた處を見ると滿更火の無い處ろの煙でも無さゝう。皆な「博士樣のお孃樣でもねえ……」と馬の角でも見た樣な驚き方なんです。

「それだからさ……」と來合せてた伯母さんの言葉が面白いですよ「娘の子は年頃になれば好い加減に何處へでも遣つて終ふに限る、瑕物になつたら取返がつきませんからねえ」こんなのでせう!! 妾ほんとに情なくなりましてね。僅な誘惑に誤られる處女は無論斯う言はれても仕方が無いのですが、親の側から見てもう少し言ひ方もあり相な物、「蟲のつかぬ内に……」よく方々で耳にするのですが何と言ふ忌々しい言葉でせう!!

然しまあ世の中の事は斯う取り立てゝ言へば矛盾や滑稽は到る處にあるので、それを一々拾ひ上げて怒つたり、悲しんだりした日には溜りませんね。大抵の時はこんな事がある位で見逃すか、それともお腹の蟲が不承知なら大きな聲で笑つてりや良いのですよ。まあ新聞一つ見たつて恩給扶助料を抵當に長期繰替の廣告と、三千圓出資の妻を求むがお隣合になつてゐるのが是世の中、其處を甘く渡つて行かうと言ふのですもの時には心にも無い事を言つたり爲たりしなきやなりませんし、他人にでも、感心した事丈口に出して、賞める事の出來ぬ事は默つて我心に嚙殺す丈の技巧がなけりやね……ほゝゝゝ飛んだ世渡の講義になつて終ひましたのね。

まあ〳〵絹さんなんかも、もう二三年の内に所謂新生涯にお入りなさるんでせうが、其時こそ、マダムといふ光榮を孔雀の尾の樣におひろげなさいな、貴女が獨身生活だつて？ ほゝゝゝ、あゝ可笑しい。ほゝゝは若い女の獨身生活と、年寄の此世が嫌になつたは昔から當にならない物ですよ。



子供は叱らずに濟む

亡くなられました高嶺先生が話されました言葉の中に斯樣云ふ事がありました。私は決して子供を叱りません、實際の處叱らなくても濟みます。譬へば日曜日の朝九時頃に復習する筈に定めてある子供が其れをしないで遊んでゐると、其時は其儘見逃して置くのです。其内子供は何か買つて貰ひたいものが浮んで父の處へ相談に來ます樣な事があると、アーさうか其れは何でも買つて上げたいものだがね、併し如何したものだらう、日曜の午前九時には復習する事になつてゐるのをしない人にはねと父の方から相談すると、子供はお母さんの處へ行つて、今お父さんが斯樣仰つたが、如何したものでせう、訊くと母も父と同樣に答へる。子供は是れも駄目だと思つて、今度は祖母さんの處へ行く。祖母も其れは是非お父さんに買つて頂きたいものですけれども朝九時が打つても復習を怠つた人にはね、如何したものだらうと父と母とが云つた通りに物語る。子供は已むを得ず自分の怠つた事を恥ぢて、自然に勉強する樣になる。是れを若しもう九時が過ぎたのにまだ遊んでる早く勉強を爲さいと叱つても、左程の効果はない。又子供を叱るのは大抵大人が叱る樣にするのだと申されました。譬へば子供が一生懸命に遊んでゐるのを呼ぶ、子供は好い加減な返事をして置く、親は不滿足氣に、何さん此處の煙草を取つてお出でと命令する、子供は聞かぬ、遂に大きな聲で叱る樣になると話して下さいました。

私は自分には子はないが、昨年から江田島に居ります兄の子供を預つて、實際に育てゝ行きますと、全く高嶺先生の仰いました通り叱らなくても濟みます。子供と云ふものは長所を擧げて褒めてやれば決して叱る樣な事はしません。今預つて居ります兄の子供は、八歳に五歳の女の子ですが、夕飯後今日は如何な歌を習ひましたか歌つて御覧。伯母さんは幼稚園の歌が大好きだよと云ひますと、莞爾して家内の者一同に恭しく禮をして歌ひます。アヽ面白かつた又明日も能く覺て歌つて下さいと云つて、今度は幼稚園のお話と云ふと、可愛い聲でお伽噺を始めますが、其樂しみと云つたらありません。私は斯樣にして夕飯後二三十分間、一般の家庭が家内一同幼兒の爲めに時間を費したならば、家庭團欒の内に面白い効果を收める事が出來ようと思ひます。即ち幼兒の話した言葉の中に好い事があれば、ナア其れは好いお話を聞きましたね、何さんも何卒其樣に好い事をして頂戴と云ふと、子供は其れを實行するのみならず、今後の話も注意して聞く樣になります。そして是れを中學に行つて居る太郎を始め次郎、三郎と云ふ風に一同に話させますと兩親の方では只今如何なる思想が腦を流れてゐるかと云ふ事なども知れます。

（宮川喜美子女史）



町に生活する人の心持

照日葵

○凋落したる伏見町

此地へ來てから何年になるかつておつしやるの、八年になりますわ、夏子を身にもつて來たんですから。それからあとへ二人できたでせう、來る時は二人きりで、今では五人、ホヽヽそりや變る筈ですよ。道理で京都辯が旨くなつたつて。エヽ、すつかり伏見つ子になつてしまひました、又ならなきあ損ですもの。いつ迄超然と、頑張つて居たつて、惡口の的となる許り。買物や何かでも大變違ひますからね。郷に入つては郷に從へで、やつぱり土地の人に接近した方が得策ですよ。それにこゝは保守主義の、舊弊思想で固めた別世界ですからね。他國から移住して來た者を嫌ひますの。封建時代見た樣にね。二言目には、「ありや國者やさかいなア、あんな漂浪者は何處の馬の骨だか解りやへん」とかうですの。よほどお馴染にならぬと相手にしませんものね、私等も初めのうちはどんなにいやな思ひをした事でせう。ですから他國からやつて來て、店なんか張つたつて、トント繁昌しませんね。今の世に他國人を排斥するなんて、矛盾な處ですもの。發展の仕樣がないではありませんか。時代には遲れる許り。その上鐵道が出來てからは、不用も同樣の地となつてしまつて、すつかり淋しくなつたさうです。この地も開け行く文明の世に反して、凋落した一例ですのね。丁度電氣燈が輝やく樣になつてから、ランプが忘れられたと同樣に。

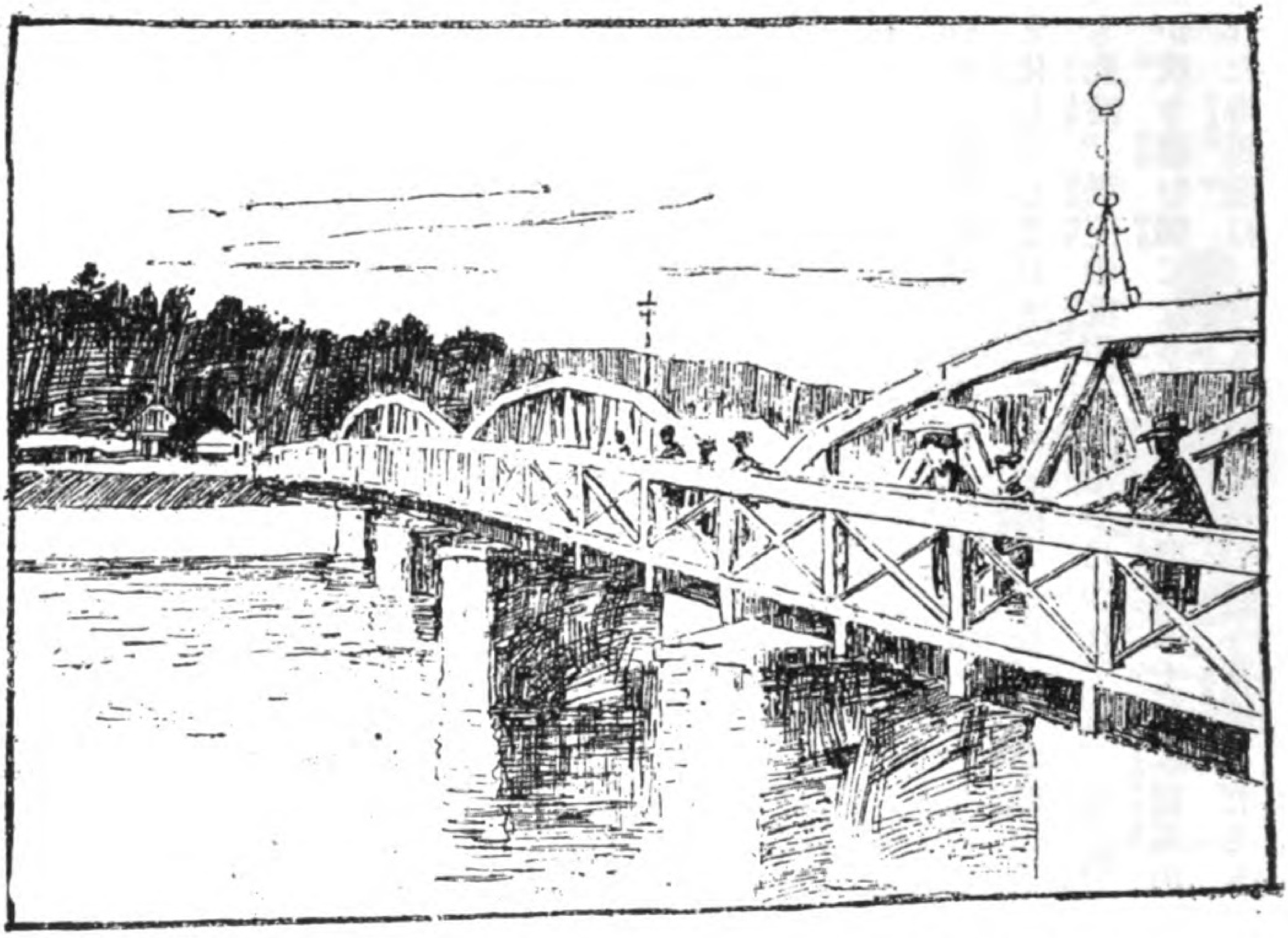
○むかしの面影

呉竹の伏見の里なんて。どんなにゆかしい處だらうと思つて來て見ると、案外淋しい田舍町でせう。失望しましたわ。けれ共歴史的な土地だけに、長く居るうちには見る物聞く物昔の思ひ出となつて、某先生に敎へて頂いた十年前の記憶を呼び起しますの。東はみどりに包まれた桃山は、三百年の其かみ、豐太閤が榮華をつくした夢の跡、西にかすかに長蛇の樣に見えてるのが、加茂川の堤で鳥羽街道ですし。北は小督で名高い少將が君の深草、今は十六師團に三十八聯隊があります。南には名馬池月が先陣を爭つた昔の宇治川の流れ、朝顏日記の一ふしも思ひ出されて、今に螢の名所として螢合戰等もあるさうです。此流れの下は淀と八幡でせう。豐公の寵を一身に集めた淀君の俤が連想されますし。弓矢の神の八幡宮には今もなほ人足が絶えません。

桃山城に威名をかゞやかした豐公時代には、此町も諸國の大名の立派なお屋敷が立ち並んだ武士町であつたさうです。今でもこの敗殘した町に似合はず所々大きな長屋門が荒廢したまゝ殘つてゐたり、何〱屋敷跡だとかいつて、廣い草原等があります。今第一小學校になつてる所が尾張屋敷の跡で第二校が土佐屋敷の跡又馬糧廠のある處が薩摩屋敷であつたと申します。

さしもの英雄秀吉公も、一代で亡び、今は桃山城址など方も止めませんが、唯一ッ紅雪塚ばかりが昔をかたり顏に殘つてをります。此塚許りは誰一人手出しをする者もなく、三百年前の俤を其まゝださうですの。土人の口傳によりますと。豐太閤のお側に紅雪といふ文武兩道に達した者があつたさうです。さすがの豐公も其奇才を恐れて、紅雪がこの塚へ馬を乘り入れてゐる所を、一矢に射止め。不意打を食つた紅雪は其まゝ塚の中で落命しました。それからは此塚にあやし、の引續いて、だれ云ふとなく紅雪塚の怨靈がるとて、紅雪塚々々とよぶ樣になつて。です。たま〱測量に行つた者でも、つた者はないと云ひ傳へられてをり伏見城の天主閣の跡だといふ頂邊へ

福井九十九橋



望のよい事まるで仙境に立つて下界でも見おろしてゐるかの樣な心持ちになりますの。遠く宇治木幡の里から、八幡、淀を見渡して、グルーッと廻つて京都市迄も一目の中にながめられます、宇治川に巡航船の通ふ樣。巨椋の池の水の面は日にかゞやきの大阪京都間の汽車が白い煙をはいて行く細い所迄、見とめられますもの、秀吉公がこゝに城を選ばれたのも宜なる哉と思ひます。今は只鬱叢とした靜な御料地に、桓武天皇の御陵を仰ぐばかりであります。其麓の鎭守の森には、神功皇后を祭つてある御香宮がります、其境内には伏見唯一の公園地。猫の額よりもまだ狹いですけれ共、櫻に、藤に、萩に、四季の眺めは取次に變ります。

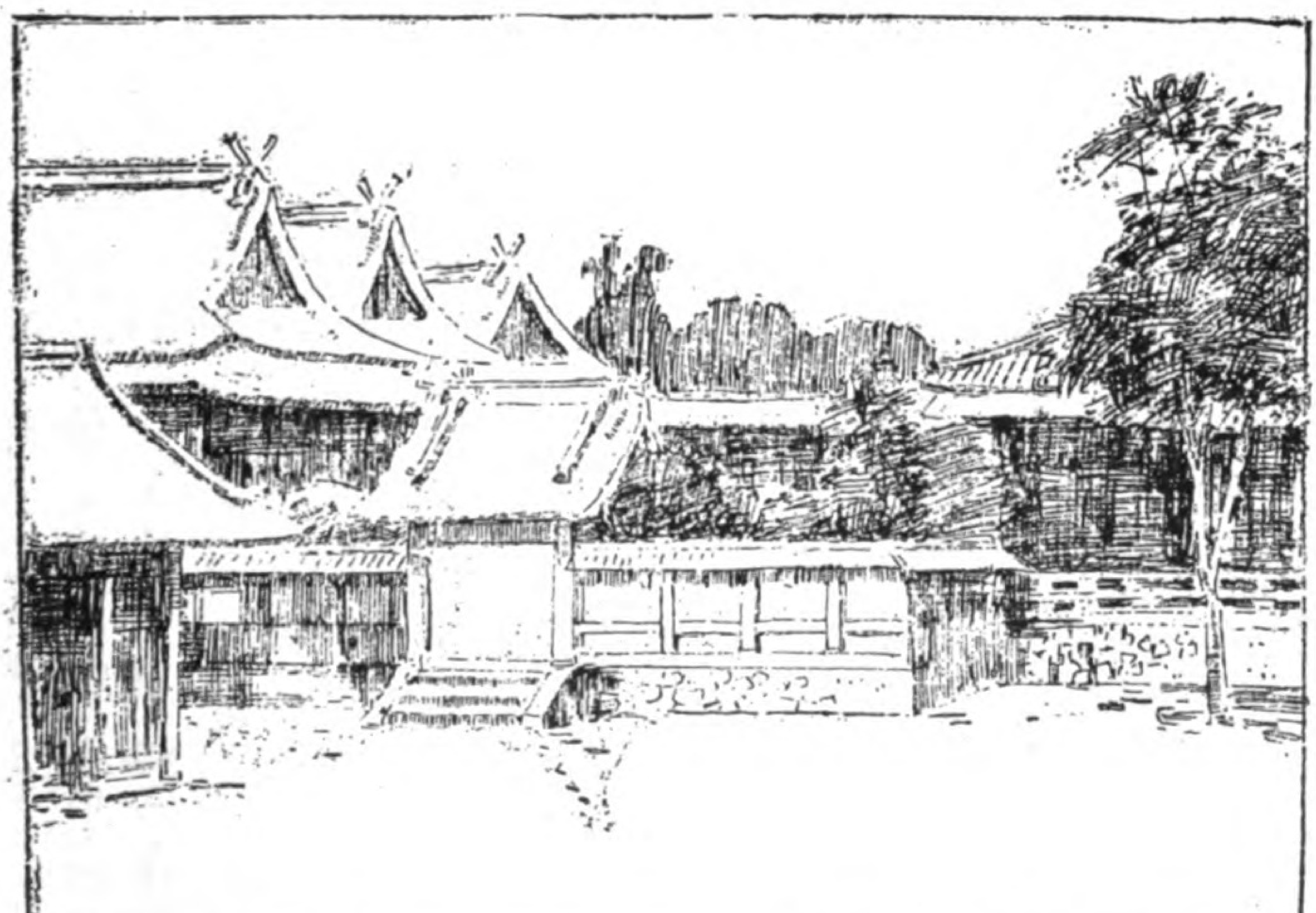
○徳川時代の風俗

徳川時代となりましてからは、次第に衰へましたでせうが、まだ／＼西國大名が參勤交代の通路になつてをりますし。交通運送の要地として、却々繁華であつたさうですの。丁度京都の玄關番と云つた樣な處で出

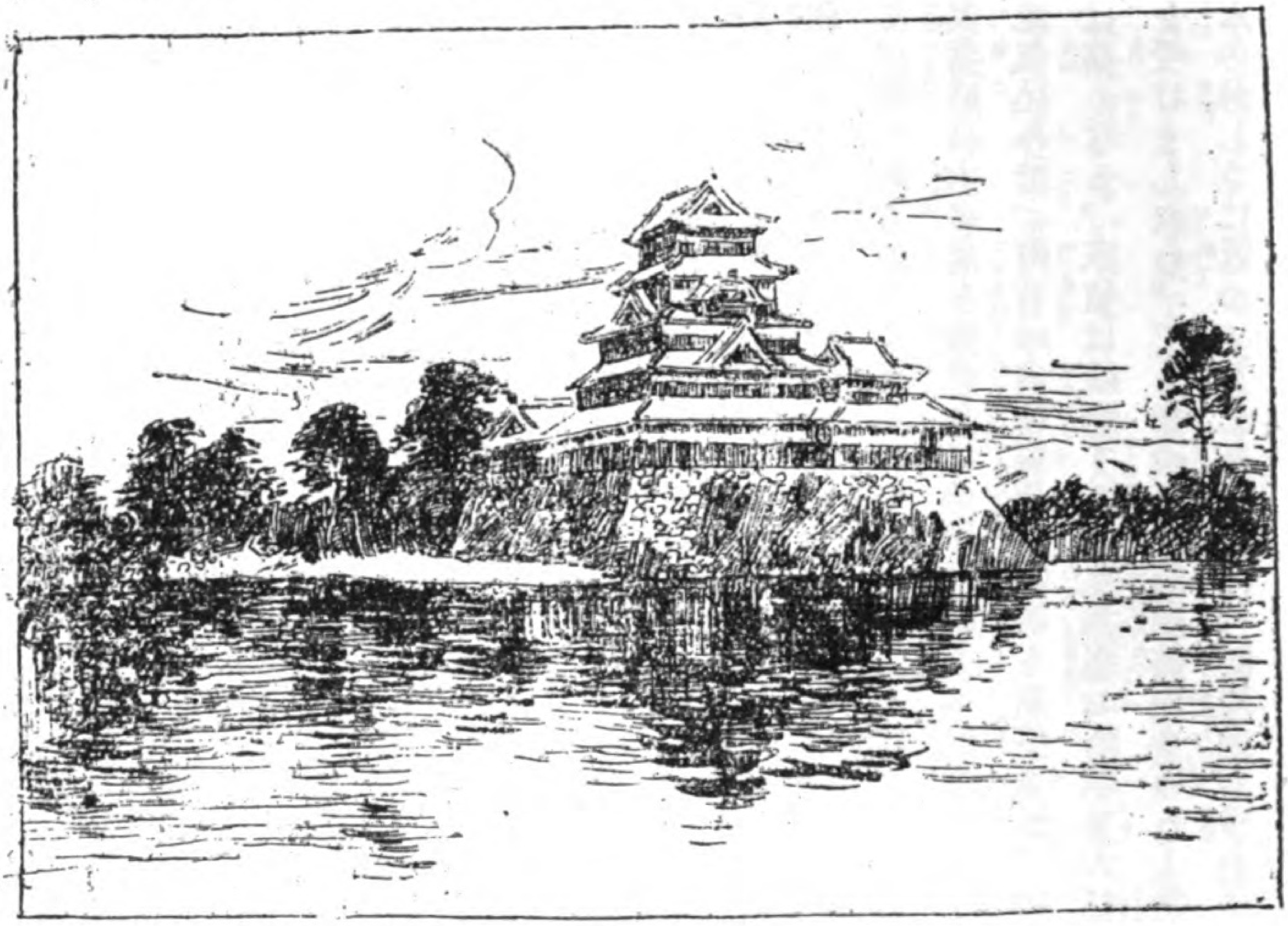
るにも入るにも大切な關門でせう。こゝまで來た大名は皆美々しき行列を整へて京都へ練り込んださうですからね。

此時分は三十石船が南濱へ着きますし、名高い喰はんか船は、小さい船に食物をのせて、血氣な男が褌一つになつて、そら喰はんか〳〵。牛蒡汁喰はんか、どせう汁喰はんか、芋に章魚喰はんか、どうぢや、錢がないか、とまるでけんか腰しで賣りに來たさうですね、母が小さい時伏見のいなりさんへ參詣して歸り船の中で、喰はんかの聲を聞いて、おそろしくて〳〵祖父さまの袖の下にかくれたとよく話しに聞きましたが、今はそれもありません。宇治の柴船に淀の川瀨の水車も其名許り。

それから維新前後の此地は全く殺氣滿々で、地獄の有樣と化してしまひました、名高い寺田屋、騷動のあつたも此時。勤王の聲が高くなるにつれては、血腥い風が吹き凄む樣になりました。忠烈の士坂本龍馬の切られた寺田屋は、今も猶宇治川の邊り青柳しだるゝ



四ノ宮東の社



讃岐高松城

所にあります。其時仆れた薩藩の九烈士の事蹟は、寺田屋の隣りに石碑となつて。うたゝ人の腸をしぼります。今年は其五十年祭を盛大に執行いたしました。

いよ〳〵幕軍と官軍とがこの鳥羽と伏見で兵火の幕を切りましてからは、人心恟々。老人の言をきゝますと皆金物等、井戸へしづめて、大事な家財のみまとめて、桃山へ避難したさうです。

漸々治まる御世となつてからは、西洋の文明が輸入され、鐵道が出來てからはすつかり、此地は見すてられてしまひました。

○現今の町風

東西には電車をひかへ、疏水には山に船が上るてうインクライン等、文明の利器を揃へておきながら、一方には又高瀬の綱引船等と、呑氣なものが、あるからおもろきますわ、大きな幾十貫もあらうと思はれる柴の船や、炭の船を綱で高瀬川の両岸から引張りながら一歩は一歩とヨツキンホー、ホーホーエーイのかけ聲

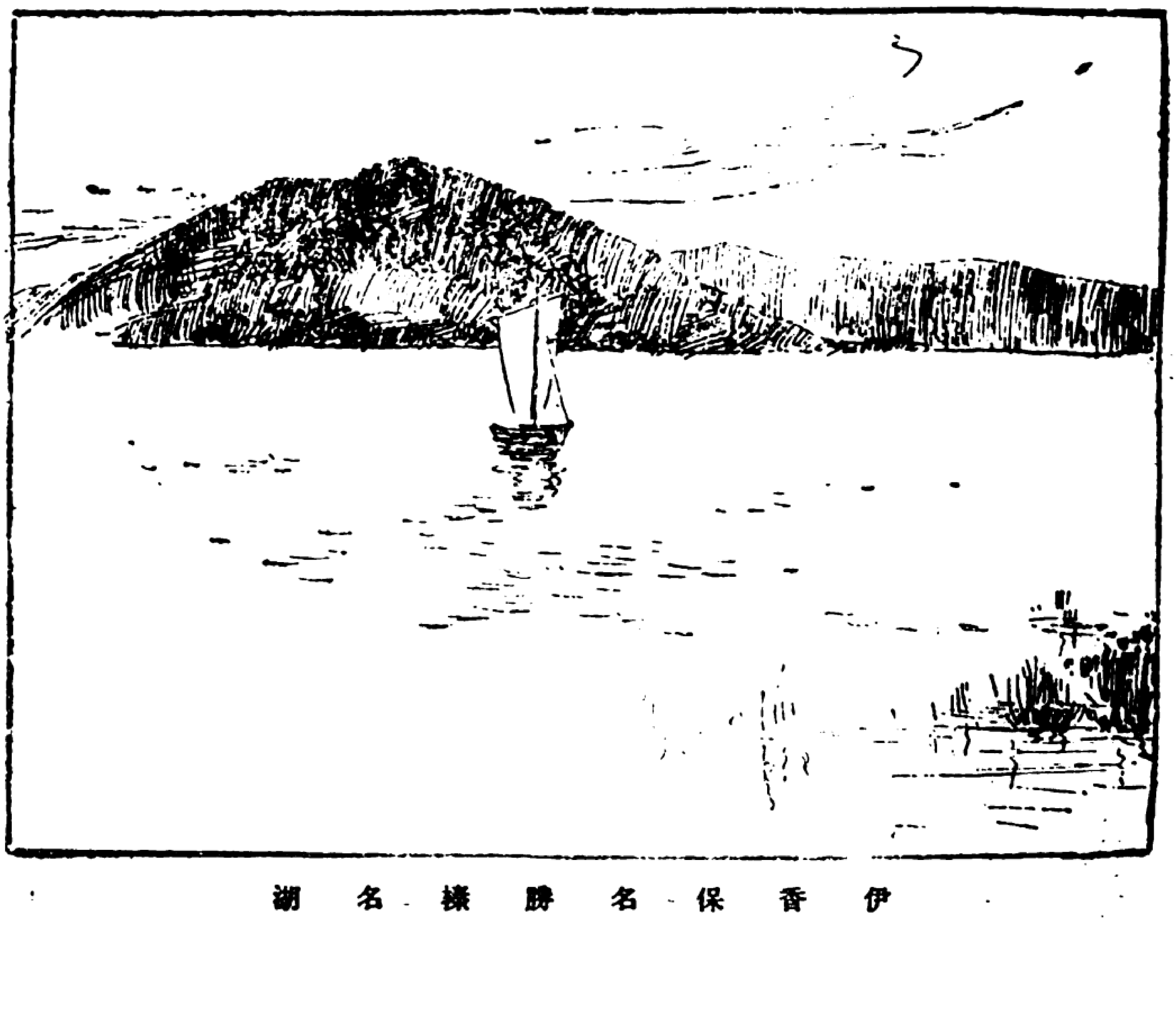
と共に、瀬を上りますの。マア京都迄一日がゝりですね。それが幾隻も引つゞきますの。寒い〳〵雪の朝、まだ四方の靜かな中から、遙かにホー〳〵の聲をきゝますと、この寒空に汗を流して綱を引く船頭を思ひ浮べまして、自然に勇氣が出て、縮まつてた手ものびますの。此頃は空飛ぶ器械迄出來てるのに、綱を引く高瀬船の氣の長さ蟻が物を運んでる樣だなと思ひます。

人情風習も今だに舊習慣に囚はれて居りますの、丁度洋服を着た丁髷爺さんの樣な處だな。と思ふのは私の僻目ではなく、僻んだ心からでせうか。一部の人が京伏合併等と絶叫しても、やはり礎がぐら〳〵しては先年も十二師團の新設に就いて、嵯峨と猛烈な競爭して、遂々此方の手に落ちたのは、此上もないお手柄、其當時は大發展を豫想して、皆師團さへ出來ればとの意氣込みで、町有の將校專用借家等も新築され、物價は高くなる、家賃は暴騰する。私共迄お蔭げで大打擊を受けましたわ。でもやつぱり師團熱のさめると共に本の淋しさに返つてしまひました。將校方も多くは市のお住ゐですよ。生活ですか。大概。職ですよ職人町ですね。大きく云へば工業地。大きな紡績會社や製布會社、肩掛製工場等を初め。建築請負業者は到る所に事務所を張つて居ります。京大阪奈良方面迄も出張所を設けて盛んに營業してゐますの。ですから大工、左官、手傳、土方等が澤山で皆親方姐キ。頭に小頭。子分等と昔の俠客的關係を結んで居ります。酒造と製茶も重なる產物ですし。小さい職になりますと。路次の角へ行つても簾あみに扇の骨けづり。團扇張りに鋸の目立かぢ等細かい〳〵生活の音が聞かれます。女の內職としては、團扇の要をあけるのやら金糸卷きに鹿の子結ひ。ア、お話ししてる丈でも肩がこりますわ。ですからあんまの澤山な事。一晩中に十種以上の笛の音をきゝますよ。此頃はあんま迄が。古洋服着たり口髭に眼がねホ、、、めくらに眼がね等なせかつて聞ますとね。眼は見えなくても塵埃が入らぬからですつて振つてるでせう。

一般に風習は野卑です。善いとも惡いとも導き樣一

つでどうにでもなる子供の爲めに一番困つて終ひます。いくら學校でよい薫陶を受けても家庭がこんなでは仕方がないでせう、職人等は大抵細いし根氣の腐りさうな仕事を終日やつて居るものですから氣晴しとでも云ふのでせう大聲で歌を唄つてゐますの。それが餘り敎育のある徒ではないですから隨分卑猥なものを平氣でうたつてるでせう。自然と子供心に聞覺えて。がんぜない子供迄が聞くにも堪へぬ俗歌を得意げに唄つてゐますし無意識の中に受ける感化は成長して後迄も浸み込んでをるだらうと思ひます。

それで中流の婦人はと申しますと奥行の深い〳〵薄暗い陰氣なお家に引籠り勝。めつたに外出もなされませんの。よく〳〵多忙な家でなければ女中もおかず地味なお暮しで、第一流の資産家の奥様でも常着は手織木綿に毛繻子の帶の、片側は見える處丈け、三尺程唐縮が付てある物。まだ其上から單衣の筒袖になつた引張りを着て、女中と共に働いてゐます。節儉主義といふよりは、寧ろ溜め主義で。藏前の四ッも五ッもあ



伊香保名勝榛名湖

る家でも、出す事には却々御遠慮深ひ方で、土地柄魚の不自由な點もありますが、マア一日と十五日の外には生臭い物の膳に上る事等はありませんね。若者の澤山居る家等では、釣瓶二杯に、豆腐一丁、葱が二錢位なお汁が晝食に付けば、朝は粥、夕は漬物これが平日の食物、一日と十五日とは職人の休業日で、赤飯に棒鱈と小芋の煮附位が付ませう。かう云ふ風ですから常に柔か物でも着て派手な暮し方でも仕樣ものなら、(極道者の締りも括りもない人やと)の陰口は必定です。

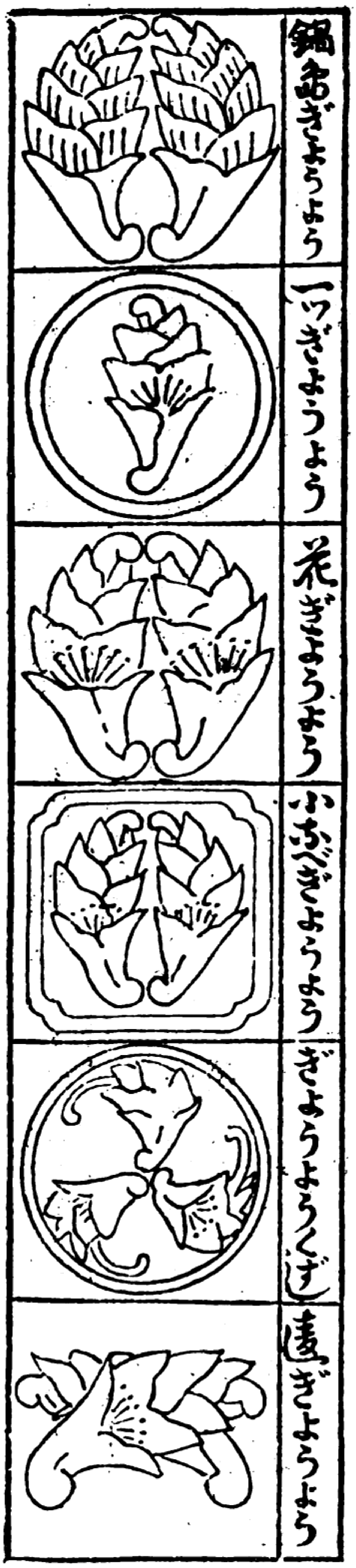
男の子は小學終たら、商業見習として丁稚に。女の子の少し間に合ふ樣になると、他家のお飯の味知らぬ者は嫁にも行けぬ。この言の下に奉公に出されて終ひますもの、娘時代の無邪氣な華やかな艶姿は見られません。皆いやにませた。十六七にもなると、はや一廉世帶振つた物越し格好、それを又無上の誇りとしてゐますの。着物一枚新調せうとする時にでも、まづ二十年三十年の先きを考へて拵らへます。十七八の娘でも三十位のお神さんでも同じ樣な物を着て居るのも、これでお解りでせう、流行の風等は。頭の一丈も上を吹き越してゐますから一向痛痒を感じません。

マアおめづらしい事。お向ひさんのお神さんが大層おめかしでお出掛けだわ。春吉どんが角袖に角帶を貝の口に結んで、萠黄の風呂敷包みをもってお供。ドレお天氣が狂ひはせんか知らと心配してたら、お晝過ぎお歸りオヤ〳〵これは何とした事。鼠縮緬の二枚重ねの裾裏を帶の際迄まくし上げて友禪の長襦袢を御自慢らしう。お首筋の襟廻りには白いハンケチ、あんな風では折角の奥樣振りが臺なし、おたいこに結んだ厚板が泣き出しさうだ。裾の切る御心配。襟垢のつかぬ御用心とはお察し申しましたが。さりとは餘りに淺き御心。

物も餘り極端に過ると常識をはづれますのね。かういふ事もありました。此地へ來て初めてのお正月十五日に家主の御隱居樣が御祝儀に入らしたとお思召せ。小紋の重ねに黑七子のお羽織の末廣を右の手に持つて

お床の前での御挨拶迄は、さすがにお大家のと御見上げ申してをりました處が、お屠蘇のお祝ひも濟んだ處へ、差配人が通帳といくらかのお錢を差し出しました。其が汚穢の勘定ではありまんか。マアこんな處へ失禮なと仰しやるかと思ひの外、手に取りあげて一枚一枚御覽なすつた御隱居樣は、差配人をとらへて、時もあらうに、處もあらうに、私共を目の前において。高いの安いのと臭い御話し遊ばすんですもの、ほんとにあつ氣に取られて暫くはお顏見つめてをりましたの

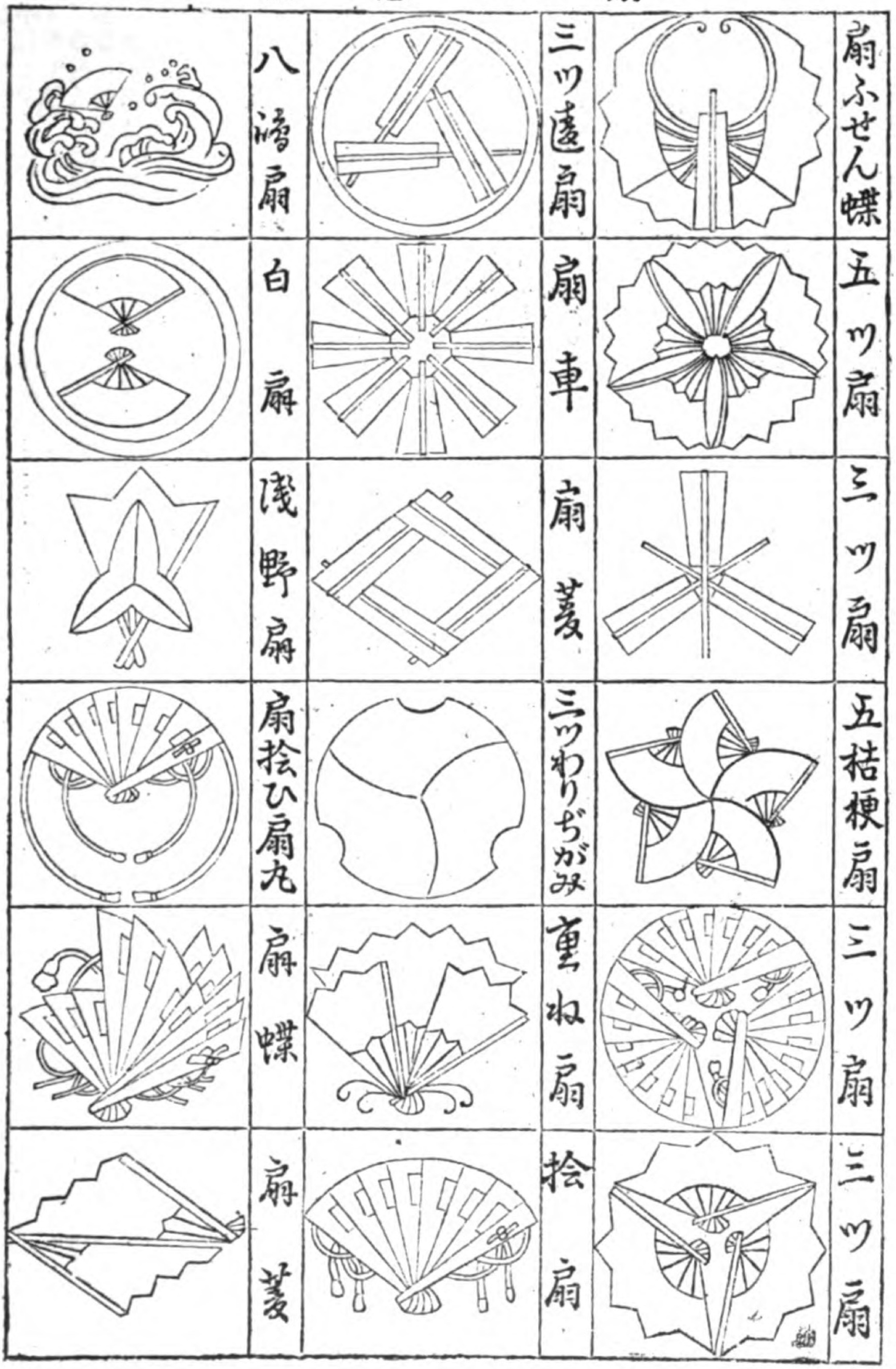
　こんな事は珍らしくありません、此頃はもう驚きもいたしませんの。化せられたんだらうつて。まさかねー

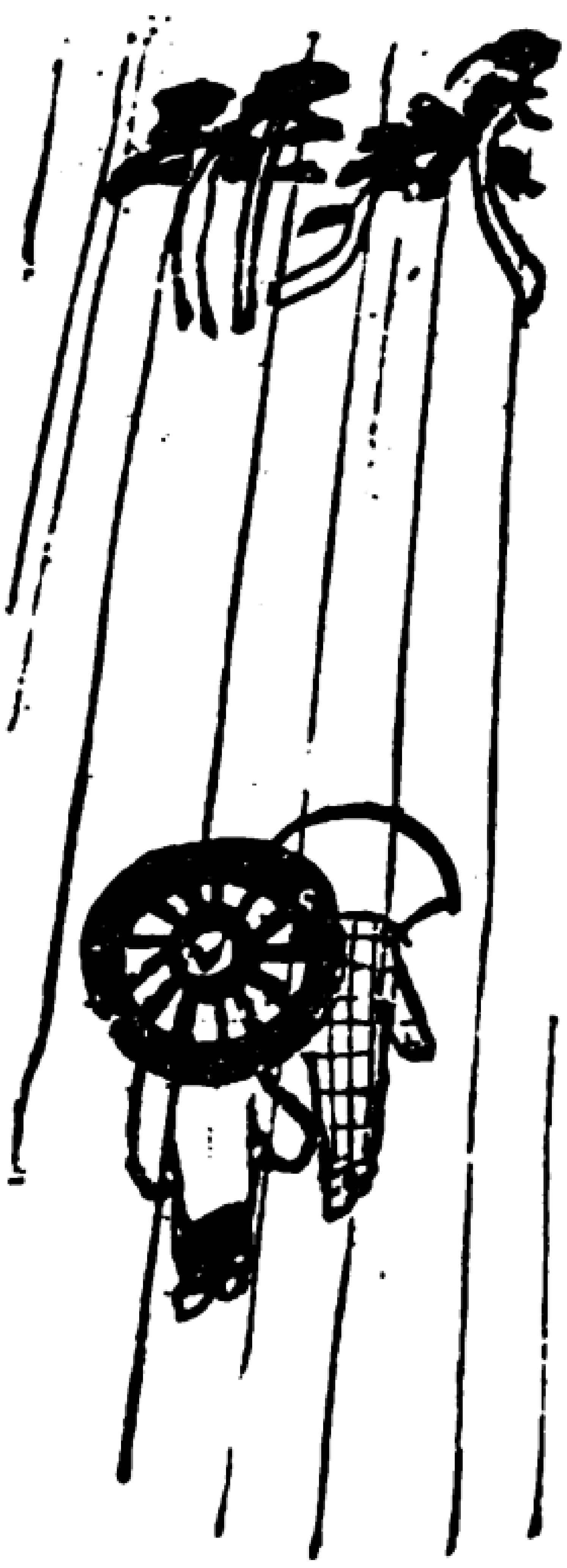


可愛い子には旅をさせとか。人生の最も樂しかるべき花の時代を。投げ出されて辛き浮世の人波の中で。若いくるしい經驗をなめ盡し、漸く新婚の夢のまどらかなるべき時に、はやくも固き舊習慣におさへつけられ、我が心の手足は動かすよすがもない此地の婦人。これでは生の意義はどこにあらうぞと、悲觀される處ですが、當人は一向平氣、女の本分はこゝにありとしてゐますのは、感心の外ありません。

　ちと今時の。束縛だとか、囚はれの身だとか云つて、家庭を。自由を奪ふ牢舎の樣に心得て入らつしやる現代風潮の流行兒に、こんな人達の爪の垢でも煎じてあげ度と思ひます。

扇の意匠


扇ふせん蝶
三ツ遠扇
八潟扇
五ツ扇
扇車
白扇
三ツ扇
扇菱
淺野扇
五桔梗扇
三ツわりぢがみ
扇拾ひ扇丸
三ツ扇
重ね扇
扇蝶
三ツ扇
拾扇
扇菱



家庭 修學旅行

淺みどり

△快晴の朝

曉告ぐる鷄の聲に、見はてぬ夢路破られて、ふと眼をさますと丁度六時、いつもならまだもう少し……なんて云ふ處ですけども今日の日曜はかねてより、父樣母樣と御一緒に一日を樂しく宮島に遊びくらさむとあこがれ待つた其日ですもの、いかな寢坊の私でもよろこび勇んでとび起きました。

先づ何より氣になるので、早速雨戸をあけて見ると、繪の具をとかした樣な色彩が天地に流れて、花も鳥も霞も水も新に魂が入つたかの樣、活々として若やいで見える。

うれしくて、手早く座敷の掃除をすまして鏡の前にすわる。

いつもより念入りに、熱いお湯ですつかり癖をなほして、ローマに束ねた襟元には、淡水色の大きなリボンをきゆつと結ぶ。

其内に父樣母樣もお起きあそばした。

御飯頂くとすぐお化粧して着物を着替へる、もう暖かだから羽織は着ない、あの私の大好きなお納戸色紋お召の華美なのに、褪紅色厚板の目覺むる樣な牡丹模樣の帶、船が寒いよと仰言るので、蝶の縫ある白マフラゆるく首に卷きつけて、まだ少し早いけども家を出る。

△汽車の中より

晴れたる空には雲もなく、心地よく走る車の上、春

靜かに頰をなでゝ、身も心も淸々しい。

來て見れば誰も志ざす東台の花ちやあゝりませんが、之は又名にしおふ安藝の宮島の春景色、同じ心の人もいと多くて押すな／＼の大混雜、やう／＼人波わけて一二等待合室に入ると、さすがに此處はゆつくりしてゐる。暫らく待つて十時十分の下關行列車に乘りこみました。

刻一刻、動一動、移り變りゆく様すが／＼しき靑田の様や、こゝかしこ黃金の色の波うつは、菜の花畑、瑠璃の空には黃蝶白蝶ひら／＼舞ふて、繪の如き窓外の景色の面白さに、いつしか横河己斐も過ぎて了つた、あれが桃畑だと仰言る父樣のお聲に、振向くと、低い山の様なのが二つ三つ並んでゐて、其山の一面さながら桃色の幕引めぐらした様に、咲きみだれてゐる、あの此處が有名な水蜜桃の產地で御座いますつて。

送り迎ふる程もなく、五日市、廿日市も夢の間に、早宮島々々とよび立つる驛夫の聲をあとにして、其ままますぐ連絡船にのる。

△船の中の眺め

見渡せば春光うら／＼としてくまなく照し、洋々たる春の海、のたり／＼と果しもなく、呼べば答へむ沖つ島山霞に煙り、寄せては返す潮の花、磯に碎けて心地よく。あれあの名高い朱の大鳥居も、嬉しや今日は浪間に浮んで見えます、後ろの方、翠滴る宮島の山山、色殊にあざやかに、左手には何國の軍艦でせう、灰白色に塗られた四本マストの大きいのが、はるけき沖にいかりをおろして、微動せぬいかめしさ、右には大阪商船會社の船一二隻、勇ましく煙をはいて碇泊してる、其紺碧の間を縫ふて靜かに行交ふ眞帆片帆、漁どる舟の限りも知らず、いつ見てもあかぬ景色に恍惚してゐると、やがてスクリユーの音聞へ初め、船はやゝに動き出した。

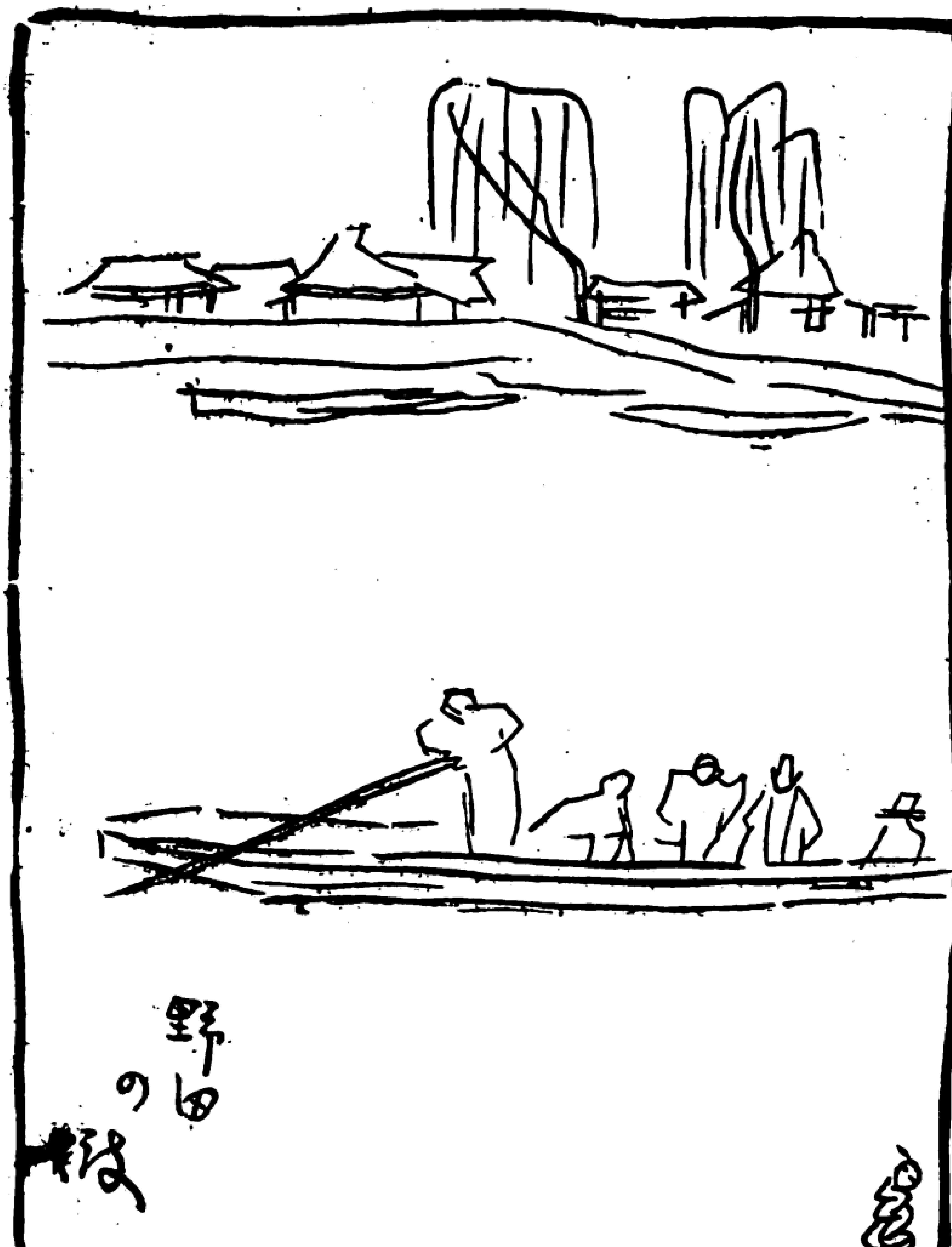
△嚴島のみやしろ

底ひ知られぬ大海の、深みどりなる其中を、わけゆ

く船のあたりは時ならぬ雪の花、且つ散りかつ砕けて、波のうねりも大きくなつた、過來し方を眺むれば、白泡しきりに立さわいでゐる。

またゝくひまにもう嚴島の棧橋についた、此處で切符を渡して上る。

まあ隨分な人出だ、ふと向を見ると毎年兵學校の生徒でせうか、いかりの徽章のついた帽子をかぶつて、肩からはな色の包をしよい、腰には玩具の様な短劍ぶら〳〵させ乍ら、三々五々打連立つて談笑してる。



道の兩側はずらりと宮島名産の貝細工や紅葉まんじう、繪端書屋の店で埋まつてゐる、之が客引とでも云ふのか、旅宿の前には若者二三人立つてゐて、「何卒お宿は手前共へ：：」なんて何だかわからない事を、早口に云つてついてくる、其處を通つてずつと行くと大きな石の鳥居がある、もう嚴島神社の境内に來ました、一望千里眺めつきせぬ其岸には、梅桃櫻並び立つて、色とり〳〵の花美しう、そよと春風たはゝなる枝を誘ふと見上ぐる袖に襟に肩

に、ハラ〳〵ハラ〳〵落花のゆき。

左にある低い山、そこにある大きな建物を、千疊敷と云つて、廣い〳〵其内部には、氣味の惡るい程澤山杓子が奉納されてあります。之は去る日清日露の戰役の際出征軍人の親や妻、又は友人などが、其武運長久ならん事を祈つて奉つたものださうです、杓子は此地の名物の一つ、そこに餘り甘味もない力餅を賣つてゐます。

△うかべる城郭

此處を出て眞直に行くと、あらあの船からも見えた朱塗の大鳥居、ゆかしき姿は燃ゆる樣な色紅に美しう、其裾は波のよするにまかせて、碧空高くそゝり立つてゐる、今更の思ひにつと瞳を交せば、神々しき丹塗の宮殿、廻廊、悉く波間にたゞようて、さながら浮べる城かと許り、散りにし花の幾片と、今も昔もかつて變らぬ其影をやどして青波はゆらり〳〵ときらめいてゐる。

仰げば颯々と通ふ松風千古つきせぬ平和の歌をうたひ、伏してはさゝやく波の聲々、げに長閑けき春の神秘を語るにも似て、身は暫し仙境にあるの想、そゞろ昔話にのみ聞きし、海の底なる龍宮も、かくやとおもひ出られて、幾年胸にゑがき來し此景色とは云へ、餘りに壯麗佳麗たぐひもなく、只恍惚と眺めいつた。

去年の夏、東京から廣島に來て、もう之で嚴島にも三度の旅、青葉若葉の梢涼しき夏の姿も、楓葉血の如く紅に龍田姫の錦織りなす秋の粧も、それはもういみじとは思ひましたが生憎にも丁度潮干の時ばかりで、何となく物足らぬ心地せられましたのに、嬉しくも日頃の望かなひて今此處に見る此美しきながめ：：：：佇む袖を春風おもむろに吹いて夢の如く、高い磯の香りも身にしみてなつかしい。

△旅館の珍膳

もう度々ですから今日は參拜しない、よそながらおろがみまゐらせて、惜しき袂を拂ふて塔の岡の松岡旅

館と云ふにあがる。

通されたのは二階の十畳の間、宮島湾一眸の中に浮んで心地よく、大きな花瓶には八重櫻の艶なのが露ながら匂ふて、床の掛物の布袋さんは、福々しく笑かたむけていらつしやる。

數ある座敷のこゝかしこ、楽しさうな話聲はもれて、誰が浮れ男のたはむれか、下の方では粋な三味の音色と共に、婀娜な女の聲が入れ交つては聞えてくる、父様時計を御覧なさるともう一時すぎ、道理で歩いてる中はさうでもなかつたのが、かうして靜としてゐると、急にお腹が空いて堪らなくなつて来た、早速紅葉まんじうの二つ三つ



平らげて、お茶を飲んでゐる處へやう〳〵お膳を運んで来た。

かういふ所では握飯にお香の物でも結構ですのに、まして之は鮮しい、まるであらひにでもした様な、ごり〳〵した鯛の刺身に、あぶらは浮んで珠と散るお吸物お腹はへつてゐるしお加減はよし何もかもみんな綺麗に喰べて了ひました、眞實にうちのお魚は新らしくてそりやあ結構で御座いますのよ。とても東京あたりのとはくらべものになりません。宅になんかもつてくるのでも皆かごの中でピチ〳〵はねてゐるのですもの、ほんとにお美味うご

座いますわ。

母様てば、「大分家のお料理とは違つてる様だね」なんて、憎らしい事を仰言つて召上がつてらつしやる。ゆつくり休んで此家を出たのがもう三時頃、ぶら〱歩いて紅葉谷の方へゆく。

一寸行くとお寺の前にまあ澤山な鳩、可愛らしい少さな坊ちやんや嬢ちやん達が、父様母様に手をひかれ乍ら、うれしさうに飛んだりはねたりして豆をパラパラ蒔いてゐる、中には頭の上や肩に鳩がとんで來るのでワッと泣き出してる子供もある。

罪のない、無邪氣な、愛らしさに、思はず微笑んで淺みどりの和らかな春草踏むでずつと行くと、茂れる松の木の間よりちら〱見ゆるコバルトの、海の面には蒔繪の様な小波立つて、遠く近く走るは小舟浮ぶはかもめ、海にも陸にも陽炎燃えて、青疊しきつめた様な芝生のこゝかしこ、雲とほこれる花の下影、緑色こきときは木のこのまがくれ、群れゐる鹿の姿もいと優に、雪と散る花の幾片背にうけては、其を餌とでも思ふのか、つと含んでは又靜に歩みをはこぶ其さまは、まるで一幅の繪卷物でもくりひろげられた様、まあ何といふ長閑にも美しい春の景色でせう、いつしかまだ見ぬ奈良の春日野さへ偲ばれて、恍惚おもひつゝけて歩きました。

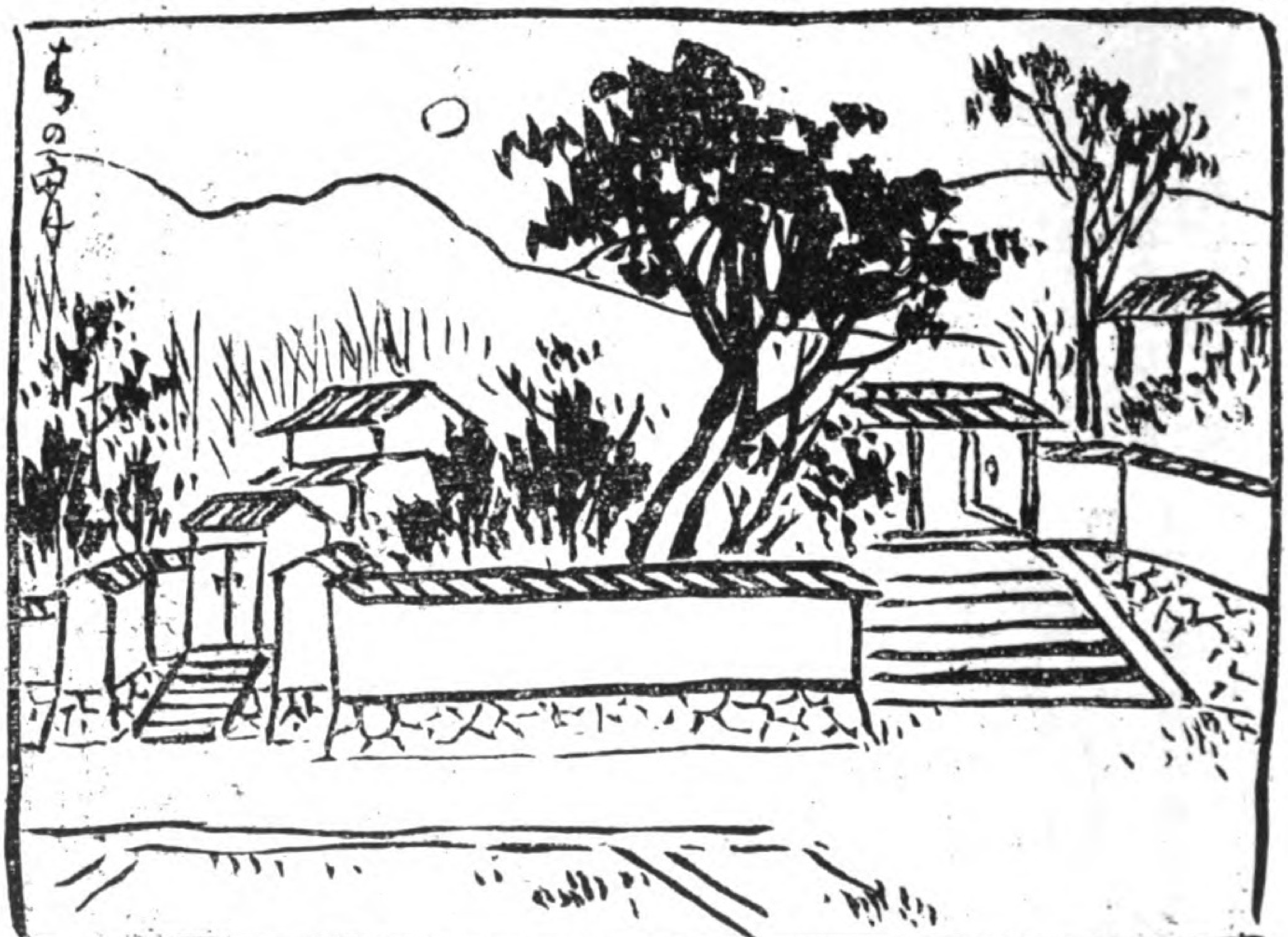
船が出るのにはまだ少し間があるので、一寸お山の方に行つて見る、これからの路はつゞら折り、登つたりくだつたり、紅葉谷公園まではまだなか〱あります。

△紅葉谷の春景色

若楓の初々しき香りなつかしみ乍ら、ずつと登つて行きますと、夏なほ寒いと云ふのは眞實にこんな處でせうか、幾百年を經た様な鬱蒼と茂る老松古杉、枝を交して天を蔽し、峰より落ち來る岩淸水、水晶よりも猶美しい透き通つた水は岩間を傳ふて帶の如く、峨々たる岩根にせかれては露の白玉數みだしつゝ、胸の血そゝる様なさゝやかな音をたてゝゆるく早く流れてゆ

く、其邊に咲く岩つゝじ、色もゆかしき薄紫に、早くも二つ三つほころび初めてやさしき姿の水に澄む處、四邊の幽邃と相俟つて閑寂の氣おのづからあふれ、魂は遠くとんで浮世の外にあそぶ。

夢心地にうねりうねつた道をゆくと、悉く緑葉の精もて包まれた樣な山の姿の其中にうす紅の霞棚引くは咲きみつ櫻かはた桃か？　紛々と散るくれなゐの雪には天津少女も袖ふりはへて空にたはむれ遊ぶらん、そやみなく降りしきる花吹雪に、木の下路はふむ處もなきまでの香ある花の白雲！



せめては逝く春の記念にと散りしく花片、三つ四つ二つ袂にをさめて、なほもふみ分け行けば、小暗き木立の茂み露ふかきところ／＼、さへたる音色に鶯が鳴く、實にそこにもこゝにも春色今やたけなはにして、つきせぬ眺めに心ゆくまで、此清遊をほしいまゝにする今日の一日のたのしさよ。

△一日の清遊

其中にも時は刻々にきざんで、遙に斷續する汽笛の聲、あゝもう船が出るのでせう、名殘りは更につきませんが、又來ん時を契りつゝ今はとて

家路に向ふ。

　歸りは町の方を通る、風光明媚な此里に似もやらぬ、薄暗い樣なせまい、汚ない町だ、そこらの店から、繪端書や紅葉まんじう買ひ求めて家土產にする。濱邊に來ると潮風が身にしみてうすら寒い。

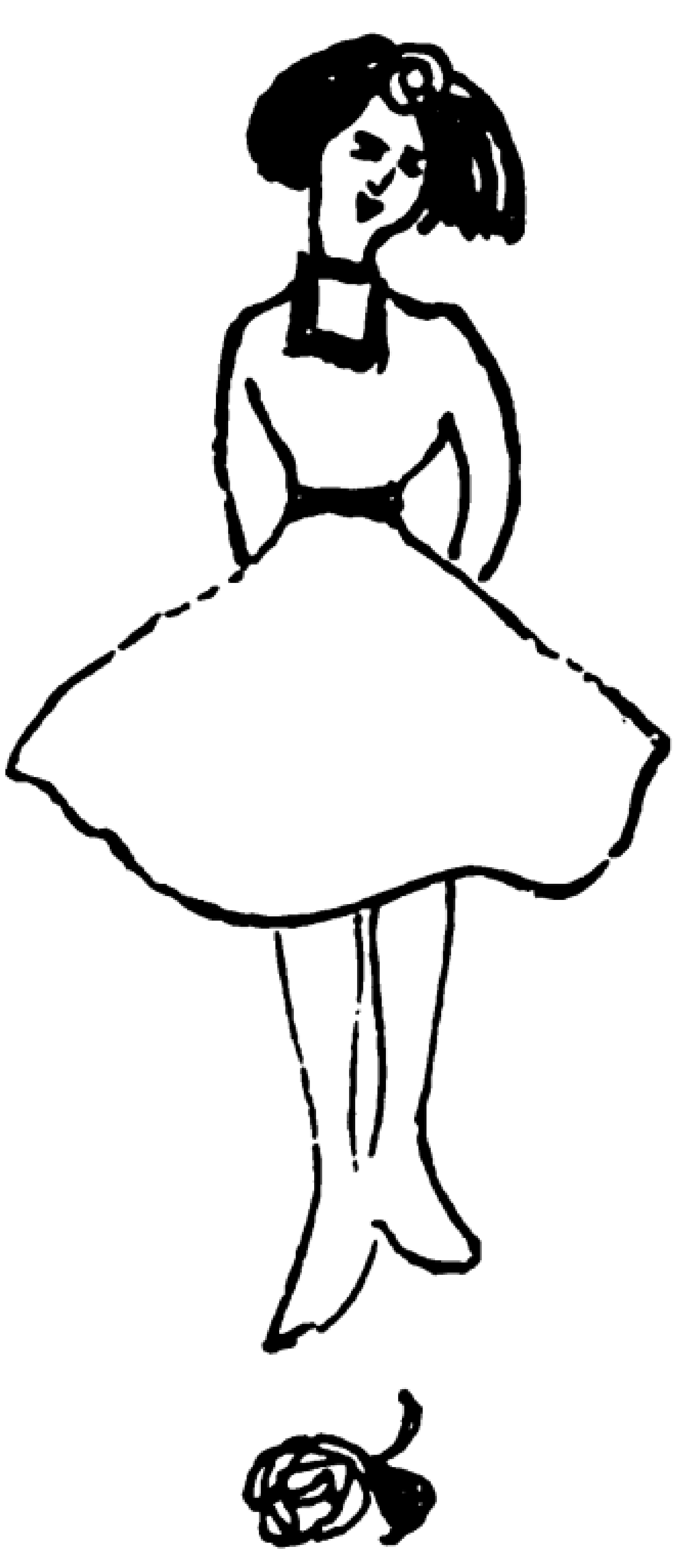
　丁度間に合つてのる事は乘りましたが、何しろもう之で今日の連絡船も最後ですから、恐ろしい樣に澤山の人はぎつしりつまつて身動も出來ない、櫻かざした微醉の靑年紳士の一群が、「チン〳〵、お聲がかゝらぬと止りません、」なんかつて、四邊の人を笑はしてる、船はもう棧橋に着いて了つた、すぐ停車場に行く、

　待つ間程なく廣島行の列車は黒煙を吐いて勇しくプラットホームに横たわつた、吾先にとあせるので此處でも又一さわぎ、やう〳〵父樣母樣と並んで腰をおろすともうがつかりして了ふ。

　やがて、笛の合圖と共に我乘る汽車は動き出した、恍惚窓によつて見送れば、入日をあびて花やかな宮島の山々、富士紫にくれゆく春の夕空に美しう浮び、紅や樺の雲が金色に緣どられて、ちぎれ〳〵にとび散つてゐる、果しなき碧綠の大海は、鏡の如くなぎて小波立たず、見渡す長汀人影もなく、沖には白帆三つ四つ靜かに水の上をはつて霞の奧に消えてゆく。

　眺る中にも空の色は刻一刻にうつろいて、いつしか銀色の星二つ三つ、淡く微にまたゝき初めた。

　黃昏はしつとり天地をこめて夢の如く煙つてゐる、さらば、やゝに遠ざかり行くなつかしき、宮島の山よ、海よ、夕の星よ、いざゝらば。





お留守日記

岩つゝじ

私は今出張先の夫に手紙を出さうと机の上に巻紙を擴げて、何と書かうかと考へてゐる。

午頃から降り出した雨に新緑の色の美しいこと、硝子戸越にじつと見てゐると何かなし物の思はれるやうな景色である。

お立ちになつてからもう小一週間になる。元氣なお姑様は音羽の方に謡の會があつて入らしつたし、此廣い家も庭も今私が一人で占領してゐるのだと思ふと、嬉しいよりも寂しい心細い、妙に恐ろしい想ひの襲つて來る、此心持を直ぐ手紙に書かうかと思つたが又止した。私は餘程變人で、お姑様には弱い〳〵女と思はれたく、常にさうした態度をとつてゐるが、夫の前には全く反對になつて現れる。もとより意識してゞはないのだがお留守になつてからと云ふもの氣味の悪い程頭腦がはつきりして、自分と云ふものゝ影や形が透通るやうによく見える。私は世間の若い奥様方のやうに明ても暮てもくつゝき合つて甘つたるい事を云ふのが嫌ひだ、お立ちの朝も「あつちへ行つたら毎日手紙出さうか」と仰つたのを「どうでも」と答へた。夫はニヤニヤ笑ひながら、「そつちからもくれる？」、「えゝ上ますわ氣が向いたら」と云つたからとて少しも夫をからかつてゐるのでも輕んじてゐるのでもない、それが私の性分――ちと贅澤な云ひ分だが趣味なのだからしかたがない、夫もそれを認めてゐて下さる。涙聲して「早く歸つて頂戴よ」などはどういふものか私には出來ない。けれども寂しい、二月やそこらナニ！と思つてはゐるけれど…………。

手紙は幾度も〳〵裂いた。ふだんはもうちつと書ける字なのだが筆が珍らしいせいか手が震へて見苦しいペンと持變へても見たが手紙はどうも日本紙へ墨で書流した方が感じがいゝやうに思はれる、まして旅なる夫へ若き妻からの消息だもの。

又ひとしきり庭に目を移す、楓もいゝが私は柏の若い葉の青白いのが何とはなしに懷かしい。「どうしてそんなに好きなの？」と夫に問はれた時、「だつて昔の戀人の紋が柏の葉だつたんですもの」、と云つたら「はゝ戀人は振つてゐる」と笑つてゐらしつた。柏の紋をつけてゐらしつたのは私が學校にゐた頃一番好きな先生無論女だつたのだが、どうかして夫の心を浪立たせて見たく、殊更に戀人などと仰山な語を用ゐて見たのだがあゝして、落付切つた樣子をされると私はまるで子供扱ひにされてゐるやうで不平で堪らない。

ふとお向うの家で蓄音器が始まる。此間から御主人が御病氣だと聞いてゐたが、雨のつれ〴〵にお始めになつたのだらう、まあ何と云ふ甲走つた聲、慌たゞしいメロデイだらう、藝者の唄らしい。

肌さはりの柔かい綺麗な着物と、廣い明るい座敷と酒や白粉や香水の匂ひと、あんな激しい音樂との中に若い友達同士で好な男の噂、好かぬお客の噂して暮すのが彼等のライフですものね、堅氣と稱する木綿着物や糠味噌の匂ひに生きてゐる我々がどんなに馬鹿に、どんなにあはれに見えるでせう。

長い手紙の中にはこんな文句も入れてしまつた。

蓄音器と雨の音との中を電車の齒が鐵を嚙んで東へ行く。(九日)

お留守と云ふ觀念が何をするにも附て廻つてしかたがない、何かしら心が慌しく追はれるやうで、それでゐて何にも物事が手につかない、お姑樣のお部屋でお喋りしてゐる間は例もの自分と少しも變らないが、部屋へ歸るに俄にしんとしてしまつて何かなし悲しくなつて來る、昨日も一昨日も此二三日夕方と云ふと必ずこんな心持に囚はれる、夫は今頃どうしてゐらつしやるだらう？、私の方からは長い〳〵手紙を二度あ上

たのに、あちらからのお返事はそれに比して甚だ短かつた。男は羨しい、家にゐれば家庭の人、外へ出れば社會の人と常に二つの方面を備へてゐるのだから。そして花々しい活動の興味に囚はれて私の事など忘れてゐらつしやるだらう――とこんな事を考へて暫く泣いて見た。それでもまだ足りなくて、自分が生れてから今日迄の記憶の中で少しでも悲しいと名のつく事を探し出して無理にも涙を搾り



出して見る。もつと〳〵聲を立てる程泣きたくて、本棚から飜譯物を二三冊引出して讀で見たが氣に入るやうな悲しい詞がない、そしてどういふものか集中力が長く續かない、眞に頭へ入るのはほんの二三行、あとは活字が目に映るだけで何を讀でゐるのやら、さつぱり解らない。夕暮の色は青葉の梢から硝子戸を通して、見てゐる紙の上にも漸々這ひ寄つて來る、電燈でもつけたら氣がはつきりしていゝかとも思ふが何だかそれ

も惜しい、此ぼんやりした夢のやうな心持を今少し續けたつて机の上へ頬杖ついてゐると、小間使が來て、「御飯でございます」と云ふ。折角歩きかけてゐた道を通せん坊されたやうで腹が立つた。

茶の間には瓦斯の光りが白々と漲つてお姑樣はもうテーブルの前に坐つてゐらつしやる。「どうした？」と仰る、「どうもしやしませんわ」と私は減らず口をきく。「嘘々、寂しくて〳〵堪りませんと顔に書てあるがな、時に今夜のお肴はえゝ上等や、奥さん却々お料理が巧い」と樂しさうにお酒を召上る、此お姑樣がなかつたら私は此二三日病人になつて寢てゐたかも知れない京都の堂上家へお小い時から御奉公遊したお姑樣は上品な中に飽迄さばけてゐらつしやる、ほんの世間見ずのお孃樣の、何一つ出來なかつた私はつひぞ一度怖い顔もなさらず、面白をかしく笑談の中にさま〳〵な教訓な與へられて、どうやらかうやらお料理も覺え、人樣と御交際も出來るやうになつたのは全くお姑樣のお蔭なのである、それに又私が持前の我儘を振まはすから餘所目には眞實の母子としか見えないとよく人が云ふ。

御飯が濟んでからお姑樣三味線を彈いて聞かして下すつた。いゝ心持になつてうつとりしてゐると「さあさあ茶音頭を合して見るから琴を彈きなさい」、「茶音頭忘れて了ひましたわ」と云ふと「そんなら玉川は？宇治めぐりは？」と仰つたれども皆忘れてしまつた、「しやうのない子やなあ、そないに忘れたら小石川（私の實家の）お母さんに申譯がないが」と大に油をとられる。

お姑樣は六十の御老年とは思へぬ程美しいお聲で、

世の中を何にたとへん飛鳥川、明日の淵は今日の瀨と……。

とお唄ひになる。地唄と云ふものはつく〲いゝものだと思ふ、如何にもデリケートでいゝ、長唄や常盤津とは品が違ふ。「そゝじんど」ど撥をお措きになるのを待つて、「お姑樣それなんですか？」と伺ふと「露の蝶」と仰る、「私にも少し三味線教へて下さいな。お

留守の中に習つといて驚かすんですから」と云ふと、「そんなら謡をやつたらえゝ謡なら何時でも敎へてやる」と仰るけれど謡はいやだ、お姑様のやうに切下げにした――女と云ふものを葬つてしまつた方がおやりになるには極く適當な上品な娯樂だけれど、まだ是からと云ふ若い女が四角に坐つて「是は平の宗盛にて候」などゝ唸つてゐる處を見ると餘りいゝ感じは起らない滑稽でいやだ、暫くお姑様



と議論してゐるうち、いつか世間話に移つて十一時迄喋つて了つた。（十二日）

實家へ行つたら弟と妹に植物園のお供を仰せつけられて、がつかり疲れてしまつた。「どうせお留守だから泊つていつたら」と母様仰つたが、やつぱり家が氣になつて車で歸つて來るとまだ四時少し過たばかり。「わしも無論泊りちやらうと思うてたと抑々家思ひの奥さんやなあ」、とお姑様に笑は

れた。

疲れた身體をお湯に入るとぐつたりと氣が遠くなるふと「此儘死んだらどうだらう」と思ふ、「死んでいゝではないか」と心の何處かで答へる、「汝でなくてはならないと云ふ事は一つもない、夫でも姑でも友達でも汝がゐなくなれば又汝と同じものを求めるだけの事さ」。私はやつきとなつて反抗した「私以上のものは澤山あるだらう、けれども私と同じものは私以外にない筈だ」と、そして此前の同窓會に大谷さんの云つた事を思ひ出した。ハイカラを通り越してパンカラに近い大前髪を振り立てながら「此中で死にたい若くは死でもいゝと思ふ方手をあげて御覧なさい」と叫んだ鋭い聲が、講堂の壁に反響して凄かつた、其餘韻の消える頃愚痴の問屋の山崎さんがおづ／＼手をあげた、それに續いて五六人の手があがつた、大谷さんは殆ど絶叫的に「さう云ふ方達は御自分の幸福を證明してゐらつしやる、私は石にかぶりついても生きやう／＼と努力してゐます、過去廿年の生涯に滿足と云ふものを一つも得なかつた私は、進んで其目的に達する迄、死は私にとつて何よりも恐ろしい敵です」とやつた。ヒヤ／＼と手を叩くものもあり「十八番パラドックス」と冷かすものもあり、私などは盛んに笑つた一人であつた。遠い／＼海や山を澤山越えた向うの方に死と云ふものが「有る」と云ふ事だけは知つてゐるが、それ以上に私は何にも考へた事はない、時々かうして氣まぐれにパノラマでも眺める氣で死に對ふ事はあるけれど。

あんないゝ天氣だつたのが夕方から又しと／＼と降り出した。夕飯後夫の處へ來た手紙二通に附箋してみよを連れてポスト迄行く。

雨は止んでゐた。夏にならうとする山の手の邸町には椎の花の甘い匂ひがたゞよつて、濡れた石橋の上に軒燈の灯が美しく流れてゐる。（十四日）



夏の自然美（梧水）

▲螢の行衛

◎空に月なく、薄曇りせる宵闇の夜、獨り靜かに野中の細流に添ひて佇立めば、懐しき底に深き悲みあるやうなる心地ぞせらる。

◎四顧茫平として薄暗き間に、唯見る淡白き一抹の細流は遙か彼方の上流より遙か彼方の下流へ流る。若し夫れ心耳を澄して其の小さき瀬の音を聽けば、或は鋭く、或は滑かに、その鋭きものは沈痛なる悲みを帶び、その滑かなるものは宛ら美人の嬌音の如し。我れ私かに惟ふ、此の茫平として夢の如き細流の何處にか、小さき〱美人の住める小宮殿あるにはあらざるかと。

◎折柄岸邊の叢中よりゆくりなくも一點の螢火斜めに空へ向ひて流れ、その明滅しつゝ空中の何處へか消え去りし時よ、夜は更に淡々として仄暗く、小川の細流更に媚ぶが如し。嗚呼我れは今幽冥界に彷徨へるにはあらずやと思ふ。

◎我れ好みて螢の一匹を捉へ、寢ぬる時必ずこれを室内に放つ。夜中夢覺めて眼を開けば、室内の一隅に青光あり、或は光り、或は消え、軈て流るゝ如く飛んで蚊幬の外を匝る。此



時、靜かに野中の細流を想ひ、その瀬音を想ひ更に螢の飛びいでし叢中を想へば、身は既に褥中に在るを忘れ、冷かなる夜氣の轉た襲ひ來るを覺えて、思はず襟を正す。

◎腐草化して螢と成るとは、幼稚なる古人の思案なり。茅根より化するものは普通の螢と成り、竹根より化するものは其形蛆の如き翅なき螢と成るなりとぞ。その餘りに幼稚なる思索の中に、一種求め難き無限の趣味あるを覺えずや。

◎古へ多くの螢を集めて紙袋に包み、その光にて書を讀みし學者ありしとぞ。手數の掛りたる次第なり。凡そ學問とは、斯くまでに骨の折れ、斯くまでに無趣味なるものにや。紙袋の光を藉りて一行一句を辿り讀むと、澤邊に飛び交ふ螢を眺めて靜かに思想を養ふと、果して其差幾干ぞや。彼の達磨大師が面壁九年のこともありけるに。

▲麥刈りし野邊

◎嘗ては朔風寒く吹き荒める灰色の畑に、青く僅かに萌芽みしこともありしが、嘗ては春の淡雪消え殘る間より青き莖を露はせしこともありしが、嘗ては天使と歌はるゝ雲雀に宿を貸せしこともありしが、今ぞ刈りて、打たれて、その稈は焚かるゝ時となりぬ。過ぐれば麥の一生も、まこと夢の如かりけり

◎夕陽落ち、暮色蒼然として迫りし時、遠く、近く、諸所〱

に薄紫の煙の棚曳くを見、更に紅のやうなる火光を望めば、總てのことは斯くて終りを告げたるかと、一種の寂しさ犇犇と胸に迫る。

◎野邊の辻に小さき馬頭觀音あり。麥畑新たに刈りつくされては、花なき木瓜の樹に護られつゝ、甚とゞ憐れに立たせ給ふ。

◎英國の湖畔詩人ウォルヅウォスが麥刈の少女を歌へる詩あり思ひ出せるまゝ――

野邊に麥刈る、少女を見よや。
　蘇國の態の、唯だわびしげに。
鋭鎌片手に、麥刈り暮らし。
　一歩あゆみて、又立ちどまり。
刈穗束ねて、節物哀れに、
　鄙歌一曲、低う謠へば、
その聲谷々に、みち〴〵ぬ。
聞く亞刺比亞の、沙漠橫斷り、
　駱駝牽きゆく、旅人疲れて、
少時憩ふ、綠島の木がくれ、
　其處に飛びかふ、鶯兒よりも、
五月の空に、夕月高う。



　血に啼くあはれ、杜鵑だにも、
少女の歌には、などや及ばむ。
少女の歌は、何に謠ふやらむ。
　往時猛き心の、益荒夫どもが、
遠き戰場に、征きて還らで、
　果敢なき露と、消えにし歌か。
然さらば人生、行路の艱難。
　落寞慘澹の、限りを盡し、..
斃れし者を、弔ふ歌か。
歌の意は、縱し得わかずも、
　少女が腕の、鋭鎌の陰に、
絲繰るごとく、限りも知らず、
　幽かに細う、絶え〴〵聞えぬ。
彼方の丘へと、野邊をし去れど、
　胸にまつはる、悲哀の一曲、
うつゝに其れと、早や聲も無きに。



最上醤油
元祖
上
開業貳百六拾七年
宮内省御用達
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領
釀造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一番　振替口座五〇二一番

(その一)

お伽二十週年紀念出版

八月卅日限り ★特價提供★ 特價金一圓五十錢 送料十二錢

巖谷小波先生著 和洋二十四大家口繪

サヽナミオトギ百話

洋裝四六判特製 極美本・書入り
紙數約一千頁
石版口繪彩色刷 廿四枚木版色刷 挿畫約三十五枚
正價一圓八十錢 郵税十二錢

巖谷小波先生黃金丸の第一聲に明治文壇にお伽噺の新方面を開拓せられし以來、星霜こゝに滿二十年、編著數千篇、天下の兒童歡呼して之を迎ふ、豈又旺んならずとせんや恰も今二十週年を記念せんが爲に、佳作百篇撰び集めて我お伽百話は成れり、裝釘善美、內容豐富、お伽界空前の大著は出でたり、少年少女は須く讀むべく、大人君子又讀むべし、蓋し苟もお伽噺を語り、小波先生を知るもの、之を備へずして可ならんや。

附錄 ▽お伽二十年史……木村小舟執筆

發兌元 東京日本橋本町 博文館

女(るの二)

（ろの三）

双楓書樓同人編

名流百道樂

洋裝四六判
總クロース上製
紙數五百餘頁
正價九十錢
郵税八錢

東京本町
博文館
振替東京二四〇番

目次


少女世界 第六巻第拾號 増刊
少女世界
夏木立
▲『夏木立』は少女世界の夏の増刊であります。夏休み中の少女の讀みものとして、すが〳〵しい裝ひを凝らし、内容は趣味と實益とに滿たされてあります。
▲『夏木立』の表紙は、太田三郎助氏の彩筆になつた麗はしい少女。また口繪には『朝』と題する無邪氣な少女の繪を、三色版にしたものであります。
▲巖谷先生の少女對話『にせ幽靈』は、巻頭第一の讀みもの。次に谷學監の『富士登山』の實話、中村文學士の少女訓話を揭げます。
▲沼田笠峰の『少女雜感』は、實際の見聞を書いたもの。その他、少女小說、旅行記、海濱の印象、學校だより、入學試驗問題など、材料は頗る豐富であります
▲また讀者の文章、和歌、俳句、考へ物解答なども揭げられますから、少女が綠陰で繙くには、最も適したものと信じます。
菊判 一二八頁 口繪石版 寫眞版澤山
定價十錢 郵稅壹錢
七月十日發行
東京 本町 博文館

女(ろの六)

文藝倶樂部 第十七卷 第十號 増刊

講談落語 滑稽旅の友

演者氏名

柳家小さん
五明樓玉輔
猫遊軒伯知
揚名舍桃李
神田伯山
三遊亭圓朝
三升亭小勝
大島伯鶴
三遊亭圓右
小金井蘆洲
橘家圓藏
蓁々齋桃葉
一龍齋貞山
三遊亭圓喬
眞龍齋貞水

以上



『旅は憂いもの』とは開けぬ世の昔の事、まこと百年の壽を保たん靈藥は、暢氣旅に如かざるべし、しかも滞留十餘日、時に雨の日の徒然を慰むるは何、密かに美形を侍らせて、飛んだ艶種を蒔き玉はんよりは、この『旅の友』一部を携へ玉へところぞ。

七月十五日發行

菊判紙數三百廿頁
口繪極彩色錦繪
及艶麗なる美人の
寫眞版十數葉挿入

正價二十五錢
郵税二錢五厘

東京 本町 博文館

女(るの七)

詠草家の好資料

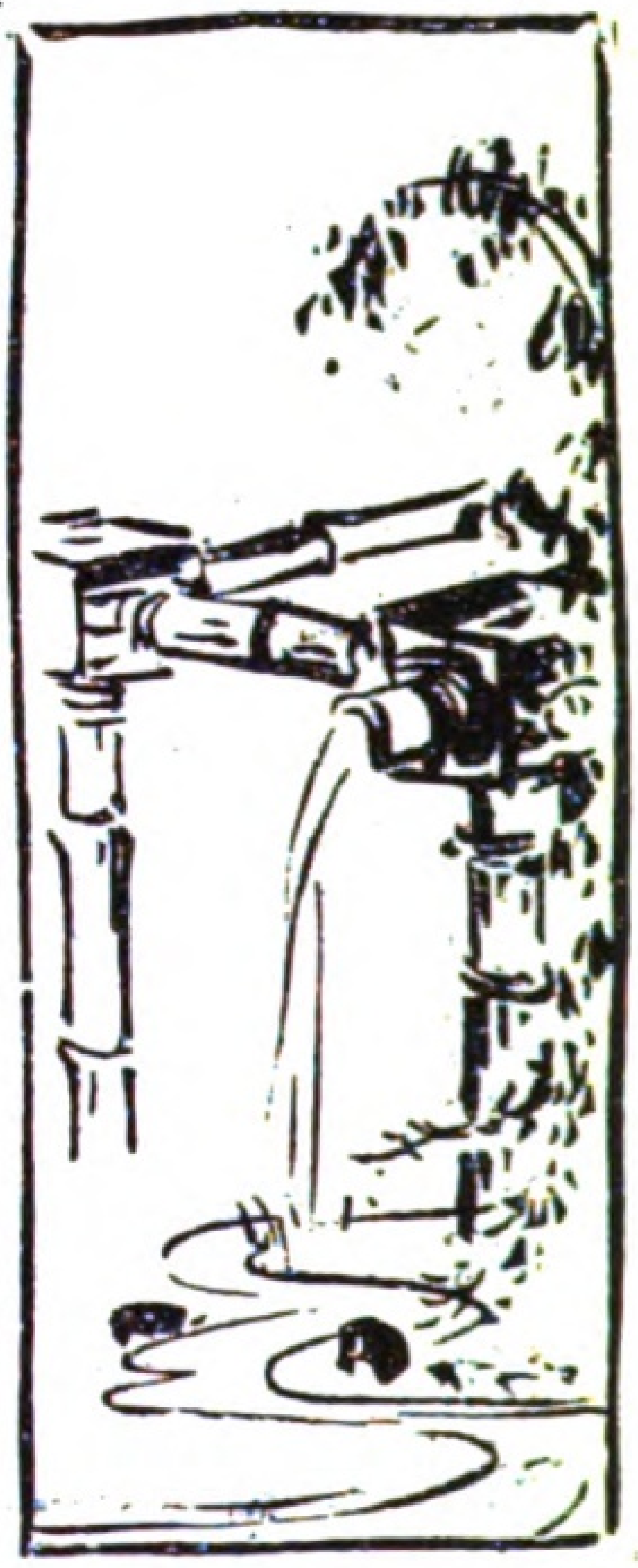
服部躬治先生選

春夏秋冬名歌選

四六判洋装
全一冊
價壹圓貳拾錢
遞送料拾貳錢

活動の巷にこれを讀まば、君が胸に寧日あらむ。 静默の座にこれを讀まば、君が心に適處あるべし。 春夏秋冬君の前に無限の清興醇味を具へて、こゝに名歌選一巻あり。收むる所短歌二千首、上下一千有餘年の間に亘つて、博捜精選悉く金玉。 且つ装幀の高雅を見よ、内包外觀秀麗を極め、全幅に一毫の塵氣あらず。

東京日本橋區通三丁目
成美堂書店
振替東京一七・一九
電話本局二七七七



我家の精神生活

野末庵子

▲夏は來ぬ！、夏は來ぬ！。
空も澄めり、水も清し、萬象みどりにけぶりてさながら人の腸をも洗うに似たらずや、何となう心ときめく此頃の朝夕よ、窓に凭れば若楓の風心地やう頸をはらうて机上のノートはたく／＼とひるがへすも涼し。
▲「とり分けて清き心に夏三月」
とは何某法師の詠なり。十二ヶ月いづれの日もさあるべきは申すまでもなけれど、取り分け夏の三月が程こそげに清き心もて過したきものなれ。
心爽ならねば、避暑などゝいかに贅を盡して海行くも暑かるべし、山行くも苦しかるべし、吾れに曇らぬ心しあらば日光も大磯も何羨ましからん、軒かたぶきし伏屋の庭に、衣洗う袂にも涼風は自ら心のまゝならんものを。
▲灸と云ふものすゑつくればすゑたくて／＼堪らず少しく心地惡しき度に蓬の香を嗅がねば居られぬ程なりと云ふ、人の習慣程恐ろしきものはなし。
殊に三ッ四ッの小兒には、善きにまれ惡しきにまれくせのつき易きものなれば、母たる人々はよく／＼心すべきなり、御身等が一言一行みな頑是なき子供の腦裡に刻まれて、生涯の幸不幸の源ともなりぬべし。
先日ある婦人盛裝して子供を伴ひ來り、つゝましやかに團扇使ひ居たるに、子供はいきなり衣ぬぎすてゝ裸體にてとび廻りながら、
「母ちやん何故帶とかないの」
吾れは婦人の顏見る勇氣もなかりき。子供は正直なり、その平常の思ひやられて氣の毒にも淺猿しう感じぬ。
▲我が子のため善き話の種を蓄うるは母親の慈悲な

り、さるを子供に「母ちゃん、お話、お話」とせがまれて窮せざる母幾人ありや。

玩具やお菓子のみにては子供はなか〳〵滿足に育ち難し、針もつかたはら種々語り聞かせたる話が小さき頭に、知ずら識らず善感化を與へて、高き人格をつくる助けとなることも多かるべし。

護謨輪の車やお召の着物や、リング、ブローチ、金鎖、山程ありとも、我が子の爲めに何かせん。眞に母の持つべきものは子供に相應しき敎訓的の話の種にぞある。



▲今宵は陰暦の十五夜。丸き月彼方の山の端に、しのぼる灯消して端居すれば、青葉をもるゝ月光水の如くに我が全身をひたす妹は聲ひくう夏の月をうたへり。あゝよき今宵、樂聖ベエトーヴエンが盲目の少女を憐みて、よしや盲ひたる眼には見えずともせめて偲べと即座に「月光」の美しき曲を編み出せしときく良夜の樣もかくや有りけむ、魂ふらふらとはなれて月の宮居に遊べる心地。

端居して隈なき
　月の影みれば
心も高く澄み
　渡るかな

▲此の邊の人達が餅や團子など供へて、お月待ちをするはまことに床しき事なり、星まつりはなほ〳〵う

れしかゝる罪なき神秘めきたる迷信は、いつの世までも傳へたく覺ゆ

もろ〳〵の理窟云ひて、月や星に手も合されぬ人は氣の毒なり。むづかしき理は天文學者などの研究にまかせんのみ、並べての人に何の要かある。

「あれは人魂ではありません、流星です」

と力みて良人をやりこめし子爵夫人の學者ぶりを、いたくも惡む吾れは一人なり。

▲某婦人「貴女は雜誌の種取りをなさるんですつてねえ、まあよく、私にもちと敎へて下さいな」

吾れは別に腹もたゝず。かゝる女に眞面目に、侮辱など〻食つてかゝるは野暮なるべし。

自分「金の草鞋で種ひろいに出掛けますのよ」

▲事毎に人の心をよみ、顏色を窺うは卑劣なるわざにはあれど、さりとて場合も時も、對手の快不快をもかへりみず、喋るが如きは實に仕末に終へぬしろものなり。

▲近所に住む小學敎員の妻君、東京は某女學校の出身とやら、頗るの美婦人なるが上に、又その勢力偉大なるに呆るゝ次第なり。

「私は生れが生れですから、そんな事はどうも慣れませんで……」

と澄し込んで、炊事や拭掃除はもとより、外出の折は下駄そろへるまで良人の君の手を役し玉ふとかや。そも如何なる御身分の果てにや在すらん、その昔も偲ばれそゞろ御いたわしき心地もすなる。

さりながらこゝに目出度きは良人の君、出でゝは友逹のたれかれに我が妻の容色や才學を鼻高々と誇るめり。

あはれこれをしも男の虚榮心とやら申すなるべきか。

▲酒のみて、否呑れて何のかのとぐづる男は憎したとへ我が兄弟なりとも打ちたゝき度き心地すれど、醉うてますます機嫌よくうたひつ舞ひつする男は可愛きものなり、我れに金の餘裕ありて酒澤山に求め、思ふがまゝに彼等を醉はせて、其の兒童のやうに戯るゝ樣を眺め暮さばいかに面白かるらんなど思ひ見つ。

▲或る人は云ふ。「驕る平家は久しからず。然れども驕らざる源氏も亦久しからず。同じく必滅必衰ならんには、源氏的の久しからざらむよりも平家的の久しからざらむことぞ吾が望みなる。」と、人々何れを選び給ふやきかまほし。



▲「私など多忙しくつて氣樂に歌なんか作つて居られませんのよ。そして第一厭ですは、亭主を尻に敷島の道なんて……」とは歌作り得ぬ婦人の云草なり、敢果なき負惜みかな、昔は知らず今の世は、我が見渡すところ、歌一つも得詠まで、一日の幾時かを他人の棚下しなどに費やす暇のある女原にこそ、亭主を腰かけ代用にする者は多けれ。さても不思議の現象にあらずや。

▲潮風子の歌は時流にそまず、形式に捉へられず、眞の潮風式なるところなか／＼に味あり。

頭だに胴離れ
ずば片時も
ものなさずして
あられぬ吾れよ

かけおちの男は
病みて女たゞ
男の兄の前になくかな

とは振ひもふるつたりな、豐太閤が

地獄から星の親父がぬつと出て
　火事の卵もいらぬ今宵ぞ
麥こがし口いつぱいに頬張れば
　思ふやうには云はれざりけり

などの名吟に較べて、いづれおとらぬ花紅葉、思ひ出でゝは妹と二人、苦しきまでに笑ひこける事の度々なるよ。

▲從兄「〇〇へ行つて幾日居て來た？」
自分「十五日居ましたの、思つたより長宿ゑして了つて……」
從兄「ホウ、十五日かい、一月の半分かい、オイ一年の二十四分の一ばかり居たつて何する暇もなかつたらう、フン女つてなか／＼お氣樂でないもんさ」
さても／＼惡う皮肉つたり。いく千代かけてうらみこそすれ。

▲夏は衣服身のまはりのもの、すべて薄色なるがよし、こはたゞに思ひやうのみなるかは知らねど、あくどき色は何となう暑苦しき心地せらる。

向うの道を白地の浴衣に水色リボンつけたる少女達が麥笛吹きつゝ行く姿のいかにも涼しげなるを見て、いよ／＼この感を深うす。

▲昨日今日朝露ことにしげくして、大空清う晴れ渡る、窓越に見やる庭の深みどり、さや／＼／＼と勝どきの葉づれ勇ましき哉、青葉は青年の色なり、夏は活動の季節なり。

あはれ、血汐沸き立つ若人達よ、希望の光きらめく時は來にけり、いや勵み給へよや、定まる業を我が行くみちを、男も女も、巷にあるも、野にあるも。





似非物語

野菊

○若き女、女學校の業卒へて、片田舍なるふる里に歸りけり。その里に、すこし心たらぬ賤の女住みけり。この若き女を知るよしのありて、ことほぎの心なるべし、草の餅こちたく搗きまろめてもてきたりけり。女うれしくて其重箱の上に

　ふる里の春つきこめし蓬餅
　　人のなさけにそへてうれしき

となんかいつけてやりける。賤の女、歌の心はえしらねども、ふかく心に感じおもひけり、やがて灌佛會の日に、女の家より、うむどんといふもの贈りこされければ、賤の女、何をがなと打案じつゝ、ふと、柱にはられたる

　千早振うつき八日は吉日よ
　　神さげ蟲をせいばいぞする

といふを見出でゝ、これなんめりと、ほくそ笑みつゝおろ〳〵かいつけて返しにけり。いと〳〵振ひたるふる舞なりしが。罪をいはば、若き女になんあるべかり……。

○むかし男ありけり。都より美しき妻を迎へてけり。その妻、ヴアイオリンといふ樂器を好みてつねに奏でけり。ある時は、鋸の目なんどたつるやうなる音もして、いと妙なりと、みな人耳をそばたてけり。さて夫なる男のよめる

　我妻のそれかあらぬか五月闇
　　いづれあやめとひきぞわづらふ

と、うめきいでければ、妻うち腹たちて、弓を折りてすてにけり。ゆるぎいでつる歯のやう〳〵据りたるよなんど、しりう言するもありきとぞ。

○新らしき婦人といふがありけり。文學を好みて多くの友をもてりけり。異性の友もありけり。ひとりのみにもあらざりけらし。日記、隨筆などにもほこりかにしるしてけり。或人あさましうおもひて、其かへしの文の末に、さる人のよめる

やはゝだの清きぬくみにふれもせで
淋しからずや道をとく君

かゝる歌、知りたまふやいかに、となんかきたりける。あなや、世の中恐ろしうなりにけりなど、舌の根ふるはする君ありやなしや。

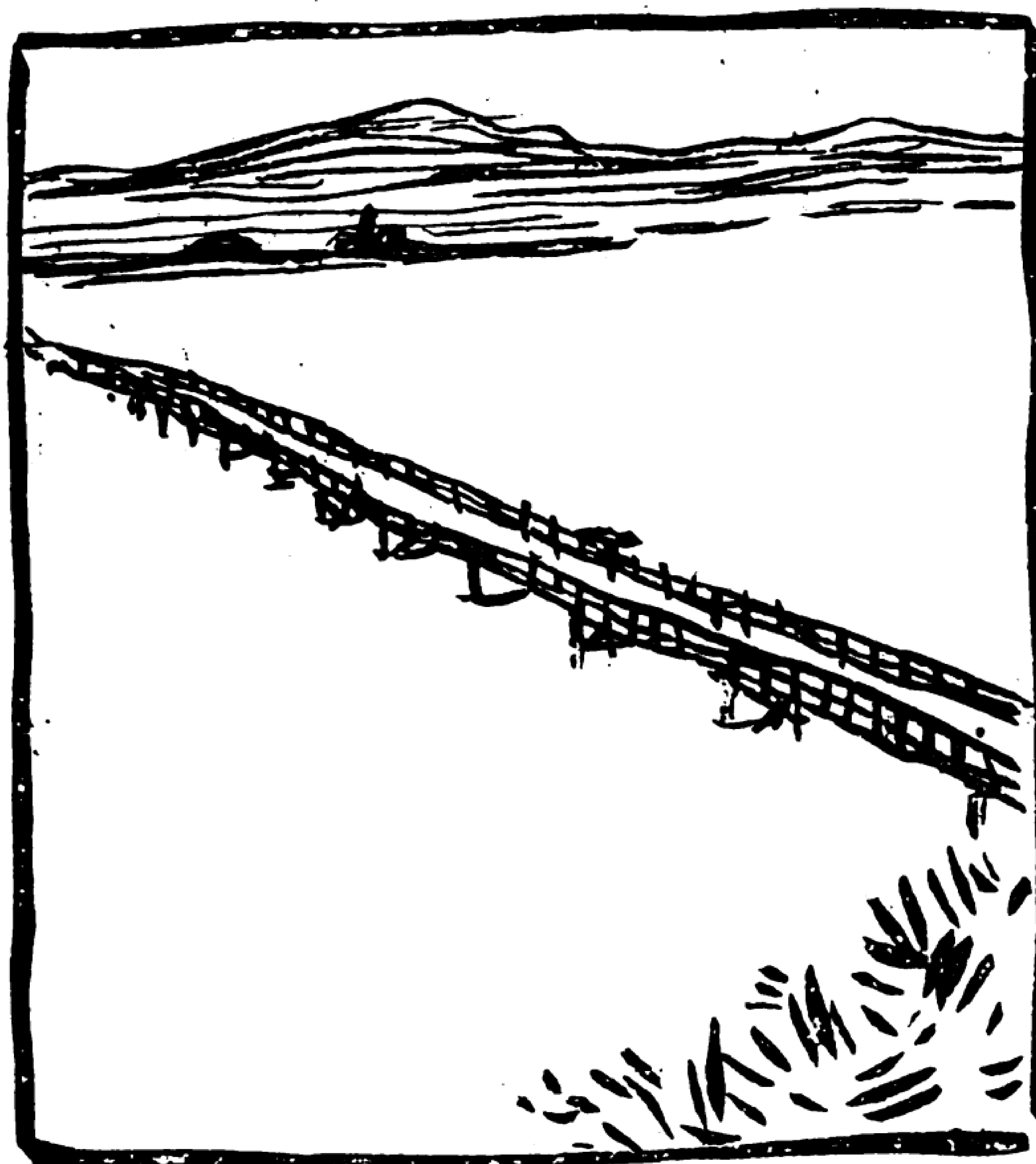


○いつの頃にか、不良學生といふものありけり。若くあでなる孃たち、たぶらかさばやと、其心の友だちゐてまどゐありきけり。常は、いとなまめかしきかぎりをかきつらねたるふみを懐にしてけり。その頃、若き女はらからの美しきがありけり。ものよりのかへるさに、ふと袖の裡にその文を見いでゝ、かたみにおどろきあへりけり。その文は、すみれ色のいとなまめいたる紙の匂ひもえならぬに、憧がるゝ心の數々をつくして

わが思ひ君がやさしきおん胸の
小琴にふればよき音つたへよ

となんありける。てはむげにいやしうて、ペンといふものにて走りかきたる、鹿尾菜流とや申すべからむ。かうやうなるおとづれごとに、心ときめきて、いなんとぞ思ふ花の君、ありやなしやはしらず。ふたりが得たる文、名も文字も異りたれど、歌ばかりは同じかりけるもぞかしや。

○田舍住の女ありけり。わくらはに、訪ひきつる都の友に賤が早苗とるさまを見せけり。雨ふりやみしさつきの田面。そほつる裳裾たかくかゝげて濃き紅の襷艶なる早少女の風情、袖にもせまほしければ、歌好む友は何をか案ずらむ、首傾けて、しばし



をそこに佇む折しも、むくつけき賤の男、音たかうならしでけり。苗代も打どよめきてのゝしりさわぎにけり。都の女とりあへず

まづ音もたかくな
らしつるかな、

と笑へば、主の女も

賤の男は米のなる
木を植うるとて

など、ざればみ交しける。そのむくつけ男は、いささか才氣やありけむ

米のなる木もなら
さにやならぬ
わしがならすもこ
りや國の爲

と聲面白う唄ひければ、都人のうたぶくろも、つぶれてやみにきとぞ。

○賤の女、いさゝか文學を好みてけり。それを本意は

しらず、友としむすばむと、志深う文通はする君の
ありけり。その君は今の世にときめく人の北の方にお
はして、美人のほまれ高かりけり。文の林ふかうわけ
きはめて、外國のことにもくらからず、歌もたくみに
水莖のあと、はた匂ふばかりになんありける。賤の女
が文の友にはおふけなう、まばゆききはの君なれば、
末おぼつかなうは思ひつゝも、文の通ひを重ねてけり
さて如月なかば、いさゝか家の事いできて、しばし、
おとづれの絶えけるに、あてなる君よりかくなん

　音にたてぬしゝまの森の山彥は
　　いかなるこゑを下にこたふる

賤の女、かへし

　音もたてぬしゝまのおもひしげしとよ
　　したにこたへむもりの山彥

想はながう筆の細きをいかにせむなどかき添へたり。
これやがて名殘りなりけり。その後はふつに、文も通
はずなんなりにける。色こき花と見しかどもなど、思
し、くやみおはすらんとは思ふものから、なほ、かの
み袖のかをり忘れがたうて

　君が袖染むべくあまりうすかりし
　　うすむらさきの野の花われは

となん、浮き契りをかこちなきける。其後は知らず。
○むかし男、友なる學士の、いみじき才學ある新妻む
かへつときゝて見にゆきけり。これかれ志ある友どち
打つれていにけり。學士いたくよろこびて洋食といふ
ものを調理させて食はせけり。もとより新妻の手に
なれるなるべし、うるはしき姿に、白き胸あてなどし
て、忙しげにたち居するさま、いとかひ〳〵しうぞ見
えにける。田舍人は名も得しらぬものかず〳〵いでけ
り。雪駄の革のやうなるもありけらし。やがてライス
カレイといふものいでけり。男、目なれつる米の飯の
盛られたるがうれしくて、大口につとくひけり。いか
にやいかに、あと叫ばむ聲もいでぬばかりに、いとか
らかりけるよ。男眉根よせ太息つきつゝ

　から衣きみが新づま見べくきて
　　かくまでからき目にあはむとは

橘の意匠


葉付立花
立花てふ
三ツ葉立花
うら立花
立花枝丸
立花桐
向ひ立花
むかい立花
たち花
かわりふせん立花
立花
うら立花
枝立花
眞向立花
利久立花
うらふり立花
立花ひし
龜甲立花



女權國の反面

智利の都會の紳士の家庭へ行て見ると、主人は大抵七時半乃至八時に目を覺して、大會社の主宰者重役、社員、官吏等は、九時事務所が始まるから身仕度をして茶を飲で八時四五十分迄には宅を出る。然るに細君は主人が會社へ行かうが、金儲けに行かうが、左様な事には一向頓着なく、主人は下婢の進むる茶を寢所の中に居て飲む。そして飲んでしまへば又寢る少なくとも十一時か十一時半迄は大丈夫寢臺の中に寢ころんで居る。さて目を覺ますと下女や小僧を叱り飛して贅澤の仕放題、そして午後一時何十分と云ふ頃朝飯をたべる。次の御飯は午後七時それから例の盛裝で公園へ主人と散歩に出懸る。歸て着物を着替へると、今度は芝居へ出懸る其他は友達を寄せて茶を飲み暮す位のもので、何等御仕事のなさゝうに見える。只だ如何にして主人の儲けて來る處のお錢を遣へば好いかと云ふことが問題である。時々「ダイヤ」の指輪や高價の帽子をねだつて居れば仕事は濟む。それを買つてやられないものは妻君を娶る資格のなきものと相場がチヤントきまつて居る。

當國では法律施行の寛大なる事驚く許りで、法律は有つてなきが如く、警官は居ても赤帽同然で有る。從つて泥棒などは容易に捕まらない。ゆゑに各人銘々が守る事は甚だ嚴重である。店持の戸締を一つ見ても、恐ろしく大きい、然も專賣特許の錠前を二ツも三ツも卸してある。詰り何事も自由と云ふ大精神から割出されて、物を盗む奴は成程惡いが、盗られる様な不用心な事をして置くものも惡いと云ふのが法律の精神らしい。しかしそれでも甘く治て行く處を見ると、自ら愼む紳士が多いものと見える。

婦人と進化説

今日の進歩せる教育を受けた新婦人は、却て人種を墮落に導いて居りはすまいか、競技を好み數理的の頭腦を持つた女よりも、お粧に浮身を窶し舞や踊が巧みで窃と若い男に秋波を寄する舊式の婦人が却て良妻賢母となりはすまいか、女子に高等なる教育を授ける結果は、男子の領分に入り込む様になり、茲に新しい婦人が現はれて來て、渠等は智力から云つても社交上の位地から云つても進歩せる婦人と稱せられて居る、併し果して渠等は舊式の婦人に比して一層強壯な活氣のある人種を造るに適して居るだらうか、と云ふ問題を提げて英國の理學博士レスリー氏は自ら之に解答を與へて居る。

新しい婦人は生活の範圍も思想の範圍も廣いが、之と相比例して一層立派な母になるだらうか。例せば渠等の數學に關する智識や、競技に對する趣味が、果して母の義務を盡すに適した婦人を造るものだらうか。寧ろ自然にして怜悧な、そして衣裳や頭の道具に趣味を持つた床し

い舊式の女の方が好くはあるまいか。大學校の講堂で博士や學士に六ケしい智識を詰め込まれるよりも、家庭にあつて日々家事に忙しく、狹い交友間で世間の事情を學ぶ位が、女子本來の智能感情を發達せしむる點に於て勝つては居ないだらうか。不思議に高等なる智識を有する學者先生達まで、男と云ふ男は大抵餘り教育の高からぬ舊式の女を好む樣である。之に依つて見ると妻としても母としても舊式の女が勝れて居ることを自然に證明して居るのではあるまいか。

大抵の婦人は力と權勢を持つた男らしい男を好み、家庭の主人としては申分が無くとも猫の樣な温和しい男を嫌ふ傾がある。之に反して男子は智力や體力の發達した近世の女よりも、却て舊式の女らしい女を好む樣である。畢竟同情とか柔和とか云ふ受動的の性格を持ち、智識よりも寧ろ感情的の女の方が家庭の主婦として母たり妻たる役目を完全に果すからであらう。

要するに婦人の目から見た「男らしい」男と、男子の目で見た「女らしい」女との結合が、最も進化の法則に適して居るのであらう。新婦人が智德體の三點に於て如何に發達して居ても、善良なる母となることが出來なかつたら、人種の進化發達の上に何等の價値も無いので、近頃の女子教育は總ての點に於て男子と競爭することを以て理想として居る樣だが、只自己の向上發達をのみ許つて、母親に必要なる犧牲の精神が無かつたならば、其國民は將來最も悲しむべき運命に出逢はなければなるまい。

教育ある婦人で二人若くは三人以上の子女を持つものは稀であるが、自分の研究に依ると第三兒から第六兒までが身體も强壯智力も勝れて居るのであるから、畢竟教育ある婦人は好い兒は生まないことになる。即ち人種の進化發達を助ける優等の人間は、全く教育のない下中等社會から造られて居ることになる。であるから若し國民の將來を思へば、獨立獨歩を以て誇つて居る今日の教育ある娘達は、須らく三省して一意良妻となることを心がければなるまい。只自己の發達を計らんが爲めに人種の發達を犧牲とすることは、後世子孫に對して一種の罪惡ではあるまいか。云々」

子供に不爲な行ひ

我々は子供の爲を思ふて居りながら不爲をして居る事が多い。子供を他人の家へ全く托さないまでも、保姆や召使の手に多く渡して置いて、自分は内を外にして居る人も少くない。自分の慰みの爲には子供を犧牲に供するもある。假令ば寄席や芝居へ子供を連れて往つて、子供の爲には何にが何にやら面白くも可笑しくも利益にもならない處で半日も一日も束縛して了う。自分の虛榮心を滿足させる爲に子供を見せびらかしにする。道具にする。雛祭、七五三の祝講中などの稚兒などの場合に飾つて彼方此方と擔ぎ廻はる。窮屈な着物など被てソンナ目に遇ふよりは子供は自由に遊びたい、又其れが子供の爲になるものを、母親は委細お構なしに到る處に自己の虛榮心を漁つて居る。或は赤ン坊にまで藝を無理に教へ込んでおつむテンテンが出來るの、アワワが出來ますの、やれお辭

供が出來るのと言つて興がつて居る。學校へ往くやうになれば、勿論學業を奬勵しなければならぬけれ共、世には子供の成績を自慢にしやうとて其の子供の腦力をも能く辨へずに無暗と攻め付ける人がある。或處に姉妹二人のうち、姉は學校の成績が良く何時も優等であつた、之に引換へ妹の方は宜しくない。で其の母は是非姉妹とも優等にして見度いと思つて姉さんのやうに爲れと言つて攻め立てた。妹は癇の強い性質で、忌々し紛れに非常に勉强したので、成績が好くなつた。然し夫は一時の事で、十三歳の時には全く馬鹿になつた。即ち腦の力が衰へて了つたのである。學校で色々調査した處が、決して性來の馬鹿ではない。餘り母親が無理强したからであると判つて、其家へ警告を與へた事がある。

世には又子供を叱るより外に手段を持たぬ人が多い。彼處の奥さんは眞實にお心懸けが宜い、ちやん／＼と子供をお叱りなさると云つて却つて譽める。然し平生能く注意をして子供を育てゝ居る人には、叱りに用ゆる言葉を見出す事が出來ないのである。殊に多くの場合を見ると叱るは眞に叱るのではなくて、怒るのである。怒ると叱るとは非常な相違がある。彼の方は能く子供を叱つて躾けを爲さるといふのは、言ひ換へれば、彼の方は能く怒つて子供を叱り付けなさるになつて仕舞ふ。怒つて叱かるのは眞に子供を叱かるのでなく、只自分の業腹を癒やすに過ぎない。自分の癇癪で怒鳴つて何んで夫が眞に子供の爲めになるべき。甚だしきに至つては體罰を加へる。即ち打つ。つねる人もある。馬や牛ならば或は時としては一手段であるかも知れぬが、之を子供に加へたとて決して爲になるものではない。一時の利目があつても子供の靜かな柔しい心は失せて仕舞ふ。琴の糸が切れて美妙な音は出なくなる。眞に子供の行末を思ふならば、決して爲すべき事でない。

子供の惡戯とは能く云ふ事である。惡戯とは讀んで字の如く惡い戯れである。然し夫れは大人が附けた名で、大人から見て惡いとしたところで、子供の方では惡いも何もないのである。所謂天眞爛漫たる心の儘に遣つて居る事で夫を惡戯といふのは、大人自身の手數や面倒や邪魔から見た事で、之を無暗と叱り飛す大人の方が却つて眞實の惡戯者かも知れない。斯かる結果は子供の活潑なる心の働きを止めて、將來の發達を害する事が甚しい。けれども子供を甘やかして育てるのも良くない。眞に子供の爲を思ふならば、愛に過ぎる即ち溺れるのは愼むべき事である。ガミ／＼叱り飛ばす家庭の殺風景なると共に、子供天下の家庭も餘り見えの好いものでない。強い意思の養はれる時がなく我儘放題の果ては謙遜や讓歩の徳を缺くやうになり、社會共同生活の要義を沒却するやうになる。見渡すところ多くの家庭には嚴に過ぎたる父あり、寛に過ぎたる母ありで、昔の川柳にも「母親はあとから釘を拔いて行く」とある（倉橋惣三氏）

朝鮮婦人の境遇

朝鮮では男女七歳にて席を同うせぬと云ふ東洋的昔風の習慣が今に殘つて居るので、女子の

妙齡に達する頃には、內房と云ふ女部屋に押籠られ、蟄居閉門外見頗る窮屈がり相な生活を爲し、容易に外出する事すら叶はないのであるのみならず、內房には居を同じくして居る男を除き、如何に昵懇の間柄でも亦た親類の男でも斷じて出入する事は出來ぬ掟になつてゐる。若し假に不心得な男があつて、此禁を破る事があると、大なる郷黨の擯斥と制裁とを受ければならぬ。斯樣に表面から觀察すれば眞に男女の間が嚴格であつて、兩者の間に溝渠が設けられ、相接近するとの如何にも得易からぬ樣に見ゆるが、其處が所謂、遠い樣でも近いが男女の中とでも云ふのか、事實は意外も意外、心情の腐敗、行爲の醜陋、あらゆる墮落は裏面に伏在して到底之を筆にするに忍びないのである。

上流社會に在つては比較的男女の品行の見るに足るべきものがないでもないが、由來朝鮮人は高尙なる精神上の快樂を求むる事を知らず、只だ之を肉體上に求むる結果、自然不倫なる行爲が演ぜられ、姦通沙汰の如きは裁判所の事件に絕間なしと云ふ狀態である。而かも其手段は頗る巧妙であつて、男子が婦人用の輿に乘り內房に忍び込みて、茲に忌むべき罪を犯さるゝのである。上流既に斯くの如し、中流以下に至りては固より云ふまでもない事である。要するに、朝鮮婦人の蟄居的生活は最初孔孟の敎に原因したものであるが、今日では單に罪惡を防ぐ一手段たるに外ならぬ觀がある。

朝鮮の婦人には日本の樣に松子とか竹子梅子とか云ふ姓名はない。只だ何々令孃とか、何々夫人とか云ふ丈けで、一般に何々召史と稱びなされて居る。而して極く上流の令孃は前記の如く內房に蟄居して無爲に暮すのであるが、日本の樣に諸禮式とか習字などは絕對にさせぬ。何故文字等を敎へぬかと云ふのに、文字を知れば男の處に文通をするからと妙な處に心配しての此仕儀だとは呆るゝの外はない。故に如何に朝鮮の令孃が智識を缺き、活動力のない、窮屈な室咲の花に過ぎぬと云ふ事が判る。然し開け行く世には何時までも斯くあるべきでない。之等令孃の爲めに既に女學校を設けられたれば開明の域に進むも遠くはあるまい。

男女が結婚せんとする場合は、男の方で女の仕度萬端の入費を辨じなければならぬので、却々大變である。故に貧乏人ほど結婚する事が六つかしい。又た從つて其期が遲い。先づ双方の父母媒夫を選んで婚約を爲さしめ、合意成立するに及び日官と稱する卜者の占に依りて結婚日を確め、新夫の家から納幣を贈るを例とする。斯くて婚姻の場所は新婦の邸內で幔幕を張廻はし、屛風を立て、其から卓子の上に造花と牡牝二疋の造つた鷄を仕らへ、新夫の乘込むを今や遲しと待て居る。一方新夫は官服と稱する衣を着け、紗帽を戴き、木靴を穿き。此時初めて垂らして居つた髮を結び上げ、馬又は四人轎に乘り、數多の人に送られて新婦の家に至り、稍々滑稽に近き所作事澤山あつた後、新婦新夫は仲睦じく轎に乘つて新夫の家に歸るのである。朝鮮人は從前十二三歲で人の母たるもの珍らしくなかつたが、隆熙元年八月早婚禁止に關する詔勅を時の韓帝に依りて發布された。けれ共因習の久しき今俄かに此蠻風を

求め得ないのは云ふまでもない事である。

苦々しき避姙の風

全世界の人口は年々増加しづゝあるも、出産率は年々低下しつゝあり、其出産率の低下するに反し、人口の増加する理由は、最近一般に公衆衛生行届きて夭折せる死亡者少なくなれるに依るもの丶如きが、出産率の低下するに就きては年々結婚數の減少するに基因すと説くものあるも、決して然らず。其富國には假令結婚しても成るべく避姙の方針を取るもの多きに依る。今は避姙の風は滔々として全世界を風靡し、歐洲各國にては有ゆる方法を以て其弊風を改革せんとしつゝあり。中には宗教の力を以て之れを喰止めんとし、現に丁抹の如きも天主教の盛んなる氷蘭地方は出産率も年年増加し居るが、此避姙の風は下流社會より寧ろ上流社會に行はれつゝあり。

實に我國の出産率を見るに、所謂貧乏者の子澤山の譬の通り、下流社會には子福者多く、中流上流には割合に子供少なきが、之れ確に歐米各國に行はる丶避姙の餘弊を受たるものと見ても間違なかるべし。近年諸種の賣薬廣告中には隨分如何はしきものあり。而も此如何はしき賣薬に限りて殊に實行夥しきものありと謂へば、以て此間の消息を解することを得べし。殊に都市に於て之れを見るに、假令ば東京府と稱しても市在住者と府下在住者の間には其出産率に於て夥しき相違ありて、如何に其弊害の市在住者に侵入し居るかを示し居れり。

偶ま上流社會に子供を産めば、後生大事に乳母日傘で寵愛し、荒き風にも當てず、室の中の花のやうに育て上ぐるより、自然柔弱の國民を造り、中流社會にても先づ強健なる國民を出さんとは思ひも依らざる一方には、子澤山の下流社會にては其澤山の子を抱へて餓に泣くの慘況を演出し、之れが爲めに貧富の懸隔益々其度を高め社會の調和次第に破れて一大危險を招き不測の災害を招くに至るとあるべし。巳に實際に於てさへ如何ばしき形跡を示し居る以上、其他に於て如何なる方法の行はれ居るかは推測するに難からざるべく、此出産率の一大危險に又以て社會の一大危險を孕むものといふべし。（永井柳太郎氏）

眞珠の奇病

有名なる佛國外交家チエールの夫人は、其所有に係る有名なる眞珠製頸飾を佛國民に贈與したることあり、此頸飾は爾來ルーヴル博物館に飾られあるが、此寶物近頃世にも不思議なる病に犯されて今にも斃死せん狀態にありといふ、抑も右の頸飾は海底より採取したる美しき眞珠百五十個を三組に編みたるものにしてチエール夫人が之を佛國民に與へたる當時の其價格は實に二十五萬弗に達せりとのことなりし、今日にては右の病の著しく進み居るが爲め、之に對して二萬五千弗をすら投ぜんとするもの殆ど皆無となれりといふ。

右の病氣に就ては專門家も其の果して如何なる性質のものなるやを知らざれども、要するに一種の餓死とも云ふ可きものなる由、出來眞珠

なるものは美人の肌理細き皮膚に依りて其生を享くるものなりとは寶玉家の語る所なり、チエール夫人は、其初め眞珠を贈與するに當り其條件としてルーヴル博物館の箱より之を取出すことを禁じたるを以て、何人か佛國政府の信用し得る婦人に之を貸與して病氣の恢復を計ることも成り難く、爲めに稀世の寶物も哀れ日一日と斃死に近きつゝあるなり。

去れど婦人中眞珠を着くること能はざるものありて、斯る婦人之を用ゐんには、美麗なるものも忽ち暗緑色となるが、又同一のものにても婦人によりて光輝燦爛として其美を發するものもあれば、又土塊の如くなるものもあり、左れば歐米の大寶玉商は今や此特性を感知し眞珠の生存に適す可き婦人を雇用するに至れり、世間往々其所有する眞珠の光輝減殺するを見て寶玉商に走るものあり、斯る場合には之に適する人に請て其肌を借らんには能く光澤を恢復するを得可し、

又眞珠は再び海中に入りて若返ることあり英國皇太后の眞珠を愛好せらるゝことは有名なる事實にして、其集めらるゝ所實に世界無比の價格を有せらるゝが、近頃其中の一頸飾頓に變色を來したるを以て寶玉商某に其恢復を命ぜられたるに、某は秘に之を海中に投じ、三ケ月に亘りて日夜嚴重に番人を附し、三ケ月の後に至りて之を引上げたるに果して光澤の恢復せるを發見したりといふ。

婦人の雄辯會

私共がお茶の水師範學校在學中は、一時各級から一名づゝ選拔して演説のお稽古をした事も有りました。又此師範學校附屬の女學校が神田一つ橋に一度文部省直轄の高等女學校と名のつて分れた當時などは、わざ〳〵西洋から二名の教師を招聘して、總て西洋の衣食住を教へた傍、時々生徒一同に英語の對話其他の身ぶりから手眞似に至るまで教へた事も有りました。今方々の女學校でよくする對話も、矢つ張り其頃外國教師が教へられたものであります然し之等はまだ時に合はなかつた爲め軈ていつとなく止んで了ひましたが、此頃又かういふ風が盛に成つたのは、時代の自然の要求で、世界の文明に竝んでゆくのには必要な練習だらうと思ひます、全體日本婦人は餘り默り過ぎて、お互に訪問し合ふのも、徒らに衣服や髮のものゝ見合の方が中心に成つて居る位なつまらないものが多く、お互に思ふ意見を吐露し合つて思想の交換をすると云ふ趣味深い交際は餘り見かけぬ樣に思ひます、之は日本婦人が封建時代に餘り壓迫されて居つた爲め男子との智識の差が餘り遠く成つた爲も有りませうし、又相集まつた時自分の不熟を人に見られはせぬかと遠慮する心から斯いふ風を作つたのでありませう、然し之は日本人同志なれば慣れて居ますから左程でも無い樣なものゝ、外國人の目から見れば寧ろ『いやみ』に見えるさうです、故に之からの日本婦人はお友達同志なら時には雄辯會の樣なものを開て之等練習をして置ても決して悪い結果はないと思ひます。(鳩山春子夫人)

比喩談

七人の兄弟

松平鏡子

△

東京に暫くおさらばして、八日から奥州の懐に入りました。宿の下を汽車が通ります、これに乗ると東京に行けるんだな、と思ふと寂しいけれど、僕はいつ迄も俊寛ぢやあない、來月の末には歸京るつもりです。

要するに病氣になんてなるもんぢやありませんね、殊に我々男子は……。五月といふ聲を聞くと腕が鳴ります、あゝ殘念だなあ……。

白條の帽子を冠つても、車掌さん！なんていふ惡口やは一人も居ないから安心です、僕は何處へ行つても學生さんで大威張なんですよ。

貴女はごく小さい時、こゝへ來ましたつけね、藤の蔓で馬を編んだり、木瓜の實をかじつて乳母に叱られたりしたのを記憶てますか。あの時と同じ宿だけれど人の顏は大抵違つて居ます、鏡さんを可愛がつた女中もゝう居ません、まだ何とも聞いて見ないけれど死んだのかもしれない!!、線香でも立てゝやり給へ、失敬

五月十二日　奥州黒田原にて

進

△

私「母樣！、中田さんの赤ちやんは女のお子さんなんですね」

母「さうですよ、何故？」

私「だつてね、先刻奥樣が、赤ちやんを抱して御門の傍に立つてらしつたから、坊樣でゐらつしやいますかつて伺つたんですよ、そしたらいゝえ女でございますよつて仰有いましたもの！」

母「困りますねえ鏡にも、坊樣ですかと伺ふものぢや

ありませんよ、否女ですつて仰しやるのがどんなにお厭だかわかりませんお孃さんですかと伺つて、男ですとお答になるのが、またどんなに御自慢だか。……總で男の方を喜びますからねえ、氣をつけないといけませんよ」

私「まあ、私、飛んだ事を云つちまいましたのねえ、でも母様！どうして、女の子だといけなくつて？」

母「いけない事はないんですけれどねえ、男許り多勢の方が、女を欲しい〳〵と思つてゐらつしやる方の外は、男の子を喜ぶんですよ、つまり男の子だといふのが、まあ一つの手柄なんですねえ」

私「ちやあ私なんかの時も落膽なさつて？」

母「否私宅のやうに多勢では、女だつて何とも思ひやしませんよ。母様は女の子の方が好きです」

私「そんなら母様は私を可愛がつて下さいましたのね、でも女だつてそんなに厭がる事もありませんわねえ、厭な事!?」

母「ホヽヽヽヽヽ」

私「ホヽヽヽヽヽ」

△

鏡子さん……。

光枝は亡なりましたよ、四月も早廿三日！。その夕べは八重櫻の葩が、ほろ〳〵と靜かに散つて居ました。

光枝の過去十八年の哀史は、今更私が事々しく申し上げずとも、貴女はよく御存じでゐらしやいますわねえ、鏡子さん！、光枝はそのつらい運命の笞に堪へかねて……、堪へかねて逝つて了つたんですよ。

貴女のお耳に此樣な事は入れたくないけれど、あゝ――毒藥自殺とお聞でしたら、まあどんなにお驚き遊ばさう、自とはいへ怖ろしい硫酸は、私のたつた一人の從妹を奪ひ去つて行きました。

あの麗はしい顔ばせや、艶のよい紅の唇、美くしいものこと〳〵く紫に爛れて、光枝がその終焉の床――。

鏡さん！これが悲劇でなくてどうしませう!?

光枝は三月の末から肺を病むで床について居りました。御承知の樣な家庭のさまですから、病魔は以前から身體に巣食つて居たんでせうけれど、こらへ〳〵て三月の暮、——末の廿八日でした光枝は血を吐いてたふれた儘！それで床にはつきましたけれど、薄く冷たい床の敷かれたのを何處だと思召す？貴女はまだ御存じのない家ですけれど、暗い倉座敷の四疊半の日の光さへ當り兼ねるところなのですもの、床についたとはいへ藥餌にも親しまずつら



い中に肩をすぼめて、それでも一月も辛抱をしました一昨年の夏父を失なつてからは、光枝には隠るゝ袖もありませんかつた、現在、生みでなくとも母のある子、それをいくら血を分けた伯母だからとて、從姉だからとて、嘴を入れる事が出來ませうか私にも父がありませぬ。——どうせ母の膝下へ、行く身だとは思つて居たでせうが、自分で身を殺す程の決心があつたら、何故私にだけでも云つて下さらなかつた？話てさへ呉たなら、少しはよい分別もあつたらうものをと、

それが何より殘念でなりません。怖ろしく光る目の下に身をすぼめて、私は毎日の樣に倉座敷に通ひました私はどうかして、光枝を貴女にあはせてやりたいと思つてましたのに……。死ぬ前の晩は事にかこつけて、長い間私を引き止めておきました。そんならこつそり宿つて、上げませうかつて申しましたら。いゝえ輝さんの爲によくないから歸つて頂戴、その代明日は早くから來て下さいなと、云つて居りましたつけが……

鏡樣にも一度會いたいつてね、涙を零しちや口癖の樣に云つてますので、早く治つても一度東京へ歸らなくつちやあいけませんよ、この儘終へて了ふ樣では貴女は何しに生れて來たんです、小さい時から苦勞ばかりして、花の咲く身にならないで死んでは、親不孝になりますよつてね、云つたら默つて泣いてました、鏡さんは何してゐらつしやるか、私はまだ鏡さんに寫眞が上げてなかつたから上げて呉れつて、別封の寫眞を寄しましたの、これが三月の始に撮つた樣です、鏡樣に心配かけちやあすまないと思つて、成るべく隱して居たけれど、鏡さんは私がこんなになつてるのを御存じでせうかつて涙を零してましたよ、貴女と一つきり違はないのに、この老け樣を御覽下さい、是が元の光枝と思はれませうか——。——急報を聞いて駈けつけた時、光枝の變つた姿を見ては、もう胸が迫つて何にも云へませんでした。やつと肩へ手をかけて名を呼びますとわかつたと見えて僅に目を開きましたが、脣が幽かに怪しく痙攣した許り、その時はもう口がきけませんでしたけれど……床の下から貴女への遺書が出ました、袋のまゝ封じこめて從きます。

貴女のお寫繪は、臨終の際まで肌身離さず持つて居りました。あゝ會はせてやりたかつた、光枝はどんなに貴女を戀しがつて居たでせう?。

光枝が逝つてもう五日、野邊の送のすんでからは、火の消えた樣におとが寂しい!。思ば儚く短い一生でした。筆をとつたら又新らしい涙が湧く……。けれども死は、光枝の縋るたつた一つの救ひの手だつたのでせう、私は光枝の爲に、悲慘なる死を喜びます、鏡さ

ん！貧女も何卒、未來の幸福を祈つてやつて下さい。心が亂て居りますのでとりとめもない事許り、お恕遊ばして頂戴よ。

終りに臨んで御身の御健康を祈り上げ升

左様なら

四月二十八日　輝子

△

「サア〳〵床に入つて寢るんですよ、小達を御覧もうよく眠つて居るぢやあないか、これからが兄様達の舞臺なんだから……」と大兄様がいふ。

「千い公早く寢てお了ひ！」、姉様とねるんだ、兄様は夜中にパンを食べるんだからね」

羨ましがらせるつもりで小兄様も云ふ。

うちはの裏團



「牛酪をウンとつけるんだ、ジリ〳〵泌みるいゝ匂ひつたらはゝゝゝ」なんて云つてる。

「いやだア、私も少し起きてませうや、何時頃まで起きてたらよくつて？」千代子が解きかけた帶の手をとめて聞く。

「まだなか〳〵なんだ、お前の起きてるうちは燒かないぞ千代公のいやしんぼ！」小兄様が笑作らまくしかける。

「學校が晩くなるといけないよ千いちやん起きられないからお寢み！パンなんて燒きやしないんだ、燒いた時には起して上げるから、ね」大兄様は起きてゐられちやあ大變だといふ様に、急に優しく云ひ更へる。

「千代ちやん起きてたつて僞なのよ、寢みませう、ね

もう十時すぎましたよ、私が顔を覗き込む樣にすると「あゝ」と云つて笑つてゐる。

妹と枕を並て、搔卷の袖から手を出してしつかりと握り合ふ、そして兄樣逹の話の模樣に耳を傾ける。

眞實に騷ぐつたらまるで子供の樣だ、いつでも二人寄ると乾度かうなんですもの、あきれて了ふ。

「…僕はまだ便所に八犬傳を持つてゆく人を見た事がないよ、それに半分から讀んぢまふまで、出て來ないんだからね、全く驚いた――僕は驚いちまつたよ」なんて小兄樣がしきりに大兄樣に當こすつてる、ほんとに可笑くて堪まらない、それで少でも笑ひでも仕樣ものなら、

「オイ〳〵寢た奴は笑つちやあいけないせ、これからお茶を入れてうんとご馳走を食べるんだから、起きてると困つちまふ」なんて云ふ。

さういへば何日かの朝、勝が武麿のお辨當を造らへるので戸棚を開けたら、たしかに入れといた筈の食パンがない、しかも一斤まるごと紛失してゐた。兄樣は口を拭つて澄ましてるけれど、私はすつかり知つてゐる、此處をパンが通りやしませんかつて、私は兄樣の食道に聞いて見たい！、…何時の間にたべるんだかしらぬまに行方不明、食しん坊つてありやしない。

それに兄樣つてば、冬休みの時一日寢續けたのが原因で、生活上に大變化を來し、夜起きちやあ朝床にもぐり込む、だから私が「兄樣は晝間眠つて夜働く」つて云つて上げたら「人を馬鹿にしてら、人間の惡い泥坊ぢやあるまいし」なんて云つてらしつたけれど――私あの時餘程、食パンの工合ぢやあ滿更お下手でもないつて言つて上げたかつたけれど、鐵拳を振舞はれると恐縮して了ふから、出かゝつた言葉を唾と一緒に呑み込んで了つた。

其癖御自分ぢや、「飯の經濟でせうねえ？」お母樣なんてきはどい處で、御機嫌を取做てゐらつしやる。

身を少でも動かすと、「早くお寢み！」とお小言を浴せかけられる…で…觀念して眼を閉ぢた。

△

「母様！餘り多勢で、やかましいと思召しはしなくつて」、私が問ふた。

「否、八釜しいとも五月蠅とも思ひませんよ、うるさいと思つても居ないと寂しくつて堪らないし、姿が見えないと心配だからね、こんなに多數の子供だけれど誰が不要といふ事もありませんよ、大きいのも小さいのも、皆可愛くてたまらないんです」と母様は仰有る

「でも末つ子が一番可愛いのね母様と！」私が聞くと

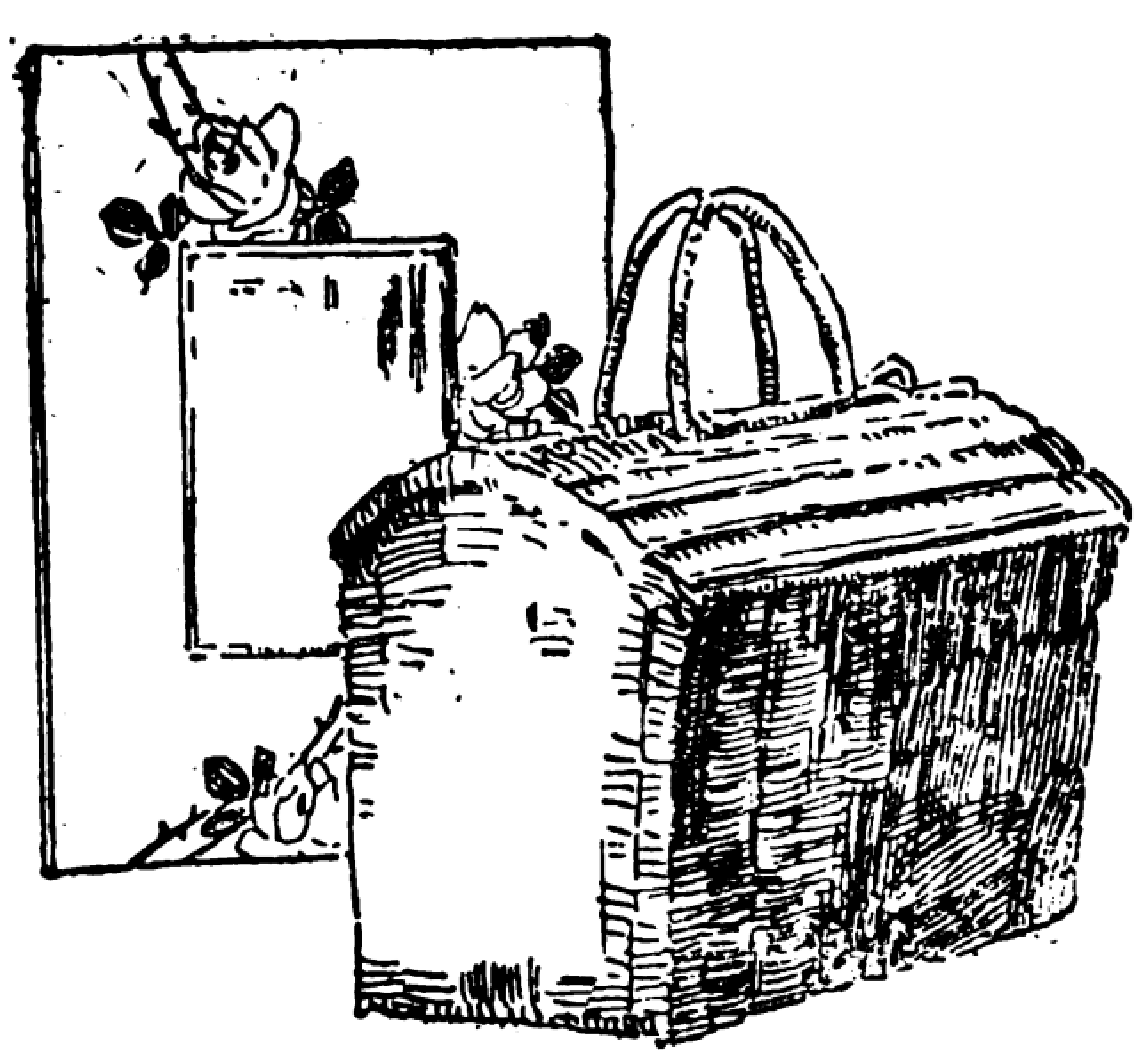
「そりやあね、親の傍に少しきり居られない子だと思ふからですよ、誰が可愛いの誰が憎いのつて分け隔てがあつて多勢の子供が育てられるものですか、そんな事をすると、折角、同胞仲を惡くして了ひます」

母さまはかう仰有つた、そして

「あア強ひて云へば、母様はあなたを一番可愛いと思ひますよ、あなたはさう思はないの？」

私はそれにかう答た、

「私もさう思てますよ母様！、それに私も誰より一番母様を可愛いと、思つてるんですもの、命よりか何よりか——私もしか母様にお別れすることでもあつたら死んだ方が好いとも思つてるんですよ……」



松風のみどりを見たる夏野かな



食卓のほとり

あや子

◎新しく女中を雇つて使つて見ると、何にも知らない。フロックコートを持つて來いと云へば制服を持つて來、制服をと云へば脊廣を持つて來ると云ふ始末で、之を一々敎へるのに隨分骨が折れた。けれど女中でも勤めやうと云ふ女は、何れ家計が不如意だとか、不幸福だとか、碌に稽古も出來ない境遇に生ひたつたものゆゑ之れに同情を表して敎へてやるのは吾々の義務だと思つた。無論女中をお孃樣と一緒に敎育してやる義務もあるまいが、爪垢ほどの親切さへあらば、骨が折れると言つても左程面倒もなくして敎へられるのである。

◎西洋では子供に至るまで食事の前に手や顏を洗ひ、又晩餐の食卓に着く時は服裝を改めて容儀を正す風がある。又肥後の山中に五箇庄と云ふ一部落があつて、平家の殘黨の隱遁せし後裔とかで、木樵山賤を生業とするにも拘はらず、食事時には紋服に改めて、禮儀正しく食事する習慣を保存して居る。何れも麗はしい習俗であると思ふ。なにも紋服にも及ぶまいが、此精神は家庭に望ましいことである。

◎飮み惡い藥はオブラートに包み、又はカプセルに入れて飮むが、ヒマシ油の如きはオブラートもカプセルも利かぬから、普通水に垂らして飮む。然し矢張り口内について氣味が惡いから、之れは小さな濡れたコップに半分程水を入れ、其の眞中にヒマシ油を垂らし、次にコップの緣に沿ふて徐ろにブランデーを注ぐ。すると水は毛細管引力により、コップの緣に沿ふて高く上り（初めにコップを濡すのは此の爲なり）爲にヒマシ油はコップと觸るゝを得ず、其所に油より一層輕

いブランデーが徐かに周圍に注入されるので、ブランデーの注入さるゝに從ひ、ヒマシ油は中央に銅貨大に集り、結局雞卵の白味が黃味を包んだ様な形となる。之を一口に飲めば何處にもつけずして嚥下される。

◎丸藥錠劑は普通舌の上に乘せ、水か白湯でコクリと飲むとよいが、子供などでは途中に引懸ることがあるから、之を舌の下（下齒の下）に入れ置き、水なり白湯なりを飲ますれば丸藥は夢の如く獨りで喉に入る。



◎瓦斯は使ひ方によりては臺所用として薪炭よりも利益である。たゞ豆のやうな弱い火で長く煮るやうな場合には損である。又プーッと音のするやうに使つては大變な損で、成べく少しづゝ出さなければならぬ。そして鍋をかけ代ふる毎に面倒でも一一消す方がよろしく、一ケ月に大燐寸一包づゝ使ふ覺悟でやれば、確かに利益だと實際家が言つてゐる。

◎訪問の習慣は西洋のは一寸好くいつてゐる。時間は

大概三時より五時半頃迄と極まつて居て、此以外には特別の用事でもなければ訪問せず、又この時間以外の來客に對しては前垂がけで出ても差支ない事になつてゐる。で訪問時間となれば、主婦も女中も、顏を洗つて衣服を更へ、お茶でも淹れて居る所にお客さんが來ると云ふので、誠に都合がよいのである。招待を受けた時は餘り早く行つても無作法だし、一分でも遲れては失禮で、午前ならば先づ五分位前に着くがよいとなつてゐる。但し園遊會とかアットホームとかの長い時間を定めた集會で、例へば一時より六時迄と云ふ招待の時は、始め頃なり終り頃なり隨意の時間に行つて差支ない。只始より終まで居るのは無作法である。又小兒は特別の案内なき限りは同伴しないのである。

◎夫婦揃つてゐる家へ訪問の時は、男は二枚、婦人は一枚の名刺を出すのが普通である。男の二枚は主人及び夫人を訪ふの意、婦人の一枚は夫人を訪ふの意で、婦人は男子を訪問しない習慣になつてゐる。若又家族總てに逢ひたいとか全家族を訪問した時は、名刺は眞中より横に二つに折つて出す。此場合には、訪はれた方では全家族が出て挨拶する。

◎應接間では上下の座席よりも寧ろ懸け工合のよい椅子に客を請ずるので、客は薦めらるゝまゝに之に懸けてよろしい。但し長椅子には餘程疲れてゝも居て強ひて薦めらるゝにあらざれば懸けない習慣である。相客があつて之を紹介する時は、男子を婦人に、同性間にありては年少者を年長者に紹介する。

◎食事の時は食卓に接近して坐すべく、椅子に倚れるのは無作法である。ナフキンも餘り高く胸にかけるのは子供らしいから、たゞ膝の上に一寸載せて置く。且つ嚴格にいへば、少しでも手を食卓に載せるは無作法であるが、實際は手首より先は食卓に載せてよいことになつて居る。又日本人にはよくナフキンで口邊や襟の邊を拭く人があるが、之れは非常な無作法である。ナフキンは食事後は丸めて食卓の上に載せて置けばよいが、若し其家に滯在して此後も食事するといふ場合には、疊んで輪に入れて置くのである。

簾の外

梧水

▲杜鵑を憶ふ

◎霖雨長くつゞきて、陰欝の情に堪へざる時、一聲鋭く瑪瑙を碎くが如き叫びを遙かに天の一角に聞き、仰いで之を看れば、既に其形なし。抑ゝ是れ何物の聲ぞ。

◎辛うじて此聲の主を知り、具さに之を檢すれば、其色薄黑く瘦せたる鳥なり。其嘴を開きて之れを見れば咽喉朱く、血汐まさに滴らむとす。彼の陰欝なる霖雨季節の情趣は、悉く此鳥に依りて表はさるゝかと思はる。

◎昔し蜀の望帝、故國を出でゝ死せし時、此鳥來りて啼くこと頻りなりしかば、蜀の民は、是れぞ紛ふべくもあらぬ望帝の魂魄なりとし、其聲を聞くや、皆な胸を打つて、偏へに客死し給ひしことをば憐みぬと云ふ。

◎我國に於ても、蜀の望帝と同じやうなる境遇に在らせ給ひし崇德院、後鳥羽院、順德院などは、此鳥の聲を聽きて無量の感慨に打たれ給ひ、熱ゝと舊都戀しき情に堪へやらず、和歌にてその意を述べ給ひしこと甚と〻多かりき。

◎この鳥、冬季の間は、朽木の洞穴などに入りて、假死の狀態



を爲すが故に、古人はこれを見て、一度死して又甦るものと思ひ、地獄に緣ある死出山の鳥と稱しぬ。死出山には、其山麓に劍を枝とせる二本の樹ありて、亡者共その間を通らむとする時、此樹に止れる鳥、眼を怒らせて問ふて曰く、汝等、我れを知れりやと。亡者共、其れを知らずと答ふれば、此鳥更に曰く、我れは汝等の國にて杜鵑と呼ばれたりしを知らずやと。

◎又或地方の傳說に依れば、昔し疑ひ深き兄ありて其弟が密かに己れの藏し置きたる赤飯を盜み喰ひしかを疑ひ、弟を殺して其腹を斷ちて見しに、何ぞ計らむ、弟は極めて黑く粗末なる飯のみ喰ひしなりき。此に於て、兄の追悔遣る方なく、終に己れも亦た自殺して死しぬ。其魂魄化して杜鵑となりたれば常に『弟突く〳〵』と追悔の聲に啼きぬとぞ。悲愴なる物語ならずや。

◎此等の他、杜鵑に關する傳說は、悉く皆な悲愴沈痛なるもののみなり。蘆花氏の『不如歸』などは尙ほ甘き悲劇なり。眞に『不如歸』の表題を冠するには、極めて暗慘たる[illegible]なかるべからず。

▲合歡木の蔭に

◎梅雨の一箇月は、天地唯だ綠白の二色に依りて褒まる雨の絲を見よ。茂れる木葉を見よ。

◎栗の花、霖雨に腐れて、遍く地上に散りしけれども、綠若青草に紛れては、花か、あらぬか、定かに得わかず。椎の花も亦た爾り。

◎卯の花、垣に咲きみだるれど、曇れる空の色に似て、折には目に止まらぬこともあるべし。橘の花、柿の花、青木の花、譲の花など盡く皆な其れなり。

◎然れば此の霖雨の頃は、空に淡紅色を漾はせし陽春三月の情味もなければ、五彩を以て綵られし首夏の鮮美もなく、四邊の風光極めて靜かに、極めて寂しく、宛ら懐しき人に別れし時の心地ぞすなる。

◎此の季節に當りて合歡木の花の淡紅色なるを眺むれば、誰れか融然として温き情に打たれざらむ。

◎我れ嘗て雜木林の間を流るゝいさゝ小川の岸を傳ひゆきぬ一際茂れる岸邊に添ひて、合歡木の花今を盛りと咲き、其蔭に山羊を洗ふ男ありき。山羊は水を嫌ひて、その細き眼を瞬きつゝ、幾度か後趾にて蹴立てながら、頻りに男の手より脫れむとす。六月の日光は鮮かに樹間を洩れて山羊の體軀に斑點を染め、彼れ馳らむとすれば、斑點も亦た動搖しぬ。風なきに、折々羽狀の淡紅花斜めに飛ぶ。幽閑なる景色ならずや。

◎靜かに暮れ初むる後園、姉か、妹か、兩人の幼女、護謨人形を手にしながら愉平と乘人なき鞦韆、柱に倚りかゝれに。その傍らに大なる合歡木ありて、絲の如き花蕊とゞ大地に散り落らぬ。古へより合歡木を植うれば一家必ず睦じと云へり。姉か妹か、兩人の幼女、將來永く今のやうに仲好かれと。



▲ひるがほに對して

◎茫々漠々、際涯なき曠野ぞ、實に夏艸の領土なる。心なく之を眺むれば、唯だ青々と茂りあへるに過ぎざれど、心して之を見れば、皆な樣々の趣致を帶ぶ。

◎妖氣滿々たる天南星は、高やかに一莖を抽んじ、薄黑き舌を吐きたる狀、宛ら惡魔の權化の如し。

◎少しく隔れて、其處に怪しき一物あり。白き粉を帶びたる如き脣やかなる葉たゞ蒸暑き風に微嚦しつゝ聳立ちぬ。餘りの憎さげなるに、手を延ばして其一葉を斷れば、柔軟き莖より黃ばみたる血汐たらたらと流るゝこは抑も精ある草か。忌はしき限りなれ。

◎其傍らに薄鴇色の夢の如く淡き花あり。烈々たる天日に對して、殊勝なる首を擡ぐ。旋花の花なり。

◎この花、到る處に小さき蔓を延ばして、薄鴇色の花を發く。野路にも、山路にも、田の畔、荒れたる庭など、何處の嫌ひもなく咲ける狀、宛ら巡禮者の彷徨ふに似たり。



雜記帳

私の讀物と交友

與謝野晶子

×

字を書いてもだらしなく、路を歩いても男に遲れる何かと云へば驚いて調子外れの聲で叫喚いたり、唯おろおろと泣きじやくつたりする外に、物事の理解も判斷も附かない。學校を卒業したからと云つて、男子に比ぶれば殆ど何事をも敎育せられて居ない。何か手に執つて讀んで居るのを見ると低級な記事で埋つた婦人雜誌か、粗雜な感情を厭味な筆づかひで書いた通俗文學の類かである、其同性同志の話の內容の貧しい事を見れば到底文明人の頭腦を有つて居ようとは想はれない、其れで閱歷あり敎育ある男子の間へ交れば沈默する外は無い。偶ゝ社會的に會などを設けても其蔭には乾度男子が居て指圖や世話をして居る。自分等丈で獨立した見識も無ければ統一ある設計も出來ないのである。又その手に成つた文章などを見ても衒ひと、半可通とで滿ちた、齒の浮く樣な物許である、全く書かなくても濟む樣な事許である。

斯う云ふのが日本の女の通有性である事に先づ氣が附いて、非常な羞恥を感じるので無くては、婦人の自覺抔と云ふ事も無意義である。

×

わたしは男女同權抔と云ふ不合理な思想を嫌ふ代りに、男女對等の協力を以て共同生活を營む日の來る事を理想して居る。生理的に性の相違がある以上、男と女と互に其活動の力の質に長短のあるのは明白であ

る。同等は空想に過ぎないが、適した力を適した所に用ゐる對等の生活は合理的に可能である。

女の腦力と體力とが果して何に適するか、其れを世の論者の樣に大早計に決めて仕舞ふのは宜しくない。恐らく今後一世紀位は有らゆる實驗をして見る事が必要である。案外政治などにも女の加つた方が効果が擧るかも知れない。少くとも有史以來の男子の專擅を除き得るかも知れない。

併し日本の現在の若い女に差詰急務であると感じるのは女自身の開發である、女の智識と感情とは餘りに男子と比べて距離がある、男女の對等を唱へるのは未だ未だ遠い夢であつて、女は互に自分が時代の低能兒である事を反省し有らゆる、手段を盡して自己の敎育に忙殺せられねば成るまい。

×

女と云ふ物は總て時代の低能兒である。男子は善く其れを知つて居る所から、哀憐を以て勞つたり、服從の道徳を以て壓へたりする、他から哀憐せられ扶助を受けてのみ生きて居る者は決して一人前では無い。服從を事にして居る者に何の個人の自由が有らう、個人の自由を樂まない者に何うして快活な社會性があらう、低能兒が婢女、玩弄物の待遇を受けるのは正當な運命である。男子から見れば女は如何にも厄介物に相違ない。女自身に考へても今は愛想が盡きる迄腦力の劣等な事に氣が附く。

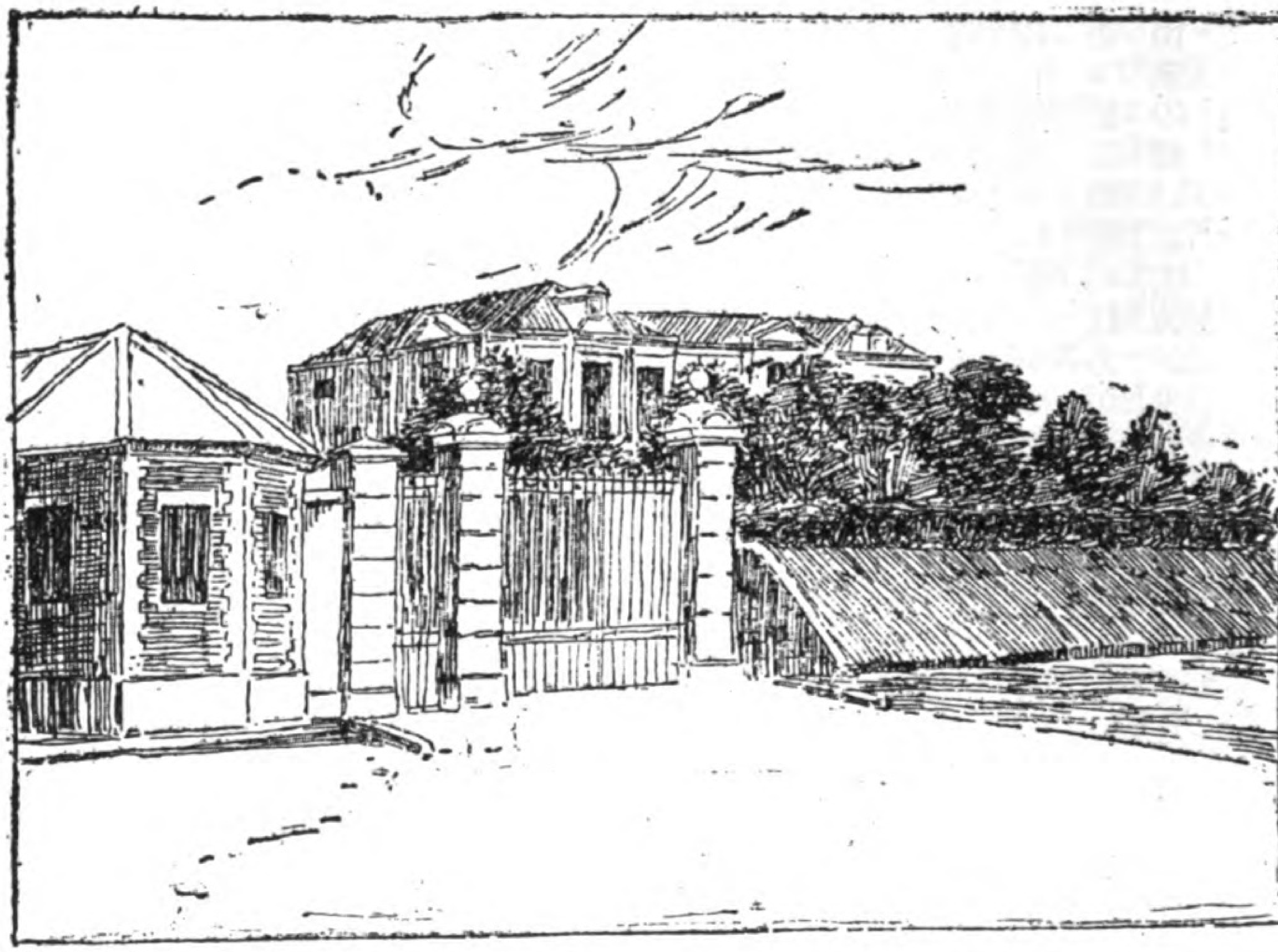
わたし達は何う自分を敎育したなら此慘な境遇から脱する事が出來るか、男子に追隨する事が出來るか。他日の男女對等の生活を要求する資格を準備する事が出來るか。

わたしは次の樣にして自分の愚鈍な素性を鞭撻して居る。わたしの境遇に順應して自分の敎育を實行するには、斯う云ふ卑近な程度より初める外は無かつた。

×

(一)讀物の範圍を擴げる。

墺國大使館



讀む事は七八歳の時からわたしの嗜好の大部分であつた。在來の女が讀む限の日本の書物は歷史物にせよ文學物にせよ大抵十六七歳迄に讀んで居た。明治の人の手に成つた文學書も目ぼしい物は一通目をとほした積である。又今も見落さない樣に氣を附けて居る。併し文學物許では慊らなくなつた。勿論文學物‥‥中にも飜譯せられた文學物を主に讀むわたしは、感情の方面に清新と複雜とを其れに由て加へる益は多いが、何うも理性を聰明にする讀物としては他に求めねばならなく成つて來た。近頃の文學物を讀むにも他の智識が必要なのである。

わたしは讀物の範圍を出來る丈擴げて、心理學で云ふ「充塡記憶」の行き方で有らゆる智識を手當り次第に吸集しやうと努力し出した、其れで近年わたしの讀んで居る物は大抵男子の爲に書かれた書物である、婦人和手に書かれた書物に碌な物は無いと決めて居る。

×

手當り次第に讀むと云つても、時間の乏しい身で然う漫然と讀む譯にも行かぬそこで。哲學書を讀むには「哲學概論」から讀み初める、心理學なら心理學の原理を書いた物から初めて「兒童心理學」の樣な應用學を後にする。斯んな具合にして進化論、生物學、動植物學にも及んだ。此後は法律と經濟と醫學とが知りたいと考へて居る。何れも一人で一生掛つて研究すべき專門の學問を、豫備智識の無いわたしが、師友も無くして短日月の間に研究の出來る物で無い事は十分に知つて居る。わたしは學問として研究するのでも學者として研究するのでも無い。其等の學問の概念を得て、わたしの智性を豐富にしたい爲に外ならないのである。

わたしは男子に理解せらるゝ學問が女子にも理解せられない事は無いと云ふ信仰を有つて居る。わたしが小學校に居た頃は男女が級を同じくして習つた。(わたしはあゝ云ふ教育の仕方が今日にも望ましい。)其頃級中で出來の好い女生徒が少くなかつた。自分なども男の生徒の出來の好い者に比べて劣つては居なかつた。女學校へ入つてからも出來の好い同窓を澤山に見た。而してわたしは何時でも斯う思つた。「出來の好い女生徒丈を選拔して男の子と一緒に中學や大學へ入れて貰つたらと。

×

併し今では高い程度の學校へ入る事許が教育では無いと云ふ事をわたしは知つて居る。男子が高等學校や大學を卒業しても、其後の自修を懈れば三四年經たない内に學界の進歩に遲れて仕舞ふ。教育は八分まで自修が大切なのである。其れでわたしは暇の無い中から暇を作つて自修する、解らない事も隨分多い。解らないで濟まさずに辛抱して幾度も讀むと、細かい事に解らない點は有つても輪廓の概念丈は次第に明瞭に成つて來る。獨學で加之に外國語の素養も無くてする研究は其程度で好いと諦めて置かねば成るまい。

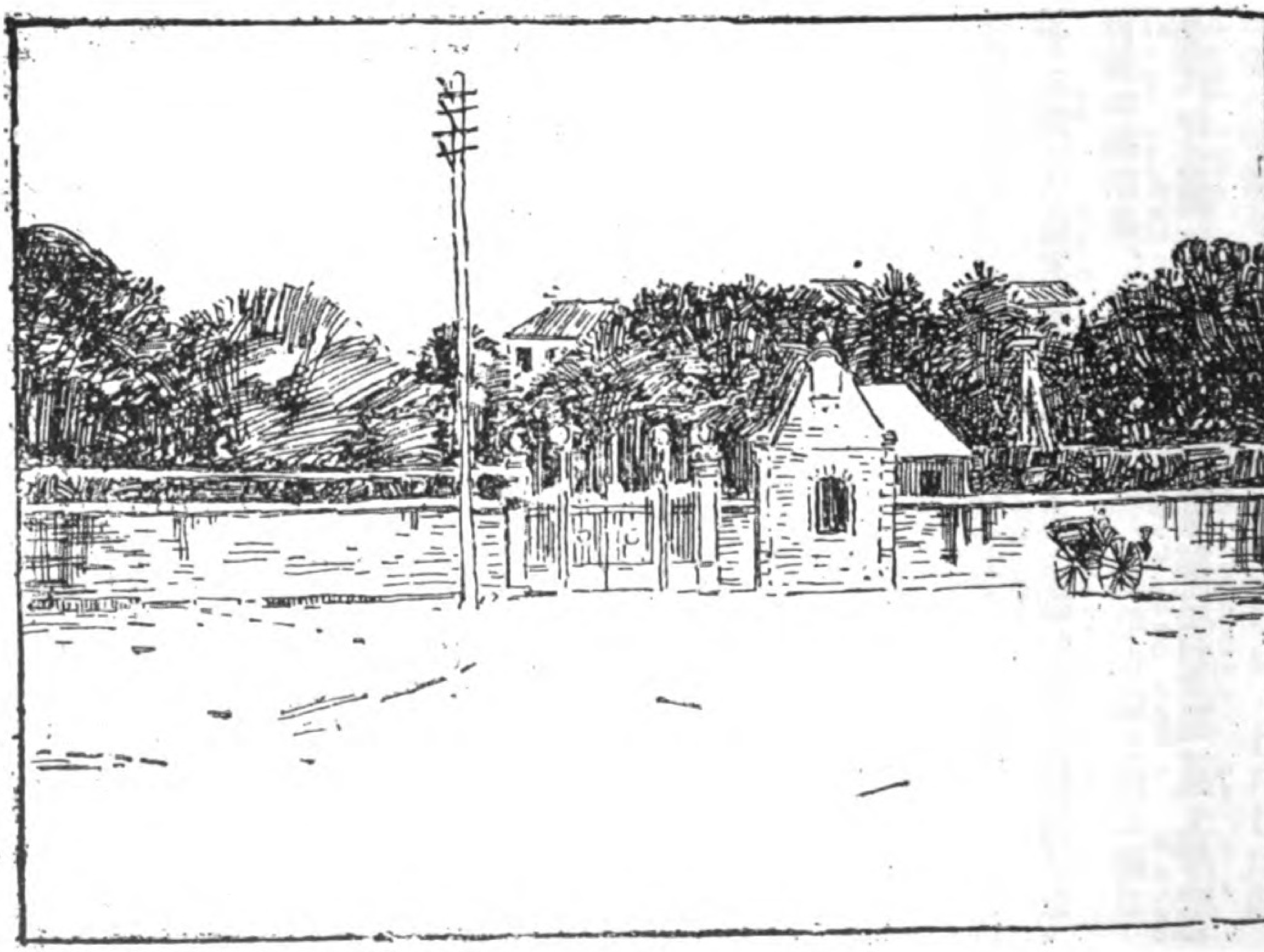
わたしは教育ある紳士の抱いて居る思想なり感情なりが、半可通で無く理解せらるる程度に迄内心の經驗

を貯へ度い。又常に新しく補充して行き度い。進んでは其經驗の統一を圖つて自分の見識と同化し何事にも直ぐに判斷が下し得るやう、意志の活動を底力のある敏捷を以て實行し得るやうに致し度い。在來の日本の女は一寸した事にも即座に意義を領解し、好惡の判斷を明言する事が出來ない。其れで人前へ出れば何時も齒切の惡い、もじ〳〵と羞んだ態度で居なければ成らなかつた。女丈では相談が纏らない、男が加はつて采配を執ると云ふのは實に見苦しい。「女には人格が缺けて居る」と罵られても返す言葉は無い。さう云ふ女と對等に共同生活を營めと云ふのは蟲が好すぎる。男の迷惑を除く爲にも女は賢く成らねばならぬわたしは最も謙遜な心で女子の高い教育を要求するのである。

×

わたしは斷片的な著述よりも力めて浩瀚な書物を讀まうと心掛ける。斷片的な書物とても其著者の人柄に

獨逸大使館



由ては有益な暗示に富んだ物もあるが、概して浩瀚な書物に學者の親切と心血との傾倒せられた物が多い樣である。勞せずに多大の收穫を望むのは思慮の足らない事である。浩瀚な書物を讀む丈の熱心が無かつたらわたしは到底薄片な智識に甘んせずば成るまいと思ふ其れが堪へられない。

廣く智識を世界に求めて舊來の陋習を一洗せよと仰せられた　今上陛下の御代の難有さには、出版の自由と共に其れを讀む自由をも自分等に與へられて居る。昔ならば「商賣往來」や「女大學」以外に讀む事の出來なかつた町家の娘のわたし迄が、誰に遠慮もなく博士達の深遠な新著を讀み耽る事が出來る。女が此自由を利用して自修しないのは幸福を捨てるものである。殊に只今では圖書館が到る處に設けられてある爲、わたしの樣な貧しい女も然う云ふ浩瀚な書物を至極手輕に讀み得られるのを喜ばねば成らぬ。

×

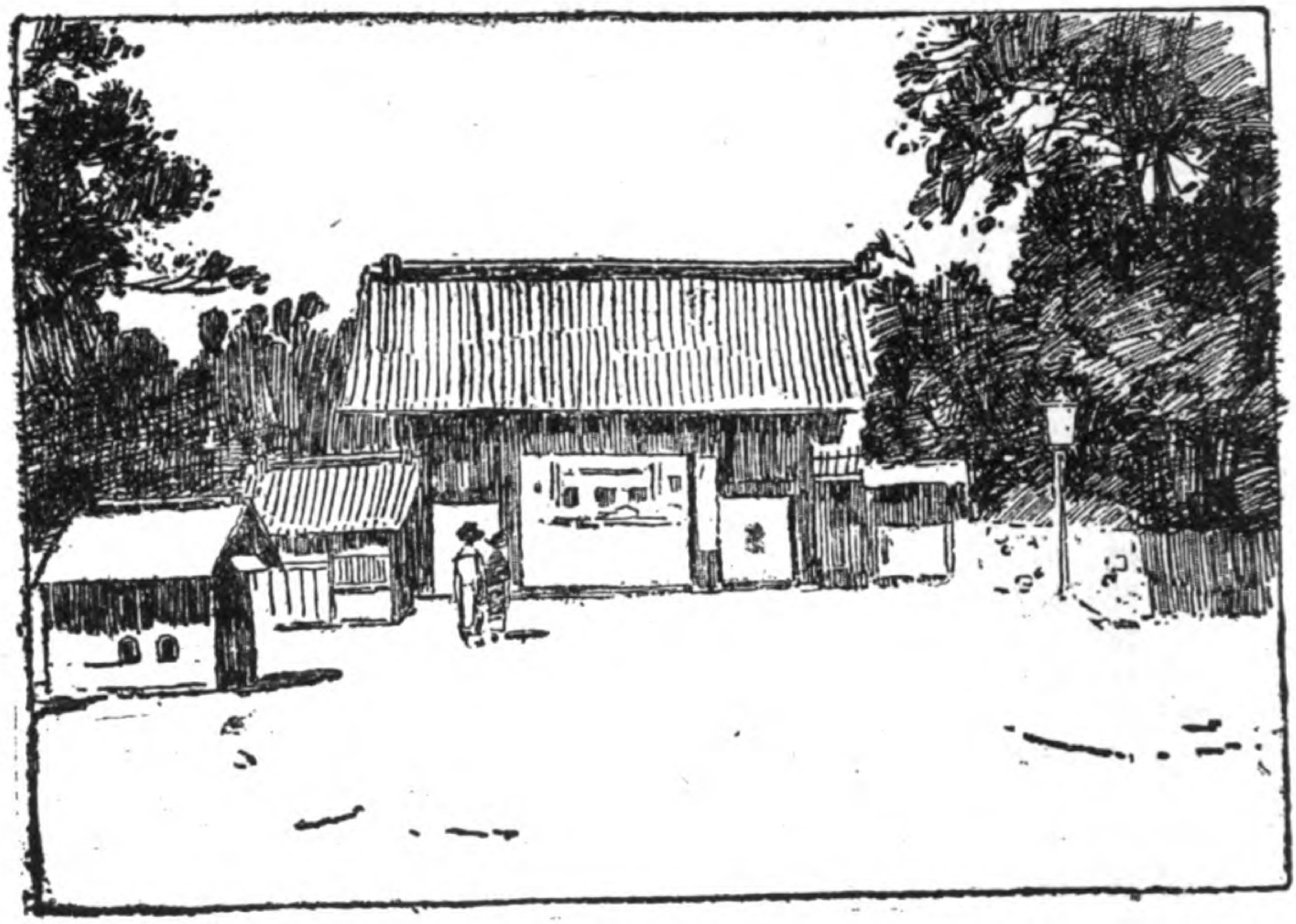
書物許でなく、わたしは新聞でも毎日十種程讀んで居る。新聞の讀み方もわたしのは外國電報と內地の電報とを第一に讀む。次には廣告欄、其れから普通に二面種と云はれる物を讀み、次に論文と三面雜報とを拾ひ讀する。之は良人の讀み方の感化を受けたのである

なせ電報欄を第一に讀むかと云ふと、其れに由て最新の世界狀態が朧げながら解る。(同じ意味で雜誌「スバル」に載る椋鳥通信をわたしは毎月第一に讀む。)內地の電報も同樣に日本國中の事が解る。モロッコが何うだとか、葡萄牙が何うだとか云ふ話題も、わたしの宅の應接間では格別珍しい事で無い。昨日大隈さんが大阪で何う云ふ演說をしたと云ふ樣な事は、小學三年生と一年生との二人の子供にも、わたしの口から話して聞かせるのである。

廣告欄を見落さないのは主に新しく出來た書物を注意する爲で、讀んで見たいと思ふ物があれば記憶して置く。

其れから雜誌も大抵の文學雜誌は目を通す。婦人雜

帝室博物館



誌は宅へ寄贈を受ける物の外は讀まない。わたしは此一兩年、太陽、中央公論、人性、哲學雜誌、歷史地理丁酉倫理講演集、藝文、考古界、東洋時論と云ふ樣な雜誌に多くの興味を持つて居る。書籍にせよ雜誌にせよ、男子の讀む物ばかりを極端に愛讀して居る。

×

(二)多く男の方と御交際する。

わたしは女の方と御顏馴染は有つても親しく御交際する方が尠ない心の中では姉樣の樣に思つて尊敬し、陰ながら其御筆に成る物などを氣を附けて拜見して居る先輩の御婦人が御五方位はあつても、外出する暇の尠いわたしは御訪問して御敎を聽く事も出來ない。御亡くなりに成つた大塚博士の御夫人楠緒樣なども、御手紙は每度頂きながら遂に御目に掛る機會も無くて永い御訣別に成つて仕舞つた。

女同志の交際は一體に女の人格が今の樣に低くては御互に何の益する所も無いと、わたくしは思つて居る

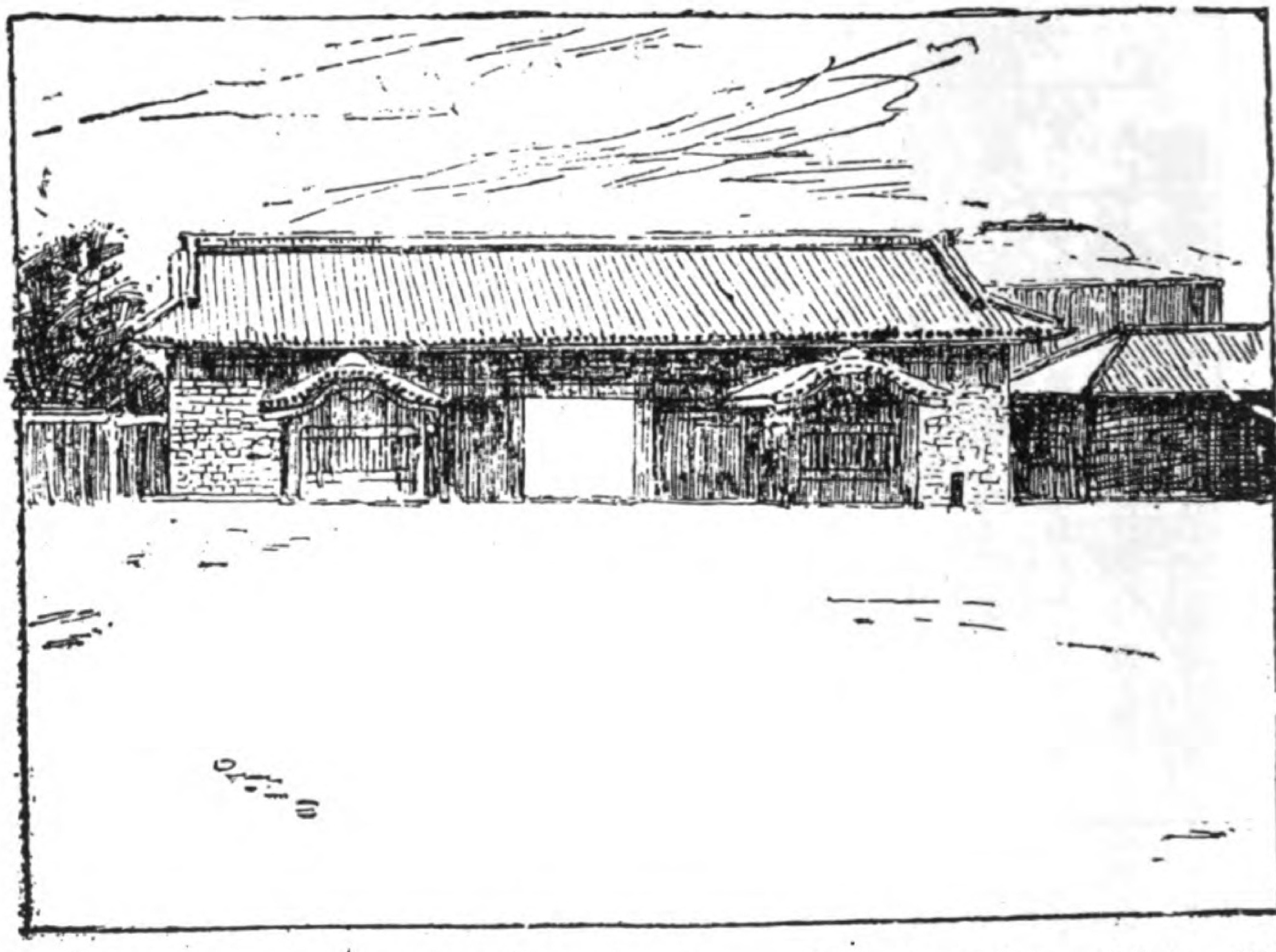
其れで自然わたしに男の方に親しい御知合が多い。良人の許へ來られる先輩や學生の方が多いので、外出を爲ない自分は居ながらにして其等の男の方々と御交際する事が出來る、男同志の御話を聞いて居ると、又讀書では得られない種々の智識と感情とを敎へられる。わたしは又大學生の方々を捉へて氣隨に質問などもする。わたしは斯う云ふ敎育ある多數の異性の方と自由な交際の得られるのを身に餘る幸福だと思つて居る。わたしは此點に就て平安朝の才女達を羨まない。

×

こんな事を書いて居ると、此十年間、まだ澁谷や千駄ケ谷に住んで居た時分から今日迄御交際を願つたいろいろの方が目に浮ぶ。雜誌を出して居た頃每月催す新詩社の小集や短歌會は賑かであつた。先輩では上田敏、馬場孤蝶、蒲原有明の諸先生が最も繁く來て御話をして下さつた、森鷗外先生、島崎藤村先生、戸川秋骨先生、三宅克己先生、中澤弘光先生、小栗風葉先生薄田泣菫先生なども來て下さつた。亡くなつた方では落合直文、齋藤綠雨の兩先生も來て下さつた。御若い方では、高村光太郎さんは未だ美術學校時代から小山内薰、生田長江、森田草平、平野萬里、茅野蕭々、栗原古城、阿部二郞、五島駿吉さん達の各學士は未だ高等學校時代大學時代から、今の澁澤倉庫の支配人川上賢三さんは未だ高等商業學校時代から、辯護士の平出修さんは未だ明治法律學校時代から、此頃伊太利亞に居られる畫家の石井柏亭さんは官報局員時代から、廣島の佛敎中學に敎へて居られる大井蒼梧さんは未だ高等師範時代から、相馬御風さんは未だ早稻田大學の高等豫科時代から、吉井勇さんは芝公園に住まれた頃から、北原白秋さんは雜司ケ谷に居られた頃から、何れも思へば最う大抵一昔からの御馴染である。

中にも平出さん、川上さん、高村さん、平野さん、茅野さん、大井さんは、わたし達の澁谷に居た頃からいろ〳〵と親戚の樣に御世話を下さる。併し今では皆さんの御地位が皆變つて、ずつと大人らしく成られた

華族會館



奥さんや御兒さんのある方も尠くない、遠方で職に就いて居る方もある。其れで自然しげ〳〵御目に掛る機會は減じたが、何かに附けて先づ思出すのは昔馴染である。偶ま御目に掛ればフロックコートを召したり、御髭が生えて居たりして大分樣子は異つて居るが、口を開けば友情は何時迄も同じ樣に若やかに溫かいのが嬉しい。

近頃宅へしげ〳〵と尋ねて來て下さる方は、高村さん平出さんの樣な方の外、大抵此五六年間の御知合である、法科大學の栗山茂さん、田村黄昏さん、藤岡長和さん、文科大學の江南文三さん、萬造寺齊さん、慶應義塾文科大學の佐藤春夫さん、堀口大學さん、日本大學の和貝彦太さん、斯う云ふ方の御話に由ても今のわたしは又種々の暗示を得て居る。

×

わたしは平生殆ど女であると云ふ事を忘れて居る。良人や他の先輩友人の男の方と話して居る時の心持を

云へば、男女の性を超越して齊しく「人」として交際つて居る樣に想はれる、其れが女の知合の方と話す場合には、妙に相手も自分も女であると云ふ事に氣が附いて何だか打解けにくい所がなる、此心理は何う云ふ訣であらう。わたし一人の心持であらうか。それとも男の交友の多かつた清少納言や一葉女史などにも共通した心持では無かつたか。

以上私は自分の事に就て餘りに書過た氣がする。

盆石の打ち方

盆石の打ち方は、池と川と海の打ち方に就て申しますれば、池を打つには、最も汀を明晰に濃く現はし、雲形に行く水際の出洲の兩端は、凡て直線を失はぬ樣に心掛けて打ち、又河川は一直線に打つては風情がありませんから、是非共見頃の所で、川筋を曲折らして流水の姿を見せ川幅も首尾同一では自然になりませんから、川上は細く、川下は濃く打ち、而して曲折した川筋の波紋を畫くに當つて、流水の紆を出すのが實に呼吸ものなのです此點が盆面の死活を制する急所であります又曲水の中心が川筋の中央から外れぬやうに、無理でなく、一羽刷でサッと書き流さなければ河相が活きません、茲が鍛錬の秘訣を見せる所で、細川流では波を畫くに、必らず河川の兩端に流れを見せます、其れから海邊を打つ時は、池水と反對に、水際を淡く打つのが法で、浪にも磯浪、激浪、女浪、男浪等種々の打ち方がありますが、矢張り羽刷か箒で書き凡て、中繼したり中途で羽刷先を變へたりしては物になりませんから一氣にスラ／＼と書き流さなければ不可ません、又盆面の四季を色別にしますれば、春十五日經てば山崩るといふ事もありますから、春は青く、夏は繁みの色黑く、秋は紅葉の紅に、冬は雪を利かして白といふ心持ちで行き、之れを景色に出すならば、春は霞を曳き、夏は夏雲を見せ、秋は月色を鮮かにし、冬は雪を打つて季節を表はします、總じて盆面の主眼は、第一が主石の位置の極め方で、此れが中央へ出過ぎれば、景色が隱れ、退き過ぎては盆面が引締りませんから、先づ此主石といふ土臺の据方を心得れば、添石も自ら格好が付いて活き、根締の石も左右兩端は直線を失はぬやうに撒なくては不可ません。



和歌

一等

雲はしりかもめさわだち大海はあらし來らしも沖なりまさる

下谷　松藤龍子

評、豪宕。

二等

ねむの香の淡く漂ふ扉に寄れば夢の繪模様圓く舞踏す

麻布　漆部惟子

評、着想用語と斬新を極む。

二等

露草の花そよがして絽蚊帳吹く風が生みたる水色の朝

青山　塚田ひで子

評、詩味掬すべく、涼味滴らむと欲す。

三等

鉦やみて若葉を傳ふ雨の音ほのかに聞ゆ山寺の晝

横濱　原瑠璃

評、閑寂の景睹るが如し。

三等

ねむられぬ一夜は胸に手をおきて眞夜の精のすゝり泣き聞く

熊本　本島とよみ

評、下句特に新奇を覺ゆ。

三等

早崎のせとの汐瀬をこぐ舟の進むにしるき君が御代かな

名古屋　瀧本逸子

評、頌美の面白きを取る。

秀逸

夕すゞみ橋のたもとにふと出逢ひ思はぬ人と郭公聞く

仙臺　淺井ひさ

評、人事往々此くの如し。

ふがいなく胸に秘めしありたけを語りしのちのうすら

備前　若葉千里子

寂しき

評、昔人の言はむと欲して言ふ能はざる所を喝破せしもの歟。

○　廣島　香川玉代

花もうし嵐もつらしもろともに散ればぞさそふ誘へばぞ散る

評、或る真理を道破す。

○　美作　いく子

ほつれにし紅色の錦むすびつゝまた新らしき涙するかな

評、多恨又多情。

○　千葉　草枕

卯の花のほろ〳〵散りてつばくらの古巣に濺ぐ雨の音かな。

評、詩趣に富む。

○　横濱　鈴木梅子

梅雨の空愁ふる人の眉のごも何とはなしに薄ぐもりして

評、比し得て面白し。

○　和歌山　優喜子

世をのろひ人をのろひしわが身にも人知れずなく日は多かりき

評、優しき心情は誰もあるべし。

○　出雲　長崎百合子

何やらむおそひ來るかのけはひして雨を知らせぬ庭の芭蕉葉

評、上句妙。

○　大分　橘哲子

つゝみてもあまる思かほたる火のしめりがちなる色のあはれは

評、娄数あり。

○　美作　田鶴子

君見れば何ともわかぬはぢらひの面そむけぬ君をとめゆゑ

評、吾少女ゆゑと自覺したる所、却て其無邪氣を見る。

佳作

○　小石川　下田有喜子

はかなさに涙するなり此頃の我身は何か淋しみのして

○　横濱　ていこ

愛きしらず、喜び知らず、息かよふ、むくろ廿年歩も見ぬかな。

○　新潟　吉野

血を濺き梔をつみて攻めとりし岩靜に五月雨のふる

○　牛込　華子

笛の音と小鼓の音ながれくるん月白きはつ夏の庭

○　本郷　平塚白百合

青さぎや朝空わたる初夏の潮多き岡あやめさくころ

○　横濱　村田たけ子

天地は初夏に入りぬ肩あげの取れし時の十七のごと

○　京都　大野靜子

花によき嵯峨は若葉にさらによし大堰の川に小鮎見るころ

○　川越　綾部歌子

夕雨や町よりかへる四五人のから傘つゞく桑の花のみち

○　群馬　高橋霜月

明日もまた昨日の悔をかさねじと物思ふ闇の夜たゞ寐られぬ

○　深川　安田はるえ

君がふく銀笛の音やわらかく樹々の緑にしみゆくゆふべ

○　相模　江藤まゆみ

あわれ誰か涙の跡ぞ新墓の手向の花に宿る白露

○　三島　遠山雪子

梁州の間を飴屋の笛は来ずなりて十戸の村も靜かに暮れぬ

○　伊豆　深谷せい子

さま〴〵に思ひ疲れし戀なれば吾れに歌なし文月七日

○　島根　青柳秀子

乳をよぶ小牛の背に栗の花仄かに白し夕月の家

○　大阪　三和美子

火ともえて紅消きひなげしは我唇のふるひしせつな

○　岩代　木口世都子

虞美人草は憎くき嬉しきかつ〳〵をのたまふ君が唇に似て咲く

○　門司　新ぐさ

くろみゆく夕べ悲しき波のいろにそゞろをのゝく我の小さき魂

○　宮城　鈴木みや子

戀もなくうれいもなくて安らかにこの身このまゝ初夏に入る

○　美作　いく子

わかき日の思ひ出の文とりいでゝひとり恥らふ紅色の筆

○　信濃　綱島節子

みどり子に乳ふくませてつく〳〵とわかき日思ふ逝く春のまど

○　横濱　吉川つゆ香

手毬より優しき母を欲しといひて小さき膝に涙おとしぬ

○　川越　村松やゑ子

洗髪風にまかせて欄干に少女たゝずむ夏の夜の月

○　神戸　森　淸子

初旅の宿に瀑瀧の音たえてしづまる夜半をなくほとゝぎす

○　千葉　池田かれ子

蓄音機いまなりいづる夕闇の避暑地の町に潮どよみくる

○　川越　吉田とも子

すや〳〵と眠れる乳子の衣縫ふて生い先きなどを思ふ夜半かな

○　紀伊　みさを

健かに生ひ育つ子はさもなくて世に亡きち子の只に戀しき

○　大阪　紫花子

さなきだにきやしやなる君がおんゆびのゆびわのゆるみ夏やせならじ

○　福岡　玉枝

海のかなたばら色の雲たゞよひて舟しづかなり夏の夕ぐれ

○　神戸　山崎山茶花

まつはらをおろちのごとく汽車ゆきぬ浦曲の海岸に西日さすとき。

○　川越　貝谷秀子
寂しさのあふるゝまゝに磯に立てはねたましき飛沫靜かなり

○　群馬　小森谷松江子
櫻の青みかへりて初夏の雲むら立てり紀伊の山々

○　横濱　小豆澤繁子
六月の上旬なつかし麥の穗の黄ばみしはてに海白く見ゆ

○　岐阜　靜江
夜氣誘ふ初瀬の御寺の夜の然なもの思ひして瀬の音きゝつる

○　高松　大内とめ子
處女さぶ青葉のかげをなつかみしはかなき春の夢をしぞ想ふ

○　淺草　渡邊とみ子
夏の月調べ賑ふ四辻の樂屋の前に人おほく立つ

○　名古屋　登貴靜子
いつことも知らぬ旅路に亡き母の見しこ夢さめて今朝のさみしさ

○　川越　笠岡愛子
親も子も妻もあらむをあはれ〳〵醫師の門の繃帶の人々

○　本所　新藤文子
羽衣をわすれし天津姫のごと青葉の影にたゝずむ人よ

○　朝鮮　丸本美都子
みどり濃く水美くしき初夏を何なやむらん面やせのして

○　陸前　沼倉たか
たゝなはる緑の山をみ空行くくも黒く這ふ初夏の風

○　芝區　長井こま子
朝の窓黒髮とくとよる人のネルの袂を吹く若葉風

○　千葉　加瀬きく子
我が夢に通ひ來ませしその君のほゝ笑顔の忘れかれつも

○　麹町　小山ひで
嘲笑ふ態して牡丹くづれけり化粧せむとてわがよる窓に

○　陽山　松下愛子
さわがしき小田のかはづの聲きゝてげに言の葉ぞつゝましとおもふ

○　下野　片岡浪子
夜の灯影あまき空氣にただよへる薔薇のにほひつと胸に入る

○　牛込　井上信子
筆とれば只悲しくて筆おけば只胸せまり亡き君おもふ

○　遠江　ゆふがほ
うらさみし少女十九歳に病みてネルの肌衣のかたの細りよ

○　大阪　赤井きみ子
うちなやむ君かすかたに似たるかな雨に委るゝ藤浪の花

○　本郷　石上治子
雨晴れて夕日まはゆくかゝやけはおもはゆけなり姫百合のはな

○　信濃　嬰子
夕ぐれを十九少女は窓によりふりの袂に詩を秘めて泣く

○　大阪　木原よれ子
旅立ちの後かたつけて又君の事のみ思ひ其日すごしぬ

○　横濱　いし塚
つれ〳〵にNｏｔｅに繪などかき散らす幼き日あり午後の五月雨

○　東京　竹内ふみ子
をりからの小雨に濡れて輝ける灯かげの花よ草市の夜

○　小倉　西原千代子
うの花の咲き散る庭にほとゝぎすなくや五月の雨の夕ぐれ

俳句

天
八州の草蘇へる夕立かな　神奈川　坂田妙子

地
涼しさや鷺脚に水分れけり　岩代　木田しのぶ

人
毒草の犇々と生ひたる清水かな　下野　片岡浪子

秀逸

油つぐ斷食堂や閑古鳥　長崎　林田まさ

蘭を刈つて沼あさましき旱かな　廣島　香川玉代

叙の笹につかへる清水かな　能登　向井きみ

絵團扇や昔箱根の湯女二人　牛込　勝田菊子

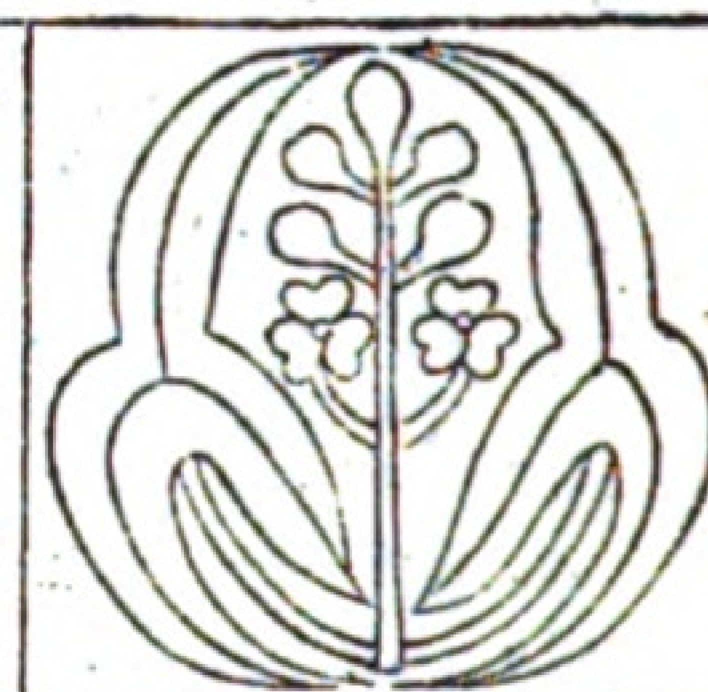
竹植ゑて故山の水を思ひけり　小石川　中川暮子

湖に入る狂ひ神輿や風かをる　廣島宇都宮よし枝
雲のわく中に翠ある泉かな　長野　松下たれ子
橋守の家の低きよ雲の峰　伊豆　土屋つれ子
夕立晴豁然として庭の菊　本郷　城本美知子
夏書する庵の外や竹の月　陸奥　藤井高子
時鳥戀に泣く子もありぬべし　茨城　今泉芳子
短夜の草の庵に細き灯かな　牛込　三橋こう子
千反の青田縫行く流れかな　横濱　佐野孝子
夏木立雲は草書に似たりけり　伊豆　遠山雪子
水底の夏雲奇峰や口そゝぐ　根室　齋藤ふじ
風鈴の風になるなり青すだれ　相模　小西芳子
雨の日やへたりと落つる柿の花　横濱　千代野
夏やせの傷なきむれを抱きけり　本所　小池こう
蝙蝠に隱亡が惡事露はるゝ　芝　遠山久子
なつかしむ藍の匂ひや更衣　香川　大井裕子
洗濯の白きに梅雨の晴れにけり　横濱　天野律子
青嵐や瀬戸のうつみの眞帆片帆　廣島　八田美和子
風薫る書窓裡に人聲長し　高知　須藤春子
御社の屋根千木高に茂かな　下總　染谷まつ子
遠乘の馬に水飼ふ夏木立　下野　岡蛙子
花活けて室あかるさよ青簾　陸中　菅原かつ

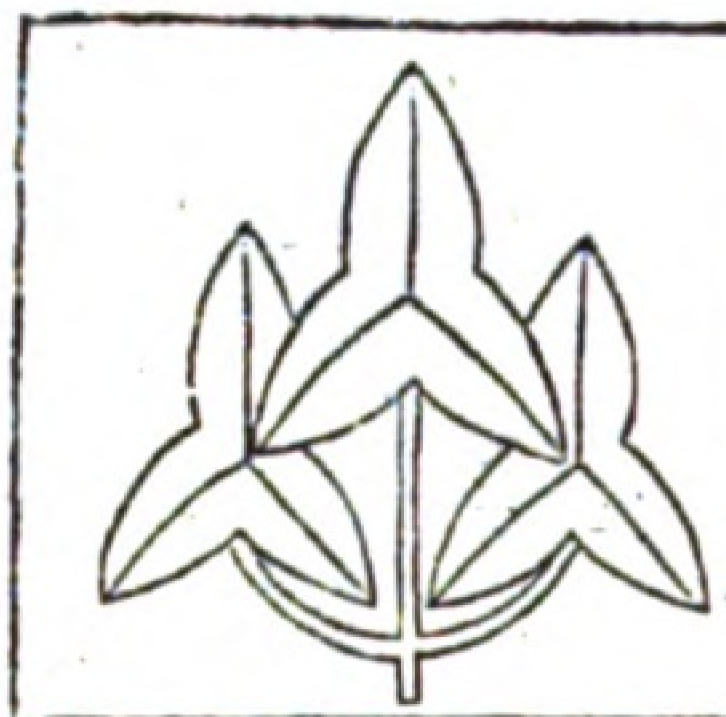
喜多八の親二に後ろゝ門茶かな　新潟　東樹　花子
水鶏きく頭の長さや越の人　栃木　太内きく子
とぶ蛍伯楽は馬鑑讀む　神戸　西村　豊枝
旅一日胸の痛みやさみだるゝ　朝鮮　瓦木　翠子
簀子やすだれなひさぐ京の家　京都　稲井いと子
箏や雛形見育つ里の家　旅順　田中きよ子
鉄に群るゝ緋鯉の上の若葉かな　神戸　植田ゐち子
薄明の一路を失す茂かな　宮城　太田　菊枝
透き通る官女の襟や青簾　上海　松岡壹岐野
隣村に通ふ一路や青木立　芝　和山のぶ子
涼しさや簾を捲けば勝の月　下谷　大上　菊子
朝日さす兎の籠や葛の花　相模　江藤まゆみ
夏草にかくれておはす佛かな　芝　藤山　藤子
梅雨晴の黄昏山や、三日月　廣島　新見あさ代
積鳴く花は簀子日和かな　下關　山本　芳子
簀子や水注ぎたる紅の色　滋賀　園田こと子
河鹿の夜床や草の夏の月　京都　園木　春子
猿臼を祭る社の若葉かな　大阪　駒橋　郁子
更衣伽羅焚き込めし勝りがな　横濱　小松方稲子
流鏑馬の騎手汗入るゝ若葉かな　大阪　浅野やゑ子
蝙蝠や日暮れて淋きし移轉の宿　京橋　川上　淑子
燕や老舗の暖簾をよくす　大阪　木山須磨子
雨の日やほとゝぎす聞く奈良の宿　茨城　鴻巣　梅子
潺々と清水流るゝ月夜哉　東京　高木姫百合
何人か樹みて笛吹く夏木立　横濱　早川　佳子

餘花仄か寺の案内の指す山に　横濱　大村　鶴
巡禮の笠の緒赤き花野かな　越後　東樹　初子
野路晴れて薊の蝶見る欠伸かな　播磨　池田　靜子
石掘れば清水湧き出づ小蟹かな　新潟　櫻井つる子
湯上りの眼に仄白し月見草　神奈川　しのぶ
青嵐孔雀のうしろ吹きにけり　麻布　吉田　勇子
さみだれや湯屋が小路の蓄音機　山形　千草
芍薬や杵屋が娘美しき　本郷　近藤たま子
柴ある庚申堂や羽蟻飛ぶ　越後　高橋　きち
藻の花やぬし住む池の宵明り　深川　小長谷樂子
ほとゝぎす木曾の花濱とゞきけり　伊勢　角田千代子
風薫る大極殿の柱かな　日本橋　土屋　要子
藻の花や寺領の池の晝の月　香川　猪熊さい子
カンテラに烏賊釣る舟や明けやすき　千葉　池田　かれ
夏菊の葉に乾きけり晝の雨　埼玉　植木　豊子
佛事する野末の庵や時鳥　美作　民　子
乘合の馬車待つ藤の茶店かな　靜岡　山内様代子
薫風や何某殿の蔵普請　府下　田中　仙子
朝かほや星のやうるな七少女　信州　戒能　濟子
竹の灯のわびしき嵯峨や時鳥　大阪　奧野　こま
蟬なくやしきりに話す寡黙僧　麻布　野口　照子
蚤に汚す白き枕や嵯峨の宿　牛込　小森たけ子
柳上に五月雨を啼くかはづかな　播州　長谷　八重
瀧壺へ出る山百合の徑哉　淺草　渡邊とみ子

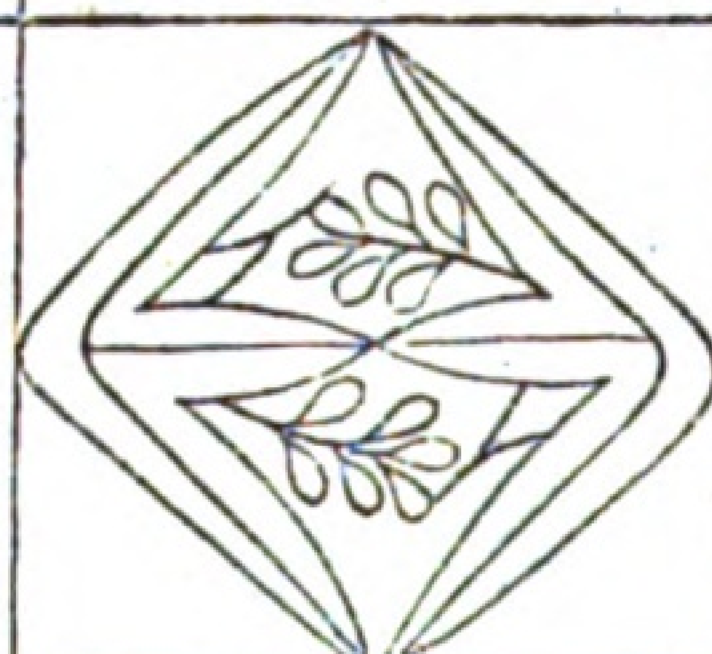
澤瀉の意匠

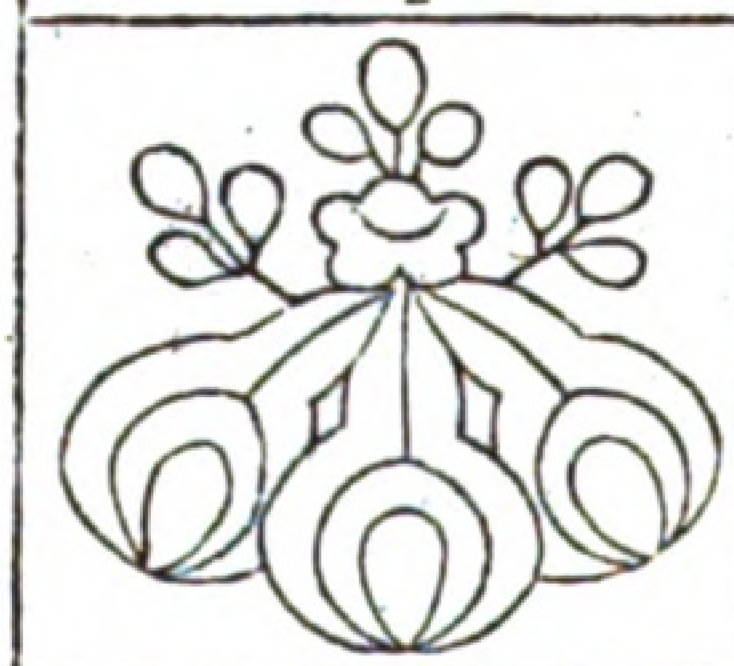

長門おもだか


一ツ花おもだか

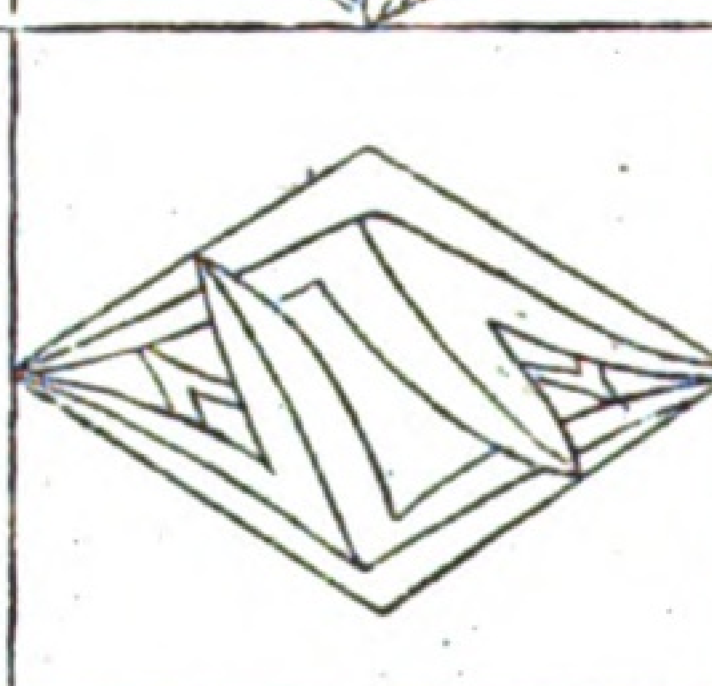

立おもだか


太閤おもだか


角向ひおもだか

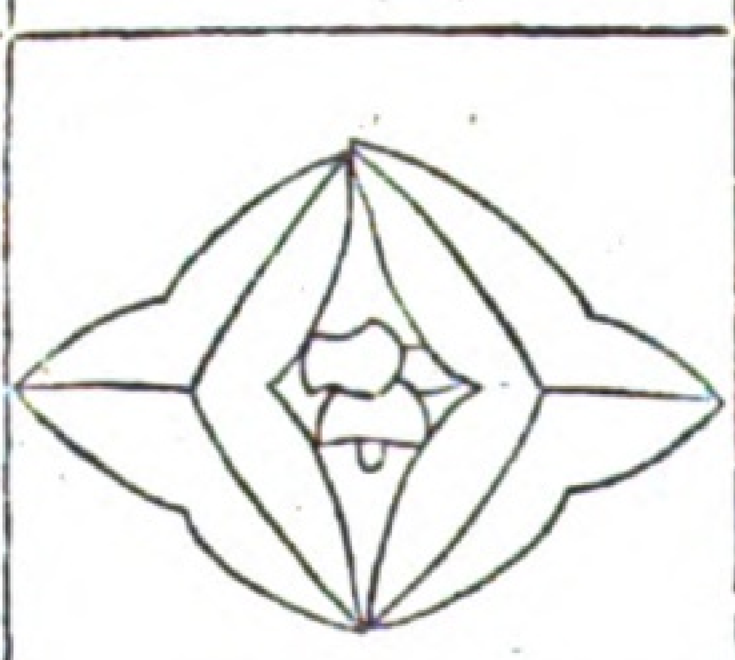

おもだか桐

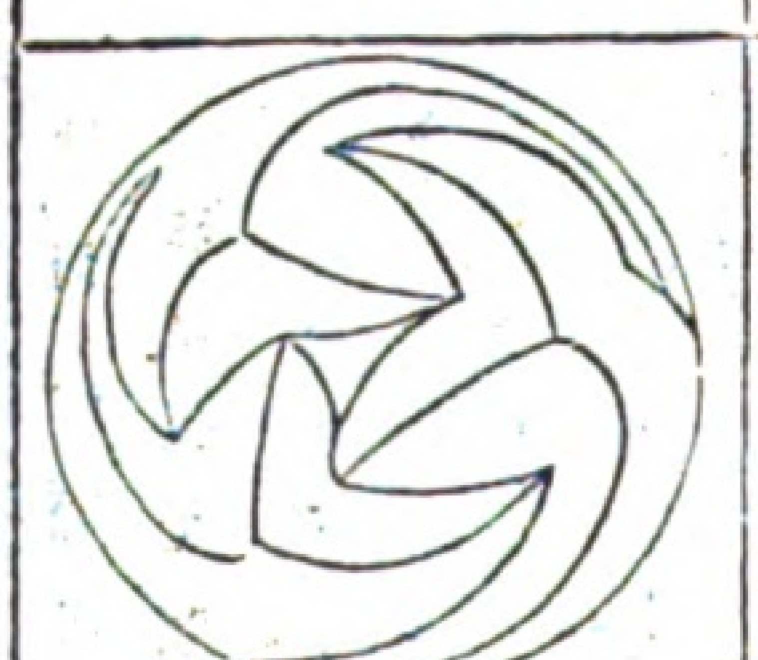

だきおもだか

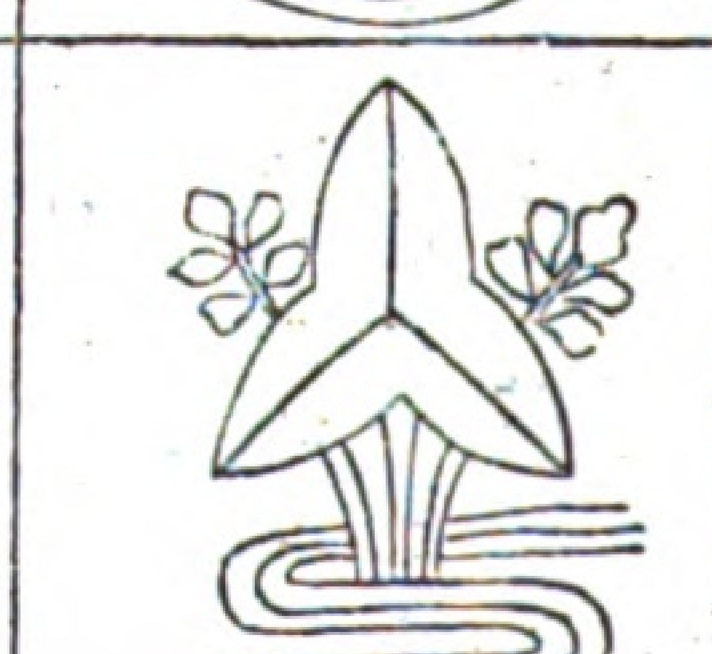

おもだかひし


おもだかてふ


糸わおもだか

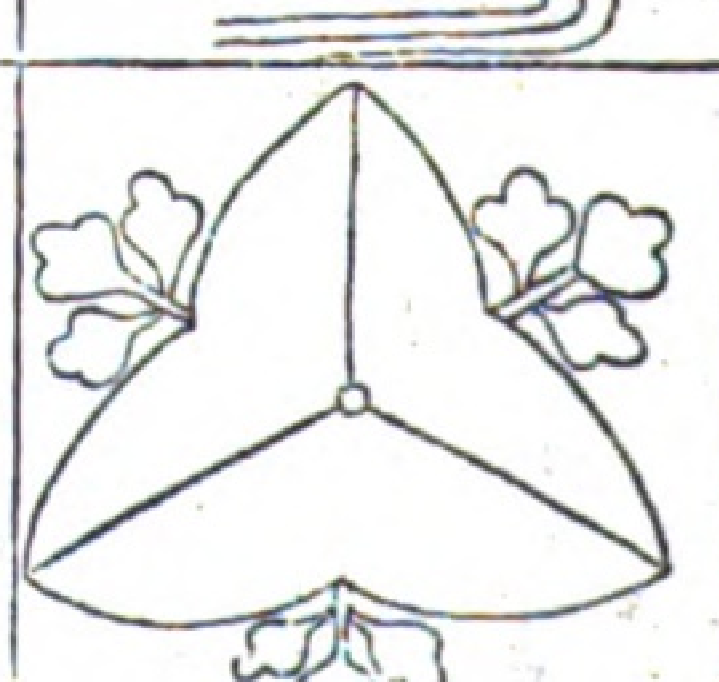

もつこうおもだか

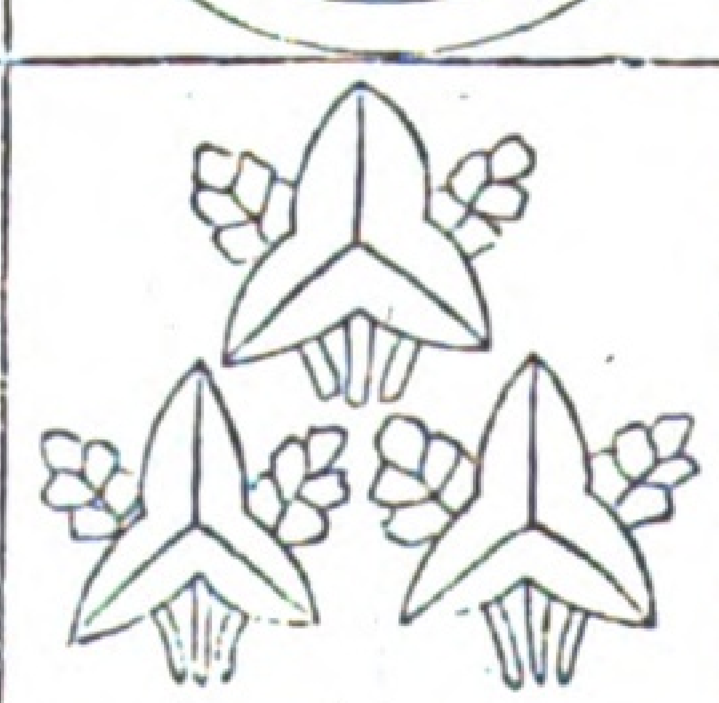

おもだかともへ

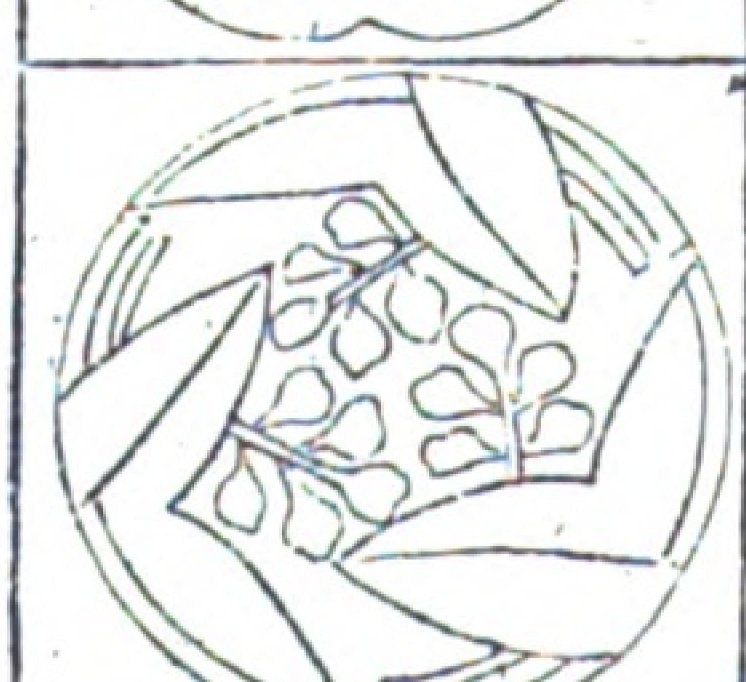

水おもだか


向おもだか


ふせんおもだか


向ふ花おもだか


三ツよりおもだか


三ツ割おもだか



產褥日記の一片

玉露女

○○日、看護婦さんが美しい櫻の枝を形よくピンにさして下すつた。外は陽春の光華やかに鶯の聲も朗らかに聞える。

二十五日の曉三時過から目が冴えて眠られぬので、色々の事を考へ續けて居るうちに、腰の方へ痛みが渡るやうに思はれて、四時頃迄に二度程痛むだので、お產があると覺悟した。而して直ちに起きて傍に眠て居る末女のお尿をさせて、自分の夜具寢着等片付け、靜かに坐して病院へ行く支度に取かゝつた。

家人はまだ皆眠て居るので、極めて靜かに障子を明けて臺所へ出て、お湯を湧かし顏を洗つたりするうちに、女中が起きていよ〳〵朝となつた。病院行の着物を簞笥から出した時。はげしい腹痛が起つていよ〳〵「お產をする」と人に話しても間違はないと思つたので、下女の一人に話したら、直ぐ母樣に告げたので、母樣も直ぐお召代へになつて一緒に行くと仰有る。

御飯を食べる時分にはもう痛みは二十五分目位になつて、家中は子供達も目をさまし、大分ごた〳〵して來た。車に乘つて病院へ着いたのは午前七時頃と思はれる。其日の十一時半に今傍にねて居る妙子を產んだのである。晶子樣のお產室のすぐ傍で、晶子樣のお話は看護婦さんからよく伺ふ。昨夜產褥の雜感を讀んで聞かせて下さつたので、一しほ御なつかしく思はれる然しもうお歸りになつてから幾日かになるので、壁ごしの御聲さへ伺はれぬのは惜しいやうの心地がする。

私は產む時も今も、大概は獨で居る。晶子樣が御良人の障子をはぢく爪音をなつかしむだ其御心地は私に

は得られないのです。私も心臟が惡くてお產の時は陣痛の苦しみよりも胸が苦しい。息が殆ど絕えてしまふかと思ふばかりになる。けれども私はその心臟が弱いと人に話すのを卑怯だと思つて居る。話して人に同情を得て產の時、聲一つでも出した其恥をゆるしてもらはふと云ふ事は私には出來ない。「死んでも無言に。」これが私の覺悟である。

其性質に生れた私には、人の妻が當然受くべきものを得られない。即ち爪音も得られないのである。それでも產の翌日たゞ一度夫は母にはげしく云はれて進まぬ步を此病院に向けられた。其時も私は「母樣に言はれたので仕方なしにお出遊ばしてね」と微笑んだばかり。話は用向以外には出なかつた。恐らく歸る迄にも一度も見舞はれるであらうか……。

それで私には一向に差支ない、夫もそれ以上は迷惑であらう。私等二人はかくて睦まじく一生を暮すのである。

さりながら親子の愛は晶子樣以上にあるかもしれぬ晶子樣はこんどのお子も多摩川の方へ里子に出して更に一言「どうしたらう」とも仰有らぬさうな。私も此夏は多摩川へ避暑するつもり、乳母に抱かれて友禪の衣服を着た凡人の子は里子になつて居られる才人の子と何所かで御一緒になるかも知れぬ。人生果して何れが幸福であらう？　親に離れても才人の子は才女となり。凡人の子は平凡であらうから……。

こんな事を考へ乍ら櫻を見つめて居るとまた昔の色色の事が思ひ出される。

十三の昔、父に連れられて大森の射的會に行つた事がある。朝野の紳士淑女打集まつて雀を擊つて競技をしたり、園遊會を催したりするのである。其會場の裏手は雲雀の聲のどかな春の野で、彼岸花が赤く美しく咲いて居たので私は三人のお友達と、花を摘んで遊んで居た。

其所へ年若き二人の男のかたが寫眞器械もて、寫させてと入らしつた。

美しい藤子樣や春子樣は眞向きに、私は打向きに、花

を摘みながら寫した。

其寫眞今は何所如何なる人の許にあるであらうう・・・・・・。

十六歳の春玉田先生の畫塾へ通ふ頃には、よく櫻の寫生をした。お茶之水女學校の五年生であつた私は、學校へ行く前に琴のけいこ、歸りには英語、土曜日の午後は畫の稽古に隨分とせはしかつた、其外色々の物を習つて一心に勉強した向上心は、うら若い胸に火と燃えて居た。



影のかすむもつらしよそまでは煙な立そ宵のかやり火

其畫筆をしまふのは、いつも夕方五時近い頃なので唇を黒くして先生の御門を出るとすぐ不忍池である晩春の夕暮そゞろ心に、上野の森をさまよつて朧ろ月を見る事もあつた。

或る夕、一重ははら〳〵と散り亂れ、八重はかをれる雪と、梢に殘る其靜けさに、知らす識らず奥深く行つた時は、早やたそがれて、往き來の人も流石にまれであつた。音樂學校へ寄つて、お友達の所へ置手紙して、其横手へ出た時ふと、美しい

人を見た。

男は角帽に正服姿の美丈夫、女は濃い葡萄色縮緬の羽織に派手な立じまのお召着て、しつかと握つた手の白さ原より其顏は花のやうであつた。私はすぐ後から行つた。

心付いた二人はじつと私を見て、淋しく微笑んだので、私も笑つて猶ついて行つた。

「だから私が十九で、貴郎廿五でせう、それでこんな事になつちやつたのよ、私が死ねば貴郎お姫樣とお婚禮するんでせう？」と女が云ふ。

「馬鹿々々しい」と男の聲はふるへた。

と二歩三歩。

「ア、!!!」と劇しく咳いて女は櫻の枝に袖を伏せて泣いた、男も女の肩を抱いて……。

通り過した私は、例の氣性から後も見ずに家路をたどつたが。其晩はヴイオリンもさらはなかつた、讀ふけつて居たダンテの詩の見かけも、見る氣にならなかつた。而して今日何處の姫君かと見た女はかねて病めると聞いた新橋の名妓○○○であると思はれて、忘れられない二人の圖の樣な姿が、幾度か腦の中にくり返された。

ユンケル師のヴイオリンにあこがれた耳を、小清の義太夫にも澄ますやうになり、繪畫彫刻の展覽會に行く傍ら、歌舞伎役者のをどりを賞するやうになつたのは、即ち此後である。ラケット握つて修業後の一時間を、一生懸命競拔したのが、折々は其一時間を圖書館の中に費すやうになつた。見る本の中には近松の世話物もあつた。十六の少女はかくてひそかに〱變つて來たのである。心理の墮落か、趣味のひろがりか、それとも世の中にふれたのでせうか……。

○○日。何處の病室にも、女學世界か、演藝畫報、婦人畫報等が置いてある。女の見る本、大して目や心をつかはず退屈しのぎに。は大抵同じ樣なものと見える。現在私の處にも家から其等の本をよこしてある。然し私はもつと、もつと見たいものがある。其ひまに讀んでおきたいと思ふものが、幾つかある。けれども

私は家を離れて居ても、矢張り女である、四人の子女の母である身は母様や妹等が送つてくれる其等の雜誌以外に、小説をよこしてほしいのとは云ひかねる。氣樂らしくつて……。

今日は雨が降つて居る。晶子樣のやうに音にあこがれてしかも爪音も足音も望まれぬ私はよい音を得て居ます。それは多分雨だれでせう。固くねぢるべく敎へられて居る水口の栓からではないらしい、とにかく上から落ちる滴々の水が下の水溜りに落ちる音樂!!!。聞きやうによると實に實に面白い音譜をたどつて居るかのやう……。



夕立は外山に過て涼しくもみゆるめにかゝる虹のかけはし　（千浪）

ふと年老いた男の人の聲がしました。其聲は家へ來る左官の勘爺やの聲其儘です彼に付いては面白い事がある。

時に奥樣一寸伺ひやすが奥樣は玉露さんてんぢや無からうか伺つてくれと私〇〇の奥樣から賴まれましたが。」

「イヽエ私は〇〇〇子と云ふ名です」

「へエそりやあ存じて居るんで。ぢやあ違ひますんで
「エ玉露樣つて方はよく知りませんね」
「ねエ、わつちも變な名だと思ひやしたんでほんとに：：：いつも其奥樣はやかましく聞いてくれ聞てくれ仰有るんで：：：玉露玉露と仰有いますだ「宇治は茶所茶は玉露：：：」つて云たくなつちまひますアハ、、、、」
「時に奥樣坊ちやんはもう學校へ行くんで？」



「今年から」
「左樣で。一體奥樣の御子にしちや大きすぎますね、坊ちやんが大きすぎるんぢやネエ。奥樣が若いんですね」
「私が三十臺のうちに坊ちやんは二十になるんです」

「成程實に結構、お樂しみですね‥‥何て理くつが好いんでせう‥‥‥」

「エ？」

「ヘエ何何でもないんで」

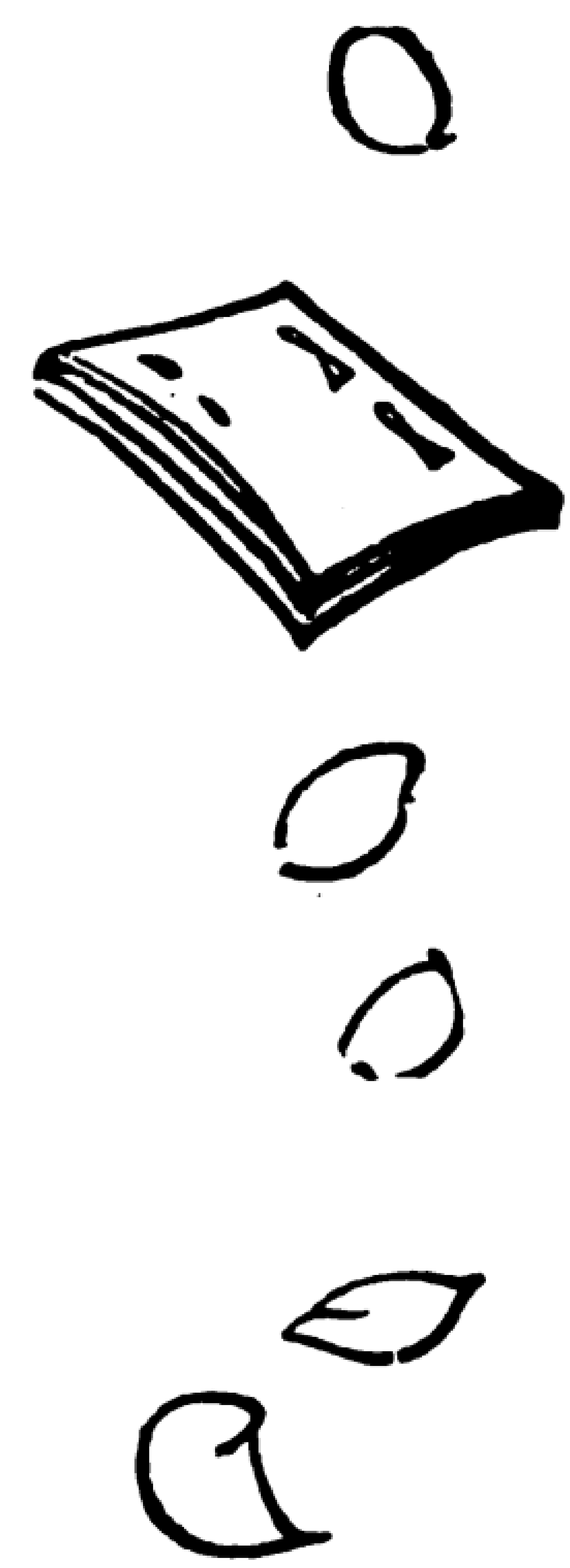
かう云ふ風でいつも私は微笑まされる。勘斎は江戸前の職人である。

前に大森の射的會の事を書いたが‥‥其日、長髪代議士の森氏は七八歳許りの友禪縮緬のお召着た可愛らしい令嬢を伴れて來られた。それが現今に帝國劇場に出て居るりつ子其人である。りつ子が自分の思ひを遂げて舞臺の人となつたのは、どんなにうれしいでせう。人は自己の望み通りに身を處する事が出來れば幸福の至りである。二度と生れて來られぬ此世に女として僅か五十年不足の命を暮すなら同じくは。はえある生涯を送りたい。政所の生涯、淀君の一生、とかくの評はあつても、當人の身になれば。羨ましい。絶世の美非凡の才、無限の富、無上の位を併せ持ちたるクレオパトラの一生は、更に羨ましい。死んでお石塔一つ殘るきりでは、あまりに下らなくて、寧ろ生れて來ぬがましだつたと思ふ。然し平凡はいやだと云つても、社會主義は眞平‥‥‥。

妙子が生れると直ちに八方へ乳母を求めたので最早幾人か來たが皆不合格で歸したので、軍人の細君の乳や、職人の女房の乳を呑みそこなつた妙子は、今猶私の乳と牛乳とを呑むで居る。あゝ私の乳が十分であつたら‥‥‥といつも〳〵思ふ。乳の出ないやうな體の人は子供も出來なかつたらばよからう。少し出る人は子供も少しゝか生まれないで‥‥‥。それでないと下層の人達が、牛乳を得られないで困つたり子供を育てられなかつたりするのであらう。

外は風が吹いて來た、歸る頃は花も實も土に歸つてしまはふ。春の命は短い‥‥‥。あゝ。!!!

（終）



青葉の蔭

内藤千代子

上京してすでに二ケ月
思へばわづらひ多き人生に候かな。

東都はとことはの春とのみ、かいまみし昔の夢の、憧憬の、美しかりしよ、二十年近くを草深い田舎に侘しく過し來て、ふと眼を開いた私は、あまりに幼稚であつたのです。燃ゆる望みを抱いて出京と云ふ一轉機、乏しい中からもお孃樣と立てられて、世間の風にふれた事のない身の、現實の苦い、冷たさに、泣きはせぬが身も心もおきどころのないまで、不安の念にせめられて居る、ツーホワイトラインに胸とゞろかし行ずりの角帽姿にはつとする、そんなやさしい駒鳥の胸の樣な心はやぶられて了ひました、かつては一度でいゝからスヰートな言葉を、その紅い唇からさゝやく樣なピンクの君をもちよいと畫がいた事もありましたものを、花やかなりし、淸かりし、純なりし・空想時代をかへりみればせん方なさの笑も湧く。

厚化粧の頰にその笑をのぼせて、露もしたゝる高島田は思ひきり高めに前髪はらせたウヰンナ卷、三吋の鴇色リボン白茶のパラソルかたげてネルの袂の振長く、白襟きつく引合せ、大またに袴の裾をけて行く姿思へば我乍らかはりやう、氣恥かしいやうな氣もいたします。

自分でひらくと言ひはなつた運命の函、鍵はいづこに……たゞ强かれ――と、心を叱して、大膽と云へば大膽、放縱と云へば放縱な生活。

『一人居てさびしき時はやちまたの人中行きて淚忘れよ』宿へかへつたつてつまらないし、落ちつかぬ不安ながら。外での歡樂ばかりもとめる樣になるんですも

の、私男子の方がお家が面白くないとお遊びなさるのも無理はないと思つてよ、どうせ婚すべきが目的の女ならねば、誘惑もぬれ衣も恐れませぬ、新聞の三面記事位うたはれる覺悟で居ます、腹も立たねば口惜しくもなし、先日も〇〇新聞のハガキ欄でどうとかかうとかつて友の一人が、千い樣殘念でございます、御無念でございませう：：：私は何と申上げてよいやら、たゞ涙するばかりで御座います、と躍起となつた手紙も私はたゞ二三度讀み返したばかりでした。神經が麻痺してるのかも知れません。

そんなものに囚はれはせねど、やるせなきこと不平不安、恐怖、懐疑、いたづらに悶々たる心よ、不遜なる私には、神も佛もたよるに足らぬ、他によつてすくはれやうとは思ひませぬ。

「姉と云はるゝ年ならば、憂き身を膝に投げかけて、つかれし頬胸によせ、たゞ一時を眠らまし。」

縋つて泣かせてくれる胸があれば、一時は心もしづまります。それでよろしい、眞の自分と云ふものは、どうせ永久にひとりです、あゝかくて行く我が世の旅路や長からむ、長からまし：：：

先日の日曜、青葉若葉に雨ふる日、春子樣と美香子樣と仲よしの三人が卓をかこんでまどゐして、取よせたのは紅の露のたれさうないちごでした、美しいコップに入れて、銀のさじでつゝきつぶして、白砂糖をたくさん交ぜて、葡萄酒をついでは、語りながら、食べました程に、顔がぽうつとして來て、もう耳までも熱くて〳〵たまらなくなりました。大きな矢飛白をひつたりと着て、お揃ひに矢の字に締めたお下げの君たちは、可愛い口をよく働からせて、奇抜な氣焰をはきました。そして罪もなく笑ひくづれました、和らかな頬は輝くやうで御座いました。年も上だし、ひとりはぐれたる私は、ピアノに凭つて、微笑んでは居りましたけれど：：：。

幾月ぶりでA樣にお目にかゝつたらば、「千代さんかはりましたね」つていきなり云はれた、襟元一ぱいに結んだ眞紅なリボンが恥かしかつた、十六の時からち

つとも年をとらないつて賞める様な冷かす様なこと有仰る、

「だつて……」と思はず肩に手をやつたら、

「さう、〳〵、肩上げが下りただけです。」澄まして笑つてゐらつしやる？十六と云ふお言葉が痛い程胸にしみた、あの頃のことを御存じの方は、A様ばかりで御座います。もう〳〵お別れでございますわね、御卒業あそばせばもう——光榮ある前途の幸を祈りまゐらすいつまでかくてとゞまらむ、流れは空し法皇の、夢香かなる鴨の水、

「三年の春は過ぎやすし、花紅のかほばせも、いま別れてはいつか見む、この世の旅はながけれど……」

醒めたる人の世の中は、すべて空虚であると云ふ。まだ〳〵私はまよふて居る。何物にも犯すを許さぬわが處女の純潔を誇りながらも、泉子様の様な相愛の二人をみればまた、何かは知らぬあたたかい涙もながれます。由紀様は、私の轍をふまぬ様



にと手を執つてお泣きになりました、夢のやうな物語りは由紀樣のおん上で御座います。

大きな眼をみはつてじつと見つめられる時には、こはい樣な氣もしますけれど……、御機嫌のよくない時にぶつかると、ひどくつれないそぶりをなさるのですけれど、それは〳〵美しい方。小學校の先生です、濃いお髪をルイザに結げて、濃茶のお袴、ひもにからんだ銀ぐさり、靴音高く、白のお振りをしつくり揃へてお通學遊ばすお姿などあまりの、氣高さに勿體ないやう、これが二十二の未亡人？

かいつまんで申せば由紀樣は、孤兒なのでした、十五の秋から叔母樣のお家へ引とられ、けれどそのまゝ女學校もお卒業あそばすし、比較的あたゝかと自由な日を送つて居られたので御座いました、お琴からピアノ、お畫・お茶、お生花、ゆくとして可ならざるはなく、才媛のきこえは高う御座いましたが、非常に感傷のするどい方で、人も世も容れず容れられぬ、と云ふ風でした。叔母樣のお姪をおつぎ遊ばす方は、高商出の敏腕の商學士、（いま支那の支店詰めで赴任してゐらつしやる）その奥樣に叔母樣は由紀樣を欲しかつたのださうですけれど、由紀樣もお一人子の事ですし、云ひ出しかねていろ〳〵考へてる中に、あんな事になつて了つたのです。

旦那樣はおきまりのJの學生でした、同棲半年にみたぬ果敢ない緣、その成立からして……あの由紀樣の火の樣に燃え立つた純情には、あらゆる物も燒きつくされて了つたので御座います。失意の人のやぶられたる胸をまもつて新生涯に入られた。

酒と女にすさび果てた學士の御臨終も、由紀樣のおん手に抱かれて安らかな死顔でしたあまりにロマンチツクなふたりの戀を、紫のスカート長うひくベヌスの女神は、妬まれたのではないでせうか。

『紅蓮の犠牲として、超然の光世に出でゝ、時これ明治三十九』春は校庭にクローヴァ萌え、冬は硝石窓にあられたばしる四高の時習寮に三年の春秋送り迎へた人、素封家の若樣、大切な嫡子で、初めて本郷の下

宿屋に梶棒下ろさせて、何番さんと呼ばれる身になつたのはまだ初々しい二十二の九月。それから新らしい角帽かぶつて制服の金ボタン輝やかし、三十番教室に出入する眉目清秀な優姿、甲斐なきおもひに血汐を湧かせた女學生達はそも何人でありましたらう。雅癖の強い、きちやうめんな、眞面目な勉强家で海山千年の下宿のお女將も、この人には敬服して居りましたさうな。

その謹直家がいかなる動機にふれたのか、一年後のK樣は、まるで別人の樣になりました。女主人公は柳橋の柳子とか云ふ十七ばかりの艶姿、それは／＼最初引ぱり出した友人方もあきれて額をあつめる程な耽溺の仕方であつたさうです。初心な方だけにやりくりがつかなくなつてお國許へ知れて了つたのも早かつたはじめのうちは御意見やら、お叱言やらで借金の整理もつけて下すつたが、それをいゝことにこちらはだん／＼老猾になつて、折花攀柳の風流はなか／＼やみませんでした。學校は落第する、お國



郊外の家にて遠く汽車走るひゞきを聽けば君のこひしき　（石井　眞）

許の首尾は破裂する、弟御は腹ちがひと云ふので、そんな事や何かいろ／＼もめの種でたのしまぬところへ女からは後を見せられた。

それからは自暴氣味で、親類と云ふ親類、友人と云ふ友人、知己と云ふ知己にはあらゆる口實をまうけて借りられるだけ借りつくし、下宿屋は渡り歩く、もう手のつけ樣がなくなつて了つて、友人の名前をかたつたり、私印僞造まで……。

由紀樣の嫁らしたのは、お國からきりつめの學費を送られて、お可哀想にずゐ分ひどい二階にゐて――それでも學校へは通つてゐらつしやいましたが――時分でした。由紀樣の叔母樣のおうちとは遠縁に當るとかで、度々御無心に來られた。ある時も月謝が納められないつて、いろ／＼お願ひなすつたのに、叔母樣はにべもなく煙草を輪に吹く。あまりの事を見るに見かねて、由紀樣がひそかに御用立てゝ上げたのださうですその時から二人は熱烈な戀中に落ちたのでした。

「Kだつて初めからあんな人間ではありませんでしたものを……、その頃のことを誰にきいても、溫和しい方だつた、かたい坊ちやまだつた、つて云はれると、もうもういたはしくて、たまらない程なつかしくて…………」

ほろ／＼と淚をお落しなすつて思ひ入つた御樣子、一部の人々からは高根の花とまで、目されて居る由紀樣です、誰しもこれを信じるものはありませんでしたが、心づよく、家を捨て、叔母樣にそむき、とう／＼御結婚なすつたのです、動坂あたりに小やかな新ホーム……。

漬物のつけ方、御飯の炊き方、お火のおこし方までお雛樣の樣な眞似事に、ある時はしぶうちは持つたまま七厘の前に泣き伏して了つた事もあるとやら、世の常の新夫婦とちがつて、花嫁君はスキートな歡樂の甘酒に醉ふ餘裕もなく、けれど間もない七月には旦那樣めでたく法學士の末班につらなる事が出來ました。私のお訪ねした時に、出ていらしたのは白飛白召したメリンスの兵兒帶で、鴨居に脊のつかへさうな大男、由

紀樣にお目にかゝりたくてと申上げる。

『やあ、さうですか、おはひりなさい。由紀子、由紀、子』

思ひもかけぬ丸髷姿の由紀樣、『まあゝ千い樣？』つて泪を一ぱいためながら、式臺へ飛び下りて、肩に手をおかけになりました。青葉の影のゆさ〳〵と疊にうごく六疊のお書齋、お机の前の座布團をうら返してすゝめられ、お茶よサイダとつ



この日よりわれに戀なし胸うつろ魂うつろ三年經にける（石井夏）

つましい、おく樣ぶり、この時K樣にも紹介されて、あらためて御挨拶した、氣持よくお髮を刈つて丸顏のお鼻の高い一文字眉の、そんなお道樂した方のやうではありませんでした、お廿七のお年より若々しく見えました。

緋の手がらに褪紅色のおみ帶高く結んで華手なおつくりであるにもかゝはらずやつれた、由紀樣はお二十一より更けてゐた。

それから一週間とたゝぬまに、學士は御他界遊ばしたのです。まことに急な御病氣で、御友人も誰も間にあひませんでした、由紀樣と看護婦に守られたまゝ逝かれました。

急報によつて馳けつけたお國の父樣、叔父樣のお眼には悲歎に沈むこの可愛らしい美しい嫁君のお姿が、何とうつつたものでせうか、まるで由紀樣のためにK樣が墮落でもしたやうに有仰つて、泪に正體もない由紀樣にはおかまひなく、學士の遺骸は茶毘一片の煙となして、遺骨を持つておかへりになつて了つた。

由紀樣は大海につき放された小舟の樣。もとより良人の家によらうつもりはゆめさらなかつたが、あんまりなおしむけ、叔母樣のお家へはかへられず。

それから小學校へ出る事となつて、もうK樣の一週忌で御座います、日に〳〵あせ行く頬の血よ、あゝ自ら播きたるものは、自ら刈らざるべからざる、結果なくんば幸なりとは云へ……。

戀もなければ詩も忘れ、やはらかな心の芽は、もみ落されて了つた私で御座います、空想の夢はやぶれて了つた少女でございますもの、二十を越した由紀樣にどうしてそんな戀があつたかと思ひます、私はもう：：醒めたのぢやない、冷えたのだ。

今日も四時過ぎ、汗をふき〳〵宿へかへつて、袴をとるとそのまゝ、今朝封を切つて一通り目をとほしたばかりのL子樣の手紙をくり返した。

『夢はいつまでもわが身にわが心にあらしめたいと思つて居ます。東京の六ケ月の生活は私のすべての夢を破つて了ひました、醒めたる夢は追はず、ふたゝび新らしい心をもとめねば生がひがありません。

あゝふるさとへ、ふるさとへ、

何しにかへるとおつしやつて下さいますな、夢見にゆくのかも知れませんもの。

過去の半生涯は美くしかつた、わが涙は熱かつた、現在のくるしき冷たき涙を替へてまた昔のやさしい悲しみとなすことができるなれば、あゝ私よろこんで都會を去りませう……熱い涙の復活はわが心の復活です

湘南の地にしづかな夢をつゞけてゐらしたあなたの生涯はどのやうに美しくなつかしく思はれるかわかりません。千代子さま、あなた、いつまでも、いつまでも美しい夢をおのぞみ遊ばしませんの、美しいゆめ、美しいゆめを』

云はれぬ心を両袖に抱いて机に胸を伏せた。



松醜く海邊の墓に崩れたるところに出でぬ丘を登れば　（石井勇）

L子樣、罰があたります、相思の人を許されで——三年の戀に一生をあげて捧げしを悔いはしなかつたと有仰りながら……いま何をおつしやつてゐらつしやるので御座いますか。まさかお飽きになつたんぢやないでせう。昔の夢を戀はれるのもさることながら、一生醒めずには居られませんものを。都會の空氣は空想の紅の世界を、灰色にかはらせ

て了ふと有仰いますけれど、工子樣、私には執着するだけの過去もないので御座います、何故ふるさとを捨て、來たなど丶云ふて下さいますな、都戀ふたが無理でせうか、何にも知らなかつた田舎少女、生の叫喚のはげしいのも覺悟の上ではありましたけれど。

あこがれの夢はやぶれたとて、いまさらどうしませうぞ、かへりゆく家はあれどもやすらかに居らるべきすみかではない、行くべき方もおもほえず、あゝ人間は生涯不滿と不平に戰ふが生の意義か、

私は思ふ、帶やリングに生き得る女たちの住む世界こそ、紅や紫ではあるまいか。どうせ不可解な人生だもの、花やかな色のあらう筈はない。

充實したる生活をもとめて甲斐なき努力につながれたる身をもだゆる女、いま解放されたらどうなるか、ひらかれたる道もないのに……みちびいてくれる人もないのに……

妻となるのもイヤ、母となるのもイヤ、オールドミツスですがれるのもイヤ、藝術家としての名譽が得れたらうれしいのか、確固たる信念もなく、めざすべき標的もなく、私の心はさま〳〵に矛盾してるからくるしい、毎日々々、こんな事しちや居られない〳〵とあせるばかり、不愉快だ、不愉快だ。

鵠沼の波の音が戀しい、毎日化粧してリボンかざして道を行きながらも、松青き海邊の孤家に、あの母は妹は、とおもふともう〳〵たまらなくなります。やつぱり子ですわね、姉ですわね、夏のやすみにはかへります。

窓にかたむく夕日の影をみつめてゐると

「内藤さんゐらして？」

玄關でやさしい聲、オヤと思つて立ち上つた。

「あら、まあ、」

「お門を通りましたから一寸。あのネ、」

白のパラソルついてにつこり、いま車から下り立たれたのは美津樣でした、めづらしい日本髮、髱の長い唐人髷に紅白の丈長を重ねて、長いお袖に四つぐらゐしかゝすりのない華手なお召縮緬の紫矢飛白、青磁色

のおみ帶胸高に、ゴールドチエーンゆるうさばいて、水色のベールは細やかな襟元に……。

いくらお上り遊ばせと申し上げてもおきゝ遊ばさず五分ばかりの立ち話し。

『お揃ひよ。』とビロード張りの可愛い小箱を私に握らせ、かたく握手して

『ぢやさよなら。また、』

『あらさう、』

金紋光るゴム輪の車、少し反り身の美しい影は小砂利に二三度ゆすられてすつと、走り去る。

お若い美しい、あれで私より三つお上のお廿一と見えませうか、東都第一のハイカラ學校の御出身ピンクの君と云へば他校までその名かくれなき交際家であつたさうな。春や昔、とき色の洋服召した花十八の御通學姿『向ふ通るドーターの、三人づれのその中で……』

物質に不足のない方は單純である、現在に満足してる方は世にこれほど幸福なことはない、やつぱりお金もちは羨しい。

門の扉によつてた私はそのまゝおはるゝ樣に本郷通りへ出た。

行人ゆく水の常に絶えざるが如き赤門前、木の間をもれて煉瓦作りの洋館、櫻の青葉、クローバーの白い花が點々と、仰げば高き時計臺よ、あの池の汀の椎の木はさぞ翠こく榮えて居るであらう。なつかしや?。

夕風涼しく單衣の袖を吹き上げてぱつとかすかにローズの香が立ちまよふ、お許し下さい母樣、香水のクリームのと云つてる身分ではありませんでしたものを帶もメリンスでは肩身をせまく思ふこの頃……。

大學の赤き煉瓦と茂り合ふ新緑みればなしかりける。

あはれなり女の二十詩もわすれ物さびしさに笑もうりける。

懸賞募集 さま〴〵の人格 (〆切八月二十日)

(新代婦人の解剖)

人間の尊いところは人格にあります、生存の意義はこの人格の向上にあります、いくら力んでもあせつても、人格が劣等では駄目であります、人格の修まらない人は、波濤の荒いこゝろの天地に安住する事が出來ませぬ、と斯樣な事はもう十位になつた子供にもぼんやり分つてゐますからそれに就て今更兎角の意見を求むるのではありませぬ、が、一體この人格といふものはどんなものであるか、それに就て皆樣がそれ〴〵その境遇から見た、徹底した見解、鋭く力のある意見、つまり皮相でなくずつと深みのある味、そして何物にも動搖しない一貫した見識を出して下さい。

賞金

一等	金五拾圓	(一名)
二等	金參拾圓	(一名)
三等	金貳拾圓	(一名)
四等	金拾圓	(五名)
五等	金五圓	(十名)

△記事は日記體、小說體を希望します
△紙數は十枚以上いくらでもよし
但し不常識に長いのは困ります
△賞金は發表の當日現金で送ります
△寄稿は「さま〴〵の人格」と朱書を願ひます
△名宛は「女學世界編輯部」として下さい



少女時代の日記

小式部

私が見えなくなつたので、家では大騷をしたのと見えて、今朝新聞を見ると、お父さんの名で、私を搜す懸賞廣告が出て居ました。「年齡八歲、眼通常、頭髮黑き方、美しき顏色」なんて、私の樣子を悉皆書いて之を見付た人には五百圓を呈すべし、猶ほ親許まで安全に連れて來た人には、金千圓を呈すべしと出て居ました。自分で父さんの處まで行つて、千圓貰はうか知ら。けれど父さんは御承知なさらぬか知らん。

私家へ歸りたくなつたから、百合子さんのお人形を抱へて、御庭の門を開けて海端へ出ました。昨日乘て來た船は港に橫付になつてゐる。神戶へ歸るのだと思つて又乘り込みました。

船に乘つて旅行するのは何より好きです。母さんや父さんが心配して被居るだらうと思ふので、其が氣になつて幾らか愉快が減りますが、是がなければ什麽に樂しいだらうと思ふ。

船員から訊かれたから、明瞭に答へました。「私、吉子と申します」と。「何處まで御出掛ですか」と聞くから、「神戶まで」と答へました。「エ神戶迄ですと」と問返した時に、人々は皆な吃驚りしました。船は桑港まで行くのでした。「御兩親は何處に御在ですか、船に乘つてですか」と聞きますから、「いゝえ」と答へたが急に哀しく成て泣出しました。でもこんな穢い風をして亞米利加に行くなんて厭ですもの。ソレニ頭髮も破れて了つてゐるし、お錢は一文も持たないのですもの。「可哀想に、何うするのですか、船長さん」つて婦人達が聞いた時に船長は「今更何うする事も出來ません困つた者が紛込んだものだ」と呟きました。

一人の婦人は「私の侍女に此の子の世話をさせませう、可哀想にお前さん何うして此の船に御乘りなすつ

たの、御兩親が嘸かし心配して被居るだらうに」と言つて呉れました。又一人の紳士が「海底電線を引上げて、電報を掛たら可からう」なんて言ふと、其の伯母さんに當る先の婦人は「笑ひ事ぢやありませんよ」とたしなめました。紳士は神田さんといふ人です。神田さんは旨しい菓子を澤山呉れました。皆が色々の事を聞くから、百合子さんと神戸から横濱まで來た事を始から話したら、神田さんは大層喜んで、百合子さんなら知つて居ると仰有いました。そして波止場まで來て神戸行の船を見付て居つた時に、急に母さんが戀しく成つて、一刻も早く逢ひたいと思つて居る時に、母さん位の年輩の人が二人の子供を連れて大きな船に乘込むのを見ましたから、大勢の乘客に押されて此の奥さんの後から船に乘つて了つた事を話しました。其から若し洋行する考であつたならば祖母さんが私の爲に銀行に預けて置くお金を引出して來て家への土産を買ひますと御話しました。

海は鏡の様に滑かです。今日で九日航海を續けました。神田さんは私が愛くるしくて航海中の無聊を慰めるには好い友達だと言つて御禮を仰有いました。つひ神田さんの雙眼鏡を海の中に落して了つた。神田さんは偉らい人だと思ひますわ。大切の雙眼鏡を失した事なんぞ何とも叱らずに私の事を天女の様だなんて言ふんですもの。

寂しくつて仕方がないから、殖民地に行く婦人の赤ン坊を借りて二人で遊で居ましたが、二人が轉んで一段下に居つた渡邊さんのお嬢さんの頭の上に墮落て、嬢さんの大切な櫛を滅茶々々に壞して了ひ、其の破片がボーイの顔に當つて血を出しました。赤坊も醫者の厄介になりました。是から後は赤ン坊は貸して呉ませんし、渡邊さんは櫛は破され、額に傷痕が出來たと言ふて私には物も言はず、そして好んで落ちたのでもないのに、私の事を恐ろしいペストの様だつて他の嬢さんに話ました。

けれど神田さんは、「私は吉ちやんの友達だ、吉ちやんはほんとに愉快な子だね貴孃は實に航海の花です。

最初色々の事で苦められたが、今に成つては私の精神上の恩人です」と言ひました。

船が桑港に着いた時、神田さんは父さんの處へ電報をかけました。「御息女は神戸行を間違へて、亞米利加行に乗れり只今安全にて且つ健康なり、次の便船にて御送り申す、神田」と書いてやつたのです。



此の電報が家に届いた時は、母さんや父さんの喜びは言ふ迄もなく、兄さんは「是は吉子に違ひない、まあ好かつた」と言ひ、祖母さんは階子段を飛上るやら町中の人が御祝ひに來るやら、非常な騒ぎだつたさうです。

其の後暫く經つて私は無事に歸宅しました。武ちやんは私が歸つたので大變喜びました。

歸路の航海は實に愉快で充ちて居ました。其は一人の美しい娘さんが日本へ來たくも御金がないと言つたので、神田さんの叔母さんが給仕として使ふから御來でなさいと言ふて旅費を與へて連れて來たのです。そし

て能く吉ちやんの世話をして與と賴んだのですが、娘さんは私の世話は隨分困りものだなんて言ひました。又船長さんも船の番をしたり吉ちやんの番をしたりなかなか忙はしいなぞ言つて居ましたが、些度も意味が分りませんでした。

航海中一人の佛蘭西人が甲板から海に飛込んで自殺しました。

何だか夢の樣ですわ。亞米利加迄行つて又歸るなんて。また何時か最う一度洋行しやうと思ひます。其時は御金を澤山持て行きませう。而して今度は佛蘭西へ行てアルプス山や佛蘭西の人形を見て來ようと思ふのよ。

今日は久振りで武ちやんと遊びました。武ちやんが「蜂蜜お好き…」つて聞くから、大好きです」と言ふと武ちやんは澤山蜂蜜の取れる處を知つて居ると言つて敎へて與れた。武ちやんは、硫黃買ひに行つて來たそして「之を使へば蜂なんか、コロ〳〵醉て了つて、迚も螫すなんて事はしない」と言ひました。又私にビスケットと何か入物を持つて來いと言ひました。何にするの」と聞くと、蜂の巣を取て入物に入れ、其の蜜をビスケットに着けて喰べるんだと言ひました。で食後の御茶菓子に出たビスケットを袂に入れて行つて、一緒にコツソリ出掛けました。

私は四阿の中に入つて硫黃を煮る樣に小さな鍋を石の竈の上に置き、武ちやんは火を焚き付けて硫黃を熔した。而して之を入物に入れて、蜂の巣の中に持て行きました。私何だか恐く成て、「蜂が螫さなくつて」と聞いたら、武ちやんは「大夫丈」と言ひながら徐々と近きました。而して靜かに硫黃を巣の下に置いたが、間も無く武ちやんは「ヤ、大變な蜂だ、螫した！、あツ又た螫した」つて騷ぎ出した。私も方々螫されて命からがら垣根の外に逃げて來ました。硫黃なんか何にもならなかつたのです。十二の巣から蜂が眞黑に成つて出て來た時には隨分驚きました。私の身體にも一度に百足もたかつたでせう。めちや〳〵に螫されて身體中熱くほてつて、痛くて〳〵其の苦しさつたらなかつた

私は再び蜜なんか取らうとは思ひません。

蜂の御陰で私の眼は五日間も塞つて了つて、御醫者さんなんか迚も助からぬと言ひました。顔は腫れて了つて、誰でも私の事を吉子だと思ふ者は無かつた位。武ちゃんも矢張眼が塞つて了つたさうです。而して本に書いてある事なんぞ當に成ぬと言つて居ました。兄さんは「蜂よ、蜂よ蜜蜂よ、晴れたる日には咲く花の蜜を集めて忙しく」



なんて歌ふて居たが、私を見て「吉ちゃんは餘り花の様に美しいから蜜蜂が花だと思つて蜜を吸はうとしたのだ」つて言はれた。兄さんが左う言つて呉れると私嬉しいわ。

兄さんは學校を卒業したから商賣をすると言つて横町に家を借りて、仲買商を始められた。

兄さんは之れでお金を儲けられると、金谷さんと御婚禮を爲さるんですつて。而し

て私に言ひました「吉ちやんも最う少しおとなしく爲て居れば、上等の御嫁さんに成れる」つて。私も是からおとなしく爲て早く御嫁さんの樣になりませう。さうすれば、嫁さんの着る樣な美しい着物が着られるから最う蜂なんかには構ひますまい。

私は兄さんの御店に時々行きます。店は立派で、兄さんは皮張の椅子に腰掛けて居ます。何時かも行つて居た時電話の處でジーと音がしました。蜜蜂の群が唸つて來たと思ふて吃驚して床の上を飛廻つて大騷しました。兄さんは「馬鹿ね、蜂だか蜂でないか分りさうなもんぢやないか」と言ひながら、電話口へ行つて、「ナンデスカ」つて言つたと思ふと、「其れで賣つて了へ」と言ひました。そして帽子を被つて出掛けやうとして「十五分間程次郎さんの店へ行つて居るから、電話が鳴つたら直ぐに呼びに來てお呉れ」と言ひ置いて行きました。

それから五分間も立たぬ内に、電話が鳴つた。兄さんを呼びに行くのも面倒だから、自分で聞いて見ようと思つて、電話口へ行つて、兄さんの樣に「ナンデスカ？」と言ふと、電話が「どなたですか」つて言ひました。で私の苗字を答へると。「石油會社の百圓株がドン〳〵高價を呈しますが、何う致しませうか」と言ふから、「賣つて了へ」と言ひました。「騰貴中なんですが賣つて了ふんですか」と聞きますから「賣れ」と又言つた時に、兄さんが表の方に見えたから、私は飛下りて、間もなく家へ歸りました。

次の朝御飯の時に、兄さんが新聞を見ながら、嬉しさうな顏して、「阿父さん石油會社の株がドン〳〵上ります。私三百枚持つて居ますが、上り詰るまで待つと大變に儲かりますよ」と言ひますと、父さんは「運の好い事ぢや」と仰有いました。又兄さんは「あの株は金に困つて居る人から殆ど無代價同樣で買つたんですが運が向くと避け切れませんな」なんて言つて居ました。

午後六時頃、兄さんが歸つて、雷樣の暴れ出した樣に、私を見て、大きな聲で呶鳴りました。「吉、私の不在にお前電話を取次いだらう、其に違ひない、お前

は一分間でも目を放せぬ娘だ、お前の御蔭で八百圓儲け損つた、眞個に仕樣のない奴たナ」。私も心から惡い事をしたと思つて、自分の部屋へ這入つて獨りで泣きました。

　私の人形も泣きました。母さんは來て一時間許の間種々叱言を仰有いました。私の考無しの爲に家に大損耗を與へた事や、私が行爲を改めなければ家が破産して了ふ事や、又私が株を電話で賣らなかつたら、兄さんの商賣は初から運が向いて居た所だからうまく行つたに違ひなかつた事を言はれ飛んだ事をして呉れたと母さんも泣て了ひました。



　門の外を歩いて居ると、小野さんの乳母が赤ン坊を乳母車に乘せて御守しながら遣つて來ました。赤ン坊は美夫と云つ

て可愛らしい子です。乳母は店に行つて糸を買ふから少しの間番をして呉れと賴みました。で出來る丈早く電車の敷石の上を飛ばせ乍ら愛して居ますと、丁度電車が遣つて來て、自分はよかつたが、乳母車ははね飛ばされて、赤ン坊は眞逆樣に轉り落ちました。乳母が飛んで來て拾ひ上げましたが、白い顏が泥塗れになつて居ました。けれど怪我はなかつた樣です。

今朝から雨がシト〱降つて居ります。雨降りの日は退屈で眞個に嫌ひです。

祖母さんが御部屋に居なかつたから、私祖母さんの一番上等の絹張の洋傘と雨合羽を借りてコッソリ外に出ました。すると武ちやんが古い大きな雨傘をさして釣竿を擔いでやつて來ました。「吉ちやん釣魚に行かないか、そして蟲を掘つてお呉れよ」。私も魚漁る事が好きだから、一緒に出掛ました。雨は益々盛んに降つて居る。其内に大風が吹いて來て、私の洋傘は、ばさばさに破れました。又雨合羽は嫁さんの着物の樣に長く裾を引摺つて泥塗れに成りました。こんな日に草原を歩いたり水の中へ這入つたのが原因で、風邪を引いて寢込んで了ひました。

病氣で家に許し居ると退屈で仕方がない、松江さんと武ちやんと私と三人で種々相談して芝居の眞似を始めました。武ちやんと松江さんは役者に、私は病氣だから後に居て口上を敎へるといふ役割になりました。武ちやんは女に扮つて松江さんは黑ン坊に扮つたのです。松江さんは顏を墨で眞黑に塗つて、手や足も黑くしました。武ちやんには、姉さんが御嫁入する時に着るのだと云ふ出來たばかりの綺麗な着物をコッソリ擔ぎ出して着せました。けれど武ちやんは頭の毛が短くつて足が大きいので好く釣合が取れません。そして兄さんの上履を穿かせたけれども、一足歩くと脫けて了つた。

最う松江さんの黑ン坊は舞臺に行つて腰を掛けて居ました。所が嫁さんの出ない内に何うした機か、紙で拵へた幕が落ちて下ひました。最う見物人は皆んな集まつて居る時だから、一寸困つた。けれども手早く幕

を張りました。やがて武ちやんも立派な嫁さんに成つて舞臺に出ました。私が拍子木を入れて、幕を明けて口上を役者に敎へやうとすると姉さんは、「オヤ、私の着物ぢやないか知ら、まあ」つて眞青に成つて飛んで來ました。而して武ちやんを捕へて手早く嫁さんの衣裳を脫がして了つて、大變に怒りました。

私の學校へ今度新しく御來でに成つた先生は誠に善い人です。而して私の評判を未だ知らぬのと見えて、大變に親切にして下さいます。私が隣席の天野さんの地圖の上に墨を零したら先生は哀し相な顏をして叱りました。或る日松江さんが先生の脊中に知れない樣にしてハイカラの繪を貼付けました。先生が黑板に向つて何か御書きになる時に、其の繪が見えたので生徒は皆んな口を覆ふて笑ひました。私は先生の修身の時間などには些度も先生の仰有る事を聞いて居ません。學校が濟んだら何處へ行つて遊ばうか知らんなどゝ考事をしてゐるから、先生の仰有る事は些度も分りません。姉さんは私を邪魔にしてそんな學校へ追遣るんですもの。私詰らないわ。而して「お前が學校へ行つてると、家内は靜かで取散らけないでいゝ」なんて言ふのよ。母さんまでが私を家に置かない算段なさる。何も惡い事もしないのに皆なから邪魔にされるかと思ふと、いやに成つて了ふわ。口惜しくつて讀本を三枚裂りました。

そんなに邪魔にされるよりは一層家を飛び出さうと思つて、姉さんの行李を借りて私の着物丈入れて、暗くなつてから人知れず裏から持出しました。そして人に見附らぬ樣に行李を持つて停車場へ行きました。それから橫濱へ着いて、何うしやうかと思つて市中を步いてゐると、或る旅館から出て來た紳士は「オヤ吉ちやんぢやありませんか、貴孃はまあ何して居るんです。又た家に歸る道でも間違へたの」と言ひました。此の人は私が洋行した時に能く親切にして下さつた神田さんでした。ほんとにきまりが惡るかつたわ。神田さんは番頭を呼んで「是は私の知つてる娘だ、一緒に洋行した事もあるんだから、朝食の用意をして吳れ」つ

て吩咐けました。

神田さんと一緒に御飯を戴いて色々の話をしました神田さんは私に「其後又洋行しましたか」つて聞きましたから、私「いゝえ」つて言ひますと、「さうでせう其後亞利米加行の汽船に餘まり珍事も無かつたから」なんて私を冷笑しました。そして「御宅では今頃どんなに騷いで心配して居るか分りませんよ、姉さんの御婚禮の支障にもなるし、母さんや祖母さんなぞは腰も立たない程でせう、早く御歸りなさい、溫順しくして居ないと不可ません」つて言はれました。神田さんは直ぐに電報を打ちました。翌日になると兄さんがやつて來ました。家に歸ると、皆な喜んで與れましたが、姉さんばかりは怒りました。姉さんは早く御嫁に行つて與れゝば好いと思ひました。

祖母さんに是からは何事をするにも先づ祖母さんに相談しますと神田さんと約束した事を言つたら、「あゝ其りや善い子だ、何でも是からは左うなさい、私によく打明けてから色々の事をなさい」と言つて喜びました。

私心の中では、姉さんの一生の大事だから、御婚禮の時待婢と成つて御供する事を願つて居るのですが此の事はかくして置いて、祖母さんに、「私待婢になるなんて可厭ですから御隣りの武ちやんや金ちやんを連れて山へ遊びに行きますが、可いですか」と伺つたら、「そんな事するものではない、良く相談に來て與た」と言つて褒美を下さいました。此後も種々の事を祖母さんに相談して褒美を頂かうと思つて居ります。

日本人の最も多く死ぬ病

最近の統計に據れば內地の人口四千九百五十八萬一千九百二十八人中死亡は百一萬六千七百九十八人にして死亡の病症中五萬人以上の者左の如し。

▲肺結核	七萬五千五百四十四人
▲腦膜炎	六萬九千百十七人
▲腦充血及腦出血	七萬八千五百八十人
▲肺炎氣管支肺炎	六萬二千五百七十五人
▲胃の疾患	六萬四千七百八十八人
▲下痢及腸炎	六萬八千八百四十九人
▲先天虛弱及畸形	五萬千九十四人
▲老衰	六萬二千九百九十一人
▲疾病不明	九萬千六十九人

手輕に出來る子供の洋服

和洋裁縫　女子共立會　松江美佐子

△女兒ホコ先形ヨークドレス

此服は極さつぱりとした形で仕立方も簡單で御座います、年齡は、當歲兒から六七歲位まで用ゐます、地質は、これから先きならば、麻織、絹寒冷紗、更紗、等が適當で御座います、そして、その地質が色物の場合でも、ヨーク卽ち胸の切れ、及び立衿はなるべく、白にする方が引立つて見えます、併し前說にも申しました通り白其のまゝでは面白くありませんから夏は白の麻又は絹寒冷紗に細くヒダを取つて用ゐます、ヒダの取り方は幾方の處に、委敷記して御座います。

尙平常着ならば白でなく共、切れに矢張りヒダを取つて用ゐても宜しう御座います、ヨークと身頃の縫合せ目は飾テップ(巾二三分)又は共切れの斜目のもの(巾八分位の出來上り)で押へます、飾テップとは御承知の通り木綿糸で巾二三分に織り、これに、木綿或はガス糸の縫ひをしてあるので、中には、色々な色も御座います、併し洋服に用ふるには、凡て、白無地又は白と、地質の共色とで出來上つたもの丶外は、決して用ゐません、例へば地質が時色の更紗で胸を白にするとすればテップは、白の無地、又は、白に時色の縫絡あるもの、或は時色地に白の縫絡あるもの等を用ゐます、從つて、斜目切れで縫目を押へる場合にも、此の上へ用ふる飾り、(縫絡、又は飾テップ)は、矢張り地質の色と白色との外は用ゐません

尙眞夏には好みによつて衿も立衿をつけずに細く斜目の切れで包んで先きへせまきレースを付け、袖も半袖にして、袖口を細く包んで矢張りレースを付けます、用布は、四五歲兒のために、二尺巾、六尺二寸一歲について四五寸位づゝ加減致します。

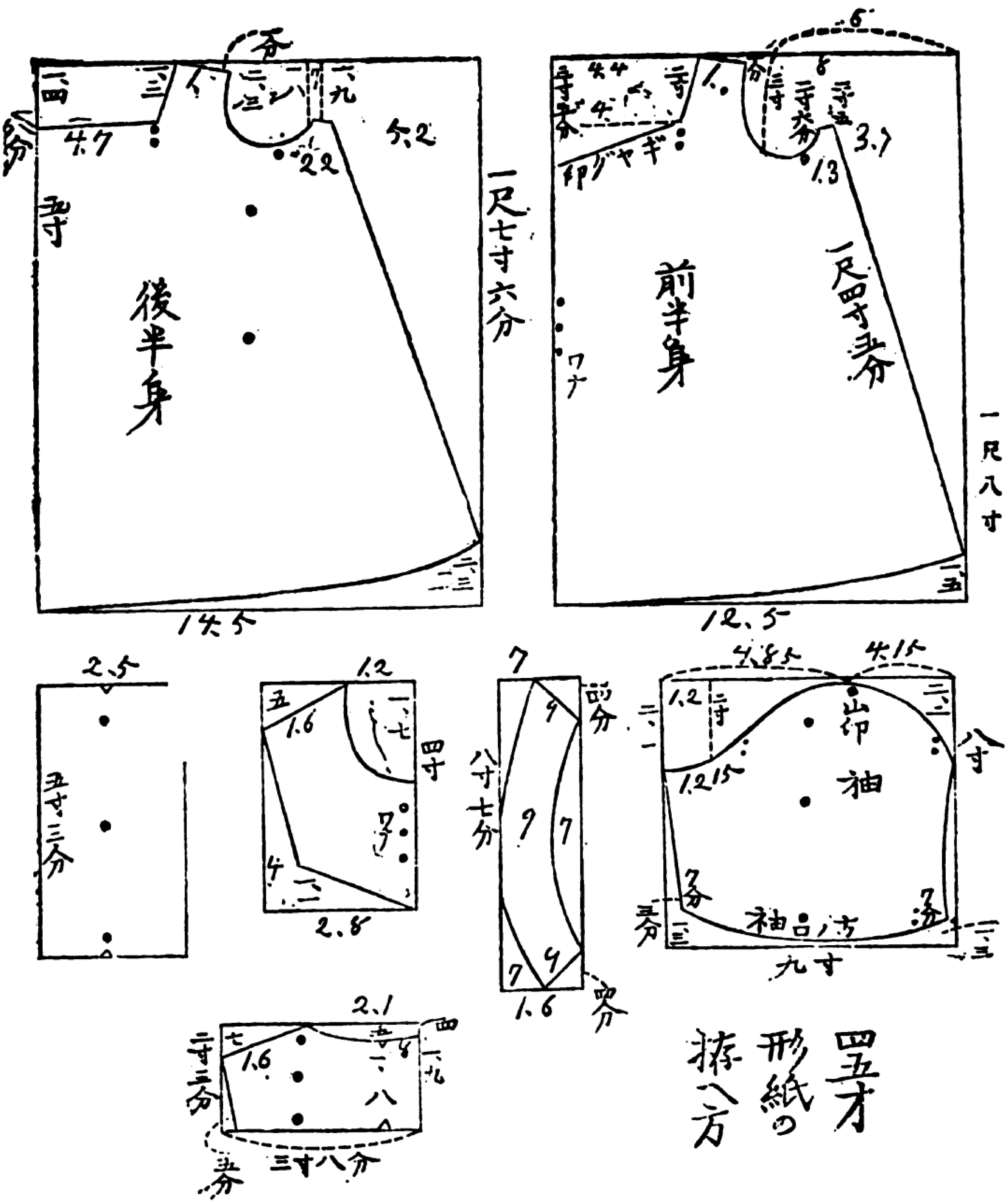




△形紙の拵へ方

此形紙を拵へるには、先づ左の通り、四角の紙を七枚拵へ次に各所を、圓く或は斜に鋏切らぬ内に、地の目縱の印、及びワナの印を夫々

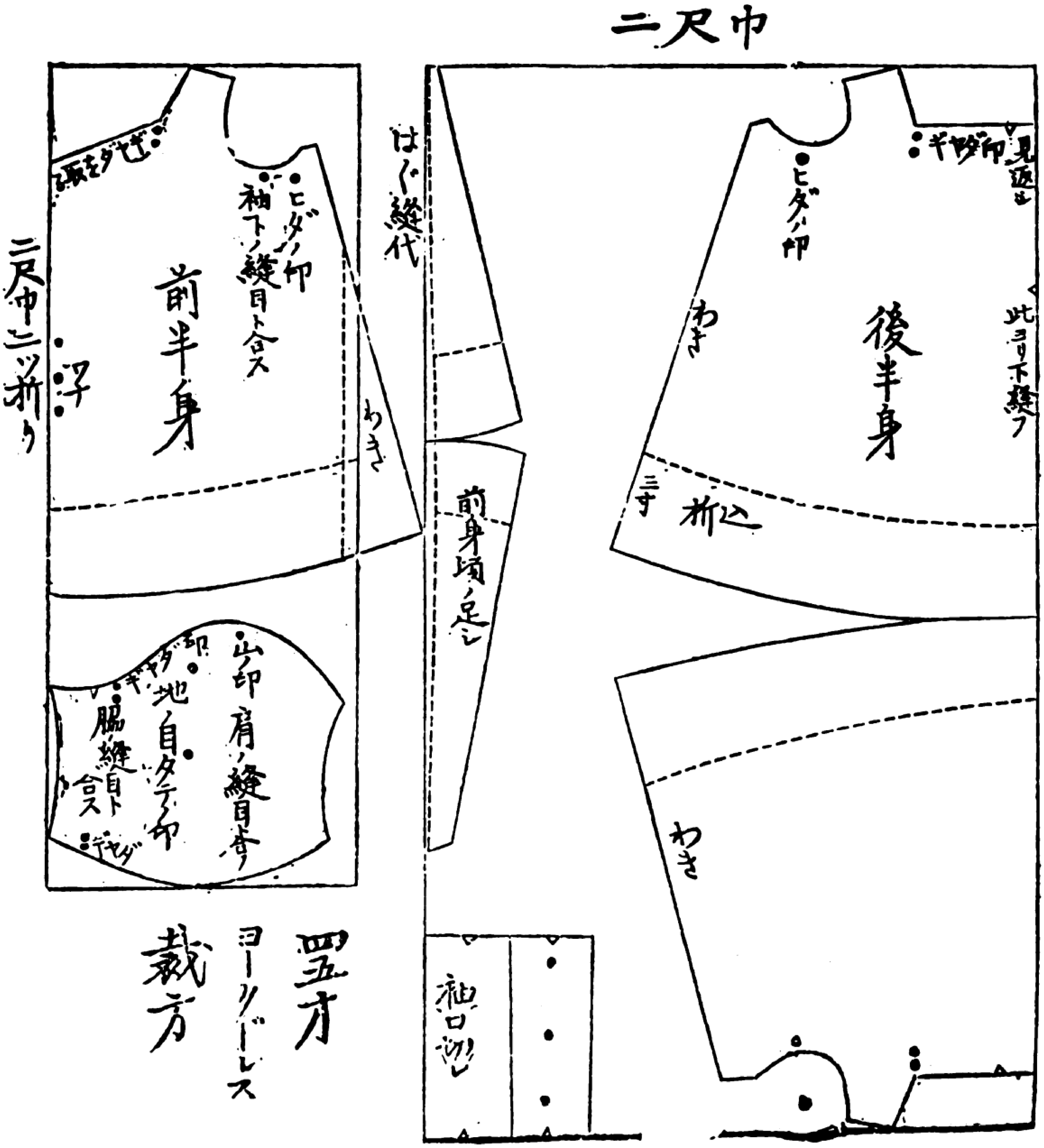
形紙に穴をあけて置きます即ち左の圖の通く三ッ●●●あるのが地の目を縦にまつすぐに取ると云ふ印次に近く三ッ●●●あるのが其所を眞直ぐにしてワナで取る印で御座います、此れが出來ましたなら夫々寸法通りに形を揃へるので御座いますが、總て圓味を付ける處などは無理のないやうに、白紙に裁ち切ります。其れより、各所へ縫ふ時に必要な印、即ちギザギザ印(●●二ッノ穴)山の印とダの印(●一ッ)▼合印(切込)等を夫々落つたく穴をあけます。



四十五才　形紙の揃へ方

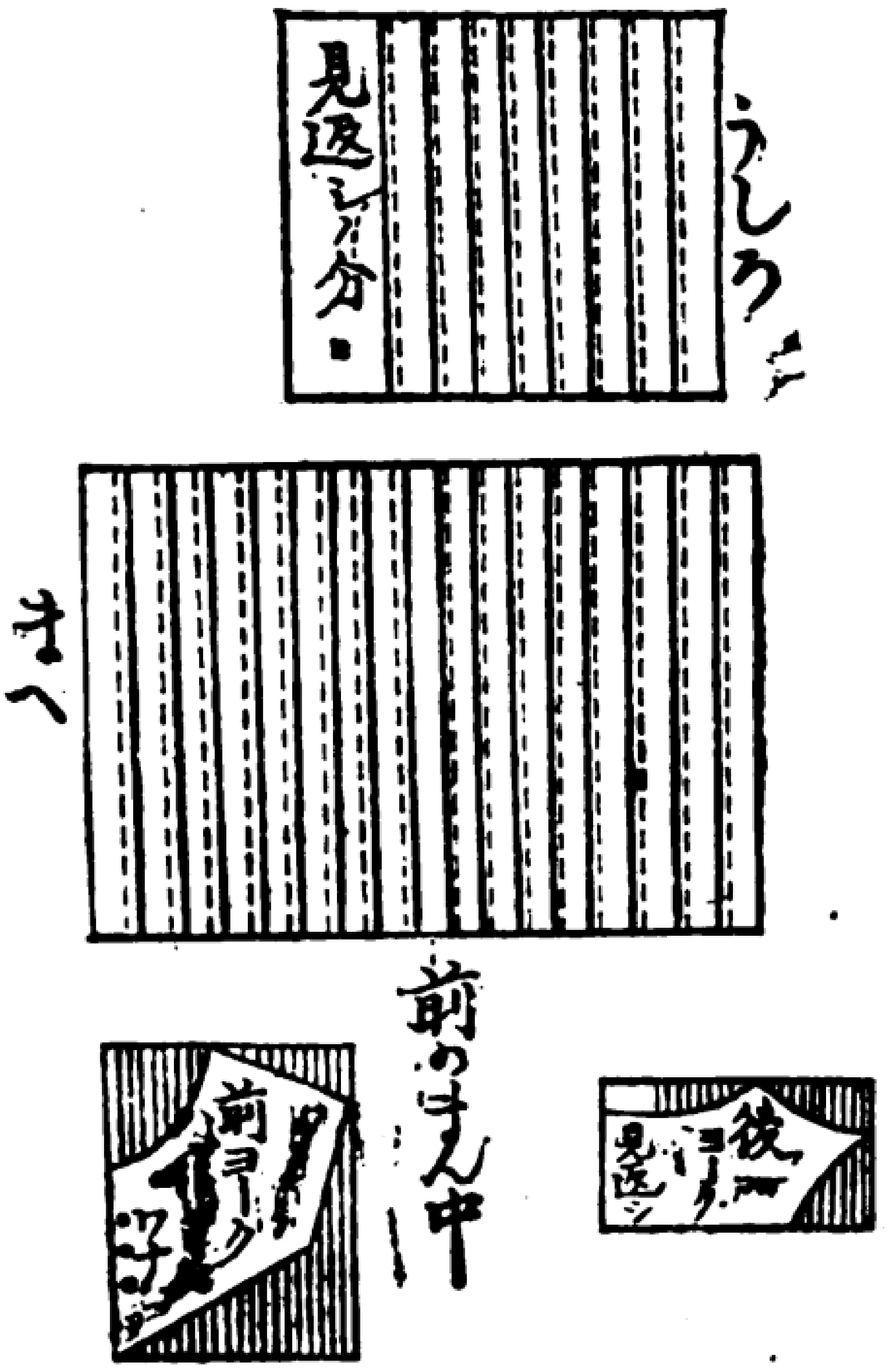
△切地に形紙を宛てゝ裁つ心得

先づ二尺巾の切れで裁つとして　最初に巾の廣いまゝで、後身頃を二ッ取ります、次に巾を二ッ折りにして、其のワナの方へ前身頃のワナの印のある處を宛て、巾の足らぬは後で足す事として其他を形紙通りに、裁ち落します。次に、二ッ折のまゝで地の目のまつすぐの處へ形紙の地の目縦の印のある所を宛袖を取ります、最後に殘り切れで前身頃の足及び袖口切れを取ります即ち左圖の通り夫れよりヨークのヒダを拵へます、出れは、先づ前ヨ



ヨークドレス　裁方

ークを拵へるとして形紙が三寸とすれば切れは凡て其の倍を要するのでありますから、六寸とそれに、ヒダの分を、例へば一分づゝのヒダを兩方で十八本位取るとして、三寸六分、加へ、合計一尺位の巾で丈は形紙通り少しゆつくり位に致し、左圖の通り、左右から眞中へ向けて一分づゝのヒダを取るので御座います。ヒダの山から山への寸法は、四分又は五分位に致します。但し眞中は兩方から向き合ひますから、左右へ三分五厘位づゝ放れた處を山に致します。次に後は、矢張り形紙が、巾四すならばこれにヒダの分を一寸八分以上二寸五分位（これはヒダの數に依る）を加へたもの（丈は形紙通りのもの）を二枚用意致し、何れも端から一すの處を山にして、一すの方へ向けて、ヒダを取ります。これで左圖を通り前は、まん中から二ッ折りにして、其の



ヲナの方へ形紙のヲナの印の處を宛て、次に後は一寸の方へ後ヨークの見返しの方をまつすぐに宛て、何れも形紙通り裁切ります、次に衿は斜目切れで、ヒダを取るも宜しふ御座いますが、ヒダなしでも差支へ御座いませんかやうにして裁終りましたなら、各所にある縫方に必要な印、即ち前後身頃にある、ヒダの印、ギャザの印、袖にある、山の印ギャザの印等を落ちのないやうに、白糸二條で下の切れにまで通るやうに印をつけて置きます。此れより先きに前身頃の足し切れは、はいで、形紙通り正して切ります。

△縫方順序

先づ第一に、袖の袖口の方に、印から印までギャザ縫ひをなし、此れを、袖口切れのたけにちゞめて、縫合し但し袖の方を一分づゝ出し置く事、折りは袖口の方へ向けて飾ミシンをかけ、次に、袖下を合し最初表を見て、先さに、一分出し置きたる分を縫ひ次に裏へ返して袖下を袋縫ひにし續いて、袖口までずつと縫ひます、夫れより袖口の縫代は自然に割り、中から裏へ折つてまつりつけます。夫より身頃にかかる事。これは、先づ後身頃を上部を六寸程殘して其より下を縫ひ、次に、縫殘したる處は上前は八分だけ裏折りて三ツ折りにし下前は巾八分の見返し切れを付け、上下前を正しく重ねてとめミシンをかけます。夫れより前身頃の上部に印から印まで、後は上前の方は印から、端まで、下前は印から身返しまでギャザ縫ひをなし、何れもヨークに

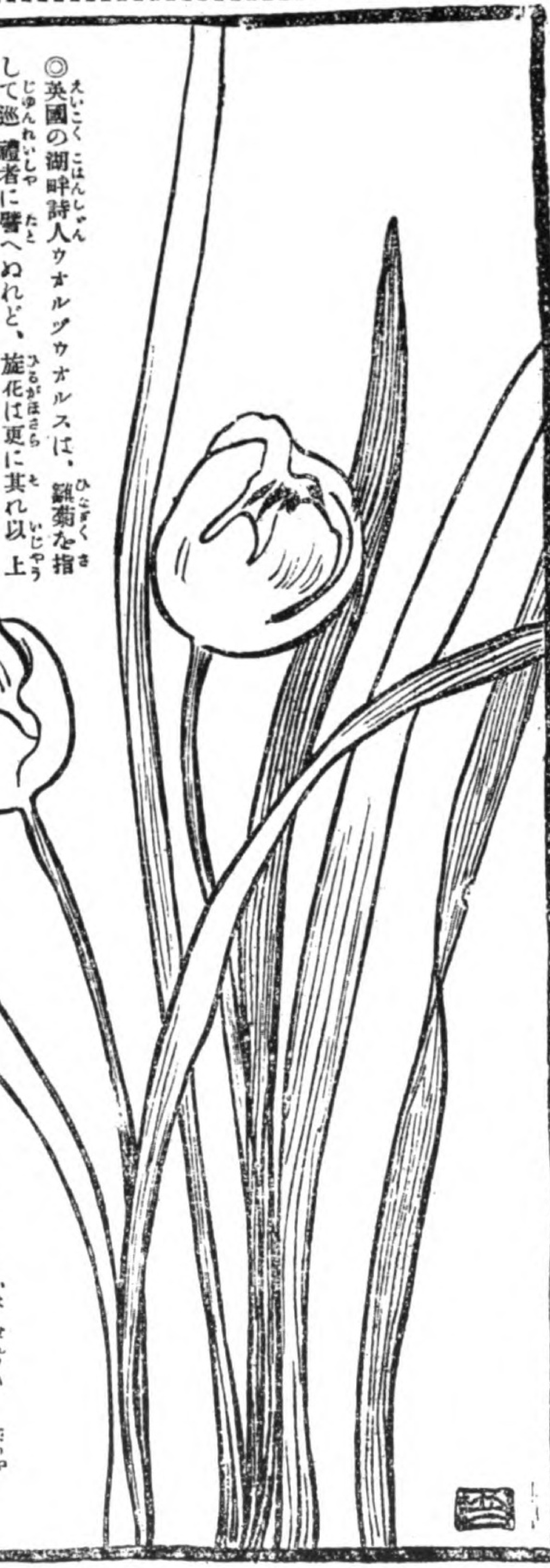
合してちゞめ、但し後の上前はヨークを八分出し下前は縫代だけ出し置き身頃と縫合したる後何れも身頃と同様になす、次に前後身頃共二分縫代にて縫目は表へ出してヨークと縫ひ合し、折りはヨークの方へ向け、肩を二度縫ひになし、次に、ヨークと身頃との縫目を飾テップ又は共切れで押へます、共切れの時にはヨークの形通り前をアナにして後までつゞけて、巾一寸二分位のものを拵へるか或は若し斜目切れがあれば巾一寸二分丈一尺七寸位のまっすぐのものを拵へ何れも寒冷紗にて裏打ちをなし端より三分づゝ入って両端に、縫箱又はのテップを宛て、次に端を二分づゝ正しく折りて出來上り八分の巾となし此れで縫代を押へて両側へミシンをかけます、分し斜切れの時は隅々を道行衿の如く折って置きます、夫より、脇を袋縫ひになし、前後にあるヒダの印を脇縫目の處でつき合せとなし、裏へ巾着ヒダの出來るやうにして、一寸綴ぢ置き袖をつけます。袖は、袖付けの方に、印から印まで、ギャザ縫ひをなし、袖付けのあきに合してちゞめ、袖の一番ひくき處即ち一寸程入りし處と、脇の縫目と合し、袖下の縫目が前に廻るやうにして袖をつけます此縫代は、巾七分位の斜目切れで包む方が綺麗で御座います。夫より立衿をつけます衿は短かき方即ち上部を圖の如く、裏表合して縫ひ(表には寒冷紗の裏打ちをなす)折りは表の方へつけ、表へ返し飾ミシンをかけ、次に表一杯を持ちて、ヨークに縫付け、同じく飾ミシンをかけ、次に、裏をまつりつけます、最後に、裾を三寸位折り其先きを又淺く折ってまつりつけます。但し裾の開いて居る分は所々でいせて置きます。

注　意

右の通り記して置きましたが尚お解りにくい所があればお答へも致しますし若し形紙及、縫上り雛形の御入用な方は郵税共三十七錢爲替券封入で御申込みになれば到着順に調製御送付致します宛名は、女子共立會の事。尚實物の仕立は依頼にも應じます、代價は四五歳兒から六歳位のために、色縮、更紗類、絹寒冷紗類で地質仕立代附屬品等全部で、凡そ貳圓位で御座います。又二三歳兒のためには壹圓五拾錢位で出來ます。

子供洋服夏期講習會

女子共立會では、例年の通り、八月一日から十日間夏期の講習會を開きます、時間は午前と午後の二部に分ち、午前は、八時から十二時まで、午後は一時から五時まで、會費は、何れも貳圓で御座います、尤も終日、即ち二部兼修の方は參圓です。御申込は、七月二十五日迄に、本郷駒込追分町三十一番地、女子共立會宛の事尚希望の方は講習中寄宿をなさる事も出來ます。開會中の食費は金參圓で御座います。



◎英國の湖畔詩人ウオルヅウオルスは、雛菊を指して巡禮者に譬へぬれど、旋花は更に其れ以上に巡禮者の趣きあり。

◎果敢なきものたゞ譬へて、露の干ぬ間の朝顔とぞ云ふなる去りながら朝顔には、假令寸時なりとて矜とすべき色彩あり歌にも詠まれし榮譽あり。これに比ぶれば、ひるがほの花は何の色彩もなく、何の榮譽もなく、空しく咲きて空しく凋み、歌にも詩にも殘らず永久に消えてゆく。嗚呼、その如何ばかり光榮なき女性の一生に似たるかを見よ。

◎某の城、某の館、古へは武夫嚴めしくよろひ、美人華かに裝ひけむも、今は芊々たる草野の間に、殘壘破壁のみ僅かに其址を止め、斷雲低く地に迷ふ時、徐かに佇立みて首を垂るれば、太陽の色些しかざろひて夢より淡きひるがほの花、そゞろに追恨窮りなき往事を語らむとすなる。

◎霖雨霽の日、寂しき小徑を辿りつゝ、今歲始めて旋花に遭ふ白き面に稍ゝ濃く紅色を潮しぬ。宛ら舊き情人に遭へる時のやうにぞ。



靜御前（下）

物集梧水

◎鎌倉殿の御尋問

明くれば文治二年なり。春は心の浮立つもの、況して都の人々は、東山の曙、鴨川の夕べ、現世の樂しさを嬉しみあひぬ　然しながら爰許北白河なる磯禪師の家には袖しぐれ母子の兩女に降りそゝぐも憐れや。

判官殿は如何に遊ばしぬらん。吉野山にてお別れ申したるまゝ、音信もなく。

と、靜太息をして云へば、母の禪師も同じ思ひの、

人の噂に聞きぬれば、最早や多武峯を出で給ひし由必ず近き中に音信ありなん。

と、愁はしげに云ふ。靜また、

鎌倉殿の御追捕嚴しければ、北國路へ落ちゆき給ふこと、もとより心許なく思はれて。

と、心細げに云へば、禪師、

世の人も判官殿を怨みぬる上に、且つは鬼神を取拉ぐ氣性しませば、爭でか無下に捕へられ給ふべき

と、我娘を慰めぬ。

斯く母子が心細く語りあへる折、京都守護職北條四郎時政の武士俄かに來りて、泣き悲める兩女をば、有無を云はさで引捕へ、關東の荒武者共に護らせて、其儘鎌倉へ送りぬ。

頃は彌生の花の盛りなり、靜は母の禪師と共に、賴朝の前へ引出されぬ。筑後權守俊兼と云へる武士、靜に向ひて、

其許は年久しく判官殿に傅きたれば、定めて判官殿の在所を知りぬべし。隱さずに申せ。

と云へば、靜涙を流して、

吉野山にてお別れ申したるまゝ、其後は雁の音信すら無く侍れば、如何坐しますやらん。妾だに存じ侍らず。

と、聲を潤ませて首垂れぬ。民部丞盛時と云へる武士側らより、

其は眞實とは思はれず。他の人々には兎にも角にも其許に音信なきなどゝは、如何にも虚言に似たり。

と云へば、靜恨めしげに首を揚げて、

然ればにて候ふ。妾も餘り判官殿の音信なきに、如何にし給ひしならんと案じ暮し侍りつるが、是れも鎌倉殿の御掟嚴しき故にやと心得候ふ。

と答へぬ。尙ほ荒くれたる武士共、左右より頻りに義經の在所を問へど、靜も元來知らぬことなれば、唯だ知らぬ旨のみ答へけり。賴朝心を焦立てながら磯禪師に向ひて、

其許は、如何なればこそ、天下の罪人に靜を嫁しつるぞ。

と、聲を勵して叱すれば、禪師、

靜、十五の年までは、多くの人々より難有き仰せありしも、更に靡く心も候はざりしに、神泉苑に院の御幸ありし時、判官殿に見初められまゐらせ、剰なきことになり侍りぬるが、淸和天皇の御末、鎌倉殿の御弟にわたらせ給へば、是れこそ身に取りての面目と思ひしに、今斯るとは夢にも爭で知り申すべき先に判官殿の都を落ちさせ給ひし折、妾が靜に思へる旨を聞き侍りしに、靜の申すやう、假令御仲違ひ給ひて、天下の罪人とならせ給ふとも、一度添ひ參らせたるを、爭でか妾のみ逃れん。唯だ何處の果までも御供仕らんと云ひて、斯くは吉野山の奥までも附添ひまつりぬ。是れ畢竟判官殿に貞節なる娘の心ばえにぞ侍る。

と、些かだに臆したる色もなく答へけり。禪師は眞に潔よき婦人なるかな賴朝、梶原平三景時に向ひて、聲あらゝげ、

靜が懷姙せるこそ、仇敵の胤を遺すなれ。汝、此處にて其腹を裂き子を取りて棄てよ。

と命ずれば、靜は呀と怕れ戰きて母禪師が脇に平伏す禪師は娘靜が手を拉りて、互に、聲を限りに泣く、賴朝の側らにゐたる夫人政子も、餘りのことに愕き、顏を背向けて涙流せば、流石に猛き關東武士ども、眼を閉ぢて愁ひに沈みぬ。梶原進み出でゝ。

御命のほど餘りに無情とこそ覺え侍れ。分娩の後は兎も角も、其れまでは某に預け給へ。

と申せば、賴朝稍〻思案して、



然らば汝の言葉に從ひて、禪師母子を預けん。

と云ふ。靜は、梶原に預けらるゝと聞きて殿へあがり矢庭に懷劍拔きはなちて自害せんとするを、斯く見て側らに居たる工藤左衛門尉祐經、靜の手を抑へながら賴朝へ向ひて

靜どのゝことは、某に御任せ給へ些か仔細のほどこれあり候へば、

斯くて祐經は磯禪師母子を申受け、賴朝の御前を退きたる後、堀藤次親家の許に預け置きたり。

◎鶴岡八幡宮の男舞

彌生の春も靜が涙の中に暮れて、鶴岡八幡宮の社前なる藤の花、今を盛りと咲き匂ふ四月初浣となりぬ。磯禪師母子は、堀藤次が許に侘しく暮しぬるほどに、頼朝の許より使者のもの來りて、近き日に、鶴岡八幡宮にて男舞を仕れと命じぬ。靜、疾病あればと辭退せしに、尚ほ再度三度折返して强ひられければ、

妾は元來賤しき身にて侍れば、爭で此身をば惜み候ふべき。然りながら一度身を判官殿に委せまつりぬる上は、人の前にて舞ふこと、甚とゞ心に辛く侍る妾が心を酌み給ひて、此事偏へにお免し給はれかし

とて、更に承諾ふ氣色も見えざりき、其後、工藤祐經の妻女來りて、四方八方の物語の末に、

御身は知り給はずや。鶴岡八幡宮は當國一の無双に渡らせられ、鎌倉殿の御氏神なれば、判官殿をも何どか護らせ給はざるべき。明日御參詣候ひて、序でに御法樂し參らせなば、鎌倉殿と判官殿との御仲も、軈ては和睦らせ給ひぬらん。且つは奥州に渡らせ給ひぬる判官殿の、若しや此事を聞召し給ひなば我が爲めに斯程までの丹精、如何ばかり嬉しう思召し候はん。必ず理を枉げても御參詣候へ。妾も御供仕らん。

と、懇ろに說きければ、靜は、是れぞ頼朝の旨を含みて來りしとは知らず、唯だ其の情ある言葉に動かされて、

然らば御參詣仕らん。鎌倉殿との御仲違ひの和睦り給ひなば、妾が願望、何かは及び申すべき。明日必ず御案内して給ひてよ。

と、甚とゞ嬉しげに承諾ひけり。

明くれば四月八日、今日こそ名にし負ふ日本一の舞の名手靜が久振にて男舞を舞ふなれと、老若男女貴賤の分ちなく、皆な鶴岡八幡宮の畔に推集りぬ。侍所よりは警護の武士を出して戒めけれど、是れほどの見物は一生に一度の大事ぞと、推しあひ、へしあひ、負傷くも顧みず、忽ち八幡宮の廻廊の邊に人山を築きぬ

舞臺は廻廊の中央に高さ三尺許りに設け、柱は唐綾紋紗にて包みたり。

賴朝は早朝より政子を伴ひて正座に坐れば、幕下の家臣ども星の如く左右に控ふ。既に巳刻（午前十時）過ぐれど、静は未だ來らず、衆人の者心を焦ちて待つ所に漸う三挺の輿は來りぬ。まづ先なる輿より工藤祐經の妻女下るれば、續いて磯禪師・静の兩り女も輿より出づ、滿場の人々皆な色めきわたりぬ。静は、内心欺かれぬと思ひながらも、徐ろに神前へ進みて、珠數爪繰りつゝ懇ろに伏拜みけり。



賴朝より母子に男舞仕れと御命ありければ、磯禪師先づ起ちて舞ふ。鎌倉の武士ども、禪師が舞だに是れほど面白ければ、静が舞は如何ばかり面白からんとぞ云ひあひける。

軈て禪師の舞ひ了れば、祐經の妻女、靜に向ひて、
鎌倉殿の御命にて侍れば、男舞仕り侍りてよ。
と云ひしに、靜胸を抑へて、
妾、近頃離別の悲愁に沈み、剩さへ判官殿の御生死も明かならざれば、胸塞がりて、思ふまゝ得舞はでこそ。
と辭するを、祐經の妻女更に推返して、
御身の言葉、實に道理に侍れど、唯だ御身の舞を見んとて、斯く故らに鎌倉殿の御出場に侍れば、枉げて一差舞ひ給ひてよ。
と、言葉優しく説きぬれば、靜稍〻思案して、
此度は偏へに許して給はれ。妾は御不審の身にて召下され候ひぬれば、鼓打なども一向伴れて參らず。重ねて鎌倉へ來りぬる時は必ず舞の支度して參りなん。
と、固く辭して肯かざるを、尙ほ再度三度强ひて勸めしに、靜終に辭すべき言葉もなく、詮術盡きて承諾ひけり。

賴朝、誰れか囃子を勤むべきぞと問へば、人々、工藤左衛門尉祐經の鼓、畠山二郎重忠の銅拍子を推しぬ軈て支度整ひ、祐經は紺褐の袴を高く掲げ、木賊色の水干に立烏帽被り、重忠は白き大口に白き直垂を着紫革の折烏帽子を被りて出でぬ。御簾の內外に群れる人々、今や靜の出でんことを待ちに待つ。
靜は再び遙かに神前を伏拜み、さて其の起立たるを見れば、白き小袖に唐綾を重ね、白き袴踏みしだき、割菱縫ひたる水干に、丈なる髮を高やかに結ひぬ。眉細く、眼明かに、口元締りて、憂愁を帶びたる顏色の、薄やかに化粧したるさま、又なく淸艶を極めき。
晷は午に近く、薰風徐ろに若葉を吹けば、社頭の藤波ゆら〳〵と搖ぎぬ　鼓の音一鼓、銅拍子の音一聲、靜、やをら起立る。續いて一聲一鼓交〻相打てば、靜、皆紅の扇を颯と開き、摺足輕く舞ひ出でぬ。實にや日本一の名に背かず、其手振、其足踏、宛ら天女の假に現世に降りて舞ふかとばかり、清き聲にて、目出度く大御代を祝ひことぶく「君が代」を謠へば、見る人

皆な醉ひたる心地して感じ入りけり、其曲終るや、靜面前義經の姿を見るらん心地して、水干の袖を外しさま、扇打かざして、

吉野山峯の白雪踏みわけて
入りにし人の跡ぞ戀しき

と、淸く高く吟じ出でぬ。滿座の人々これを聞きて、思はず手に汗を握れば、靜、再び他の一曲を謠ひ更に又高く朗かに、

賤や賤しづの苧環繰返し
昔を今となすよしもがな

と謠ひつゝ舞へば、其聲細く透徹りて、聽く人の腸を斷つ。

賴朝の神色穩かならずと見れば正座の御簾卒爾として垂れぬ。幽かに鼻さゝりて咽ぶ聲するは政子か。賴朝、聲あらゝげて、



八幡宮の御前にて歌舞を施すに、關東の萬歳を頌はで、叛逆の義經を慕ひ剩さへ九郎が昔に立還れとは奇怪至極なりと叫びたれど、政子、聲を咽ばせて慰めければ、其儘何事もなく事果てたり。

此時の靜の舞こそ實に千古の見物なりしか。其舞酣なる頃、卒然として朧ろに義經の俤を見、口を衝いて、古今集の歌（三吉野の山の白雪踏みわけて入りにし人の音信もせぬ――壬生忠岑）、伊勢物語の歌（古への賤の苧環繰返し昔を今となすよしもがな）を紛り謠ひ

たる、其や神來の調とは斯る類のものならん。

◎鎌倉幕僚の侮辱

靜は義經の胤を宿しぬれは、未だ却々都へ歸ることを許されず、尙ほ暫時堀藤次が家に逗留りけり。

時しも五月雨の候になりぬれど、降りみ降らずみの陰雨長く續きて、懶きこと大方ならず、或日、鎌倉の幕僚工藤左衛門尉祐經・梶原三郎景茂 千葉平次常秀八田太郎朝重など、靜の僑居に集りて酒宴を張りぬ。興酣なる時、祐經、靜に向ひて、

先日の男舞、眞に妙技神に入りて候ふ。何にてもよければ、一差舞ひて給へ。

と云へば、靜恥羞を含みて、

彼時には、餘りに强ひられ侍れば、心にもなく仕り侍りぬれど、判官殿の御生死すら知れぬ中、偏へに赦させ給へ。

と拒みければ、祐經打微笑つゝ、

然らば强ちに强ひまゐらせまじ。

と云ひて退き、更に磯禪師に向ひて、

御身こそ、年齡老いたれど、却つて興あれ。一差舞ひて給へかし

と云へば、禪師甚とゞ氣やすく、

然らば老嫗が舞ひ侍らん。

と云ひながら起ちて舞ひぬ。

梶原景時の末子三郎景茂、絕かに醉ひしれて、靜の袖を執へながら、

御身 そ實に便なきものなれ。生死のほどすら判ちかねたる判官殿に仕へまゐらせんよりは、いざ某の意に從ひ給へ。

と舌緩く言ひ寄れば、靜、血相變へて、柳眉を昻げ、

此は何と仰せらるゝぞ。判官殿は鎌倉殿の御連枝に侍る。御家人の身にて妾に戲れ給ふとは。判官殿若し浪々し給はざれば、和主爭でか妾に對面だに得らるべき。

と袖を拂ひて身を引くや、脣頭を嚙みて、口惜しの淚はら〳〵と零しぬ

◎由比濱邊の悲歎

斯く憂きこと繁き鎌倉に滯留りぬる中、月日積れば閏七月廿九日と云ふに、靜は甚とい愛らしき嬰兒を產みぬ。

豫ねて、其子若し女子ならば其儘母の許に養はるべく、若し男子ならば、直ちに生命を絕ちて將來の憂慮を除くべしぞと定



められければ、禪師も、靜も、偏へて神佛に祈りて、生れん嬰兒の女兒にてあれよかしと願ひけり。今や嬰兒は生れぬ。愛らしき玉のやうなる男兒なり。

母の禪師と、娘の靜とは、言ひ知らぬ悲愁に掻暮れその嬰兒を掩ひて泣きぬ。

堀藤次は直ちに此由を賴朝に報ずれば、賴朝、安達新三郎淸經に其嬰兒を由比濱へ棄てよと命ず。

淸經、軈て堀藤次の家に至りて馬を停め、靜が產室へ蹤々と進入れば、兩女は早くも其れと悟りて、四つの袖にて嬰兒を推匿し、忍音に泣き沈みぬ。淸經、元來情なき武士ならねど、主君の御命默し難く、

鎌倉殿の御命にて候へば、其嬰兒をば某に御渡し候へ。

と云へば、靜は嬰兒の上へ掩ひ重り、禪師は頸に額を當てゝ、互ひに潸然と泣く。淸經　片膝立てゝ、

如何ほど歎き給ふとも、思ひは盡きじ。早く某へ御渡し候へ。

と云ひながら、兩女を搔分くるやうにして、嬰兒を奪へば、靜其を奪ひ返さんとして起立りしに、俄かに眼ふら〳〵と眩暈きて倒れ、聲を揚げて泣伏しぬ。

其間に淸經、嬰兒を懷中に抱き、禪師が縋りつくを振拂ひながら門前へ走り出で、馬に跨りて一鞭あて、由比濱指して走りゆく。

禪師は直ちに淸經の跡を追ひながら、秋風通ふ濱邊に出でつ、馬蹄を便りに其處か此處かと尋ぬる中、堀藤次も下人を從へて走り來りぬれば、共に濱邊傳ひに西方へゆき、折柄眞砂の上に戲れゐたる子供等に向ひて、

馬に乘りたる男の、嬰兒を抱きたるをば見ずや。何處へ行きたる。

と問ひしに、子供等遙か彼方を指さして、

何かは知らねど、彼方の材木の上より擲げ棄てたるやうなり。

と答へたれば、藤次の下人逸早く駈出して、其處に到りて見しに、嬰兒は軀泣く音も立てず、波のまに〳〵浮きつ沈みつしつ。下人矢庭に裾を搔掲げて汀に下立

ち、嬰兒を拾ひあげて、磯禪師に見せけれど、今は其面影宛ら花の蕾の萎れたるやうに變り果てたり。禪師萬一と思ひて、暖き眞砂の上に衣の褄を打敷き、其上に横へて、再度三度頬に唇當てぬれど、哀れ蟲の息だに通はざりけり。

淺猿しき屍骸を持歸りて、徒らに娘を歎かしむるも詮なしと、濱の眞砂を掘りて埋めんと思ひしが、何處も牛馬の通ふ路、若しや其蹄に掛らんも痛はしやと、終に又懐中に推入れて歸りけり。

靜は爰に生を替へし我兒の軀掻抱きて、頭を撫でつ頬に接吻しつ熱き涙雨のやうに流して泣き叫べど、終に嬰兒の息は通はざりけり。

其夜、堀藤次、親の悲歎は罪障多しとて、密かに嬰兒の屍骸をば程近き寺院に葬りぬ。

◎墨染の袖

頼朝の憂慮、今將た全く絶えければ、靜は母禪師と共に都へ歸ることを許されぬ。政子より許多の財寶を贈られたれど、素より嬉しかるべきかは。

靜が都へ歸りての後は、唯だ明け暮れ持佛堂に引籠りて、讀經にのみ耽りしが、軈て北白河なる天龍寺の畔に草庵を結び、緑の黒髪惜氣もなく剃り落しぬ。

實に思へば果敢なき運命なりけり。去年の年、判官殿に別れし以來、世は唯だ憂きことばかり多く、胸の思ひの積り〳〵て、次の年なる文治三年秋九月、苟且の病氣より、終に亡き人の數に入りけり。其時の母磯禪師が悲歎は如何ばかりなりけん、最愛の一人娘に先立たれて。

靜が死亡りし時は、義經は奧州に逃れて秀衡に頼りし時なりけり。哀れ吉野山の別れに再び逢ひまつるまでは御道恙なくと哀みし靜は、其後雁の音信だに聞かず、終に二十歳を一期として現世を去りぬ。

▲幸福は未だ之を得ざるが故に幸福なり、既に之を得れば復た幸福ならず。

誌友倶樂部

▲本誌へ御投書なさる皆様は、揃ひも揃つて御幸福な家庭に在る方ばかりで居らつしやいますれ、私ばかりどうしてこんなに不幸なので御座いませう。夫と趣味が合はないので御座いますよ、それはもうれ、合はぬと云ふは間違で、合せれば成らぬものだ、位の事は萬々承知して居るので御座いますけどもれ、何も趣味が無いから合せ様が無いので御座いますよ、たま／＼有ると思へば、それは妾として同化し得ざる趣味なのですもの、境遇を悲觀せずには居られませうか、本統に悲しくて、情なくて、朝な夕な袖をぬらさぬ日は御座いませんわ、萬一私と同じやうな御境遇に在る御方ありましたら、倶に共に慰め合ひ度う御座いますわ、市内ならば御尋れも致し度う御座います　夫に嫌な顔され乍もせめて讀者位はと思ひ、これが私の命なので御座いますよ。（麻布、谷間の百合子）

▲四月號の「現代婦人評論」面白く書かれましたれ、晶子様には、御難産なさつたさうで、さぞお苦しかつたでせう、私も産の經驗がありますが、難産でなくとも苦しいものですのに、逆見では隨分お苦しかつたでせう、お腹の兒の事を飛行機ですつて、さすがは詩人で居らつしやると感心しました、「人情の表裏面」白く讀みました潮風様はハイカラでは被居らないのですれ何にかの雜誌の寫眞の中に大隈伯と御一緒のがありましたが、成程バンカラらしいと思ひました、御文中の神戸の某女史の事、あれは「おとづれ」と云ふ本ではありませんでせうか、私當地の本屋で新刊だと云ふので一寸見ました、「矛盾の多い世の中」ですつて、ほんとですれ「細川三齋夫人の事」、お書きになつた池邊義象様の「邦文日本外史」、皆様ごらんなさつて、面白くよく書いてありますのれ、「歐米漫遊土産」の終りに、横濱へついて今更日本の家が、小さいとか低いとかありましたが、私あれが癪にさはりますのよ、百合子様、又の御名千代子様でしたれ、あのいつも讀んで印象をのこしませんれ、（私だけかも知れませんが）、いつでもダイヤモンドやルビーだのがキラ／＼光る、そしてすゐ分甘いのですもの、私には少し甘過ぎます、今少々靈氣のあるのを拜見致し度いものです、「ハイ私は東京の眞中に生れた田舍者です」「歯の衛生」や「睡眠の話」のやうな有益なのを澤山願ひ度いと私は思ひます、尤も本誌は科學雜誌ではありませんが：：：私の様な海外に居るものは、皆新聞や書籍によつて智識を得るのです、私だつても本も見ずに、かうやつて居ては、日本の皆様にどし／＼まけてしまふだらうと思ひますから、一生懸命いろ／＼のものを讀みます、最早つゝじや牡丹や藤が美しく咲きましたでせう、金門公園の日本茶園にはいろ／＼日本の花が咲いて居りますけれど、櫻が澤山ないので私は不平ですのよ。（桑港にて白菊）

▲記者様始め、讀者諸姉様　私も以前よりの本誌愛讀者です、只今は樺太の片田舍に日を送り女學世界を唯一の友として暮して居ります、どうぞ皆様誌上にてお交り下さい、當地は冬季は非常に不便で御座いまして、一月の女學世界は漸く三月になりましてから落手する様な譯で實に待遠でございますの、でも、只今は月に五六度は船便がありますから、手紙でも、女學世界でも早く參ります、そしてまだ雪が澤山ございますよ、流石樺太ですれ、さうでせう北緯五十度近いのですもの、まあ皆様折角御榮え遊ばせよ、（樺太田舍女）

▲私は以前から「靜」といふ人はしたはしい人だと思ひまして、又何だか可愛いくて仕方がありませんでしたが、六月號に物集先生がおかき遊ばしたので、一段となつかしく思ひます、國柄所を異にする人と話が出來たらとつく／＼考へます、櫻千島様の「新つれ／＼草」なか／＼皮肉

ってゐらつしやるのれ、いゝ題到で御座います江木樣の御話の「仕舞」は私も習ふて居ります、なかなかむづかしくて、どうもいやでたまりません、まだそれに對する趣味が出ないのでせうか(赤坂すみ子)

▲雜誌お贈り下されし如星樣、深川の夢見る鳥樣、御親切誠にありがたく讀んで御禮申上ます、いよいよ夏休みも近づきましたれ、女學生ならぬ私も何となく待れますわ、皆樣本年は是非避暑地便りを拜見させて頂戴な、珍らしい草花の採集や、勇ましい愉快な登山、さては涼しい水上の月見等、さぞお樂しい事でせうれ、私なんか大火後の悲慘な町を見て淋しく暮しますのよでは夏を負かす程のお元氣で〻暑遊せよ。(山形市カスミ町字庚申堂物河鈴子)

▲沖繩縣島尻女子工業徒弟學校は三　廿三日を以て第七回卒業式を行ひて、二百八名の同志を社會に出現致居候科目は機織、染色、裁縫と普通學科とを教授して、實用有益なる成績を實現致居候、有力なる本縣唯一の實業女學校にて御座候、現校長は第三代にして、東京工業教員養成所出身の吉永校長にて御座候、先は概況御通知申上候。(琉球恒花石頁座一〇三愛讀者和歌子)

▲私の心は眞によく變る、其日々々の風次第、春は鴨川べり青柳けぶる京の紙住に戀しがつて夏はわけなく夕焼美しい入日の海を戀しがる、秋はしつとりした冷たい須磨の空氣が好きで、冬は未見ぬ雪路がなつかしい、毎年くり返して……願くば花の下にて我　なん……遮那優しいのんびりした者へもあつたけれど、此間は氷嵐かなんかに横たはつて其儘氷つて了まへば好いと思つた。今はお葬式もお供も何んにも入らない、私が友染の華かな布團に横たはつて、其傍にとし樣が泣いてゝ下されば、體なんかどつかに捨てられたつて好いと思つてる、けど此先どう變るか(衣笠)

▲丹波靜谷美夢樣に申上げますが、細かき事は誌上にて餘り長過ぎます故、御尋ねになる事があるなれば、私に迄おはがき、送つて下されば直ぐに申し上げます、(米國アイダホ州ソーダスプリング郵便函百六十三本願寺信子――N. Hongwanji P. O. B. 163. Soda Springs Idaho. U. S. A.)御諸姉樣、繪はがき交換を願ひます。

▲四月の増刊號に「昔を偲ぶ武士氣質」御書き遊ばした方の御本名はどなたでゐらつしやいましやう、ほんとに面白く拜見致しました、周易の南公堂へ、御通ひ遊ばしたと云ふ事、鏡川に姿を映す筆山の景色など〻伺ひまして、實にふる里なつかしく存じます、同じ野山の景色をながめ、同じ川のほとりに夏の暑さをも忘れてクラスの人々と、白くきしく遊びし昔の事など偲ばれて、そゞろにふる里が戀しくてたまりません(在京とく子)

▲もう元祿姉さんの御北あとはうかゞはれないでせうか、私、眞の江戸ッ子風の人が好きよいつも同じタイプで、千代さんではないが、三尺のテーブルをぐるぐるまはしてるやうな事を咎く方嫌よ!!、夫れは若い方のあつまりですもの新しい時代の少女ですもの、然し浮薄な少女でなく往生院にまよひたる横笛の如き心でありたいと思ひます。(淺草菜目子)

▲六月號面白う御座いました、中にも新つれづれ草は大好きです、あの六頁の寫眞は左前ですれ、オホヽヽヽ氣になつてなつて仕方なくつてれ、(神戸照子)

▲舌について面白いお話があります希臘の哲學家にサンサスと云ふ人がありました、或日イソツプと云ふ家僕に向つて、明日は名だゝるゝ人人を招くのであるから、市場に行つてお前が一番善いと思ふものを、お金にあかして買つて來て、思ふ存分の御馳走をせよと命じました、翌日數多の貴紳淑女等は賑はしく集りました、さて家僕が出す料理を見ますと、皆悉く牛の舌でありました、スープも舌、ビステキも舌、料理

こそ違つて居ますが、舌ばかりで、他に何物もありませんから、主人は額に青筋を立てゝ家僕を呼び寄せて大變叱りつけました。するとイソップは落付拂つて「市場で一等の善いものを求めて料理をいたしました、舌は交際には最も必要なもの、又雄辯、慈善等の要具ではありませんか」と述べましたら、流石哲學者だけあつて其答を最も面白く思つて今度は其才を試めさうと思ひ、翌日改めて最も惡きものを材料にして饗すべきことを命じました。然るに又 今度も出す皿毎に舌ばかりでありましたから、サンサスは再び怒つて詰れば、家僕は答へて、此度も仰に從ひまして最も惡きものを用ゐました。即ち舌に罵詈の機關、又食言の機關ではありませんか」と申しました。吾等は皆此の有益なる又恐るべき舌を有して居ります。(如星)

▲私この倶樂部によつて、新らしき二人の友を得ました。六七里も隔て居ゝ、さながら十年の知己見るやうに餘程親しく御交際つゞけて居りますが、是によつて受くる快樂と利益は少なゝないといつも感じて居ります。見も知らぬ土地の風俗、習慣など居ながらにして知る事を得ますもの、友の筆蹟文章、十人十色、人さまゞゞの御このみを見て自身の參考になります事も非常なものですのよ。(ちよ子)

▲私は野薔様と綾子様の御作を讀みながらいつもいつも一種のインスピレーションを感じます。御二方とも〱御才筆の千代八千代迄榮えられん事をねがふ。(横濱拾小舟)

▲あゝ私は、このいやな山里に、淋しい〱五月雨を、明さればなりません、糠の如き雨は毎日毎日降りつゞき、可愛いバラも散つてしまひさう、杜鵑が鳴く音をならしたら、私のこの胸にはいかにひゞくでせう、きつと旅に出て遠山の鐘を聞くのと同じく、泣きたいやうになるでせう、いやきつとなりますこんな時に思ひ出すのは鶴様の事、昨年の今頃はこんなに淋しいとは思はなかつたのに。(紫の花)

▲私は御國に留學中病氣になりまして、歸國致しましたが、寒さの烈しいため、病氣が重くなりまして、何も自由がきゝません、讀者倶樂部の御作で海山の御友達が出來まして、御手紙下さる方が多う御座いますが、一々御返事を差上る事も出來ません、本所北二葉町安田艶子様、朝鮮平壤南門外[illegible]重照女様、京都府下八幡町大森須子様、奈良市櫻間明子様 千葉縣安房郡瀧田村千代池田濟子様 以上皆様から御手紙はたしかに頂戴致しました、すこしよくなり次第必ず御返事を差上ます。(淸國上海南市竹行碼頭同登里施公館峯志)

▲米國に長くおいでになつた中村様、私あちらの事情を色々知りたいのですが、御差支なければ一寸御しらせ下さいませんか。(Miss. K. Tamura. Haranomachi・Soma. Iwaki.)

▲御慕はしい諸嬢様、私は十八歳の愚かな少女でございます、悲しい〱身の上に人知れず夜着の襟かみしめる身には新年から愛讀し初めました本誌が何よりの慰藉でございます 誠にかねて御噂になりました萩香様や花散里の君方の御才筆には、思はず若い血が躍りますわね、皆様!!!、更に一歩を進めて誌上の友となつて下されたら私どんなに嬉しい事でございませう。(笹の露)

▲諸姉様方、私は去月睦月賑やかな都を跡にして當地に參られればならぬやうに成りました、そして良人は留守勝で御座いますので、誠にさびしう御座います、それ故女學世界を一番樂しみに致して居ります、どうぞこれから誌上で御交際を御願ひ申上ます。(香川にて君子)

▲お懐かしき御姉様よ、私は北海に住む少女でございますが、お互に其土地の風俗 習慣等お尋いたしたり、又お教へ申す事いたすと きつと面白い事と思ひます、當地 函館 にも内地とは變つた事がありませうから、お尋ね下されば存じて居る限りはお答へ申します。(富子)

新刊紹介

△世界最話 數理の奇談　大上茂喬著

智慧の寶、數學者の想像する色々の世の、野蠻人の有する數の觀念、骨牌に關する問題、碁石を用ふる遊戯などいふ風の數理に關する娛樂的の事項を蒐集したる著述にして、中等教育程度の學生の課外の讀物として面白さうな書なり。定價五拾五錢、本館發行。

△日本お伽噺　巖谷小波著

著者が少年文學の第一篇「こがね丸」を出してより滿二十年になる記念として編纂したるものにて、歷史上の逸話、傳說等が多くを占め、平易通俗の口語體を用ゐて、讀で滋味あるのみならず又子供の修養に資する様につとめあり、假名遣は例の便利なる新式を用ゆ、定價金壹圓拾錢、本館發行。

△劍橋大學と學生　北島葭江譯

此書は英國ケンブリッヂ大學の獨逸教授が、同大學の夏季講習會に於て爲したる同大學の由來學生々活、其の課業の美點等に就ての演說を譯したるものにして、女學生に關する事も少なからず、一讀して宜しき書なり、定價貳拾五錢、麴町區土手三番町國民評論社發行。

△音樂初步　天谷秀著

音樂の初學者の爲に眞き書にして、一々樂曲を說き、樂譜を示し、何人にも分り得るやう丁寧に記しある所は、流石に著者の多年の經驗に基きて出來たるものと肯かれたり。定價五拾錢、日本橋區本..金港堂發行。

△東西名婦の面影　高須梅溪著

家庭百科全書の第三十二編として出でたるものにて、收むる所は多く古今東西の女らしき女なり、加ふるに東西の賢哲の金言等を多く挿入しあれば、婦人の修養の爲には好き參考書なり、定價四拾五錢、本館發行。

△家庭に於ける心理學の應用　高島平三郎著

家庭は肉體を養ふ苗代であると同時に又心意を培養をする苗床のごときものである、人智進みこ交いよ／＼複雜となつては、日常萬般の事皆心理の作用によるものであるから、何人もこの學の智識に暗くてはならぬ、心理學はつまり人格養成の根本であるといつてよい、本書は兒童心理の研究に多年從事され居る高島氏が家庭から見た心理の情態を通俗で且つ滋味ある說明ぶりを以て記された有益な家庭の讀物である。價九十錢　榛正町服部書店發行。

△衣類洗濯色揚法　阿部洋著

著者が前年青森縣下のさる女子實業學校長の職にありし間に學生に課したる實驗材料を基として著はしたるものゝ由にて、多く輕便なる實用向の事のみを掲げあり、定價貳拾錢、本鄉區本鄉一丁目啓成社發行。

△古今名媛書簡　桑田春風著

收むる手紙の數は百五十餘通に及び、古くは王朝時代の名媛の手に成りたるものより、近くは現在の婦人のもの迄もあり、手紙は人格の反影なり、一讀して得る所多し、定價八拾錢、啓成社發行。

△頭腦明斷法百話　堀田相爾著

美食して運動して勉强すれば頭腦は明斷になりさうなものなれども、又其樣もいかざることあり、是れ本書の出でたる所以にして、又必要なる所以なり、樣々の方面より忠實に說明しあり、定價四拾錢、啓成社發行。

△世界お伽文庫 忠義猫　巖谷小波編

カル、オーバーライトナア氏の獨訳したる「瑞典お伽話集」中の「金柱城」といふのを日本の少年少女の趣味に合ふやう面白く書きたるものなり、定價拾參錢、本館發行。

△類別索引 書翰辭典　大町桂月監修

現今普通一般行はるゝ實用語、即ち簡易なる熟語を、天地、時候、人事、言語、物名の五大部門に別ち、各部門毎に「いろは」索引を施し搜索に便宜ならしめ、字解を平易にし且つ趣味を加へ、文法上の補別をも明かにしたれば單に書翰用として必要なるのみならず、又一般の日用文を作爲ときに參考として極めて重寶なる辭典也、本書は曾て俳諧字典を編纂して斯界に益せる武田櫻桃氏が三年間の勞苦を以て集成したるものなり定價一圓二十錢、京橋區弓町四三立社發行

募集（七月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を提へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲端書文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館内女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

毎月一回一日發行

定價表

一冊（紙數百八頁）金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
定刊數……十二冊
（内増刊四回 一、五、九、十一月價格同一）

郵稅 一冊 二錢

廣告料

＝四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切＝等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●遠隔目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治四十四年六月廿三日印刷納本　第拾壹卷第九號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所（東京市小石川區久堅町百八番地）

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　本局　三千百三十八番・二千六百二十三番・二千二百二十九番

通信販賣 博 博通社特賣品

●安心の出來る買物は博通社に限る!!!

●うきぶくろ

好く泳ぐ人、泳げざる人 男女を問はず生命を重んずる方は是非共本具の必要を認めます入つてはブイとなり出ては枕となる天下如斯重寶なる游泳具ありや!



善く浮!! 浮く事不思議!! 子供は勿論大人で容易く浮!!

特價 金九拾五錢

▲送料市内四錢内地八錢海外卅錢

●男女兩用海水浴用シャツ



本品は例年の經驗に依り本年特に新製したる男女を問はず浴心地の善き肌ざはりの軟かき優等品にして價格又低廉實用經濟兼備の逸品なり

◎甲種 特價 一圓四拾五錢

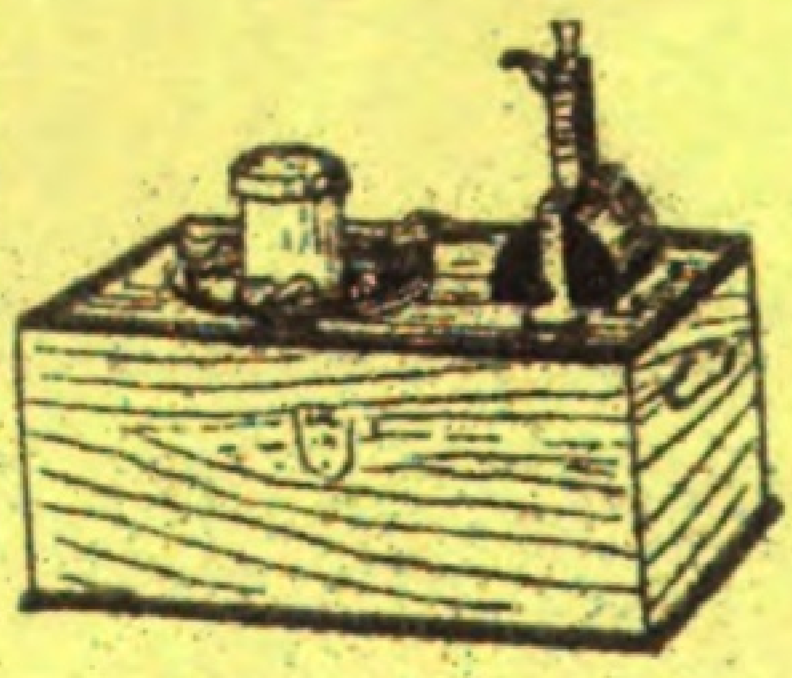
◎乙種 特價 八拾五錢

◎丙種 特價 五拾五錢

(シヤツサルマタ付)

▲送料内地八錢海外卅錢

●電氣發火煙草盆



燧火、マッチを要せず指一本あれば點火容易なり、晝は煙草盆となり夜間は燈火の代用をなす、體裁頗る優美にして然も些の危險なし眞に文明の利器と云ふべし

◎特製手提形朱檀製 特價拾壹圓五拾錢

◎一號 朱檀黑檀製 特價六圓貳拾五錢

◎二號 寄木製 特價五圓七拾錢

◎三號 並木製 特價四圓五拾錢

▲送料荷造費共内地四拾錢海外六拾錢

●御手紙一本で何でも御求めに應じます!!!

女(後付の一)

大橋メール、オーダー、ビジネス

博通社

東京日本橋區本町一丁目

振替口座東京五十番
電話本局六百十四番

新装を凝らし内容の充實をはかれる本誌を見よ

少女世界

第六卷 第九號
七月一日發行

菊判紙數百二十八頁
口繪石版寫眞版澤山
正價十錢 郵税一錢

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二號

女(後付の二)

少年世界 第十七卷第十號 増刊

七月十日發行



暑くなつた、夏休みが來た、夏暑い時には、都に居るより山に登つて勇氣を養つた方が可い、水の邊に行つて、涼を入れた方が可い、乃ち我が少年世界は、爰に臨時増刊として「山水號」を發行して、諸君の二無き好伴侶たらんと企てた。乞ふ盛に愛讀を給へ。

初旅 巖谷小波

これは二十五年前の夏の初旅の思出の記である

山水天狗 竹貫佳水

これは銷夏の讀物として滑稽諧謔の妙を極めたもの

千將鏌耶の劔

一角仙人

我が故郷の山水

江の島紀行

諸動物の水泳法

都の友に送る手紙

休暇中の快事

冒險砂地獄

菊判一二八頁 口繪依例澤山

正價十錢 郵税壹錢五厘

東京 本町 博文館

女(後付の三)

第十七巻…第九號

文藝倶樂部

七月一日發行

定價廿五錢 郵稅二錢五厘

菊判紙數三百二十頁 口繪石版寫眞版澤山

時漸く炎暑の候に入らんとす、憂鬱四方にみらんとする準備的時期は正にこの月なり、平素健康る讀者に在つては、一服の清涼劑また何の要かあらん、依つて之に代ふるに本誌を捧げんとす、内容は如何、卷頭には**泉鏡花**氏作**笹色紅**(長編)あり材を京師の舞妓に採る**眞に艶麗無比**は、次に**黑田湖山**氏**晝寢**(滑稽小說)作を揭ぐ、盛夏期の讀物としての一書は又好題目とならずや、次に、**岡村柿紅氏新作**「所作事**朝比奈**」(七月市村座興行)を載すこれまた見落すべからざる逸品なり、**新講談**に至つては、每號喝采を博しつゝあるもの今回は**田邊南龍**子が**快男兒林彌三郎**を載す讀者は一讀して肉躍り骨鳴るの快味を感ずべし、**雜錄**以下**百花園**に至りては趣味津々として盡きず例に依て**愛讀**を玉へ。





東京本町 博文館

女(後付の図)


文章世界第六卷第十號增刊
青鷺號
新らしき文と詩
七月十五日發行
菊判二百八十頁
口繪石版寫眞版豐富
定價廿錢
郵税二錢
本文は、大金を懸けて洽く天下に募りたる
特別懸賞文
（甲）：●吾等青年の行くべき道●予が崇拜する人物に對する感想
（乙）：●予が生れたる土地●少年時代の追想
と、每年二回、期を定めて特に募集する左の諸種の傑秀なる作品の發表を以て滿載せらるべし。
小説・論文　散文、書翰、短文、長詩、短歌　俳句・繪畫、
現代の新らしき文とは誠に此の一卷に盡きたりと云ふべし。
別に載する大家の作品及評論は左の如し。
▲日本風景美論　田山花袋
創作と飜譯
▲十三峠（岩野泡鳴）▲輪（ソログーブ）▲城郭（西村渚山）
▲花梨の棺（チエエホフ）▲下宿屋（細田秋聲）
小品三篇
●海から來た男（河井醉茗）
●空虛（三島霜川）
●藝人の悲哀（兒玉花外）
鼇頭…古今節序の名文
東京本町
博文館

女（後付の六）

を述べたる二大少年叢書

少年百科叢書

洋裝細長形頗美本
紙數毎編二百八十餘頁
美麗口繪數葉挿入
定價一册金廿八錢
郵税一册金四錢

第一編 竹貫佳水君編
先哲至言勉學訓
全一册

第二編 前田越嶺君編
世界名君傳
全一册

第三編 竹貫佳水君編
讀書法
全一册

第四編 前田越嶺君編
世界名臣傳
全一册

第五編 澤田順次郎君著
天界之觀察
●緒論●月●太陽●地球●遊星●彗星●隕星及び流星●月蝕及び日蝕●暦●恒星及び星座●北天●動物附●南天
全一册

第六編 澤田順次郎君著
地界之觀察
●緒論＝地球〇天章と地文●遊星としての地球－地球の狀態〇地球の運動〇經緯度の測定法〇晝夜五帶及び四季〇地球の內部●陸地＝水陸の分布〇大陸の島嶼〇海岸線〇地勢〇地殼の構造及び發育〇火山及び噴氣孔〇溫泉〇地震●水＝陸地の水及び其の作用〇海洋〇潮汐●大氣＝大氣の高さ及び性狀〇大氣の溫度〇大氣の壓力及び風〇大氣の溫度
全一册

▼以下續出▲

振替東京二四〇　博文館



女（[illegible]）

（每月一回廿三日印刷納本）
（明治四十四年六月廿三日印刷納本）第拾壹卷第九號（明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可）

婦人の夏養生

▲御婦人は一般夏季に於て衛生を重せねばなりませぬが、殊に梅雨あがりの五六日から暑さが加つて來る、此季節が最も注意を要する時です。此頃の氣候は一定して居ませんから、昨日非常に暑かつたと云ふので、厚い蒲團を藏ふて、翌日俄かに冷えるので、折角藏つた蒲團を、復出すのも倒だなどゝいつて、薄蒲團のまゝで寢たりすると、身體は冷えます、此冷えると云ふ事は、御婦人の禁物で、婦人病の起る原因となるのですから、斯ういふ時には、鑛火保溫の効ある中將湯を飲で腹中から溫める事が肝要です

▲斯くて暑さが進んで來ますと誰しも氣分が重々しく食事も甘くなく、果物や氷などばかり食べて居たい樣な氣になる、而して不知不識、御飯の數を減らして、果物の方を多く食べる、これは夏分は凡て身體の五臟が其活動の力を緩め、冬の樣に働きませんので、自然斯かる狀態になるのでありますが、此場合に於ては調中催食の効を有つて居る處の中將湯を御上りになれば惡心も止み、食慾も增進し、健康は保全されます

▲婦人は殊に冬は足の裏が冷えて、夏になつてから燃える樣に熱くなるものです、之は心臟の惡い人又は身體が弱く出來て居る人杯にもありますが、子宮に故障のある人に殊に多い、つまり之は血液の循環が調はぬ爲めでありますが、婦人は男子と違つて骨盤内で澤山の血を藏して居りますから、子宮に故障ある時は足の裏などまで思ふ樣に新鮮な血が送られません、それで足の裏に靜脈の返へり來るべき血が停止して彼の樣にほとるのですから順血補心の効ある中將湯を御上りになれば血液の循環は好くなつて、斯の如き容態は自然消滅します

▲以上は夏季に於ける一般御婦人の注意すべき數點を述べましたが、平生左に掲ぐる容態にて御困りの方は、此際特に中將湯の服用が肝要です

ヒステリーで頭が重く、氣がふさぎ、些細の事が氣にかゝり、過去の事や取越苦勞するやうな婦人●白帶赤帶にて顏色は常に青く活氣に乏しい婦人●年頃になつて月の者を見ないとか、たとへあつても時期一定せず、其量に多少ある婦人●月經時に苦痛を覺える婦人●惡阻にて營養分を攝取する事が出來ない爲めに身體の衰弱する婦人其他腰足が引釣り痛み又胸先へ差込だり目が眩んだり耳む鳴つたり、肩が凝つたり、顏がほてつたりする婦人●產後日立ちが惡しき婦人等は皆中將湯の服用が肝要です。